

ブラジル



日本移民80年史

第二部

日本移民のブラジルに及ぼした影響

(注・原本の283ページ以下を収録してあります)

第2部 日本移民のブラジルに及ぼした影響

第1章 ブラジル農業に果たした役割

I. 新作物の導入と育成	15
1. 果実類	
2. 蔬菜類	
3. 繊維作物	
4. 花卉・庭園樹	63
5. 香辛・嗜好作物	
6. 雑穀作物	77
7. 新しい作物	81
8. 養鶏、畜牛 養蚕、養魚	91
II. 集約的農業の確立	103
1. 日本での経験を近郊で生かす	
2. 初期のジャガイモ栽培	
3. 蔬菜づくり	111
4. 養鶏	
5. 果樹栽培	
6. 奥地に波及した集約的農業	
7. 集約的農業の果たしてきた役割と現在	120

III. 新しい農業の開発	126
1. ブラジルのセラード	128
a. 政府のセラード開発案	
b. 日系農業者がPADAP の先駆	
c. PADAP の成績	
d. 新たな乾期作物	
2. 日伯協同の開発事業	139
a. 第1次セラード開発計画の概要	
a－1、コチア組合のパラカツー団地	
a－2、CDAC のサンタ・マリア農場	
b. 第2次セラード開発計画の概要	

b-1 コチア組合のオウロ・ベルデ計画	149
b-2、スール・ブラジル組合のグアルダ・モール計画	
b-3、コアセラル組合のフォルモーザ計画	
c. ブラジル全産業に大きなインパクト	
3. 生産団地開発事業	154
a. サン・フランシスコ河流域開発計画	
a-1. ピラポーラ果実団地	
a-2、クラサー果実団地	
b. サン・ジョアキンのリンゴ生産団地	
IV. 農業協同組合の創設と発展	167
1. 協同組合の誕生と発展	170
a. 小農の自衛組織として	
b. サンパウロ市の膨張と共に発展	
c. 国際市場にも進出	
d. 大戦の抑圧で質的転換	
e. 中小農安定に大きな役割	
2. 日系組合の現状と将来	185
a. 現存する日系協同組合	
b. コチア産業組合中央会	
c. 南伯農業協同組合中央会	
d. 競合する商業資本	

第2章 日本移民の商業・工業と進出企業 201

I. 日本移民の商業進出	201
1. 戦前の日系商業 (354)	
a. ・最初から商業進出を目指したもの	
b. 農業移民を便法として商業進出を目指したもの	
c. 移民共同体の中から自然発生した商業	
d. 野菜市場への進出	
e. 農産物仲買商と精選業者	
f. 洗染業	
g. 金融業、サービス業	
2. 戦後の日系商業	214
II. 日本移民の工業進出	217
1. 手工業からの出発	
2. 最初から工業進出を目指したもの	
3. 農業移民から工業進出を目指したもの	
4. 農業部門、商業部門からの工業進出	
a. 戦前の工業進出	
b. 戦後の工業進出	
5. 戦後の技術移民が果たした役割	
III. 進出企業	231
1. 戦前の進出企業	

a. 国策に基づいた移植民事業会社	
b. 純粋な民間企業の進出	
c. 綿花買付商社の進出	
2. 戦後の進出企業	242
a. 初期の進出企業と日系コロニア	
b. 起るブラジル進出ブーム (374)	
c. 大型プロジェクトの参入 (375)	
d. 撤	
e セラード・プロジェクト始まる	
f. 軍政の終了と経済危機	
3. 進出企業の果たした役割	

第3章 教育・文化・宗教 280

I. 戦後のコロニアの子弟教育	280
1. 日本語教育	
2. 日本語普及活動一本化の動き	
3. 「教育熱心」について	
4. 上級学校への進学	
5. 日系学生の志向	
II. 文学活動の流れ	297
1. 短歌 (392)	

2. 俳句	
3. 川柳	
4. 詩・歌謡（民謡・童謡を含む）	
5. 小説（その他）	
III. 美術	319
IV. スポーツ	328
a. 相撲	
b. 陸上黄技	
c. 野球	336
d. 柔道	
e. 剣道	347
f. 水上競技	
g. 卓球	
h. テニス	
i. 空手	
j. ゴルフ	
k. サッカー	
l. バレー・ボール、バスケットボール	
m. ゲート・ボール	
n. ラジオ体操	
V. 趣味・娯楽	363
a. 囲碁	
b. 将棋	

VI. ブラジルに於ける日系人の宗教生活と日系宗教	369
1. 第1期－宗教の空白期	373
2. 第2期－「植民地での宗教活動」	381
a. 植民地の形成と宗教生活	
b. キリスト教系宗派の伝道活動	
c. 日系宗教の布教	
3. 第3期－離村向都時代	397
a. 1930年代後半から戦時中の宗教活動	
b. 日系人の都市移動と日系社会の変容	
4. 都市時代－日系宗教の復活とその後の展開	404
a. 1950年代における日系社会の宗教事情	
b. 1950年代以降の日系宗教布教の概略	
c. 1960年代以降における日系宗教団布教の特徴	
d. 60年代以降のブラジル社会の変化	
e. 日系宗教教団側の条件	
5. コロニアの宗教構造	438
編纂後記	456

第 1 章 ブラジル農業に果たした役割

日本移民の大部分は、戦前はまずコーヒー園の契約労働者として、戦後もまた農業者として入国した。つまり、ほとんどが一度は農業に征事したわけであるが、それが最近の 20 余年に急激に様相を改めてきた。ブラジル自体が農業国から工業国に進展するにつれて、「農業の先生」と呼ばれた日本人も 2－3 世の時代に移り、高等教育を受けた 2～3 世は都市部の職業に就く者が多く、1 世の移民では法律の関係で参加できなかった政治、あるいは公務員の分野にも多数の者が進出した。

こんなことから、日系人で農畜産業に従事する者の比率は大幅に減少した。現在では 122 万人の日系人のなかで、農畜産部門従事者は約 15% とみられている。しかし、この比率の減少は、ブラジル社会全体の傾向であり、日系人の農業面での活躍の減少を

示すものではない。反対に 1 農家当りの飛躍的な生産規模増大で、ブラジル農畜産業に大きな力を発揮している。



超大型灌水機ピボセントラル。これを数基導入して、雨期乾期の別なく、安定した営農をおこなう形態が出現しつつある。

近郊農業は別として、内陸部においては、1950年代にはサンパウロ州、1960年代末にはパラナ州にも原生林が無くなり、1970年代になると新しい農地を求めてミナス、マット・グロッソ、その他の地方への日系農業者の拡散が目につくようになる。この時期は1世から2・3世への世代交替もすすみ、農業から都市部の職業への転

換も多く、農業者の数は減少するが、1 農家当りの生産規模は拡大した。

この生産規模拡大は、農業機械の大型化が進んだことにより一層促進された。今では一基の灌水面積 1 0 0 h a といった超大型灌水施設のピボートセントラル設備を所有する農家も珍らしくなく、なかには一農家でそれを数基設備し、雨期乾期の別なく安定した営農をおこなうという形態が出現しつつある。

また、日系農業者の果たした役割には「生産規模の拡大」だけでなく、「作物の多様化」がある。この作物の多様化、つまり新作物の導入は、すでに 1 9 3 0 年代から日本移民がおこなってきた。なかで著名なのは養鶏、ラミー、紅茶、ジュート、コショウなどだが、この伝統は今日まで続いて、ブラジルの農作物の種類を豊かにしてきた。花草栽培を一つの「産業」の地位に引上げ、あと野菜、果物における新品種の導入は 2 0 数種にのぼる。この新品種の導入、栽培技術の革新で、単に国内市場の品物を豊かにしただけでなく、それが新しい輸出作物としての地位を獲得したものも数多くある。

作物の多様化と合わせて考えられることに、農業地帯の拡散がある。1 9 6 0 年代まで、日系農家の生産地帯は、若干の例外を除けば、サンパウロ州とパラナ州、リオ州、

それにアマゾン河流域の一部に限られていた。それが1960年代から、まずブラジル南部の農業者がミナス州以北に入り込み、その直後に日系農業者も全ブラジルの的に拡散を始めた。

すでにミナス、バイア、マラニオン、ピアウイ州などのセラード地帯（熱帯サバンナ）から、さらにはサン・フランシスコ河流域のカーチンガ地帯（熱帯半砂漠）または東北伯の海岸地帯、アマゾン上流地帯にまで日系農業者の活躍がみられるようになった。

ブラジルの東北地帯といえば熱帯、しかも内陸部は熱帯サバンナ気候であるが、そこへブラジルでもっとも農業技術の高いといわれる日系人とブラジル南部の農業者が入り込んだ。彼らはまず、気象データの収集から始め、この地方の自然条件をマスターすると同時にさまざまな作物の試験栽培をおこなって適作物をみつけ出した。

すでにゴヤス州では相当規模の水田が造営され、米の生産量は大幅に増加しつつある。

サン・フランシスコ河流域では多種の果実、野菜類の生産から、それらの加工までが始まり東北伯海岸地帯ではパパイア、メロン、マカダミヤナッツや多くの香辛料作物の生

産地帯が現われ始めている。

日系人は農畜産の生産面だけでなく、生産物の流通、加工面にも大きな役割を果たしてきた。「コチア」「スール・ブラシル」など、日系農業組合の発展は、まさにその典型である。

また、この流通、加工の分野はもちろん、肥料、農薬、飼料、農業機械など生産資材の分野にも、大小さまざまな地元日系企業、さらに日本からの進出企業も参加して、大きな貢献をなした。（これらについては第2章に記載した）。

ブラジルの農業の近代化は1970年代から始まったともいえる。農業の近代化といえば農業者の近代化にはかならないが、広い知識と経営能力を備えた「農業者」がいなければ、条件に恵まれた土地があっても、かつてのブラジル東北地方の砂糖プランテーションのように農業は衰えてしまう。

この面では日系農業者は早くから「次の世代の農業者」の育成に努力してきた。その一つとして「ブラジル国際農友会」のような組織を作り、農業先進国において若い農業者を研修させてきた。そしてこれらの後継者はすでにセラードにおいて、あるいはサ

ン・フランシスコ河流域の灌漑農業において、地域のリーダーとしてめざましい活躍をおこなっている。

1908年に始まった日系人のブラジル農業に対する貢献は、今後も拡大することはない。あっても減少することはない。それどころか、ブラジル農業が50億を越した地球上の人間の食糧供給センターの一つとして、世界と結びつく将来は、今までに増した大きな役割を果たすことになるであろう。

以下、日本移民がブラジル農業の近代化に果たした役割を、「新作物の導入と育成」「集約的農業の確立」「新しい農業の展開」「農業協同組合の創設と発展」の項目に分け、そのあらましをのべることにする。

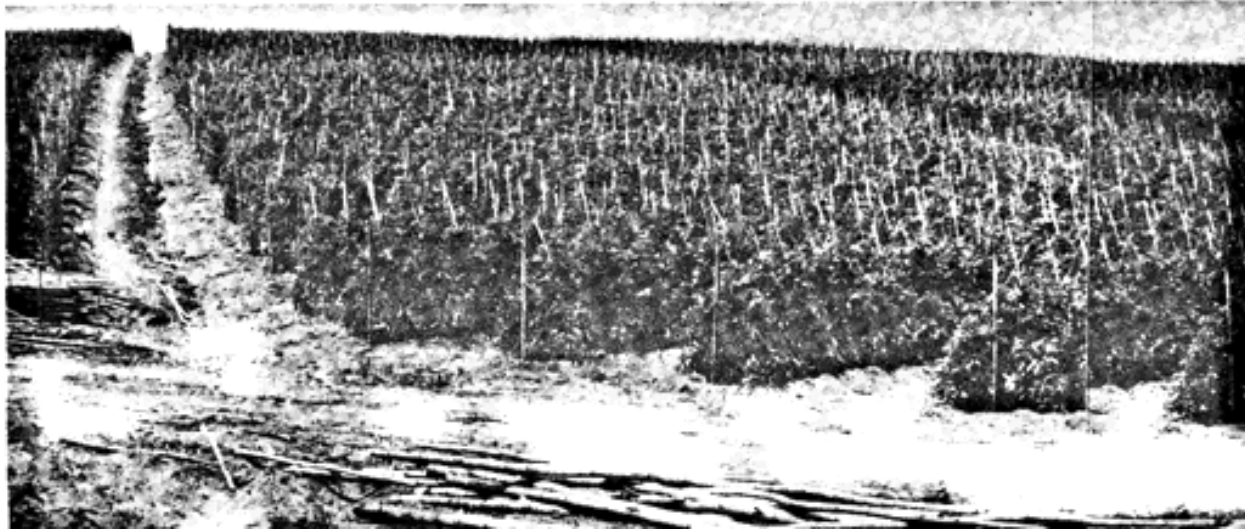
I．新作物の導入と育成

ブラジルの農作物の種類はきわめて少なかった。18世紀末の主な作物としては、マンジオカ芋、トウモロコシ、フェイジョン豆で、果物としてはバナナ、マンゴー、オレ

ンジのほか、地元原産のゴヤーバ（ばんじろう）、パパイヤ、パイナップルなどを利用し、野菜として玉ねぎ、カボチャ、里芋、ニンニク、甘橘、コウベなど、ほかに特殊作物としてはコーヒー、カカオ、棉、タバコ、サトウキビ、椰子などがあっただけで、栽培された作物は20種ていどだったと思われる。

この、作物の種類が豊かになるのは、19世紀に外国移民が入国するようになってからである。外国移民はそれぞれ自国で慣れ親しんでいた作物を持ち込み、ブラジルの農作物の種類を豊かにした。この分野で最も大きな役割を果たしたのは、イタリア移民と日本移民であった

つぎにそれらについてのべるが、数が多いので、経済価値の少ないものは除くことにした。なお、各作物の末尾にサンパウロ州青果物配給センター（CEAGESP）への1988年度入荷量を掲げたが、馬鈴薯、玉ねぎ、ニンニク、鶏卵については、コチア産業組合中央会とスール・ブラジル農産組合中央会の両組合は独自に集配しているので、その入荷量を併記した。



サンパウロ近郊のトマト圃場。料理にトマトを多く使うイタリア人の激増で
日本移民の集約農業化は一層促進された。

1. 果実類

ブラジルでは、スイカ、メロン、イチゴも果実として取り扱われているので、この
項にそれを入れた。果実の名称は、日本での呼名、学名、科名、ブラジル名の順にした。

アボガド (*Persea americana* Mill) クスノキ科。Abacate
コロンビア、エクアドル、メキシコが原産で、ブラジルには1541～42年頃にペ
ルーからアマゾンに入り、さらに南下して、広く知られるようになったのは、帝政時代
(1822～1889年) といわれている。

1921年、米国フロリダ大学Henry教授がミナス州ヴィソーザ農業大学を中心に
栽培指導をおこなった。カンピーナス農事試験場と一部の苗木商が、北米からアボガド
のメキシコ系、グワテマラ系、その他の交配種苗木を55種導入し、それから選抜され
たものが、現在の栽培種となった。

サンパウロ州イタペチニングアの生産者伊藤泰蔵は、1958年、自園から果型が大型
(1個800gr) で品質の良好なコリンガ種を選抜、16万本の首木を作って全伯に
配付普及に努めた。

現在の営利用品種では最良といわれている。

1972年、コチア組合では北米から輸出用小型品種を導入して試験中であったが、最

近その優良性が認められ、苗木の配付をおこなっている。またパラナ州で牧山親子によって選抜された冷涼地帯向けのドゥラード種の栽培が増加中である。

1988年度入荷量 22kg入：1.618.132箱

パイナップル (Ananas comosus Linn) アナナス科。Abacaxi
ブラジル中央部と北部の原産といわれるパイナップルは、16世紀にはすでにブラジルで栽培されており、主な品種はブランコ種とアマレーロ種であった。

1935年、サンパウロ州キロンボ植民地在住の今井豊吉は、セッテ・バラスの安藤由蔵がシンガポールから導入したと思われるスムーズ・カイエン種（缶詰原料として大栽培に適するトゲなし種）の首を譲り受け、それを増殖して普及した。現在、ミナス、サンパウロ、マット・グロッソ州では在来種に替りつつある。輸出はほとんどの品種で、それを目的としたサンパウロ州バウルーの吉浦悟、小田順介など、日系農業者による大栽培も多く、最近のセラード開発での栽培作物の一つと目されている。

1988年度入荷量 155kg入：205.980箱 17kg入：94.598箱

スモモ (Prunus Salicina 日本種。Prunus domestica 欧州種) バラ科。Amexa

スモモには3つの系統がある。日本、中国で生れた日本系スモモ、欧州から西部アジアで生れた欧州系スモモ、北米大陸で生れた北米系スモモであるが、ブラジルでの栽培の中心は欧州系（加工用）と日本系（生食用）である。

ブラジルには早くから日本から北米を経由してきた、サンタ・ローザ、ケルシー・パウリスタなど日本系スモモがあったが、いずれも庭先の果樹で、商品としての経済性をもたなかった。日本移民はそれから選抜したものを経済栽培の軌道に乗せた。

現在の主要栽培品種であるカルメジン種は、1969年、カンピーナス農試で改良されたものであるが、その交配、選抜、固定、普及は各地の日系栽培者が委託されておこなった。

1988年度入荷量 7, 3 kg 入 : 377. 961 箱 25 kg 入 : 11. 022 箱
2 kg 入 : 1. 933 箱 輸入量 10 kg 入 : 294. 433 箱

カキ (D i o s p y r o s K a k i L i n n . F) カキノキ科。C a q u i

カキの原産地は日本である。カキ属には約 2 0 0 種あるが、その大半は日本に存在している。ブラジルへのカキの導入は、1 8 9 0 年頃、ペレイラ・パレットがフランスから、初めは種子で、後に苗木で導入したといわれる。つまり日本からフランスに渡ったものがブラジルに来たわけである。品種は「禅寺丸」「峰屋」「衣紋」「富士妙丹」「美濃」など渋柿であった。

甘柿の優良品種は日本人によって日本から導入された。1 9 1 6 年に松本、1 9 2 3 年に吉岡、西岡、渡部らが、それぞれ「富有」「次郎」を導入して普及した。渋柿は吉岡が「美濃」「会津身不知」、栗原が「改良峰屋」「平核無」を導入した。郷愁の果実ともいえるカキの日本移民への普及は早かった。独立後、自家用果樹としてまずとりあげたのがカキであった。しかし完熟したものをすすって食べるというブラジル人の食習慣のため、カキとくに甘柿の経済栽培が軌道に乗ったのは 1 9 5 0 年以後のことである。最近は甘柿の消費が増加して、各地で増植が進められており、少量ではある

が、「富有」

のヨーロッパ輸出が始まっている。

1988年度入荷量 4,5kg入：1,278,845箱 27kg入：357,139箱

バンジロウ (Psidium guajava Linn) フトモモ科。Goiaaba
原産地は南アメリカといわれるが明らかでない。たしかに記録でないが、導入はブラジル発見後といわれ、各州で野性化したものを見ることができる。ブラジルで生果用としてバンジロウの経済栽培を初めておこなったのはイタケーラの渡部作蔵である。1939年、開墾地でみつけた野生の古木を残し、モモと同様の管理をして市場に出したところ、ダース2ミル（当時、鶏卵がダース2ミル）で売れ有望ということで増植し、一般にも奨励した。

野生の果物を栽培果樹として一般に広めた前例は少ない。

現在リオ州、サンパウロ州に生食用の栽培が増加し、周年栽培も技術的に成功し、年

間を通して出荷がある。

リオ州の生産者小川真一は「改良サンタ・アリセ」「小川白色1号」「2号赤色」「3号赤色」の選抜に成功、リオ、サンパウロ市場で人気を博し、増植が進んでいる。またカンピーナスの熊谷兄弟が「熊谷種」アチバイアの森西が「森西種」を選抜、両種とも品質が良いので栽培が広がっている。日系のミランドポリス農業組合ではその加工品を製造している。

1988年度入荷量 20kg入：132.941箱 3,7kg入：2.657.794箱

パパイア (C a r i c a P a p a y a L i n n) パパイア科。M a m a o

パパイアは中央アメリカの原産で、世界中の熱帯、亜熱帯地域に広く分布している。ブラジルでは食後の果物としてもっとも一般的なものである。ブラジルでの栽培歴は明らかではないが、北はパー州から南はパラナ州まで、古くから栽培されており、その栽培の容易さのため、これといった改良種はない。

1971年、フザリウム病に悩むピメンタ・ド・レイノ（こしょう）に替る作物として、パラ州の丸岡、大屋、山瀬らは、天理教東京大芝大教会長日木原明広の尽力で、ハワイ大学農学部で改良されたハワイ・マモンの種子を導入して栽培した。そのあと台湾で改良されたタイワン・マモンも導入され、両種とも美味なので、高級果実としてサンパウロ、リオなど大都市だけでなく、地方都市にも消費が及び、最近はヨーロッパ市場への輸出が進んでいる。

1988年度入荷量、在来種34kg入：1.968.794箱 ハワイ種6kg入：7.468.271箱

ペカン（Carya Pecan Engler et Graebner）クルミ科。Pecan

ペカンはクルミ科で穀果類ヒッコリーと呼ばれる種類群に入る。ブラジルには1865年アメリカ移民によって導入されたが、栽培は一般化しなかった。1942年パラナ州ウライの寺部正行、1948年プレジデンテ・プルデンテの柿原義治らが広面積の栽

培をおこない、また1950年、日本の賀川豊彦がペカン苗をもって来伯し、多くの日本人が耕地に数本つつ苗を植え、種子を蒔いた。最近、北パラナで病気に強い「諸川種①②」が育成され、パラナ州ウライを中心に栽培され、生産されている。

メロン (C u c u m i s m e l o , L) ウリ科。M e l a o

ブラジルにはヨーロッパ移民によって導入された。リオ・グランデ・ド・スール州では古くから栽培され、1966年まではブラジル最大の生産地であった。1967年以降はサンパウロ州奥地で栽培が急速に伸びて最大の生産地となったが、1981年にはバイア州、ベルナンブーコ州、パラー州など東北伯に伸び、現在リオ・グランデ・ド・ノルテ州が最大の生産地となっている。

1968年、サンパウロ州プレジデシテ・ブルデンテの大西らが、コチア産業組合と協力して、イスパニア系メロンのテンドラル・アマレーロから選抜採種して、ブラジルに適した系統を見つけ出し、1972年それを品種として固定し「アマレーロCAC種」と名付けて全伯に普及した。現在の栽培品種はほとんどこれであり、これが本格的に普及（まだ品種名がついていなかった1968年末から有利品種として普及し始めた）し

た 1 9 7 0 年以降は、それ以前に欧州、アルゼンチンなどから年間 1 2 万箱以上もあった輸入メロンが皆無となり、そればかりでなく、最近の東北伯の栽培の伸びで輸出も始まり、近い将来には世界的なメロンの大生産国となる可能性が非常に強い。現在のメロン生産の大半は日系農業者による。

1 9 8 8 年度入荷量、1 3 k g 入：2 . 6 0 0 . 0 1 0 箱 2 2 k g 入：1 5 7 . 1 5 7 箱 6 k g 入：5 1 . 3 6 4 箱

リンゴ (M a l u s p u m i l a . L) バラ科。M a c a

ブラジルへは欧州移民が種子で導入したものが多い。初め南伯 3 州で栽培されたが、当地の気候に適合した品種がなく良好な結実がみられず営利栽培までいかなかった。ただ、サンパウロ州ピエターデのアルヴィン・ブルックネルが実生選抜した暖地リンゴは、サンパウロ州の海岸山脈を中心とした小地域で、ある程度の営利栽培をおこなっていたが、量的にも質的にも問題にならず、市場はアルゼンチンからの輸入リンゴで占められていた。

1964年、サンタ・カタリーナ州フライブルゴで公的機関が試作したリンゴの中から「スター・クリムソン」「ゴールデン・デリシャス」が選ばれ、サンタ・カタリーナ州を中心としたパラナ州、リオ・グランデ・ド・スール州の標高1000m以上の高原地帯で本格栽培が始まった。

1971年、日本の国際協力事業団からサンタ・カタリーナ州に派遣された後沢憲志（農学博士）は、6年間の技術指導のかたわら、日本から導入して試作中の数種のリンゴの中から、中心品種として「富士」を決定、サンジョアキン市を中心にコチア産業組合のりんご生産団地をつくり、約500haに富士を植付け、1984年には72万箱以上の生産をあげた。

これらの成功によりブラジルのリンゴ生産は激増し、その消費量も増え、1986年に30万トンの生産量は、1989年には36万トンとなり、輸入量は年ごとに減り、86年に8万トンであったものが、1989年に5万4千トンとなっている。なお、生産時期の違う北半球（とくにヨーロッパ）への輸出も始まっている。

1988年度入荷量 21kg入：5.274.035

ビワ (E r i o b o t r y a J a p o n i c a , L i n d l e y) バラ科。N e
s p e r a

ビワはブラジルに古くからみられ、リオ・グランデ・ド・スール州には再生林の雑木の中に大木となった自然生えがある。初期のポルトガル船員がもち込んだものと思われる。

ビワは日本と中国が原産なだけに、営利栽培は日系農業者が多い。初期の日本人移住者が日本から苗で持ち込んだ「茂木」「クスノキ」「田中」などが初めの栽培品種であったが、後に茂木種から選抜された「イタケーラ早生」がサンパウロ州に広く普及した。現在の栽培品種の主なものは、日本から導入された「ミズホ種と大房種」、前者のほうが圧倒的に多い。ビワは摘果や袋かけなど管理に人手を多く要するので、増植の速度はにぶく生産量は少ない。したがってほとんど全部が高級果実として取扱われ、最近は少量であるがヨーロッパへ輸出されている。

1 9 8 8 年度入荷量 5 k g 入 : 2 7 6 . 3 2 6 箱

ナ シ (P y r u s c o m m u n i s . L) バラ科。 P e r r a

ブラジルにはリンゴやモモと同じように欧州系の移民が持ち込んだと思われる欧州系のナシがあるが、良い結実をみていない。

日系農業者が試験機関を通じ、あるいは個人で日本から導入した品種の中で、西洋ナシの雑種、支那ナシ（ヤーリ、ツーリ）、西洋ナシと東洋ナシの交配種、日本ナシ（晩三吉、20世紀）が有望とされている。また最近、サンパウロ向け栽培種として日本から「新水」「幸水」が導入され、すでに商業生産が始まり、高級果実として好評を得ている。

ブラジルのナシ栽培は、最近のマルメロのイ矮性台木使用で経済栽培への始期が早まり、また矮性で管理が容易になったため、急激に栽培が伸びる見込みである。かつてのリンゴと同様、輸入量は現在200万箱と非常に多いので、将来は大いに有望である。ナシの高級品種の生産のほとんどを日系農業者が占めている。

1988年度入荷量17kg入：45.260箱

モモ (*Prunus persica* L. Batsch) バラ科。Pessego

モモの原産地は学名にペルシャとあるが、最近では中国の華北の高原地帯だといわれている。ブラジルにはポルトガルの初期移民が持ち込んだと思われる。現在、北はミナス州から南はリオ・グランデ・ド・スール州にわたる広い範囲にモモの古い放任樹があるが、営利栽培をおこなったのは日系農業者が初めてで、わずか60年の歴史しかもっていない。

現在の栽培品種の多くは、放任樹を日系農業者が育成し、淘汰選抜したものである。そのうちの代表的なものは、サンパウロ州イタケーラの吉岡兄弟（義一、省、太一）が作った「ギイチ種」「タイチ種」「ロザータ・デ・イタケーラ」「4011号」「5014号」、沢部が関係した「サワベ種」などで、これらの品種はサンパウロ州のモモの40%を占めているといわれる。ただ、栽培面では最近では日系農家の割合が減少し（約20%）大部分は非日系の果樹園に移った。

1988年度入荷量 2,34kg入：2,582,808箱 10kg入：386,383箱 25kg入：3,191箱

ポンカン (C i t r u s r e t i c u l a t a B i a n c o) ミカン科。P o n c a
原産地はインド北部で、インド、中国南部、台湾、ハワイ、マレー、フィリッピンなどに産する。ブラジルには日本人移民が日本から導入した。

1 9 2 9 年、桑原久次郎が日本から持参した 2 本のポンカン苗を、在来 of レモン苗に接木して、2 本 3 本と増やしたものがそれといわれ、系統として高橋系ポンカンと低■系ポンカンの二つがある。初めは近隣の日系農業者だけの栽培であったが、サンパウロ州を中心としたブラジル人にも徐々に普及し、現在ではブラジル人の大栽培もある。

1 9 8 8 年度入荷量 2 7 k g 入：1 . 6 2 6 . 5 1 9 箱

イチゴ (F r a g a r i a c h i l o e n s i s D u c h) バラ科。M o r a n g o
ブラジルにおけるイチゴの栽培歴は浅く、5 0 年にしかない。営利栽培が本格的におこなわれるよう、になったのは第 2 次大戦後で、本多慶次郎が在来種から選抜の「ホンダ種」を 1 9 4 6 年に作出、スザノ、イタケーラの日系農業者が栽培したものが始めといわれる。

そのあとビラシカーバ農試などから優良種がぞくぞく作出され、コチア産組、南伯組合の無ビールス病株の配付、栽培者の苦心による高地育首、高地栽培などの栽培技術も確立して、栽培はサンパウロ近郊はもちろんのこと、リオ市、ブラジリア市、クリチーバ市、ポールト・アレグレ市近郊などでも盛大におこなわれている。

1988年度入荷量 3,2kg入:2,580,619箱

イタリア・ブドウ (*Vitis vinifera*. L) 巨峰。Uva Italia KYOHU

現在のブラジルの生食用高級ブドウであるイタリア・ブドウと巨峰の生産に関しても日系農業者の力が大きい。

イタリア・ブドウは1940年、フェラーズ・デ・パスコンセイロ (S. P) の臼井晋がルシアーノ・ホレンチがイタリアから導入したブドウ苗のうち、ベロバーノ65号に着目し、ブラジルでの栽培法を確立して、普及指導したものである。現在ではサンパウロ、パラナ、ベルナンプッコ、バイア州にも普及し、高級生食用ブドウとして確固た

る地位を占めている。

1973年、パラナ州バンディランテの奥山孝太郎は、自園のイタリア・ブドウから色つきの枝変りを発見、それを繁殖固定させ、「ルビー・オクヤマ」と命名して普及した。この枝変りはイタリア・ブドウと栽培管理が同様に、味、果型、重量もほとんど変わらないが、熟期に入ると着色し完熟と共に真っ赤になるので、収穫適期を誤ることがない。つまり早採りで糖度の少ないものを出荷するということがなくなるので、生食用高級ブドウとしての声価はいよいよ高まることになる。日本でも品種登録され、生産が増加している。

日本でつくられた有名な巨峰種を、日系栽培者が日本から導入した。花振りや脱粒の欠点に多少の研究余地があるが、黒紫色の高級ブドウとして評価を得つつある。

高級生食用ブドウの生産の90%は日系農業者によるものであり、ヨーロッパ向け輸出も順調におこなわれている。

1988年度入荷量 イタリア種8kg入：1,757,400箱 ルビー種8kg入：665,077箱

スイカ (C i t r u l l u s v u l g a r i a . S C H R A D) ウリ科。M e l a n c
i a

原産はアフリカである。ブラジルには北米の南北戦争（1 8 6 1 ～ 6 5）の後に移住してきたアメリカ農業者が北米の種子をもち込み、サンパウロ州のアメリカーナで自家用に植えたものが広まったといわれる。

第2次大戦後、サンパウロ州バストスの日系農業者が日本から導入した「大丸大和」種は品質良好、輸送性、貯蔵性が良かったので、当時までのサンタ・バルバラ種（北米系）を圧倒し、現在ではほとんどの品種になっている。最近になって日系農業者が日本から小玉西瓜のいろいろな品種を導入したが、そのうちの「ニュー小玉」が定着、栽培されている。

1 9 8 8 年度入荷量 7 4 . 6 8 3 . 5 5 0 k g

ウ メ (P r u n u s m u m e S I E B . e t Z U C C) ブナ科。A m e i x a b r
a v a

中国と日本が原産地で、ブラジルへは日本移民が携行したと考えられるが、その多く

は生育しなかった。台湾梅は1967年ころ台湾人の孫河福が梅の種をとりよせ、サンパウロ州ボツカツで育成したものが始めであるが、現地の日本人老人クラブが主になってそれを増殖し、各地に苗を分譲した。現在ではサンパウロ近郊各地に栽培が広まり、梅漬、梅酒の原料となっている。

ク　リ（*C a s t a n e a c r e n a t a . S I E B e t N U C C*）ブナ科。*C a s t a n h a*

今から約100年前、ペレイラ・パレットが各種の温帯果樹をヨーロッパから導入したがそのとき日本栗の苗もいっしょに導入したといわれる。したがって日本移民が来伯したときには、すでにブラジル南部のあちこちに、放任された日本栗があった。

1958年、サンパウロ州イタケーラの松本圭一は、日本から多数の栗の品種を導入し、自園あるいは他園に依頼して栽培試験をおこない、ブラジルに適合した品種を選出し、その普及に努めた。

ブラジルで有望といわれる栗の品種は、極早生で「森早生」「玉造」「KM-1」早生

種では「丹沢」「伊吹」「出雲」「大国」中生種では「筑波」「有磨」晩熟種では「岸根」「晩赤」などがある。

クリは12度Cの等温線を中心とした北緯30度から45度の範囲に自生していたものであるから、高温多湿のブラジルで良栄を得るには相当の技術を必要とする上、収穫後の保存が限られる。栗の需要の多いクリスマス以前に生産がないので、栽培は一般化していない。

2. 野菜類

ブラジルでは、バレイショを雑穀類としているが、この項に入れた。

レタス (L a c t u c a s a t i v a L) キク科。A l f a c e

レタスの品種は非常に多い。原産地は小アジア内郡、コーカサス地帯、中東から地中

海沿岸とされている。ブラジルでもっとも経済性の高いものは結球レタスのうちのバター・ヘッド型である。この型は60～80日の早生で比較的つくりやすいが、輸送性がないので栽培は都市近郊に限られる。

代表的な栽培品種は「ホワイト・ボストン」であるが、これは暑さとビールスに弱い。カンビーナス農試の永井洋は、この「ホワイト・ボストン」を基礎に、ビールスに強い、春から夏にかけて栽培できる「ブラジル48種」を作出し普及した。レタスのほとんどは日系農業者が生産している。

1988年度入荷量12kg入・2,435,426箱、.4kg入り・144,584箱

ニンニク (*Allium Sativum* L) ユリ科。Alho

ブラジルに導入されたのは非常に古く、初期のポルトガル人によるものと考えられ、すでに植民地時代から料理の重要な香辛料となっていた。ニンニクの繁殖は種子によらず栄養体繁殖でおこなわれるので、ブラジルに適合した新しい品種をつくり出すことは

非常にむずかしい。そのため各国から多数の優良品種を導入し、試作をくり返して、ブラジルの気候風土に適合し、栽培可能なものだけを残していくという方法がとられてきた。

1974年から在来種の選抜をおこなってきたサンタ・カタリーナ州ラーモス植民地の長南ら生産者は「長南種」の作出に成功、1977年末におこなわれた全国ニンニク共進会で最優秀賞を獲得した。このため現在、ブラジルの南部諸州での栽培品種は「長南種」が多くなり、生産も増加している。

1988年度入荷量10kg入・219.561箱、コチア組合入荷量・284.589箱、スール・ブラジル組合入荷量・146.342箱。

馬鈴薯．ジャガイモ（*Solanum tuberosum*. L）ナス科。Batata
1913年ごろ、奥地のコーヒー農場からサンパウロ近郊に移った日系農業者は、当時
イスパニア、ポルトガル系農家によって、極めて粗放的につくられていた馬鈴薯の栽培
をとりあげ、まず種いもの選別からはじめ、より生産性の高い「パラナ・オウロ」を選

抜した。

その上、施肥、消毒と、当時としては最尖端をゆく栽培法を確立して、経済栽培の先鞭をつけた。

これらの日系農業者は、馬鈴薯の栽培で近郊集約農業の原型をつくったばかりでなく、コチア組合、南伯組合、モジ組合など有力な農業協同組合を生み出す原動力となった。

そのあと馬鈴薯の経済栽培は、サンパウロ近郊からアルタ・ソロカバーナ、モジアナ、ブラガンサ、南ミナス、南パラナへと広がった。また南部のサンタ・カタリーナやリオ・グランデ・ド・スールでは、馬鈴薯を主食とする欧州移民が導入されたので、早くから自家用に栽培されていたが、市場向け大規模栽培者はほとんどなかった。

なお、最近の馬鈴薯栽培は以前の投機的な栽培型は影をひそめ、堅実な栽培計画で行われるようになった。また、コチア組合は最近、馬鈴薯の半加工品の販売を開始し、目下急速に消費が拡大しつつある。

1988年度入荷量 60kg入・3.601.915 コチア組合入荷量・3.3

2 1 . 4 6 0 俵、スール・ブラジル組合入荷量・3 7 3 . 4 5 5 俵。

ナス (S o l a n u m m e l o n g e n a . L) ナス科 B e r f n g e l a

ナスの栽培品種の原生地はインドと考えられている。ブラジルにはいつ入ったか明らかでないが、おそらく中央アジアのトルコ人、レバノン人移民によって導入されたものと考えられている。初めは北米から種子が入っていたが、在来種のほうが市場性にあったものが多いので、それを基にビラシカーバ農大の生田博が、一代雑種「ビラシカーバ4 1 号」「ビラシカーバ1 0 0 号」をつくって普及した。

そのほか、日系の一般栽培者も選抜に努め、それぞれの地域に合った市場性の高いものを選び出している。有名な「エンブー種」はエンブーの篠原らが選抜固定したものである。

最近では日本から日本種を導入して栽培している者が多いが、小型細手ものは日系人の消費だけで、まだ一般的な市場性は少ない。

1 9 8 8 年度入荷量 1 2 k g 入：2 . 0 0 1 . 5 0 2 箱

アーチチョーク (*Cynara scolymus*. L) キク科。 *Alcachofra*

原産地は地中海沿岸といわれている。初めは葉だけを食べていたが、花■を食べる現在の品種に変わった。イタリア系移民がもって来たと思われるものがサンパウロ州サンロッケ付近に古くからあったが、その栽培法を確立し、経済作物にしたのは日系農業者で、ここ30数年のことである。現在では周年収穫の技術も確立して、地域の特産物となっている。

生産の90%は日系農業者のものである。

1988年度入荷量 0, 1kg 束: 6, 900, 940 束

ニンジン (*Daucus carota*. L) セリ科。 *Cenoura*

ニンジンの原産地はアフガニスタンである。ブラジルでは第2次大戦までフランスから種子を輸入し、そのあとフランスのナンテス系を北米で改良したものを北米から入れ、最近では北米種をいれて栽培をおこなっている。

1963年、ビラシカーバ農大の生田博が、日本から各種のニンジンをもって来た。そ

のうちの「黒田五寸」は尻細であるが、長さはナンテスと同様、色はより優れて、特に夏蒔きするとき黒葉枯病に強いという特徴をもっていたので、尻の太いナンテスを目標に、黒田五寸の選抜を始め、やや目標に近い「黒田改良種」をつくって普及させた。これは市場性が良く、夏蒔きには欠くことのできない重要な品種である。

また、パラナ州ロンドリーナ近郊の上佐義雄は、ブラジル在来種にナンテス種を交配、選抜育成して、夏期の端境期に出荷できる「ロンドリーナ種」を作出して普及、現在、ブラジルの各地で栽培されるようになった。

1988年度入荷量 25kg入：3,297.082箱

ピーマン (*Capsicum annuum*. L) ナス科。Pimenta o

原産地が南米だけに在来種が多く、サンパウロ州、ミナス州、パラナ州では、そのうちのブラジルに適したものを使い北伯やリオ・グランデ・ド・スール州では北米産の種子を使っていた。

1955年ごろ、スザノの栽培者の間で選抜されてできた「カスカ・ドウラ種」は、ビー

ルス病にやや強く、豊産、日もちもよいのでサンパウロ、パラナ、ミナスの各州で広く使われた。1958年、カンピーナスの池田虎之輔は、この「カスカ・ドゥラ」の収穫末期にビールスの害を受けていない株を選ぶという仕事を7年間くり返して、カスカ・ドゥラ種よりはるかにビールスに抵抗力のある「イケダ種」をつくることに成功した。1965年、コチア組合で品種比較試験をおこなった結果、「カスタ・ドゥラ」は「ルビーキング」（在来種）の3倍の収量、「イケダ」は「カスカ・ドゥラ」の3倍の収量という成績であった。「イケダ」は「カスカ・ドゥラ」と同様の市場性をもつので、ビールス病の多い地帯での最も実用的な品種となった。

また、リオ州の渡部が作出した「アーベラ種」はYビールスに非常に強く、果は「イケダ」と同様なので市場性が高く、リオ州で栽培が多い。現在のブラジルのピーマンは、「カスカ・ドゥラ」「イケダ」「アベーラ」「アグロノミコ10G」「マルガレッテ」「カンガレッテ」の6種で占められている。

なお、これらを元にして、各地の生産者あるいは日系の種苗会社がそれぞれ特長のあつるものを作出して普及している。日系以外の農業者の大栽培もふえたが、なおピーマン

生産の大半は日系農業者である。

1988年度入荷量 12 kg 入：2,793,928 箱

パースニッフ。(Arracacia xanthorrhiza. BANK) セリ科。Mandioquinha 原産はアンデス山脈の東部といわれ、ブラジルでは南部の冷涼地帯で栽培が多い。まだ世界的な野菜に入らないが、サンパウロでは重要な野菜の一つとなっており、年間55万箱(25 kg 入)ほどの入荷がある。

サンパウロ州の主な産地は、ピエターデ、イビウナ、サント・アマーロなどの日系集団地で、日系農業者が在来種から市場性の高いものを選抜し、馬鈴薯やトマトの裏作としての有利な栽培法を確立した。

1988年度入荷量 25 kg 入：555,062 箱

キュウリ (Cucumis sativus. L) ウリ科。Pepino

原産地はインドのヒマラヤ山麓地帯といわれている。キュウリの導入は古く明らかでないが、ブラジルには欧州系移民がもち込んだものと思われる。

現在、市場の大半を占める「青大種」は（ブラジル人もアオダイという）1930年代に移民が日本から持ちこんだものである。長年の採種のくり返しで、日本の青大種とは異なったものになっているが、市場性が高いので、現在もなお、栽培者、産組、試験場の間で選抜採種がおこなわれ、有望な青大の新種がぞくぞく発表されている。この品種なしではブラジルのキュウリは語ることはできない。

1960年代からあと、日系農業者が日本からいろいろなキュウリの品種を導入しているがこれらもブラジル人の間に徐々に浸透して人気を拍しつつある。

1988年度入荷量 24kg入：1.809.669箱

トマト（*Lycopersicon esculentum*. MILL）ナス科。Tomate

ペルーを中心としたアンデス山脈の中腹に野生種があるので、この地帯が原産地と考えられている。したがって中南米での栽培の歴史は古く、栽培種は紀元前のインディアンの移住によって、中米やメキシコその他に伝えられたと想像される。

ブラジルでは、サンパウロ州にイタリア移民がふえて、今世紀初め頃からトマトの生産と消費が増えた。

そのころ小資本で独立した日本移民が営農の中にトマト栽培をとり入れ、近代的な栽培法をおこなったことと、リオ、サンパウロなどの大都市の人口膨張による消費の増大とが相まって、生産は年ごとに増大した。とくにサンパウロを中心にイタリア系住民の多いことが、トマトを多く使用するイタリア料理の普及とともにトマトの消費増大につながった。

トマトは他の作物に比べてやや栽培がむずかしく、生産費も多くかかるが、収益も大きいので、日系農業者は好んで営農にとり入れ、それぞれの地域で有利性を高めるため、品種の選抜を積極的におこなった。

約60年前、トマトの経済栽培が始まったころの品種は、イタリア系在来種の「レイ・ウンベルト」をはじめ「シャカレイロ」「カンピネイロ」で、いずれも果型が小さく、品質も悪かった。当時、スザノの花城が「レイ・ウンベルト」と「シャカレイロ」を栽培中にこの両種の自然交配から、両品種の長所を合わせもったものを発見して、これ

を育成採種した。

1940年、コチア組合はリオ州サンタ・クルース植民地に入植した10数家族の組合員にこの種子を送り、集団的に栽培・出荷させたところ、リオ市場で品質が良好という声価を得て、市場の仲買人にトマト・サンタ・クルースと呼ばれるようになり、それが今日に引継がれて「サンタ・クルース種」となった。

そのあと現在に至るまで、各地の熱心な生産者、産業組合、種子業者らが、このサンタ・クルースから選抜採種しているものが多く、有名なものだけで20数品種に及ぶ。そのうち日系人の関与したものを列挙する。

「CAC-A種とCAC-B種」はコチア組合で選抜採種。「スールブラジル種」は南伯組合で選抜採種。「ピエダーデ・ジカンテ種」はピエダーデのドラジンニョ区の生産者が選抜採種。「サマノ種」はイビウーナのサマノが選抜採種。「コバヤシ種」はサマノ種からリベロン・プレットの小林が採種。「モンマ種」はサント・アマーロの門馬が選抜採種。「カダ種」はピエターデのドラジンニョ区の生産者が選抜採種。「サンタ・エリーザ種」と「アンジェラ種」はカンビーナス農試の永井が選抜採種。「ミゲール・ペ

レイラ種」と「サント・アントニオ種」「L 4 種」はリオ州ミゲール・ペレイラの渡辺が選抜育成。「ヨコタ種」はピラル・ド・スールの横田が選抜採種。「オオサワ種」はインディアツーバの大沢が選抜採種。

他にサラダ専用として、トマト・カキといわれる大型の平たいグループがある。これには前出のカンピーナス農試の永井、リオ州ミゲール・ペレイラの渡辺が、在来種に北米や日本からの導入種を交配して、ブラジルに適応したものを選抜したものがある。最近、サン・カルロスの大石は北米種から選別して尻腐れに強い「大石種」を作出した。

トマトはブラジルでは、量、金額とも最重要の野菜で、その栽培の80%は日系農業者とみられている。

1988年度入荷量 25kg入：12,619,290箱 トマト・カキ 24kg入：148,327箱

サヤインゲン豆 (Phaseolus vulgaris. L) マメ科。Feijoa Vagem

原産地はメキシコ南部から中央アメリカにかけてである。ブラジルでの栽培歴は明らかではないが、欧米からもち込まれた栽培種をブラジルで採種し、ブラジルの名がつけられたと思われる。

現在のブラジルの栽培種は、莢の平たい「マンティガ種」と莢の丸い「マカロン種」であるが、コチアの日系農業者は、その中間の「リオ・コチア種」を選抜、市場で好評を博している。スール・ブラジル組合は「スール・ブラジル・カンピネイロ」を作出、日系採種業者のアグロフローラは「ナモラーダ種」と「セニヨリッタ種」を作出して大いに普及している。そのほか「トッパン種」「イタチーバ種」「ブラジリア種」など、各地で地域に適合した品種が育成され、栽培されている。

1988年度入荷量 19kg 入：1. 150. 355 箱

オクラ (*Hibiscus esculentus*. L) アオイ科。Quia bo

オクラの原産地は東北アフリカといわれ、ブラジルには奴隷がもちこんだものと思われるが、その時期は明らかでない。

1948年、リオ州ビラネマの国沢寿春は、サンパウロ州奥地から在来種の白オクラを導入し、試作2年のあと経済栽培に移ったが、白オクラは収量が少なく市場性も悪かったのでその欠点改良に努め、1964年に自園で1本の節間の短かい（つまり収量が多い）果型の良い緑色オクラを発見した。それから大事に採種し、3年かかって選抜固定させ「キアーボ・ビラネマ」と命名して一般に普及した。

この品種は、果型果色も味もよく、収量も多いので、現在のブラジルのオクラの代表的品種となっている。他にリオ農大のスト・シノブが育成した「サンタ・クルス47号」とカンビーナス農試が育成した「カンビーナス2号」が有名である。

1988年度入荷量16kg入：494．908箱

日本カボチャ (*Cucurbita moschata*. DUCH) ウリ科。 *Abobora Japonensis*

ブラジルでカボチャとして栽培してきたものは、西洋カボチャ (*maxima*) に類するものとペポカボチャ (*pepo*) に類するものであった。1970年代に入って日

系農業者が日本から、日本カボチャの「鉄カブト」や「エビス種」を導入して栽培を始めていたが、最近是一般食用のほかスープ用、あるいは菓子の原料としての需要が多くなり、ブラジル農業者の間にも増植が進められている。サンパウロ市場では日本カボチャを「アポーボラ・ジャボネーザ」、あるいは「アポーボラ・ホッカイドウ」という名で取扱っている。

1988年度入荷量 35kg入：24.026箱 kg売り：6.640.896kg。

キャベツ (Brassica oleracea. L) アブラナ科。Repolho

原産地は地中海沿岸地方といわれる。ブラジルへの導入時期は明らかでないが、サンパウロ州では欧州系移民が古くから栽培していたという。現在、世界のキャベツの品種は多く 200種近くもあるという。ブラジルでできた品種は、導入種が馴化した「サバウーナ」（別名ロッコ種）と日本種を交配した一代雑種だけで、他はすべて輸入種である。

1940年ごろサンパウロ州モジ・ダス・クルーゼスのイスパニア系農業者が、とり残したキャベツが大霜で偶然にも抽台結実しているのを発見した。彼はこの種子を蒔いて、その中から低温要求度の低い、毎年採種できるものを選抜し固定した。この品種は抽台しないものが抽台したということで、気狂い（ロッコ）種と名づけられたが、後に地名の「サバウーナ種」と改名された。

1960年代に入って、日系農業者は日本からキャベツのいろいろな品種を導入し、試作してブラジルの気候に合ったものを栽培種とした。日本キャベツはロッコ種に比べ耐病性はやや劣るが、味が非常に良いので、わずか3～4年の間に、ロッコ種に代わる代表的な栽培品種となった。

ビラシカーバ農大の生田博は、日本種の耐病性が劣るという欠点を除くため、ロッコ種を交配して、耐病性のある一代雑種をつくった。この品種は1967年から一般に配付された。

現在の栽培種は「夏まき理想」「四季どり」「晩抽理想」「松風」「葉深」など、すべてが日本種で、日本から種子を輸入して栽培している。味の良さが、短い期間でブラジル人

の味覚を変え、在来品種を駆逐した一つの実例であり、栽培も日系農業者に多い。

1988年度入荷量 35kg入：2,405,131俵

ハナヤサイ (Brassica oleracea. L) アブラナ科。Couve Flor

原産地は地中海沿岸といわれる。ブラジルへの渡来は明らかではないが、リオ、サンパウロ、パラナリオ・グランデ・ド・スールの各州の山脈に接した、比較的涼しい多雨地帯で広く栽培され、重要な野菜の一つとなっている。

花芽の集合部分（花球）を利用するこの作物は、花芽の分化を起す温度感応の差により品種の早晩性が強く表われる。したがって栽培地域に適合した品種を得るための選抜育成が古くからおこなわれ、在来種、輸入種からの選抜種が多い。

リオ・グランデ・ド・スール州の山口と中村は「リオ・グランデ種」を、サンパウロ州の安楽は「安楽種」をつくったが、これらは早生とごく早生の端境期をねらったものである。最近、サンパウロ州ジャラグアの宮井は花揃いがよく、高温に敏感でない、つまり暑い時期にもつくりやすい「宮井種」を発表した。いずれも主要栽培品種の一つと

なっている。他に各農事試験場、日系採種業者の手になった有名品種が普及し、各地で栽培されている。

1988年度入荷量 12 kg 入：1.339.739 箱

ハクサイ (*Brassica pekinensis* RUPR) アブラナ科。 *Acelga Japonesa*

中国の原産であるハクサイは、古くから日本に伝わり、日本人となじみの深い高菜である。ブラジルには日系農業者が導入し、ブラジルの日系人を対象につくり始めたが、最近ハクサイの微妙なうまさをブラジル人が知りはじめ、サラダ、スープ用として需要が多くなり、ごく最近では日系人よりブラジル人の方が多く消費するようになった。

主な栽培種は日本から輸入の「耐病40日」で、栽培の大半は日系農業者である。

1988年度入荷量 27 kg 入：543.411 箱

タマネギ (*Allium cepa*. L) ユリ科。 *Cebola*

タマネギの原産地は中央アジアといわれている。ブラジルにはヨーロッパ移民によってリオ・グランデ・ド・スール州に導入され、そのあと南部諸州に、現在はさらに北上してベルナンプッコ州にまで栽培が広がっている。

栽培地域も広く、品種も多く、気象条件も違うので一概にはいえないが、タマネギは一般に粗放栽培が多く、単位面積当りの収量は他の主要生産国に比べると半分以下となっている。しかし、日系栽培者の場合は、灌水、消毒、施肥を積極的におこない、ブラジルの平均収量の3～4倍の単位収量をあげているのが通例である。最近はその管理技術が次第に周囲に普及し、全体的な生産が向上しつつある。

1988年度入荷量 20kg入：3.792.820俵 コチア組合入荷量：1.451.030俵

スール・ブラジル組合入荷量：477.927俵

ショウガ (Zingiber officinale Roscoe) ショウガ科。Gengibre
原産地は熱帯アジアで、ブラジルには17世紀にオランダ人がもち込み、当時はブラ

ジルとオランダ両国の交易上重要な産物であったといわれる。現在サンパウロ州が主産地で、年間1800トンほどの生産があるが、ほとんどが欧米に輸出され、貴重な外貨を稼いでいる。

現在の栽培品種は大型種が多く、「オタフタ」「タカハシ」「オウショウガ」「インドショウガ」など、大部分は日本から導入したものである。最近はセラードでも栽培されている。

1988年度入荷量 16 kg 入：127.749 箱 葉付ショウガ 0,75 kg
入：87.761 束

長ネギ (*Allium fistulosum* L) ユリ科。Cebolinha
ブラジルでは細ネギが肉の味付けに多く使われているが、最近は普通食にも使われはじめ、需要が増えている。栽培にはほとんど日本からの導入品種が使われている。

1988年度入荷量 0,6 kg 束：4.026.210 束

サトイモ (*Colocasia esculenta* ENGL) サトイモ科。In
h a m e

スープ用に最近は需要が多い。したがって価格は安定している。日本から導入した
「土垂」「石川早生」「黒軸」などが評判がよい。

1988年度入荷量 22kg入：187.921箱

ダイコン (*Raphanus sativus*. L) アブラナ科。R a b a n o

最近、ブラジル人の間にサラダとしての需要が増えている。品種は日本から導入の
「美濃早生」「交配夏美濃早生1～3号」が多く栽培されている。

1988年度入荷量 束3, 8kg：789.482束

ゴボウ (*Arctium lappa*. L) キク科。B a r d a n a

野生種は欧州、シベリア、中国にあり、欧州の一部で、ゴボウの若い時の葉と根を食用に
するところもあるといわれるが、根菜として重要な野菜となっているのは日本だけ
である。ブラジルには日本人がもち込み、日本人の郷愁の食物となっていたが、最近

ブラジル人が、日本料理店、あるいは近隣、親戚の日系人（子弟の結婚による）家庭で、その味を覚え、ゴボウと名ざしで買うものが増えてきた。しかし、ブラジル人の一般的な食料とはまだ言えない。

1988年度入荷量 束 1 k g : 4 0 2 . 4 9 7 束

エンドウ豆（P i s u m s a t i v u m . D . C）マメ科。E r v i l h a

中央アジアから地中海沿岸を原産地とし、南欧州で栽培種となっただけに、ブラジルには南欧系移民がもち込んだものと思われる。

1940年の末、サンパウロ州イタペチニングアの大川は、欧州から導入の赤花大莢系を選抜淘汰して、さらに大莢で早生の「大川種」をつくった。コチア組合はその優秀性を認め、大川に採種を依頼し、組合員への普及に努めたので、現在の生産の大部分はこの品種。

1960年ごろ、ピラール・ド・スールの村松は晩生の「村松種」をつくり、ごく最近にはモジ・ダス・クルーゼスの鶴賀が、大川種から選抜してさらに有望な「ツルガ

種」をつくって普及している。1980年代に入り、上記のサヤエンドウの他に、加工用粒エンドウの生産が、セラード農業者によって始めて可能となった。エンドウの生産はすべて日系農業者による。

1988年度入荷量 12kg入：144.733箱 30kg入：34.674箱

タケノコ (Phyllostachys. SP) イネ科。Brotto de bambu

ブラジルには蓬萊竹に属すると思われる、地下茎のごく少ない、あるいは全くない株立ちの竹が多くあるが、そのタケノコはあくが強く食用としては適当でない。ブラジルで食用にされているタケノコは、すべて日本人が日本からもち込んだ日本竹のものである。

1930年、サンパウロ州コチア郡の下元亮太郎と矢野政美は日本から「孟宗竹」「真竹」「ハチク」を導入し、繁殖して普及した。タケノコもゴボウと同様、初めは日系人だけの食物であったが、最近ではブラジル人がサラダの一つとして好んで食べるパルミット（ヤシの新芽）とタケノコの味がよく似ているので、パルミットの替りとしての需要

が増えている。

1988年度入荷量 23kg入：26.117箱

3. 繊維作物

ラミー (Boehmeria nivea. GAUDICH) イラクサ科。Rami

今世紀の初めにサンタ・カタリーナ州で牛の飼料用として試作されていた。また1934年に中国系品種が導入されてサンパウロ州サルト・グランデで栽培されたといわれているが、ラミーの本格的な栽培、加工、普及は日本人がおこなった。

1938年、コチア組合の村上誠基が日本の宮崎農試から取寄せた品種を改良して「村上種」を作出、サンパウロ州内に広めた。また、同年に松井丙吉（海外興業職員）は、マレー産のものといわれるラミー苗をもち込んで、海興のアニューマス農場とパラナ州ウライで試植した。この苗は「台湾太茎・白色皮」で、試根の結果は良好だった。さっそく日本から脱皮機をとり寄せ本格的栽培に移ったのは、翌1939年であった。

1941年、東京麻糸株式会社はパラナ州ウライに726haの土地を購入、2名の指導員を派遣してラミー栽培に当らせた。しかし、脱皮機に欠陥があるなどで、ラミーの生産が軌道に乗ったのは第2次声戦後であった。

1946年、海興関係者によるブラジル・ラミー会社（CIBRAM）の加工設備ができ、ついで1958年、ウライにラミー王と呼ばれる市村の加工場がつくられ、栽培から加工まで一貫して日系人がおこなうことになった。その後、化学繊維の出現で多少の浮き沈みはあったが現在は再び天然繊維の盛況期に至っている。現在、主産地のウライにごく近いロンドリーナに東洋繊維が工場を建設している。製品はほとんど輸出である。

イグサ（*Juncus effusus*）イグサ科。Juncus

1931年、サンパウロ州レジストロの吉村茂は、日本から移住する時に岡山から数株のイグサをもち込み、自園の低湿地に移植した。そのうちの一株が、たび重なるリベイラ河の氾濫に耐えて繁茂したので、それを増植した。日本ではイグサは年1回の刈取り収穫しかできないが、レジストロでは3回の収穫が可能であったので、1934年、海

外興業株式会社の斡旋で日本からムシロ編機を導入して、本格的栽培に移った。

初めはイグサでつくったゴザ、手芸品などはコチア組合で販売したので、生産は年ごとに上昇したが、1963年に至ってゴザ類は工業製品とみなされ、コチア組合では扱うことができなくなった。そこで1963年11月、イグサ生産者30家族は独自の組合をつくり、生産から加工、販売までをおこない、地域の特産物としての地位を確保し現在に至っている。

生産者はすべて日系農業者である。

ジュート (C o r c h o r u s C a p s u l a r i s . L) シナノキ科。J u t a、

原産地は中国南部といわれ、栽培はインド、パキスタンなどで古くからおこなわれていたが、当時はインドが英領であったので、英国が独占の形で世界に供給していた。

1920年から30年にかけてブラジルは農業国でありながら、コーヒーを筆頭とする多くの農産物の包装袋の原料であるジュートを、インドから高額で毎年輸入していた。当時のブラジル政府はこの事態を重視し、国産化を考え、関係者はアマゾンでのジュー

ト生産を日本人移民に期待した。

辻小太郎（当時神戸高商講師）はアマゾン一帯の視察の途次、立寄ったサンパウロ州農務局からインド産と思われるジュート種子を2 k gわけてもらい、アマゾンでの最初の試作をおこなった。1930年、マナウスでのことである。

そのあと、上塚司の指導と後援で移住していた日本高等拓殖学校の卒業生をはじめ多くの人たちの手で2度3度と試植されたが、結果は4～5 mに伸びるものがその3分の1にも満たず、極めて不良だったため、栽培者のほとんどが失望し、ジュート栽培を断念してしまった。

ところが、1933年に52才でアマゾンに入植した尾山良太は、暮れの12月20日に自園の生育不良のジュートの中から突然異変とも思われる2本のジュートを発見し、そのうちの1本から辛うじて10粒の採種に成功、その種子の増殖を計り、1937年4月から繊維の調整を始め、初めて8.941 k gのアマゾン産ジュートが世に送り出された。これが後に「オヤマ種」と名づけられた。

そのころブラジルのジュートの輸入量は、1935年に2万4千トン、36年に2万

7千トン、37年に3万4千トン、金額にして56万5千ポンドの巨額に達していたが、このジュート「オヤマ種」が普及してからは、輸入が年を追って減少し、ジュートは当時の州経済の30%を担うほどになっている。

この「オヤマ種」は1941～66年の間に政府機関の手によって改良され、1948年に7千トンに下った生産量が65年には6万トン以上になった。なお、ここ20年ほど前までは日系農業者がジュートの直接の栽培者であったが、最近はブラジル人が直接の栽培をおこない、日系人はその雇主、あるいはジュートの仲買人となっているものが多い。

4. 花卉・庭園樹

〈花卉類〉

ブラジルで花が経済栽培できるようになったのは、今から35年ほど前からであるから、その歴史はごく短い。それ以前は移住者が携行したそれぞれの国の種子は、庭先

に植えられて、郷愁の花として眺められていたに過ぎない。

1952年、サンパウロ州スザノの石橋初雄はオランダからグラジオラスの優良種を導入、5年間の試作でブラジルの適応品種を選抜し、それを繁殖して普及した。

1954年、サンパウロ州アナハイチの松岡春寿は、ウルグアイからシム系のカーネーションとブラジルになかった菊の品種を導入して繁殖し、2年目から花づくりを志す青年たちに苗を分譲するとともに、その栽培技術をも指導した。

1958年、前出の石橋はアルゼンチンから菊とカーネーション、1961年には日本からバラ、ツツジ、ツバキ、松、杉など多数の品種を導入、ブラジルに適した優良品種を選んで繁殖し普及した。

1950年代の末に、石橋、松岡ら先覚者の技術指導を受けた青年たちから、更に幾何級数的に増加した日系花作りは約1000家族を数え、現在ではブラジル花卉産業を担う中核となり、そのうちの相当数のものは輸出をも狙った花卉栽培を大がかりにおこなっている。

前記したように、ここ35年ほど前はブラジルの花の栽培種は、先覚者が苦勞して外

国から導入し繁殖したものであったが、最近ではブラジル経済の発展と共に花の需要は急激に増え、更に外国からの導入も容易になったので、日系とオランダ系栽培者は、機会あるごとに日本やアメリカ、ヨーロッパなどから有望な品種を導入して栽培しており、国内ばかりでなく輸出を専門とする栽培者も増えている。

〈庭園樹〉

数多くの庭園樹がブラジルに導入されているが、その導入の経緯の明らかなでないものが多い。日本移民が移住の際に種子あるいは苗を持ち込んだものが相当あったと想像されるが、そのほか植物園など公的機関が日本から直接、あるいは北米やヨーロッパを経由して導入したものも多いようである。

1958年、サンパウロ州スザノの花弁、庭木栽培者の石橋初雄は、日本から庭園用としてバラ、ツツジ、ツバキ、山吹などの花木や、松、杉、イチョウ、楓、ナンテン、ヒバ、八手、竹などの庭木を導入、それを育苗して同業者に分譲し、更に全伯に普及させた。ちなみに石橋が1971年に分譲した苗木は40万本にのぼったという。

最近では日本庭園に関心をもつブラジル人が増え、庭園樹の需要も徐々に増えているが、更に高速道路や発電所の築堤などの保護林兼鑑賞樹としての需要も増え、生産が間に合わないほどのようだ。

5. 香辛・嗜好作物

コショウ (*Piper nigrum*. L) コショウ科。Pimenta do Reino

原産地は西インドといわれ、12世紀からアラブ商人を通じてヨーロッパに知られている。

ブラジルには17世紀になって導入されたが、品種が劣っていたことと栽培技術が確立されていなかったことで大規模栽培には至らなかった。そのコショウの優良品種を導入し、栽培技術を確立して、経済栽培の軌道に乗せたのは日本人移民である。

1928年、日本で設立した南米拓殖会社は、翌29年に現地代行機関のコンパニヤ・ニッポニカ・デ・プランタソン・ド・ブラジルをパラ州ベレンに設け、アカラ植

民地（後のトメ・アスー植民地）の開設に乗り出し、同年9月に入植した第1回移民に、カカオを主作とし、米、コショウ、その他を補助作物にした営農を指導した。この時のコショウはブラジル在来種で、実の成りが少なく経済性はなかった。

1933年8月、ハワイ丸の輸送監督臼井牧之助（南拓社員）は、ブラジルへの途次、シンガポールの植物園で20本のコショウ苗を購入、船内でそれを育成、アカラ植民地のアサイザール試験場に植えた。

1935年4月、経営不振の南米拓殖株式会社は業務縮小を決定し、8回以降の移民にはカカオ栽培に当らせたが、すべて徒労に終り、カカオ直営農場の閉鎖、アサイザール試験場の廃止、モンテ・アレグレ植民地、カスタニヤール農場の閉鎖などを実行した。

この時、アサイザール試験場の閉鎖業務に従事していた尾花福太郎は、試験場の片すみにすくすく伸びている3本のコショウの若木を見つけた。臼井敏之助がシンガポールからもって来た東洋のコショウであった。それを居合わせた加藤友治と斉藤円治（南拓閉鎖後試験場を買い取った）に一本ずつ分けた。加藤と斉藤は入植以来、適性作物を発見するため自国でいろいろな植物を試験栽培をおこなっていたので、喜んでもち帰り早

速植えてみた。このあと、これを徐々に増やして日本人農家に配付した。

1945年8月、第2次世界大戦が終るとともに、ブラジルのコショウが値上りをはじめ、

45年にkg30クルゼイロであったものが、翌46年には85クルゼイロに高騰した。これはコショウの主要産地であるインド、インドネシア、マレーシアが戦火に荒されたからである。

この当時、前出の加藤友治、斉藤円治の育成した東洋コショウは約800本に増えていた。

コショウの高騰に刺激された入植者は、在来種コショウの手入れをおこなうとともに、加藤、斉藤から東洋のコショウ苗を譲り受けて新植した。

1947年、アカラ産業組合の決算で、コショウの売上高が前年の7倍増となり、植民地の全員がコショウを主作とすることを決め、加藤、斉藤が熱心にそれを指導した。

1949年、アカラ産業組合はトメ・アスー産業組合として正式に認可され、植民地名もトメ・アスー植民地と改めた。1950年、コショウは組合の販売高の1位となり、

サンパウロに販売所を設けた。この年からコショウの値は徐々に上りはじめ1952－53－54年と高騰し、アマゾンの黒ダイヤといわれたコショウ・ブームが起った。このときのトメ・アスー植民地のコショウ栽植本数は33万2千本に達していた。（現地ではコショウ・シンガプーラ種と呼んでいた）。

1955年、東南アジアのコショウ栽培の回復とともに。徐々に値下り徴候をみせ、55年にkg150クルゼイロであったものが、56年には65、57年には原価を割る34クルゼイロと下落し、大不況となった。この不況も1958年には一段落し、徐々に値段が回復、トメ・アスーのコショウ生産も3000トンを超え、アルゼンチン、北米、英国に輸出するなど、好況が60年末まで続いた。

1970年代に入って、トメ・アスーはまたもや苦境に追いこまれた。数年前から発生し始めたコショウの病害（フザリウム菌とウイルス病）があつという間に第1、第2トメアスー植民地の全域に広がり、生産が急落したからである。最盛期の1968～70年ごろは、組合員が320人を越え、コショウの生産も7000トンに達していたが、その直後に組合員は240名となり、生産も5000トンを下回り、1976年に

は 3 5 0 0 トンというみじめな状況になった。

コショウの病害にとりつかれた組合員が、その後にとった対応策は 3 つあった。

1 つは病害地帯のトメ・アスーからの離村であり、比較的富裕なものが、主としてサンタレン（パラ州第 2 の都市）周辺に転住して、新たにコショウ栽培を始める。

その第 2 は、植民地に残り病害対策として廃コショウ園を利用した経営の多角化路線である。4 ～ 5 年でコショウの病害が出るので、苗を植え込むと同時に、メロン、パパイヤ、マラクジャ（パッション・フルーツ）マンジョカなど短期換金作物を植え、経営を多角化しようとするもので、すでにハワイ種マモンは主要作物の一つとなっている。

第 3 の対応策は、組合の集団の力を結集して新植民地を建設しようというものである。

すでにこの計画は具体化されアイウ・ウスー区に約 1 1 万 h a の払い下げを受けている。

日本からこの病害退治のため派遣された一戸稔博士（農林省農林技術研究所線虫研究室長）の研究によれば、コショウの病害「根ぐされ病」は、根こぶ線虫が高密度に寄生

することに強く関連する病気だといい、これには熱帯特有の気象、土壌、生物条件を総合した根本的な対策が必要であるという。

1986年末現在の組合員の永年作物植付本数を、つぎのようにトメ・アスー組合では発表している。それによると多角営農化はめざましく進んでいるが、なおコショウは主作物となっている。

コショウ＝1. 327. 990本、ゴム＝195. 542本、カカオ＝924. 984本、デンド＝28. 228本、

タッパアスー＝19. 282本、グアラナ＝15. 149本、コーヒー＝14. 517本、カジュ＝500本、

マラクジャ＝132. 265本、マモン＝3. 000本、リモン＝4. 300本、グラビオーラ＝3. 000本、ココヤシ＝773本、カスターニア＝600本、マンゴスチン＝400本、アサイ＝10. 000本、

コショウは、現在、病害地を遠く離れたバイア州、エスピリット・サント州でも栽培が始まっている。1986年のブラジル全体の生産量は25. 468トンであるが、そ

の 90% はパラナ州の生産で 22.968 トン。ブラジルの輸出量は 21.468 トン、金額にして 85.736.792 ドルとなっている。

茶 (Thea Sinensis. L) ツバキ科。Cha

1812 年、中国から茶を導入し、リオの王室植物園に植えられたものがブラジルの茶栽培の始めといわれ、のちに中国から移民を入れて、その加工もおこなった。ここで採取された種子がミナス、リオ、サンパウロの諸州に普及して栽培が増え 19 世紀半ばには、すでに 10 数トンの茶がヨーロッパへ送られたという。19 世紀後半にはサンパウロ市内でもかなり栽培があり、近郊のアナバイア、カンピーナス、サンロッセも産地となり、ミナス州のオウロ・プレットと競い合っていた。しかしコーヒー栽培の拡大で、ブラジルの茶栽培はわずかの間に衰退した。

1920 年、各地に茶が野生化して残っていた。サンパウロ州スザノの萩原喜作の妻が、野生化した茶の実をとって植えたのが、日本人が茶を手がけた始めという。そのあと揮旗深志もモジで茶の栽培をおこなった。この茶はシナ茶 (Thea sinensis

i s) であった。

1919年にサンパウロ州レジストロに入植した岡本寅蔵は、1922年ごろシナ茶の種子をサンパウロで入手し、レジストロに栽植した。当時の消費は日本人を対象にしていたため緑茶で、その量はごく僅かであった。



1930年代終りの岡本茶工場と茶園

1930年代に入って、ブラジル人の需要に応じて紅茶の製造を始めたが、シナ種からは良質のものがどうしても得られなかった。そこで1934年、岡本は墓参に日本へ行った帰りセイロンに立寄り、リプトンの製茶工場を見学、やっとの思いでアッサム茶の種子100粒を入手、それを船内で発芽させて、65本の首木をとった。これがレジストロの茶の親となり、国内需要を賄い、外貨獲得の重要な輸出産物の一つとなった。

ここで製茶について概観すると、岡本寅蔵がシナ茶を栽培しそれが緑茶として売り出されたのは1930年ごろであった。翌31年、レジストロ地方としては、ごくまれであった降霜に見舞われ、コーヒー樹が被害を受け、茶の造成に転向する日系農業者が続出した。

1934年、岡本の持ち帰ったセイロン茶が普及してから栽培者が一層増えた。さらに第2次大戦中にはアジアからの茶の輸入が無くなったヨーロッパからの茶の注文が増え、レジストロに群小の製茶工場が乱立し、多いときは42工場を数えるに至った。これが大戦終結とともに、その劣悪不統一な品質のため国内、国外市場を失ない、たちまち経営困難に陥り、大半は脱落した。

1945年、コチア組合は、組合員の茶の品質の統一を図るため、共同茶精選所を設置した。

1959年、レジストロの山本周作は、北米のStandard Brand社と提携して、年産700トンの本格的工場を設置、コチア組合もほぼ同じ規模の中央工場を設立した。

両者とも、インド、セイロン、東アフリカなど世界市場の代表的な生産地に人を派遣して調査をおこない、オランダ、日本から専門技師を招き、英国から製茶機械を輸入するなど、その近代化に努めて海外市場への道を開いた。

多くの曲折はあったが、レジストロ地区の日系人による茶生産は、ブラジルの日系人の独占産業の一つとして健全な発展をつづけ、1988年で産出量10,000トンに達し、そのほぼ全量が輸出されている。

1988年度コチア組合入荷量：1,018,397kg

グワラナ（Paulinia cupana. HBK）ムクロジ科。Guarana

アマゾナス州マウエス地方が原産地で、アマゾン一帯に野生が多く、採取はほとんどそれからおこなわれていた。グワラナの利用価値が知られるようになったのは、19世紀初めフランスへ入ったときからといわれる。

コショウの項で説明したように、1970年代に入ってコショウが根腐れ病で不振となって以来、グワラナがにわかに注目され、栽培を手がける日系農業者が増えてきた。1973年、上野アントニオ、鳥毛栄之助および日系開発会社の三者は、マナウスから約30kmの地点で、400haに15万7000本のグワラナを植付け、本格栽培をおこなっている。

このようなグワラナの大栽培がおこなわれるようになったのは最近のことである。それはグワラナの発芽能力が低い、育苗期間が長い、原産地マウエス地方以外は栽培が困難、といったことで、生産増強ができなかったものを、現地の公的試験期間が、その欠点を解決する「挿木繁殖による育苗技術確立して優良母樹の選抜を可能とする」画期的な技術を生み出し、その上、大手清涼飲料会社の参入、例えばアンタルチカ社のマウエス郡への直営農場の設置、コカコーラ社の大量買付け、また日本、北米、西ドイツの

需要など、好条件がかさなったからである。

ブラジルのグワラナの生産量は、1975年に180トンであったものが、1981年には700トンと、年を追うごとに増えているが、国内の需要も増え、生産量のわずか10%ほどしか輸出にまわされていない。

6. 雑穀作物

ダイズ (G l y c i n e M a x . L) マメ科。S o j a

ダイズは外貨獲得の花形として、またセラード開発の主要作物の一つとして、最近、華々しく登場したが、ブラジルへの導入歴は古い。

F・J・ベルネッチの「ブラジルの大豆の歴史」によれば、1882年、グスターボ・ドゥトラは家畜の牧草用として、バイア州に最初の大豆を導入した。1892年、カンピーナス農試はグスターボの導入した大豆をとりよせ、稲科牧草との混植試験をおこなった。

また、これとは別にリオ・グランデ・ド・スール州で、北欧移民が今世紀初めから栽培を試みている。

このあとに登場するのが、日本人移民が行李の底にひそめてもって来た大豆である。この大豆は小面積に植えられ、味噌や納豆、豆腐になって初期移民の郷愁をいやしたばかりでなく、後にこの種子はカンピーナス農試での大豆改良に使用された。

この当時の大豆は、主として家畜の牧草用として栽培されていたが、1940年代に入ってこれが抽料作物、家畜のタンパク飼料作物として世界に認められ、ブラジル南部諸州の経済栽培が急速に拡大した。

そのあと、カンピーナス試験場マメ科植物研究員宮坂四郎は多くの優良品種を育成して州別に適合する指定品種を作出したので1970年代に入ってからミナス、ゴヤス、マット・グロッソ州などのセラード地帯にも大豆栽培が拡大され、現在の盛況に至っている。

なお、ブラジルと関係の深い石川島造船の土光社長は、ブラジル農業における大豆の重要性に着目、研究費を負担し、現在セラードで広く栽培している「ドコー種」が生れ

た。

1989年のブラジルの大豆生産量は2200万トンで世界第2位である。

コメ (*Oryza sativa* L) イネ科。Arroz

米の栽培に関しては、初期移民がコーヒー農園を出てすぐ、サンパウロとミナスの州境にあるグランデ川沿岸で米作をおこなったとの記録がある。水田耕作については古くはレジストロ植民地と、鐘ヶ江久之助、前田常左工門など数多くの日本人移民が、各地で適性品種を選んで大規模におこなってきたが、ただ、日本人農家による水田は現在もほぼ日本米に限られている。

ソバ (*Fagopyrum Sagittatum* GILIB) タデ科。Trigo Sarraceno

ブラジルには欧州から導入され、南部3州で古くから栽培されていた。日本人が日本からもち込んだ種子は、ソバ粉を対象に、初めは自家消費用として小規模に栽培されていたが、のちに精麴所への販売、第2次大戦後は日本への輸出と、栽培は徐々に伸びて

きた。

コーヒー、その他

サンパウロ州カンピーナスの東山農場支配人であった山本喜誉司は、1930年から40年にかけて、コーヒーの害虫であるブロッカを退治するため、天敵のウガンダ蜂を導入して高い効果をあげた。後にその研究論文で農学博士号を受けた。しかしこの駆除法は大規模栽培のコーヒー園では、技術的にむずかしかったのか、あまり利用されていない。

そのほか、ブラジルの伝統的作物であるコメ、綿、落花生、トウモロコシ、サトウキビ、ハッカなどの品種改良、栽培方法の決定などは、ほとんど政府の公的試験機関がおこなってきたが、日系移住者は単位収量の増大など実際栽培面で大きな貢献をなしてきた。

7. 新しい作物

この項では、ごく最近、日系移住者が公的機関や専門業社、あるいは日本から直接種苗を導入し、またブラジル自生のものに手を加えて種苗をとり、経済栽培に移した新しい作物と、現在、試験栽培中の作物をとりあげた。

アセローラ (Malpighia glabra) キントラノオ科。Acerolla

原産地は明らかでないが、一般に中米のカリブ海に浮ぶ西インド諸島といわれている。

一見サクランボウに似た赤い果実であるが、そのビタミンCの含有量はどの果物よりも多く、果汁100g中、1000－4000mgといわれ、レモンのその30倍以上といわれている。

ブラジルには1955年、ベルナンブッコ農大教授のマリア・セレーネがプエルトリコから帰国の際、種子を携えて来たものが初めといわれる。ブラジルでアセローラの経

済栽培に成功しているのはパラ州カスタンヤール地区である。これは同地域の下前原輝男がアマゾン熱帯農業総合試験場（I M A T A M）から首を導入し増植したものである。

現在、日本の日冷がジュースその他の加工を引受け、すでに3～4年前から日本に輸出し、日本ではアセロラ・ドリンクの名称で一般に売出し、大ヒットした。現在では10社以上がアセローラの製品化をおこなっている。アセローラはトメアスー地区でも栽培が始まっている。同地区にはジュース加工場があるので、これから大きく伸びると考えられる。

クプアスー（T n e o b r a m a g r a n d e f l o r）アオギ科。C u p u a G d

カカオと同属であるが、最大の花をもち、花梗の長さ約5 c mの暗赤色、果長10－25 c m、果径10～15 c mの楕円錐状で、重さ1－2 転、20個ほどの種子のまわりに果肉がまとまりついている。果肉はジュース、種子からは白 チョコレートが作られる。

現在のクプアスーの最大の栽培地はパラ州のトメアスー植民地である。主作のコショウの病害で、同植民地は10年ほど前から作物の多角化を進めてきたが、その重要作物の一つとしてクプアスーがとり上げられ、1988年末現在60,000本の植付けが終っている。クプアスーはコショウと同時に植付け、4～5年でコショウが病害でダメになったあと、定植4年目から結実するクプアスーを収穫する。89年の加工製品生産量は60トンの予定。

同植民地のクプアスー栽培の先駆者は渡辺勝利である。彼は1976年に5000本、後に3000本の定植をおこない、現在、年間1本から20kgの生菓を収穫している。冷凍加工はJICAの援助のもとに1986年から稼働しているトメアスー農村振興協会（ASFATA）の加工場でおこなっている。

チョウジ（*Caryophylls aromaticas*）フトモモ科。Cravo de India
ふともも科のチョウジは、ザンジバル、ペンバ、マタカスカル、セイロン、インド、マレーシアなどが主産地である。ブラジルには18世紀の終りに、ドレイが歯の痛み止

め用として携行したものと思われるが、ブラジル人もドレイもチョウジの首の育て方がわからず、それから160～170年の間、一地域の家庭用として作られていただけで、7～8年前まではマダガスカルから毎年300～400トンも輸入されていた。

今から30数年前、バイア州イツベラーに入植した余湖清は、イツベラーの町で200年近い古木のチョウジを見つけ、その下に落ちていた実を拾い集め、それから首を作って周囲に普及した。現在、イツベラーからカマム、タベロア、バレンサなどバイア州の日系農業者に広まり、総生産量は1500トンに達し、その70%を輸出している。

マカダミア (*Macadamia ternifolia*. F. Muell) ヤマモガシ科。Macadamia

マカダミアはオーストラリアのフィーンズランド南部とニューサウスウェルズ北部沿岸が原産地といわれ、原住民の間では早くから貴重な果実として利用されていた。世界最大のマカダミア生産地ハワイには、1882年、種子で入り、改良を重ねて重要な果

樹となり、現在では世界総量の 90%を生産する大栽培地となっている。その他の生産地としてカリフォルニア、オーストラリア、南アフリカ、ローデシア、ケニア、グワテマラ、コスタリカなどがあるが、いずれの国も栽培規模拡大に拍車をかけているといわれる。

ブラジルには 1948 年頃、カンピーナス農試が導入して、ブラジルに適した品種の選定を続け、KEAUDO, WAIASOL, KEAUMI, KAKERE, KEAUHOUなどの優良品種を発表して、その栽培を奨励した。すでにサンパウロ州では 50 万本が植付けられ、3 年後には 150 万本に、またサンタ・カタリーナ州政府も 93 年までに 125 万本の栽植計画を立てている。日系移住者の栽培もあちこちに見られるが、まだ大規模栽培は少ない。

キウイ・フルーツ (*Actinidia chinensis planchon*) サルナシ科。

K i w i

中国の揚子江流域の原産で、自生のものがミオ・タオ、ヤン・タオと呼ばれて、地方

市場で珍重されている。1900年になって植物学者の手によって世界各地の有名植物園に移入された。そのうちの一つニュージーランドでは一園芸家がこの果物に関心を持ち、果樹園で栽培し商品化に成功した。同国では1960年、国鳥のキウイの名を借用して「キウイ・フルーツ」と名づけ、大々的に宣伝して世界に知られるようになった。

現在の生産量は中国が年産11万トンで世界最大であるが、ほとんどが国内消費のため、

国際的にはほぼ全生産量（年4万トン）を輸出にまわしているニュージーランドのほうがある。

日本には1963年に種子で導入され、ごく短期間に広まった。それは「キウイ・フルーツ」が「またたび科」に属し、これと近縁の「サルナシ」が日本の各地に自生していることで、栽培が容易と考えられたからであろう。

ブラジルには1971年にカンピーナス農試とりメイラのジェルベルゲル種苗会社が導入し、また、その頃に訪日した日系移住者が日本から持ち帰った種苗も多く、現在ではサンパウロ州イビウーナ地区の本格栽培を始めとして、エスピリト・サント州、ミ

ナス州、パラナ州、サンタ・カタリーナ州の各地での試験栽培を含めると、日系の栽培者は200名を越えているものと考えられる。

レイシ (L i t c h i c h i n e s i s s o n n e r a t) ムクロジ科。L i c h i a
原産地は中国南部からインドシナ半島を経てビルマにかけ、フィリッピンを含む東南アジア熱帯圏である。

果形はイチゴ、大きさは径2～3cm、外皮はウロコ状であるが真っ赤で美しい。白色透明な果肉は甘いジュースを含み、ほど良い酸味と香りをもつ。

ブラジルへの導入は古く、1809年、隣国の佛領ギヤナからリオの植物園に送られた。そのあと各地の公的機関で選抜され、B R E W S T E R, A M E R I C A N, B E N F A L の3品種が、リメイラのジェルベルゲル種苗会社から売出された。現在「レイシ」の日系移住者の経済栽培はサンパウロ州のカンピーナス、リメーイラ、バウルー、バストスなどでおこなわれているが、市場入荷量はまだ少量である。

マンゴスチン (*Garcinia mangostana*. Linn) オトギリソウ科。Mangostao

昔から果物の女王といわれる「マンゴスチン」は、東南アジアのマレー半島、スンダ諸島が原産地といわれており、ジャワ、スマトラなどでは、普通の庭木として、どこにでも植えられている。現在の栽培地域はインドシナ南部、タイ、ビルマ、マレー半島、スマトラ、ジャワ、西印度諸島、インド南部、セイロン島、フィリピンのミンダナオ島、ハワイなどと、非常に広範囲である。

ブラジルでは、トメアスー植民地を含んだパラ州のベレン近郊とバイア州ウナ植民地の近くのイリエウスで、すでに日系農家が収穫を始め、アマゾナス州マナウス地区のその他で試験栽培がおこなわれている。

「マンゴスチン」は自然環境に対する適応性が割合に狭く、種子の発芽力が少なく苗づくりがむずかしい、収穫まで長い年月（8～10年）を要するなど、経済栽培には困難な面も多いが、国内外に市場が約束されているので、将来性は大きい。

アブリコー (Mammea americana. L) オトギリソウ科。Abrico do Para

原産地は西インド諸島と熱帯アメリカであるが、現在では世界の各地に分布している。しかし、いずれも庭木で、まともな栽培は少ない。

「アブリコー」は「マンゴスチン」と同じ「オトギリソウ科」の果樹であるが、果実は大きく円く、1 kg ほどになる。味は甘酸っぱくアンズのような香りがあり、利用価値が高い。

ブラジルではアマゾナス州、パラー州に多く、リオ州以北の各地にもある。アマゾナス州マナウス近郊のエフイジェーニオ・デ・サーレス移住地の佐藤五郎とパラー州カスタンニャールの大屋昇は、自生の「アブリコー」から選抜して優良木を選抜して栽培中であるが1本から150～300個の収穫があり、地元ベレン、マナオス市場で好評を拍している。

大屋昇の所属するアマゾニカ農協では、現在、1700本の苗を育てており、これを組合員に配付して、近く本格栽培に乗り出すことになっている。

オールスパイス (Pimenta officinalis. Lindl) フトモモ科。Pimenta de Jamaica

原産地はジャマイカ、キューバ、ハイチなどで、最大の生産地はジャマイカである。これの未完熟果を採取して天日乾燥したものはシナモン（桂皮）ニクヅク、丁字などの香りをそなえているので（オールスパイス、総べての香辛料）と名づけられた。学名に「コショウ、Pimenta」とあるが、これは間違いで、「丁字」と同じ「フトモモ科」の植物である。

「オールスパイス」の原産地以外での経済栽培はむずかしい。過去にシンガポール、台湾、セイロン島などで試作したが、結実しなかったという記録があり、原産地のジャマイカでも、半野生のものから収穫する時代が長かったといわれている。最近、このむずかしい「オールスパイス」の栽培に、主作物のパパイアの病害に悩む、バイア州ティシェラ・デ・フレイタス地区の日系移住者が挑戦、試植を始め、まだ少量であるが生産が始まっている。1990年の予定は15トンである。

8. 養鶏・畜牛・養蚕・養魚

〈 養 鶏 〉

1925～26年ごろ、奥地のコーヒー耕地からサンパウロ近郊のジュケリー、コチア、スザノなどにジャガイモやトマト、その他の野菜作りに入った日本移民が、鶏糞の高い肥効を知り、簡単な囲いで鶏を閉じ込め、20～30羽の庭先養鶏をやったが、これが日本人養鶏の始まりである。

1926年、フランスから300羽の白色レグホンを入れ、ブラジル養鶏の元祖といわれたイタカセツバの「グランジャ・マンジー」から、モジの田辺重明、滋野甚一、イタケーラの永島巖、松本圭一ら養鶏の先駆者たちがいち早く種鶏を分けてもらって養鶏場をつくり翌27年から白色レグホンの成鶏と卵を売り出していた。

コチア組合では創立5周年に農産品評会をおこなったが、そのときジャガイモやトマトと並べて白色レグホンの成鶏と卵も出品して養鶏への関心を高めた。

ジャガイモのコチア村で、養鶏に手をつけた最初の人には仲川賢一といわれる。193

0 年ごろ、採糞を目的に自レグを飼い始めたが、やがて本格的に養鶏に取り組み、採卵を目的とした生産性の高い鶏の作出に没頭し、34年から35年の一年間に302卵鶏と300卵鶏を一羽ずつ作り出し、業界を驚かせた。

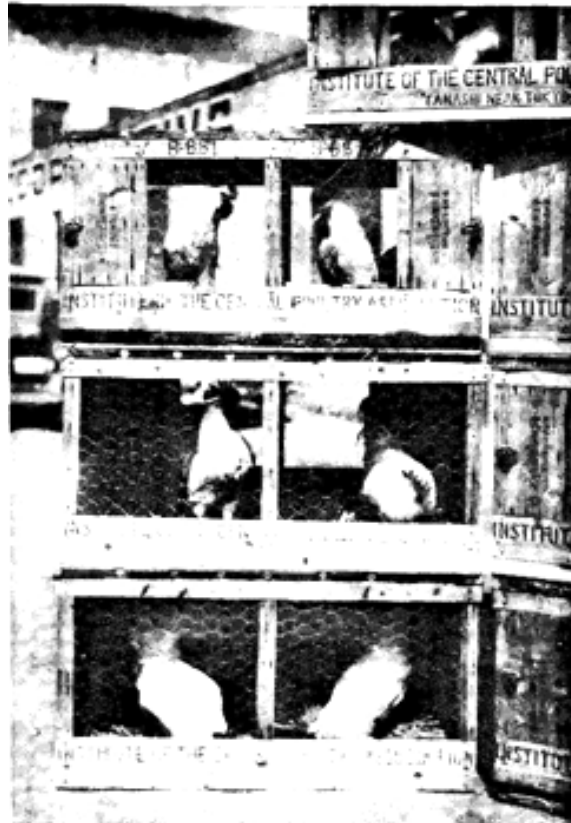
この頃、サン・ミゲール・パウリスタ、スザノ、モジ方面では50羽、100羽の飼育は普通となり、300羽飼育もみられるようになり、その生産卵の販売が問題になってきた。

コチア組合では34年度から野菜販売所の片隅で試験的に鶏卵を並べてみたところ、この年は1件当たり3～4個という小口取引であったが、年間に7000ダースの売上げを記録して鶏卵の有望性を実証した。翌35年から鶏卵コーナーを設けて本格的に販売を開始した。その頃の出荷はせいぜい10ダースが単位であったが養鶏家数と飼育羽数がどんどん増えていったので、出荷量は急増した。36年度の販売量は2万8千ダースに達した。

1935年は奥地からの転住日系人も相当な数に上り、その養鶏熟も高まって、だれもが養鶏技術の不足を感じはじめていた時であった。サンパウロ総領事館勸業部はそれを

察知、有力者に諮って養鶏普及会成立に協力した。

そのあと勸業部長の江越信胤は、日本に帰るに当って、普及会に日本の原種鶏を贈ること約束した。この約束が実現したのは1937年11月3日であった。



1937年11月3日、サントスに着いた日本からの原種鶏45羽。ブラジル養鶏の発展に大きく寄与した。

サントス港に着いたのは「白色レグホン」 1 5 羽、「ロード・アイランド・レッド」 1 5 羽、「プリモス・ロック」 1 5 羽の計 4 5 羽であった。このうちロード 1 5 羽とプリモス 1 5 羽は、この年カシンギーに創立した日本農事協会の養鶏部に、白色レグ 1 5 羽はコチア組合で引受け古田土芳次に飼育を依頼した。

1 9 3 8 年 4 月、コチア組合は日本から 1 万卵入立体孵化機（マスターピース型）を導入した。それに応じ、古田土芳次、田辺重之、細川賢一は、前から飼っていた種鶏と日本から送られた種鶏を集め、コチア組合の代行機関として、初生雛を組合員と一般農業者に配給する K・T・K 協会をサンパウロ市カシンギーにつくった。

コチア組合が K・T・K 協会に仕事を代行させたのは、組合として養鶏事業を始めるのは、時期尚早であったし、日本からの種鶏はコチア組合だけへのものでなく、ブラジルの日本人農業者全部に贈られたものと考えたからである。

この日本からの原種鶏を父祖とする「年間 3 0 0 卵鶏」の初生雛が販売されるようになったのは 1 9 3 9 年 7 月 6 日からであり、この年度だけで約 3 万羽が組合養鶏家と一般養鶏者に販売され、ブラジル養鶏の改善発展に大きな貢献をなすことになった。

養鶏の普及と技術の指導については、（産青連）の農村青年講習会と青年会の組織を利用し、K・T・K協会その他から講師が出向して講習をおこなったが、青年らが帰途につくとき、各自が200羽づつ初生雛を持ち帰り地元での養鶏普及に努力した。

ノロエステ線、アルタ・パウリスタ線沿線の養鶏はこうして発展し、「年間300卵鶏」の初生雛の販売が始まって、大戦を挟んだ約10年間にサンパウロ全州に養鶏が普及し、完全にひとつの産業として発展した。

1941年の第2次世界大戦勃発以来、1962年までの約20年間は、戦争、戦後の混乱、アメリカでのニュカッスル病の発生などがあって、外国からの種鶏の導入は一切なかったが、サンパウロ州農務局の調べによれば、1947年に、日系農家は、全州鶏卵生産量の90%を占めていた。

1961年、種鶏輸入禁止令が解け、翌62年からアメリカ鶏がどっと入り、こみ始めた。

種鶏輸入禁止令の解除を待っていた伊藤種鶏場では、4元交配法でつくった種鶏（この交配法は10年間の特許をもっていたが、期限切れの寸前であった）をもつ北米のハ

イライン社と早速提携、ハイライン種を導入して一般に分譲を開始した。この種鶏は、旧式の遺伝方法で作られたブラジル鶏に比べ、抗病性、産卵性は極めて良く、飼育希望者は門前市をなすありさまで、他の種鶏業者も、北米鶏の導入に踏み切らざるを得なかった。

1963年、すでにハイライン種と同じ方法で独自の鶏種をつくり、ハイライン社の特許期限の切れるのを待っていた、キンバー、バビコック、シェーバなど有名種鶏業社は、期限切れと同時に、いっせいにブラジルに進出、ブラジル種鶏界は北米鶏一色に塗りつぶされた。これはブラジルだけでなく、日本も欧州諸国もその例外ではなかった。

この時、北米の各社は産卵鶏だけでなく、革命的ともいえる高能力の肉用鶏を進出させ、ブラジルの肉用鶏をも北米一色に塗り替えた。

1969年には、日本のイワヤ種、後藤種、エンヤ種も進出し、北米鶏に交って健闘した。

現在の日系養鶏業者の中には、産卵鶏10万羽から100万羽という企業的大規模養鶏もあるが、大半は1万羽から3万羽ていどの飼育規模と推定される。

また肉鶏飼育は大手資本との契約生産が多く、ほとんどが非日系で、日系による大型肉鶏飼育は少ない。

1988年度入荷量（鶏卵）30打入：403.407箱、コチア組合入荷量1.907.338箱 スール・ブラジル組合入荷量 439.585箱 （鶏肉）コチア組合入荷量16.394.654kg

〈畜 牛〉

日系人で大がかりな牧畜を営む者が最近多くなっているが、種牛を改良育成して、それを普及販売している者はごく少ない。

そのうちの1人、サンパウロ州の吉雄弘は約1万頭の肉牛を飼育しながら、ネローレの原種をインドその他から導入し、純粋血統の維持を図るとともに、品種改良を重ねて、各地でおこなわれる数々の畜産展で最高賞をとる優秀なネローレ種を多数つくりあげ、サンパウロ州はもちろん、ブラジルの各州、あるいは近隣諸国にまでそれを普及している。

また、吉雄は精液販売会社をつくり、種牛同様、全伯、近隣諸国に精液を分譲し、優良肉牛の普及に務めている。なお、日本企業で畜牛牧場をもつものは10社を越えている。乳牛についてはヤクルト社が、それを行なっている。

〈養 蚕〉

養蚕にごくなじみの深かった日本人移民が、ブラジルで養蚕に関心をもったのは当然のことである。第1回移民の茨木友次郎は、渡航に当って蚕棚を携行したが、サンパウロの移民収容所で養蚕道具と説明しても、解ってもらえなかったという。

1912年、サンパウロ州イグアペ植民地の創設者青柳郁太郎は、州政府に依頼して桑の苗をとりよせ、1916年になってイタリアから蚕種を導入、養蚕を試みたが良好な成績は得られなかった。

1914年、サンパウロ州リオ・タラーロ耕地で通訳をしていた佐藤次郎が、耕地内の垣根に桑樹の茂っているのをみて、耕主に交渉して農商務省から蚕種をとりよせ、妻の副業として、3年間養蚕をおこなった。しかし、専業として養蚕をとりあげたのは第2

回移民の小野豊三で、１９１９年ごろ、数名の同志とともにガルサ植民地で養蚕を始めた。

１９２２年、サンパウロ州政府もようやく養蚕業に関心をもちはじめ、カンピーナスに州政府の補助による内国絹業会社 S e d a N a c i o n a l S . A を設立、蚕種の育成配付など、その普及に努めた。

１９３８年、ブラジル拓殖組合はバストス、チェテ、アリアンサの３移住地の入植者に、副業奨励の意味で養蚕をとりあげ、バストスとチェテの両移住地に小規模な製糸工場をつくった。（後のプラタク製糸）これによって、移住地は女子供でもやれる養蚕の副業で経済的プラスとなり、養蚕に経験のある移住者は養蚕を主とする営農に切り替えていった。

プラタク製糸は、日本から蚕種を輸入して従来の蚕種の改良をおこなったほか、養蚕移民の導入、最新式自動繰糸機の輸入など、ブラジル生糸の品質向上に努めたので、養蚕の機運は一層高まった。

当時、ブラジルの紡績界で消費する生糸の９０％は、日本やイタリアから輸入してい

たが第2次世界大戦と同時に輸入は不可能となり、政府も国内産業奨励策をとったので、大戦終結までの数年間ブラジルの養蚕業は戦前の10数倍に達する活況をみせた。

戦後まもなく、日本、イタリアの養蚕業が復活し、世界市場への生糸供給が始まると同時に、ブラジル生糸の輸出は止まり、大量のストックをかかえ、繭価の大暴落となつて、蚕糸業界は最大のパニックに見舞われた。更にナイロンなどの化学繊維の出現によって、生糸の消費量は激減した。

このような状態がしばらく続き、養蚕家も製糸工場もかろうじて生き延びたというありさまであった。1962年、ブラタク製糸がスイスの国際生糸検査所に送った見本が、日本や中国、イタリアのそれに劣らぬ優良品との折紙がつけられ、世界市場に通用することになった。あわせて、最大の生糸輸出国であった日本が、戦後のめざましい経済復興による生活の向上で、生糸の国内需要が激増し、世界的な生糸不足となつて、ブラジル蚕糸業界も再び陽の目をみることとなった。

1967年、ブラジルから始めて日本へ9,2トン(153俵)の生糸を輸出した。1972年には216トン(3600俵)の輸出となったため、養蚕家の生産意欲は盛り

上った。この頃から日本の生糸会社が続々とブラジルに乗り出し、再び養蚕ブームがわき起り、生糸の生産量は1970年＝5.291俵、1975年＝8.980俵、1980年＝19.200俵、1983年＝22.700俵と急増した。

現在、ブラジルの製糸会社は7社、そのうち6社は日系で、83／84年度のブラジルの生糸生産量（1327トン）に占める割合はつぎのようになっている。

ブラタク（51，8％） カネボウ（16，4％） グンサン（8，9％） コウペス（10，4％）

昭栄ブラタク（8，7％） ミナシルク（2，7％）

〈ニジマスその他の飼育〉

ブラジルでは、州の水産試験場や欧州系の移民によって、ニジマスの養殖がたびたび試みられたが、いずれも成功しなかった。輸入した種卵の孵化率が悪かったからである。

1970年ごろ、コチア青年出身の小池清は、サンパウロ州カンボス・ド・ジョルドンにある州試験場で、1年半にわたってニジマスの孵化養殖に従事したが、その間に、ニ

ジマスの孵化率を従来の40%から90%に上げることに成功した。

1972年、サンパウロのレストランの経営者であるエヴァリスト・コモラッチが資金を出し小池清が技術を提供するニジマス養殖の共同事業を、カンボス・ド・ジョルドンでおこなうことになった。

小池は同年12月から、稚魚、養殖、出荷、販売までの一貫した施設をつくりはじめ、翌年から養殖を始め、常時8万尾（稚魚から成魚まで）をもつ飼育場をつくりあげた。採種卵もおこなっている。この成功に刺激された各地の養殖希望者が多数この飼育場を訪れ、現在ではリオ州やサンタ・カタリナ州でもニジマス養殖がおこなわれている。

一般に日系農業者は水利を考えて農地を購入していたので、農地の低地には池や沼をもつものが多く、古くからそこで鯉の飼育をおこなってきた。なかには飼育池10アルケール（242,000平方m）鯉出荷専用車を数台持つという大型飼育家もいるが、一般には自家消費でいどの飼育規模である。

最近では商社や大資本によるエビ、カメ、食用蛙、ワニなどの飼育もはじまっている

が、これは一般化されていない。

Ⅱ、集約的農業の確立

サンパウロ大学教授オラシー・ノゲイラ（ORACY NOGUEIRA）は、1968年サンパウロで開かれたブラジル移住60年シンポジウムで、「日本移民とサンパウロ市の発展」と題して報告をおこなったが、その中で次のようにのべている。

「今世紀の初めに始まった日本人の移住はイタリア人、ポルトガル人、スペイン人などの移住に比べて、時期的に新しく、数的にも僅少であるが、きわめて重要な役割を果たしてきた。それはとくに日本人移住者が野菜、果物、鶏卵のような国内消費食料の生産と、その商品化に果たしてきた役割についていうことができる。いいかえれば、市民の食生活を支える食料生産の面で、日本人が貢献したという事実を度外視して、サンパウロの今日の都市化と工業化とを理解することはできない、ということである。

しかも、農土の管理や処理をはじめ、各種の農事試験を通じて、より効果的な品種の

育成や種苗の生産、あるいは小農地による野菜・果樹・畜産をとり入れた集約的営農方法の確立、協同組合運動の展開、農産物の商品化に至るまで、ブラジル農業の近代化に及ぼした日本人の影響はすこぶる大きい」以上のノゲイラ教授の報告は1968年のものであるが、日本移民のブラジルにおける功績を一口にいいあらわした言葉、として、20年後の今日でも、まことに適切なものである。

1. 日本での経験を近郊で生かす

モジアナ方面のコーヒー園労働者として入った初期移民は、その契約期間を終えたのち、あるいは契約を途中で放棄して各地に散ったが、その一部のものがサンパウロ市近郊に入ってきたのは1914～15年のことである。それ以後も独立した移民たちは、サンパウロ州奥地に集団地を形成して入植するが、同時にサンパウロ近郊各地への入植も徐々に増加傾向をたどり、とくに第2次世界大戦後は奥地からの市内と近郊への転住者は急激に増加した。

1958年におこなわれたブラジル移民実態調査の数字をみると、市内を除くサンパウロ近郊への流入、流出家族数はつぎのような推移を示していた。

年 代	流入	流出	差引
1908～17年	27	17	10
1918～27年	188	64	124
1928～37年	922	473	449
1938～47年	1,586	704	882
1948～58年	1,939	916	1,023

上の数字でわかるように、近郊から出ていく流出も相当あるが、近郊へ入ってくる流入のほうがはるかに多い。

この近郊集中の理由はいろいろあげられるが、その最大の理由は、移民それぞれのもつ日本での農業経験を高度に生かすことのできる農業経営を、この近郊でやれることが可能とわかったからである。

森喜一（日本農業における資本主義の発達、P. 125～129）は、第1回移民が

ブラジルに入った1908年（明治41年）から1912年（大正元年）までの5年間の平均で、日本農家の土地所有面積はわずかの1, 1ha、その家族数は6人とのべている。

そのため、日本の農家では、一定の耕地から高い収益を上げるため、自分たちが食べるだけの自給作物の栽培から、消費者の要求する商品作物に転換し（明治以降、日本では雑穀に替って野菜、果樹、養畜が伸びつつあった）しかも耕地の利用度を高めるため、適合する新品種を導入するとか、あるいは輪作、多毛作を考え、肥料も多投し、防除作業もおこなって生産を上げ、そのうえ耕地内だけでやれる養畜、養蚕などもおこなって収益を増すという、いわゆる集約度の高い農業をやっていたのであるが、日本移民にはその経験をもったものが多かった。

奥地農業ではこの経験を十分に発揮する余地はなかったが、近郊においてはそれがやれ、またサンパウロ市という世界でもまれな急激な成長を遂げつつある工業都市の人口増加が、それを必要としていたのである。

そうした状況のなかで、近郊に入植した初期移民は、まず、いずれもジャガイモを

もってその生活活動を開始し、ついで徐々に需要が増えてきた野菜、果樹、養鶏をとりあげ、それを組み合わせて、日本で経験した集約的農業を、ほぼそのままブラジルでおこなったのであるが、このことが、それまでブラジルに存在しなかった集約的近郊型園芸農業を生むことになったのである。

2. 初期のジャガイモ栽培

1914～15年に日本人移民が入ったコチアはサンパウロ市から西方約20kmの地点に在る。

ジェズイット僧が土人教化を目的につくった部落であったから、早くから拓けていたが、樹木を伐って、火をつけ、土地を耕やさずに植穴だけを掘って種を蒔く、という土着民式農法を長年やっていたので、地力は衰え、日本移民が着いたときには、痩せ地に好んで生えるバルバ・デ・ポーデ（ひげ草、イネ科の雑草）が茂る荒蕪地であった。

これはコチアだけでなく、初期に開拓されたサンパウロ周辺は、どこもほぼ同じであったが、ただこのような土地は適当な手入れをおこなえば、地力は回復させることが

できた。

したがってこのような土地があったのは、小資本で自営農をめざした日本移民にとっては極めて都合のよいことであつたし、外国移民の到来で、サンパウロ市は成長期に入り、人口は急増し、その食料補給をねらつての近郊農業は有利という時期でもあつた。

このようなときにコチアに入った日本移民は、土着民のまねをせず、まず、固い赤土に鋤を入れて日本式に耕やし、ウネをつくって土着民から買ったジャガイモの種を蒔いた。

ジャガイモは消費も多く値段も良かったことは、入植前にすでに知っていた。

しかしジャガイモらしい芋ができるようになったのは、低湿地の腐葉土を畑に入れてからである。それも連作の無肥料なので、2年ほどで地力が衰え、よい芋がとれず、生活に事欠くことさえあつた。そのころオザスコ市に屠殺工場があり、その残物を肥料として売り出していることをコチアのカトリック僧から聞き、代表2～3人が買って試した結果は今までにない良い成績であつた。それ以来ほぼ全員がその肥料を使うようになった。

肥料を使うようになってからは、今までの耕作法では間に合わず、日本式の鋤をつくり馬耕をおこなうことになった。鋤に使う丸木は山から採って来て、削って穴をあけ、刃先は鍬の古いのを鍛冶屋で形よく切ってもらい、それを丸木に打ちつけた。当時の最新式のアラード（鋤）であったが、これが成功し、今までの耕作法を一新し、作業はめざましくはかどった。

土着民から買った種いもは、いろいろな種類が混じっていたので、芋を掘るときは一株一株掘って選り分け、後に「コチアのオーロ芋」と評判をとる種いもの選抜をおこなった。

堆肥が良いと聞き、痩せ馬を買って小屋に立 飼いにし、朝晩、野原の草を刈って馬に踏ませたものがあり、草を刻んで畑に撒き、鋤き込んだものもある。ボルドー液での消毒を日本の古本で勉強し、それをつくって散布し、高い効果をあげたものもいた。

植付けにはムチロン（共同作草）をとり入れ近隣のものすべてが集り、戸毎に割当てられた畑の植付を一日で終るようにした。これが部落みんなに家族的な親しみをもたせ、肥料の買入れ、植付の制限、芋の出荷など、全村的な連帯、協調がなければやれな

かったむずかしい問題もスムーズに取り運び、コチアのジャガイモ生産は順調に伸びていった。



(左) 丸木でつくった手製のアラード。

(右) ジャガイモの植付けは共同で割当分を一日で植えた。

(下) ジャガイモの出荷、53kg入20俵をピニエロスまで往復二日かかり。



以上でわかるとおり、日本移民はそれまでの焼畑農業から、文字通り日本式の耕作農業をおこない、肥料、農薬も使い、農具も自らつくり、さらに自分たちの手で種芋の品質改良をおこなうなど、試行錯誤をくり返し創意工夫を加えながら近郊農業を確立していったのである。

3. 野菜づくり

最初の栽培作物はジャガイモの単作であった。1920年代のサンパウロ市の人口は57万9千人と記録されているが、野菜類の需要はポルトガル人のごく小規模な菜園農業でことたり、日本移民が当時の市民に馴染みのない日本の野菜を本格的につくっても商品となり得なかった。したがって近郊における商品作物はしばらくジャガイモに限られていた。

こうしたジャガイモ生産者を中心として、1920年代の終り頃から近郊各地にいくつかの日系農業組合が誕生したがこれらの組合がジャガイモのみでなく、野菜類を本格

的に取り扱うようになったのは、１９３３年以後のことである。

１９３４年におけるサンパウロ市の人口はすでに１０６万人となっていた。イタリア移民を主体とする人口の増加で、トマトを主とした野菜の需要もようやく高まってきた。

一方、１９２９年におとづれた経済恐慌から、奥地のコーヒーあるいは綿作をおこなっていた移民の中には、小資本で再起をはかる道を求め、近郊の野菜作りを目ざして移転してくるものが多く、また近郊でもジャガイモの生産コストが割高で、誰にでも栽培できるというものではなかったことから野菜農に切り替えるものもあって、近郊の野菜栽培者の数は急激に増えていった。

すでに１９３１年にはコチア郡内にも少数の野菜栽培者が集って、コチア野菜出荷組合（後にコチア組合野菜部となる）を結成するに至り、さらに３４年にはサンパウロ総領事館勧業部の肝入りで、サンパウロ近郊野菜栽培者が「打って一丸」となるため「聖市近郊野菜栽培者共同出荷所」設立が見られるほどになった。この共同販売所は間もなく分裂状態となったが、これがきっかけで、各組合も野菜を取扱うことになった。

１９３１年１月にコチア郡にできた上記のコチア野菜出荷組合が、正式にコチア組合野

菜部となったのは2年半後の33年8月である。コチア組合60年史では、「野菜部が発足したこの年、7月に大降霜、8月には寒波の襲来があって、サンパウロ市場へのトマトの入荷は激減し、トマトは暴騰して争奪の的となった。この高相場に魅せられた近郊の数百家族と推定される野菜栽培者が、一斉にトマトを植付けたため、33年末から始まった出荷のため翌年1月から2月にかけて、サンパウロ市場はトマトの大洪水となって、価格は大暴落した。一日に500箱も出荷されると売りようもなかった。それが数千箱の出荷で、一箱25～40ミルのものが、10ミルを割り4ミル、2ミルと下っていった」と、野菜栽培の揺籃期に、すでに生産過剰によるトマトの大暴落があったことを伝えているが、これを契機に、トマト単作者の多くは、ジャガイモ、キャベツ、ニンジンなどもとりに入れた野菜作りに変り組合加入者も急増していった。

コチア組合野菜部に例をとると、開設の1933年の末に約70名であった野菜組合員が、翌34年には190名、35年には371名と、全組合員の約半数を占めるようになった。

その後も近郊野菜栽培者は増加の一途をたどり、1936年2月に出された野菜生産

者関係の新聞広告には「聖州郊外 2 千家族の野菜栽培者」との文字が見られる。

こうした日本人の野菜づくりが増えたことにより、単に野菜の生産量が増加したのみならず、野菜の種類の間においても新品種の導入がおこなわれて豊富となり、さらに品種の改良、あるいは日本などからの優良品種の導入により、品質の間でもいちじるしく向上した。こうしたことはまた、サンパウロ市民の食生活の間においても、単にそれを豊かにしたばかりでなく、徐々に未知の野菜類を普及させるに至り、従来の食生活を大きく変革させるまでになった。

4. 養鶏

前記の野菜栽培と並んで、日本移民が近郊農業の中で確立していったものに、養鶏産業があるが、それについては、第 I 項の新作物の導入と育成、の 8) 養鶏の項 (P 3 1 4) で述べているので、ここでは省略する。

5. 果樹栽培

果樹栽培、とくに温帯果樹栽培は、野菜栽培、養鶏とならんで、近郊型集約農業の軸をなすものである。

日本移民が、永年作物である果樹の栽培を本格的こ手がけるようになったのは、ジャガイモや野菜の栽培、養鶏などで、自分の土地をもち、経済にあるていど余裕ができてからである。

ブラジルには、古くからヨーロッパ移民が導入したブドウ、カキ、ナシ、スモモ、クリなど、日本移民にもなじみの深い果樹があったが、そのいずれも自家用生産の域を出ず、商品としての生産は、ほんの一部についてしかおこなわれていなかった。

それらの在来種の果樹に、せん定、摘果、施肥など綿密な管理の手を加え、さらに品種改良をおこない、あるいは、よりよい品種を導入して、商品として生産のできる果樹栽培をきずきあげたのは日本移民である。

このあと、近郊型の集約農業が奥地にも波及するようになってからは、前項の「新作物の導入と育成」でのべたように、ブラジル原産、あるいは古くからブラジルに在った熱帯果樹、亜熱帯果樹のアボカード、パイナップル、パパイア、マンゴー、ばんじろう、メロン、スイカなど、ごく粗放的に栽培されていたものもとあげて、前と同様に栽培方法の改善、品種改良、新品種の導入を積極的におこなって、経済栽培の基礎をつくった。現在では、それらの大規模栽培があちこちでおこなわれ、国内消費を賄ったうえ、欧米各国への輸出もできるほどになっている。

6. 奥地に波及した集約的農業

コーヒー農場の契約労働者として渡航してきた日本移民は、その契約終了後、多くのものが独立自営農民として、各地の日本人集団地へ入植したが、これらの入植地は永続性のあるものではなかった。

ほとんどの耕地では、コーヒーあるいは棉作の単作を、現地人と同じように無肥料の

地力掠奪農法でやっていたから、地力の衰える数年後には、さらに未開の土地を求めて移転せざるを得なかったからである。

この当時の日本移民の移転の回数を、1958年の日本移民実態調査では、一世帯あたりの移転回数は平均6回半と記している。こうした出稼ぎ的不安定な心情がなくなり、大地に腰をすえた態度が見えはじめたのは、日本が敗戦に終わった第2次大戦以後のことである。

戦後、サンパウロ市内や近郊に移転するものが多かったが、これはおそらく永住の居を定める最終的な移転であったと考えられる。

こうした常なき移動という不安定な状態が終り、永住の地が定まるとともに、奥地農業も開拓は地力掠奪のための開拓でなくなり、肥料や農薬を積極的に使い出し、さらにトラクターなどの機械化も普及し、その結果として栽培規模も拡大し生産性も高まり、日本人移民の経済的状況はいちじるしく向上した。

さらに、1965年から70年代の初めにかけて、サンパウロ市を中心としたブラジルの主要都市を結ぶ道路網が完備し、また地方都市市場が発展するようになってから

は、奥地農業も従来の単作という不安定な営農を脱し、野菜、果樹、養鶏をとり入れた多角営農に変わることができたのである。

現在ではサンパウロ市から1千キロも離れた奥地においても、いわゆる近郊型の集約農業を行ない、現地人でも手入れのできるコーヒーや棉といったものは、これらの日雇人にまかせ、日本人移民自身は高級な技術を必要とするイタリア・ブドウなどその他の作物に力を入れているというものが多くなっている。　いわば大型の近郊農業が奥地に普及した、ということであるが、こうした単作農を典型とした奥地農業が近郊型の農業に変わり得たのは、先にあげた流通機構が完備したということのほか、協同組合の組織・機能の充実が大きな要因となっている。

日本移民の集団する各地域には、日系の農業組合、またはサンパウロに本拠を置く大手組合の出張所が設けられて、独自の組合活動をおこなってきた。

これらの農業組合は、一般には生産の指導にはじまり、生産資材の配給、生産物の集荷輸送、そして最終的な販売・輸出に至るまでの組合活動をおこなっているが、最近では、極端に言えば、農業者は組合の指導に従って生産活動だけをやっておればそれでよ

い、というほどの充実ぶりをみせている。

道路網の発達とともに、この組合組織の充実が、数百キロも離れた奥地においても、サンパウロ市やリオ市など大都市を市場とした近郊型の作物をとり入れることを可能にし、 とかく不安定であった奥地農業を安定させ、さらに発展させることになったのである。



サンパウロ州奥地での加工トマト栽培

7. 集約農業の果してきた役割と現在

日本移民の集約農業が、ブラジル農業に与えた影響は非常に大きい。

前にのべたとおり、初期移民がジャガイモで始まり、野菜、養鶏、果樹を加えて近郊型集約農業の形態をつくり上げたが、それら初期移民の耕作規模は極めて小さく、ほとんどが10ha以下の規模であった。

この10haという規模は、ブラジルでは「生産性のない規模」とされており、農地改革に際してブラジル農地改革院が零細農（ミニフンジオ）として整理する対象となっていた。

その生産性のないものと規定されている規模の耕地面積で、日本的な集約農法を導入し高度な技術を用い、肥料を使用し、農薬を散布して高い収益性を示したことは、ブラジルの一般的な農業水準からみると、まことに驚異的なことであった。

広大な未利用地をもつブラジルにおいては、生産を上げるという概念は、とりもなおさず原始林を伐採し、耕地面積を押し広げることであった。原始林を焼き払い、堆積さ

れている有機質を利用して無肥料栽培をおこない、数年にして地力を消耗しつくすと、さらに新しい原始林を求めて開拓前線を拡げていく。

こうした地力掠奪農法が、20世紀前半までブラジル農業の一般的な形で、日本移民もその初期、コーヒー園労働者から独立したあと1950年代まで、このような掠奪農法をもっぱらにして、サンパウロ奥地の原始林を伐り開き地力を蚕食しながら移動して、隣接パラナ州まで移っていった。

日本人集団地の離合集散が常ならなかったのは多くはそのためであり、自衛のために農業組合を設立しても崩壊することが多かったのは、構成員である組合員の移動が激しかったからである。

こうした奥地農業のあり方にあきたらなかった一部の日本移民が、サンパウロ近郊に来てみると、近郊の土地もすでに一度は略奪されて捨てられた土地であり、無肥料ではろくな収穫は望めなかった。そこで知恵を働かし、屠殺物の残物を利用して施肥をおこない、農具をつくり、文字通りの耕作をすることになったのである。

近郊農業において、日本移民は生きるために、初めて日本で経験した農業技術を生か

したのである。こうした農業のあり方は移民たちが自ら生きるためのものであったが、結果として、ブラジル農業に全く新しい型をもたらすこととなった。

それは、生産の増強とは、開拓前線の拡大ばかりでなく、単収の増強ということもあり得るのだ、ということを示したのであり、一度利用しつくした土地も再び利用し、生産することが可能なのだということも、ブラジル農業界に教えるものであった。

こうした集約農業の形態は、時代とともに形を徐々に変えながら奥地にまで及び、かつて牧場でしかあり得なかった荒廃した土地を再び利用して、果樹、野菜、養鶏の生産地としてよみがえらせたのである。

こうして生産された各種産物は1300万の大サンパウロ都市圏市民の食卓を賄ったのみならず、整備された幹線道路網を利用し、数千キロ離れたブラジル東北部の都市までうるおしている。

さらに、ブラジリア首都圏、リオ、ベレン、ポルト・アレグレ、クリチーバ、ベロ・オリゾンテ、サルバドール、マナウス、ヴィトリアなど各州都をはじめとして、地方各

都市の近郊にも、日系人の手によってこの集約農業が移植され、それぞれ発展して、地方農業のあり方に大きな示唆を与えている。

現在、この集約農業の形態は大きく変っている。サンパウロ州の工業の発展は、サンパウロ近郊の農業活動を圧迫し、工場が建設され、そして住宅地が外側へ広がるたびに、農地は縮小され、あるいは更に奥へと移動することを余儀なくされている。

30年前に桃と養鶏で名を成したイタケーラ植民地は、今はその片鱗すらも留めぬ市街地となり、それに続くスザノ、モジ・ダス・クルーゼスも次第に農業経営はむずかしくなってきた。

この傾向は1970年代からとくに顕著となり、アチバイアのような近郊集約農のモデルとされていた場所ですら、別荘地化して、異質の発展を遂げつつあるが、このアチバイアの現象は、近郊の各地で普通にみられる現象となっている。

日本移民が初めに組み合わせた野菜、養鶏、果樹の形も変らざるを得なくなった。養鶏は、住宅地が接近したことで衛生上の問題があり、また道路網の完備で、近郊での小羽数飼育の旨味が減ったなどで、廃止するか、奥地へ移動して大型養鶏に切替えるかの

選択を迫られ、果樹もまた、比較的広い面積を必要とし、人手も工業にとられて優秀な労力が得られない、木も老齢化したなどで、奥地に適地を求めて移らざるを得なくなった。そのため近郊では、遠距離輸送の無理なサラダ用野菜や花卉などの集約農、あるいは花卉専業の大型農家が増えている。

また、サンパウロから100キロ以上離れたブラガンサ・パウリスタのジャガイモ、カンピーナス、インディアトゥーバのトマトも、さらに奥地、あるいは他州で栽培されるようになっている。

カキ、モモ、ビワなどの温帯果樹はイタケーラ、スザノ、モジなどのセントラル鉄道沿線から、アチバイア、カンピーナス方面に移り、さらにミナス州南部の山地などへ分散している。

イタリアブドウは主として気候上の理由で分散しているが、初期の産地は大きく後退し、代ってサンパウロ州南西部及び西北部地帯、さらに北パラナ、ピラポーラ（ミナス州）ジュアゼイロ（バイア州）と広がって、それぞれ違った時期の収穫期をもつ生産団地が形成されている。

ひるがえって、伝統的なコーヒー、棉花、コメ、トウモロコシ、落花生の栽培で特徴づけられていた奥地農業をみると、最近20年間にかなり移り変りをみせている。相次ぐ降霜と地力低下のためにコーヒーは大きく後退し、棉花、コメなどの雑作も縮小され、替って大豆、採卵養鶏、果樹、砂糖キビ栽培、牧畜が伸びつつある。中でも州西部地区のオレンジ生産はめざましく、減少するコーヒーに替って主要な輸出作物となってきた。

また、地方都市の発展とともに、野菜の需要も増えたことから、リベイロン・プレット、アララクァラ、バウルー、アラサツーバ、プレジデンテ・プルデンテなどの奥地都市の周辺に、それぞれ小規模な近郊農業が成り立ち、野菜や果実の生産が増え、以前はサンパウロ市周辺に集中していた生鮮農産物の供給源が多地方に分散した。

従って、野菜、果実、鶏卵の供給という意味では、サンパウロ州内における近郊と奥地の区別はほとんど無くなり、サンパウロ近郊が耕作地の問題で伸び悩む代りに、広い土地をもつ奥地農業がその不足を補い、州内全体の需給バランスをとっている、というのが現状である。

以上、日本移民が日本からもってきた集約農業が、どう変ったかを大ざっぱにみてきたが、形がどう変わっても、野口弥吉（農学大辞典）のいう「一定の耕地面積に資本（技術・農機具・農薬・肥料・諸資材のような生産手段）と労働力（雇傭労働力を含む）を追加的に投下して、単位面積からの収益を高める」という集約農業の神髄を生かしていることは明らかであり、次項でのべるセラード開発も、生産団地も、発展した集約農業の新しい一つの型である、ということがいえるであろう。

Ⅲ．新しい農業の開発

ブラジル農業は1970年代から変化した。1960年代半ばから急激に発展してきた大豆、小麦、米、トウモロコシなどの栽培は、機械化により、それぞれに耕地面積を拡大した。

この農法を早くからとり入れたリオ・グランデ・ド・スール州、サンパウロ州、パラナ州などでは1960年代末から農地不足に悩み、上記地方の農業者は南4州以北の農

業未発達地帯に入り込み、高い技術水準で、新しい農業地帯を拓いた。そのパイオニアは南部リオ・グランデ・ド・スール州の農業者であった。彼らは1960年代に、ごく短期間で、マット・グロッソ州に大豆、小麦、トウモロコシ、米の大栽培地をつくりあげた。この農地不足は日系農業者にも痛感されていたところであり、たちまち、これに追従することになった。

ただ、インフラストラクチャーのできている南部4州と違い、市場からの距離が遠い、しかも農業者不在といった新地帯の開発は、おのずから違った形態の農業が生れることになる。一つは集団開拓地、他は特定作物の生産団地という二つの概念である。

ここで政府の開発事業だが、この時期に急に始まったものではなく、政府は前世紀の後半から、国内各地に大農業団地を拓いてきているが、そのいずれも農作物生産地として成功したものはいなかった。

このため、政府は最近、ブラジル南部の有力な農業団体に、プロジェクト段階から協力を要請するようになり、ここに日系農業協同組合も参加を求められることになった。

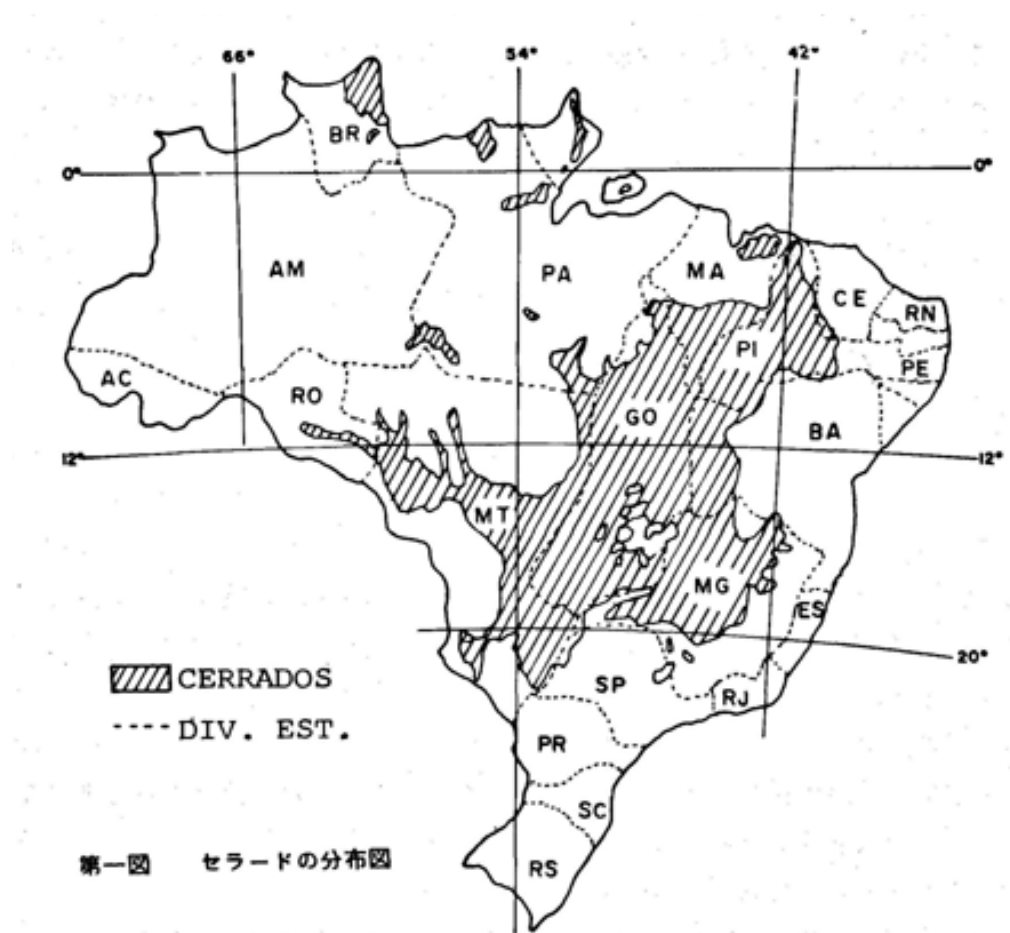
その一つがセラード農業だった。

1. ブラジルのセラード

ブラジルのセラードの面積は約 1 億 8 千万 h a 、下図の通り、ゴヤス、ミナス、マトグロッソ、ピアウイ、マラニオンの各州にわたって分布し、ブラジル全土のほぼ 2 0 %（日本全土の約 5 倍）を占める。

ブラジルのセラードは、南部アジア、アフリカ、オーストラリアにおける熱帯サバナ気候と同じ気候帯に属する。このセラードに共通した気候・土壌は次の通りである。

①年間降雨量は平均 1 5 0 0 m m 前後である。地域によってバラつきがあり、セラード全体の 6 5 % は降雨量 1 2 0 0 ～ 1 8 0 0 m m の範囲内にあるが、2 0 0 0 m m を越す多雨地帯、1 0 0 0 m m 以下の寡雨地帯もある。きびしい乾期は 4 月～ 9 月と続く。



第一図 セラードの分布図

第一図 セラードの分布図

②セラード全面積の約 90 %は養分欠乏の酸性土壌であるが、地形は平坦か、あるいは軽い波状形のところが全体の 70 %を占めている。セラードのほとんどは排水性は良好であるが、土壌の保水性は弱い。

農業にとっては、土質は極めて貧しく、5 カ月以上もの乾期があるという、きびしい自然条件をもつこのセラードの開発が、急激に関心を高めたのは、ブラジル南部に未開発農地が少なくなったことと、高度の技術と労働意欲のある農業者ならセラードでも農業は可能と判断されたからである。

また、アマゾニアの森林地帯の開発よりもセラードの開発のほうが、資金的にも容易で、環境破壊のリスクが少ないということもあった。

なお、ブラジルのセラードの開発は、すでに 50 億を越えた地球上の人間の今後の食糧確保のため、とくに南部アジア、アフリカ、オーストラリアなど熱帯サバンナ開発のため、なんとしてもその開発技術の確立が必要だとの基本認識があった。

a . 政府のセラード開発案

ブラジル政府は、新しい農業技術を駆使すれば、5000万haのセラード地域が農畜産開発に利用できるとして、1975年1月20日、連邦法令第75.730号によってポロセントロ（POLOCENTRO（Programa de Desenvolvimento dos Cerrados＝セラード開発プロジェクト）を設定し、ミナス・ゼラエス、マット・グロッソ、ゴヤスの4州に分布するセラード12地域に、1975年から1979年までの間に370万haのセラードを農畜産の生産地として開拓する。うち180万haは農業に、120万haは畜産に、残りの70万haは森林に向けたいとした。

以上がブラジル政府のセラード開発案であるが、この案の発表以前に、コチア産業組合は、ミナス州政府、連邦政府と提携して、ミナス州においてPADAP計画によりセラード開発に先鞭をつけていた。

b.

日系農業者がPADAPの先駆

PADAP (Programa de Assentamento Dirigido Alto Paranaíba) はミナス州内の「パラナイーバ河上流開発計画」である。コチア産業組合はその中心となるサンゴタルドに事業所をおいた。

サンゴタルドからミナス州都のベロ・オリゾンテには300 km、サンパウロ市へは740 kmリオ市へは800 kmであるが、すべてが舗装道路で結ばれ、交通事情は良好である。

標高は1150～1190 mとやや高く、ほぼ平坦地でシャッパドンと呼ばれている。国道に沿って(354号線)南北に伸びる台地状のセラードは、雨期の豪雨を、東側ではインディア川とボラシュード川に落したあと、サンフランシスコ河に注がせ、西側ではパラナイーバ川からパラナ河に流す、分水嶺の台地となっている。

この台地の上で、あちこちにオーリョ・デ・アグアと呼ばれる湧水が噴き出し、細流をなして東西の斜面へ流れ落ちていく。その斜面下方に比較的肥沃な土壌が堆積する地

帯があり、地元の住民はこの土地を利用して自家用のマンジョカ芋とフエイジョン豆、トウモロコシなどを栽培してきた。

この小面積の農耕と高台の低木を焼いてつくる木炭以外には産業らしいものはなかったこの地帯が、ミナス州政府とコチア組合及び組合員の協力によって、一大農業地帯に変貌したのである。

C. PADAP の成績

PADAP は、大豆、陸稲、小麦、コーヒーの栽培で始まった。

〔陸 稲〕初年度（800 ha）がベラニコ（雨期の中にある小乾期で、1～2週間から30日に及ぶ例もある）とイモチ病の被害で、ha当2俵、翌農年（1400 ha）もha当1，5俵といった惨たんたる成績で、このあと長く放棄された。80年代に入ってから耕地の輪作の関係で若干の稲作を取り入れたが、全体で100～250 ha までである。

〔大 豆〕初年度（74～75農年）2000haの植付けでha当りの平均収量は僅か6～7俵であった。これが2年目（18俵）3年目（20俵）と次第に増加していき、6作目（79～80農年）には1万9千haの栽培面積の平均でha当り36俵に達した。

このあと81年から83年までに、大豆栽培の内容が変わる。それまでは冬作に小麦を栽培するため大豆は早生種であった。それがこの時点から晩生種が導入された。これは80年から83年までの天候異変と灌水設備のピポーセントラルの導入が始まったことによる。

天候異変というのは、この地帯の年平均降雨量1500mmといわれているのに、80年（1960mm）から83年（2485mm）までは多雨量が続いた。そのため早生種大豆の収穫期になっても収穫ができず放棄した（83年5000ha）。このことから晩生種の導入が始まったが、ha収量は早生種（30～35俵）晩生種（45～47俵）と晩生種のほうが10俵ほど多い。

〔トウモロコシ〕80年代の始めからトウモロコシが加わった。これは単に相場の影

響からだけでなく、大豆単作の連作障害を防ぐためにとられた方法である。この平均収量は当初（８０～８１年）にh a 当り６５俵だったものが次第に向上して、近年では１００俵になっている。

〔小麦〕セラードの穀物栽培は夏期（雨期）は大豆、トウモロコシで良いとしても、問題は冬期作である。ここでは初めから小麦が目標とされていた。これは当地方の標高が、１１００mと高く、このため亜熱帯圏ながら５月から８月までの月間平均気温は２０度以下、湿度は５０％台ということで、小麦作可能とみられていた。たしかに小麦作は可能であった。

乾期とはいえ、１３年間の平均降雨量は４月に９５mm、５月に６０mmある。このため初年度（７５年）h a 当り１４俵だった平均収量は、４年目（７８年）には２３俵となった。７９年、８１年、８３年のような天候異変で不作となったこともあるが、天候に恵まれればh a 当り３４～３５俵に達し、８９年などは非灌水区で平均６０俵は堅いといわれる畑もあった。が小麦作が安定したのは、１９８３年に導入された最初の灌水機ピボーセントラル１１台が稼働を始めたからである。

83年は異常降雨でとくにその威力を発揮できなかったが、翌年からは60～70俵と確実に生産性をあげ、小麦作は安定してきた。ただ政府の農政変更で、この小麦作の行方も混沌としている。1988年にこの地区にはピポーセントラルが39台設置されている。

〔コーヒー〕 コーヒーの植付面積は87～88年で4436ha、これから6万俵（精選）が生産された。89年は、84～85年に定植された230万本が生産樹齢に達して、かなり生産は増えるはずである。

セラードのどこでもとはいえないが、サン・ゴタルドの強みは、地味、気候が好適で、高品質のコーヒーがとれることである。

以上の作物に加えて、ピポーセントラルが導入されたあとは、乾期作物に次のようなものがとりあげられ、当地方の農業を安定させつつある。

d. 新たな乾期作物

〈エンドウ豆〉 85年から始まり、h a 平均収量は非灌水13～20俵、灌水20～36俵をあげ、現在は灌水栽培700h a、非灌水栽培1100h aであるが、これは缶詰会社との契約栽培である。

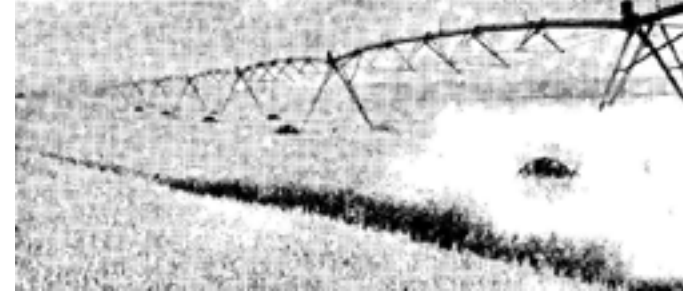
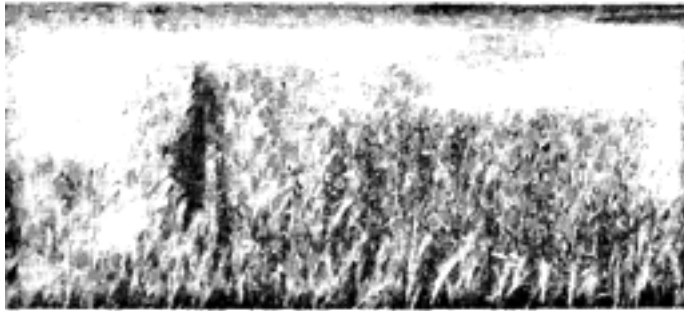
〈加工用トマト〉 乾期4～7月の気温は北海道北部の真夏の気温と変わらない。この5カ月間の雨量は255mmと少ないが、当然、湿度も50%台と乾燥しているので病虫害は少ない。そこに適当に灌水をおこなえば、と試験栽培中である。

〈ジャガイモ〉 試験栽培中、15h aの栽培面積でh a当り370～400俵の平均収量。〈ニンジン〉 h a当り収量1500箱（25kg入）で今や重要な作物となっている。

〈ニンニク〉 h a当り収量4～700箱（10kg入）〈野菜種子〉 種子会社の依頼で、ニンジン、キュウリ、トマト、ピーマン、オクラ、ハナヤサイなどの採種をおこなっている。

ちなみに、3年で一応のメドが立ち、6年で軌道に乗ったPADAPは、9農年目の1983年には、管轄するサン・ゴタルド事業所の販購買事業量を、88あるコチア組

合事業所（支所を含む）のトップに立たせ、今なおそれを維持させている。



（左上小麦）小麦作は年々生産性が上がっているが、問題は政府の価格政策。

（左下コーヒー）サン・ゴタルドは地味、気候が好適なので、高品質のコーヒーがとれる。

（右上バタタ）ジャガイモはha 当り 370～400 俵とれ、いい収益となった。

（右下ピボーセントラル）大型灌水機ピボーセントラルの導入で新たな乾期作物の栽培が可能となった。

2. 日伯協同の開発事業

1974年、ブラジルを訪れた日本国総理大臣田中角栄は、セラード開発のための「経済協力プログラムを検討したい」との提言をおこなった。日伯両国政府によるセラード構想はこの時から公式の場で論議されるようになった。

その頃、すでにコチア組合が推進する前述のPADAPは第1陣24家族の入植が始まっており、一方ブラジル農務省は広大なPOLOCENTRO（セラード開発プロジェクト）の案を作成中であった。

76年にガイゼル大統領が訪日、経済協力に関する総合プログラムについての両国政府の声明書に調印したあと、事務レベルでの細目検討がおこなわれ、実務担当機関として、CAMPO（Companhia de Desenvolvimento Agrícola Brasil-Japãoー日伯農業開発会社）を日伯共同出資で設立した。

77年9月にパウリネリ農相が訪日、両国政府間で「セラード農業研究協力」がとりきめられ、ブラジルはEMBRAPA（Empresa Brasileira de

Pesquisa Agropecuária)「ブラジル農畜産研究公社」がCEPAC (Centro de Pesquisa Agropecuária dos Cerrados)「国立セラード農業研究所」を設立、ブラジリア郊外に試験圃場を開いたのに対し、日本側は78年度より国際協力事業団を通じて、専門家から成るチームを派遣して研究に協力した。

実務機関であるCAMPOに対する資金準備のために、両国ではそれぞれ投資会社が設立されていた。ブラジルではBRASAGRO (Empresa de Investimento Agroindustrial Brasileira)「ブラジル農工投資会社」が誕生し、ミナス州開発銀行、ブラジル銀行など44企業が出資に参加した。日本側ではJADECO (Japan Brasil Agriculatural Development Corporation)「日伯農業開発協力株式会社」が設立され、この両社の出資により78年11月CAMPOの創立総会がおこなわれ、これより実施計画がスタートした。

a . 第 1 次セラード開発計画の概要

ブラジル農務省が企画しCAMP Oが実施する計画は段階的なものでその第 1 段階がPRODECER-I (P r b g r a m a d e D e s e n v o l v i m e n t o d o s C e r r a d o s - I)「第 1 次セラード開発計画」と呼ばれ、ミナス州北西部のイライ・デ・ミナス、コロマンデル、パラカツーの 3 地区における合計 5 8 . 7 7 1 h a の土地が対象とされた。それぞれ「パイロット計画」と呼ばれる事業計画が作製され、9 4 家族の植民事業と 2 企業農場、およびCAMP O直営農場造成が実施された。

インフラストラクチャーの一部はP O L O C E N T R O の資金が転用され、また一部はミナス州政府が負担して、延べ 2 1 5 k m にわたる道路建設と 1 6 3 k m の配電工事が実施された。

PRODECER に対する総投資額は 5 0 0 0 万ドルで J A D E C O (4 9 %) と B R A S A G R O (5 1 %) がそれぞれ出資し、日本側では J I C A (J a p a n I n t e r n a t i o n a l C o o p e r a t i o n A g e n c y) 「国際協力事業団」

を通じて、更に 2 5 0 0 万ドルの融資をおこなうことになった。 P R O D E C E R - I は、もともと日本政府がブラジル側に提案して始まった経済協力事業であるが、ブラジル農務省の意向で、日系の農業協同組合または農業企業の参加を当初から考えており、 P A D A P を通じてセラード開発の経験をもつコチア組合に対しては特別な期待が寄せられていた。

日伯の両政府よりの要請を受けたコチア組合はこの計画への参加を決定し 5 0 家族が入植し、ほか日系では「セラード農産開発会社 - C D A C」（1 0 . 1 2 0 h a）が日系社会有志の資本で設立され、参加している。

a - 1 , コチア組合のパラカツー団地

コチアの計画地は、パラカツー市から北西へおよそ 1 0 0 k m の所に位置する 2 万 2 千 h a の土地で標高は 8 0 0 ~ 1 0 0 0 m、やや起伏がある。パラカツー市から主な都市までの距離はブラジリアに 2 2 0 k m、ウベルランジア 4 0 0 k m、ベロ・オリゾン

テ 5 4 5 k m、リオ 1 0 0 9 k m、サンパウロ 9 8 0 k m で、港湾設備をもつビトリアまでは 1 0 8 6 k m、サントスへは 1 0 5 8 k m となっている。

このあたりの気候条件は、年間平均最高気温 3 8 度 C、最低 1 8 度 C、平均降雨量 1 2 0 0 ～ 1 3 0 0 m m で乾期は長い。

植生はカンポリンボ（草原）からセラード（低木疎林）にわたり変化がある。高地では緩やかな地形で排水良好な砂質土壌が主体で、所どころに見られる陥凹地には水源があり、小川が流れ排水不良の土壌も存在する。大部分の土地は機械化農業に適する。

この土地を平均 4 0 0 h a で 5 0 区画に分割、組合員に分譲した。この計画地の主要作物は次の通りである。大豆は初年度の h a 当り 8 4 0 k g （1 6 俵）から 8 2 年度は 1 4 6 7 k g （2 4 俵）8 4 年度は 2 1 8 4 k g （3 5 俵）と成績をあげ、今ではこの団地の主作物となっている。

米は h a 当り 6 1 3 ～ 1 3 5 9 k g と生産性が上下しているが、これは主として夏の降雨が不規則なことによるものである。パラカツー地方の気象上の特徴は雨期の降雨分布が不規則なことで、集中豪雨があるかと思えば、次の数週間は一滴も降らず強烈な

直射日光が照りつける。この現象を現地ではベラニコと呼んでいる。

コーヒーは84年から収穫が始まったが、不規則な降雨による影響を受けて栽培はやむずかしいと判断されていた。しかし品種選定と肥培管理、とくに有機質肥料を多用することによって干害が緩和されることが立証され、それを実行した一部の組合員は、一般が大減収した86年の収穫でも、h a 当り20俵以上の好成績をあげている。今日ではコーヒーは大豆とともにパラカツー営農団地の二大作物とされている。

トウモロコシは有機質に富む肥沃な土壌を好む作物であるからセラードの痩せ地では無理と敬遠されてきたが、大豆とコメを3回収穫して土壌養分が増え、物理、化学的性質が良くなってきた84年度の試作（506 h a）では、h a 当り2550 k g（42俵）と、セラードではまずまずの成績を収めた。そして85年と86年にはEMBRAP Aが作出したセラード用の品種を導入、肥培管理も充分におこなったところ、収量はh a 当4000～5000 k g と向上した。

この成績はサンパウロやパラナの肥沃な土地における伝統的なトウモロコシ産地と比較しても遜色はなく、セラードでも経済栽培が可能なことを立証している。

とくに大豆の裏作として栽培すると成績が良く、パラカツーでは限られた雨期を有効に利用するために、まず大豆の早生種を早めに播種して、これを雨期の最中（１～２月）に収穫したあと、すぐにトウモロコシを植える。つまり半年間の雨期に２作おこなうわけである。この方式でトウモロコシの団地内の平均収量はh a 当り 8 2 俵、中には 1 0 0 俵を越す高収量の畑もある。

a - 2 . C D A C のサンタ・マリア農場

1 9 7 9 年の創業であるセラード農産開発株式会社（C D A C）は、日伯経済協力によるプロデセール（セラード開発計画）に参加した農業企業である。

株主には、日伯両国合弁の C A M P O （日伯農業開発会社）をはじめ、日本側出資会社の J A D E C O （日伯農業開発協力会社）、コロニア側出資会社のセラード農産出資株式会社、それにミナス州立銀行、南米銀行グループ 5 社、ブラジル東京銀行、ブラジル三菱銀行、ブラジル住友銀行、山本グループ 5 社が名を連ねている。

サンタ・マリア農場はミナス州パラカツー郡、前出のコチア組合パラカツー団地に近接し、自然条件はほぼ同じであり、コチア団地と同種の作物を栽培している。

b. 第2次セラード開発計画の概要

第1次セラード計画がミナス州の3地区で実施され、82年9月に日本側のブラジル中央銀行に対する貸付が完了し、プロジェクトの計画が終ったとき、連邦農務省はその延長として第2期計画の実施を検討していた。

83年2月、ブラジル政府は日本政府にその内容を提示して意向を打診し、同年10月スタビレ農相が訪日、拡大計画についての協力を正式に要請した。これを受けてJICAは2度にわたる調査団を派遣し、その報告に基づいて協力の方針を固め、84年5月、フイゲイレード大統領が訪日した折、中曽根首相との間で合意に達した。

85年2月、特別プログラムとしてPRODECER-II（第2次セラード開発計画）が決定され、翌3月、中銀・CAMPOと日本側との間でプロジェクト契約が締結

されて、スタートした。所要資金は3億ドル、これを日伯両国政府が折半し、実務は第1次と同じくCAMP Oが担当している。

事業実施地区は、ミナス、ゴヤス、南マット・グロッソ、マット・グロッソ、バイアの5州、このうちPOLOCENTROが実施され、成果をあげた3州では、その延長としての「拡大計画」が、またPOLOCENTROの恩恵が少なかったマット・グロッソと全く対象外であったバイア州では「パイロット計画」が通用された。総面積は19万ha、第1次計画の3倍強の規模であった。

この第2次計画では、第1次計画の体験から、農業協同組合を主体とする事業計画が作成された。参加意志を表明した農協組合は次の通りである。

コチア組合＝バイア州フォルモーザ・ド・リオ・プレット郡。(日系)

スール・ブラジル組合＝ミナス州グアルダモール郡。(日系)

COACERAL＝バイア州フォルモーザ・ド・リオ・プレット郡。(日系)

COOPERLUCAS＝マット・グロッソ州ビウーバ地区。

COOPERCANA = マット・グロッソ州アナテーラ地区。

COOPERVAP = ミナス州エントレ・リベイロ地区。

FEMECAP = ミナス州ボンフィノポリス地区。

COCARI = ゴヤス州ハイネイラス地区

CAMAS = 南マット・グロッソ州アルポラーダ地区。

COOPA GO = ミナス州ブリデイス郡。

COOPA DF = ミナス州ピラチンガ郡。

CP LAC = ゴヤス州ニッケランジア郡。

PRODECER-Ⅱは、その開始が軍政から民政への交替期、さらにブラジル経済の混乱が始まった時と重なり、ブラジル政府では貸付利子の決定などがおくれ、このため、各組合もなかなか正式決定ができず、86年から88年までと相当のムラができて、実行期間の延長がなされている。

b－1．コチア組合のオウロ・ベルデ計画

土地の取得に手間どっていたコチア組合は、86年末にようやく登記を終り、87年からスタートすることになった。フォルモーザ・ド・リオ・ブレット郡に広がる組合員所有地30万haのほぼ中央部に、13.558haの土地を入手、約400haずつ34区画に分割した。この地区は組合内部ではオウロ・ベルデ地区と呼んでおり、84年以来、南隣の「コチア・バレイラス・セラード開発組合」が開墾中の土地を含めて、すでに100余名の組合員が存在する。

土地の取得に手間どったが、88／89農年には、既に計画地面積の大部分が作付された。

しかし、まだ2作目ということと天候の関係もあり、大豆の収量はha当たり144トンと僅かである。その作柄の悪さに加え、大豆の国内相場の安値が、スタート直後の入植者を苦しめた。

ただし3～4年を要する土作りが終った後に灌水設備が導入されれば、栽培作物も多

様化し、現在と全く異なった農業地帯が出現するものと期待される。

b ー 2 . スール・ブラジル組合のグアルダ・モール計画

PRODECER-Ⅱ、ミナス州グアルダ・モール郡に購入した第2次セラード開発計画の造成地は、33区画のうち87年度に18名が入植し、うち16名が2600haの大豆を植付け、88年度に3800トンの収穫を得た。また8名が135haのコーヒーを植付けた。

あと88年に15名が入って入植が終り、1区画保有した組合試験場の整備も終えて、開発計画の全面積が本格的に動き出した。ただ、ここも現在のところ、スタートから間もなくで、また灌水設備も未導入（91年にピポー・セントラルを設置の予定）のため、栽培可能の作物の種類も少ないが、既に灌水設備導入後の営農方針を試験場を中心に研究がすすめられている。

b － 3． コアセラル組合のフォルモーザ計画

コアセラル（COACERAL）、この組合は、棉作、アルコール精製、コーヒー栽培ではブラジル農業界を代表する規模をもつ、上野・岡本グループがPRODCEER－Ⅱに参加するために、新たにつくった組合である。

この組合に割当てられた15．000haの土地は、コチア組合のオウロ・ベルデ地区の北側の地続きで、バイア州とピアウイ州の州境にある。気候条件はオウロ・ベルデとほぼ同じである。1区画420haずつ30区画に分け、すでに満植であるが、うち17名はパラナ州の日系農業者である。開発は1987年初頭から始まり、4月には30区画すべてが拓かれ、この年に大豆と米の植付けが終ったが、前述のコチア組合のオウロ・ベルデと同線、天候による作柄不良、国内相場の安値で苦境に立った。

しかし、すでに土作りを終え、灌水設備の導入体制ができているので、ここにも、コチア組合のオウロ・ベルデと同様、導入後は現在と全く変った農業地帯が出現するもの

と期待されている。

C. ブラジル全産業に大きなインパクト

1970年代から始まったセラード農業は、公式発表では、1985年までに1020万ha、1988年までに1295万haが開発されたといわれる。1985年のブラジルの全耕作地面積は5238万haであったから、同年でセラード農作地は全耕作面積の約20%に達している。

このセラード農業は、1988年に全国の大豆生産量の45%、トウモロコシは36%、米の生産量の47%を占めたと発表されている。また憶測ながらコーヒー生産量も約40%を占めた。

つまりセラード農業は幾つかの作物ではブラジル農業のなかに相当な比重を占めるまでになってきた。

セラード農業は、ブラジルの全農業、さらには全産業に相当に大きなインパクトを与

えた。農業設備機具類、インフラストラクチャー面にも資金が投入され、幾つかの農業都市も発達した。

ただ現在のところセラード農業は、相当高水準の技術をもつ農業者が資金を投入した場合には農業生産が可能なことを実証した段階といえる。米、大豆の生産が多いが、これは開発初期には、この二作物以外は栽培不可能なためで、とくに米の場合には、その生産は一時期のものに過ぎない。またセラードが内陸部に所在するため、陸上運賃が極めて割高なブラジルでは、他地域とコスト面では競争不可能と見られる地域が多い。

80年代前半に一種のセラード農業ブームが現出したため、南部の農業者は土地の安価さ、地形、地質だけにひかれてマット・グロッソ、ゴヤス、マラニオン、ピアウイ、バイア州などのセラード地帯にまで入り込んだが、あと経済的に行きづまり放棄されたものも少なくない。とくに80年代後半になってからのブラジル経済混乱からのハイパーインフレ、政府の農作物低価格、農業金融高金利政策、割高な諸税公課などは、長期の安定資金の準備のなかった農業者によるセラード開発に大きなダメージを与えている。

ただ、コスト高でも熱帯サバンナは土壌改良の結果で農業が可能なこと、とくに乾期にも灌水用の水が不足しない地域は、灌水により多くの作物を含めた効果的農業の可能なことを実証し、市場に比較的近い地帯に幾つもの新しい農業地帯が定着してしまった。

セラード農業は、今後にも、開発段階からの経済性ある技術の開発、また自然環境保全の方法、適作物の発見、安定的営農形態の研究など、多くの研究を必要とする。

このセラード開発のために従事する全農業者、またその中の日系農家の比率は資料が少ないが、得られた資料から判断すると、参加している日系農家は、少なくとも全体の20%に達するものとみられている。

3. 生産団地開発事業

a. サン・フランシスコ河流域開発計画.

サン・フランシスコ河は全長 3 6 1 6 k m、北海道から沖縄までの距離にほぼ匹敵する。水源をミナス州南部の山脈地帯に発し、バイア州を北上、ベルナンブーコ州に入り、アラゴアスとセルジッペの州境を蛇行して大西洋に入る。

この大河の流域 5 0 数ヵ所に拠点を置き、灌漑農業で、東北伯のカアチンガ（乾燥疎林地帯）地域の零細農を救助しよう、という壮大な国家計画、これがサン・フランシスコ河流域開発事業である。この事業は内務省（当時）CODEVASF（C i a d e D e s e n v o l v i m e n t o d o V a l e d o S a o F r a n c i s c o）「サン・フランシスコ流域開発公社」が担当し、1 9 7 4 年から始まった。セラーダ開発事業と同様、コチア組合とスール・ブラジル組合は協力を求められ、これに参加した。ここでは第 1 号のピラポーラ計画に参加し、すでに 1 0 年を経過しているコチア組合の果実営農団地の事例を紹介する。

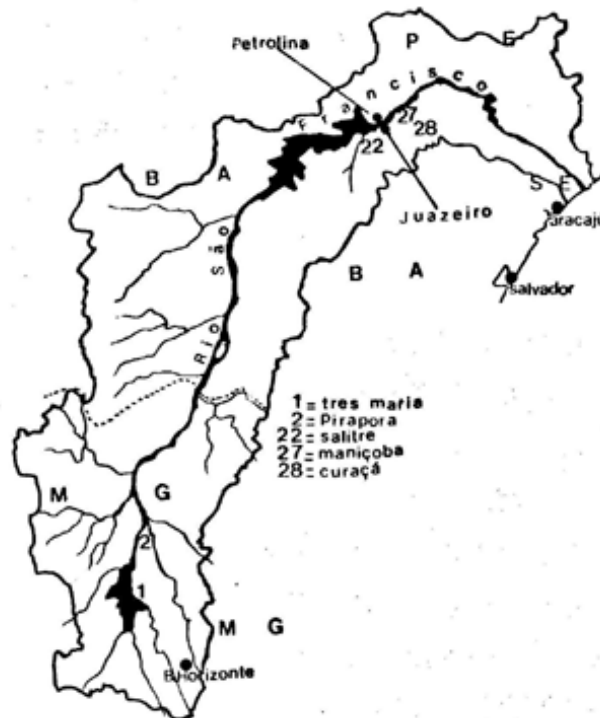
a - 1 . ピラポーラ果実団地

コチア組合は、1979年3月、CODEVASFに対する協力事業の第1号として「パイロット・ビラポーラ」に参加した。場所はミナス州北部のビラポーラ郡。サン・フランシスコの大河とヴェリーアス河の合流点に近く、ピラポーラから12km、州都ベロオリゾンテへは330km、首都ブラジリアへは約500kmの地点で、流通市場、インフラ面は他の開発地に比べて申し分なく、何よりの魅力は灌漑設備が完備していることであつた。

総面積は1685ha、「パイロット・プロジェクト」（本格的な事業に先立つ試験的事业）であるから、規模はごく小さい。そのうちの900haをコチア組合が引受け、15に分割して組合員農業者を入れた。入植者はサンパウロ州、パラナ州で果樹栽培の経験をもつ、中堅の農業者がほとんどであつた。

メロンは灌漑によって成育がよく、10月には最初の収穫ができたが、そのほとんどは上級品で、初期の運転資金獲得に大いに役立った。このあとほぼ6ヵ月ごとにメロンを植付け、同時にパパイア・ハワイの育苗をおこなった。パパイア・ハワイは定植後約10ヵ月で収穫を始め、2年間にわたって収穫できるが、この団地は折からのパパイア

サン・フランシスコ河流域開発計画



景気の波に乗り、栽培熱は一層加速した。

この頃（1980年）からイタリア・ブドウの植付けも始まった。この団地からは南

伯地方の端境期（7月～12月）に出荷できるので、非常に有利であった。また、ブドウと並行して永年作物のマンゴも植え、収穫も始まっている。

1988年10月現在の団地の果樹栽培面積はつぎの通りであるが、始め15名であった入植者は33名に増え、団地内の予冷用冷蔵庫、パッキング・ハウスはフル運転をおこなっている。

ブドウ（210ha）、マンゴ（263ha）、パパイア（27ha）、メロン（40ha）、ピンニア（17ha）、レモン（32ha）、マカダミア（2ha）

a - 2 . タラサー果実団地

ピラポーラに次ぐ第2の協力事業として、CODEVASFのプロジェクト・クラスーにコチア組合が参加したのは1983年で、すでに6年を経過した。場所はバイア州北端のジュアゼーロ市から東北方へ約90kmの州道210号線沿いにある（南緯9度、標高370m）。サン・フランシスコ河の右岸に当る。総面積は約4000ha、

コチア組合はその2分の1の2000haを引受けたが、CODEVASFによる灌漑可能面積はそのうちの926haである。入植戸数は27戸、1戸当りにすると約35haの灌漑可能面積となる。

この団地は前出のピラポーラと同様、生産、流通、市場、インフラストラクチャー面の条件は大体そろっている。入植者のほとんどは南伯での果樹栽培経験者であった。

営農もピラポーラと同様、初期の換金作物に短期作のメロン、永年作にイタリア・ブドウをとりあげた。この地方がメロンの最適地であることは、すでに周辺地帯に入って栽培をおこなっている日系農業者の実績が証明済であったし、ブドウについては、サン・フランシスコ河の対岸、ベルナンプコ州の山本守らが、10年も前から大がかりに栽培し、好成績をあげていたことは、果樹栽培者なら誰でも知っていた。

メロンは成育が早く、年中栽培が可能な上、4～11月の高値の時期に出荷できたので、初期にそれで十分な資金をつくり、それぞれがイタリア・ブドウを植えた。このブドウもピラポーラ同様、7～12月が出荷期で南伯の端境期に当る。それに北伯市場も大きく伸びてきた。

86 年末で、ブドウの植付面積は 207 h a、そのうち 172 h a が生産段階に入って 122.000 箱の出荷、メロンは 63 h a で 85.000 箱の出荷である。

以上のピラポラ、クラサーのほかサン・フランシスコ河流域には、ジュアゼーロ、ペトロリーナ、マニソーバ、トゥロン、マンデカルー、マサンガーノ、ベベドゥロなどの開発計画があるが、流域の各地には、それとは別に、早くから多数の日系農業者が進出し、それぞれ平均 100 h a の農地をもって営農している。

b. サン・ジョアキンのリンゴ生産団地

1973 年 3 月、コチア組合は、サンタ・カタリーナ州の高原地方に「リンゴ生産団地」を造成することを決めた。当時リンゴは国内消費の 99%、約 20 万トンを入力に依存していた。

すでにブラジル農務省は、国内産業の育成と外貨節減という、二つの目的を同時に達成できるリンゴの国内生産を、国家計画の一つとして検討していたが、コチア組合も国

内に大きな潜在需要があり、将来の産業としても大きく発展することを認め1960年代の後半に検討をし始めていた。しかし、60年代の栽培技術はまだ未熟で、気候や品種など未知の点多すぎ、すぐに手を出すことはできなかった。

サンパウロ州カウカイアの果樹栽培者・西森多光（コチア組合員）は、1963年にブルックネル種の試植を始めていた。冬の気温の高すぎるサンパウロ郊外での栽培品種は、当時これしかなく、市場性のある良質のリンゴの生産はむずかしかった。翌64年に西森は、サンタ・カタリーナ高原の産地（当時、標高1000～1500mの高原で、リンゴ栽培が可能であることが立証され、わずかな生産者が散在していた）を視察し、「やはり、リンゴは冷涼気候帯でなければ……」と判断し、この地方への進出を考え始めたが、技術面の不安で自重した。

70年代に入って、技術情報も入るようになり、同志をすぐって「リンゴ栽培研究グループ」をつくった。同じころ、コチア組合販売部では、「リンゴは果実部門の目玉商品としてぜひ必要」という結論に達していた。

このそれぞれの未熟な構想に火をつけ、一挙に生産団地計画という具体的プランにま



左 サン・ジョアキンのリンゴ団地全景。手前の石垣は畑の置石を積んだもの。
右 開拓はまず石の根起し作業から始まった。

で進展させたのは、1971年3月30日に来伯した、リンゴの権威・後沢憲志博士（世界的に有名な「フジ種」を作出した）であった。

博士は、ブラジル農務省の要請で、リンゴ栽培指導のため、サンタ・カタリーナ州ヴィデイラにある州立農事試験場に着任してすぐ、ブラジルの主なリンゴ栽培地を視察し

た。サンパウロ州では西森多光らリンゴ栽培研究グループと懇談したが、それは彼らに深い感銘を与え、リンゴ栽培への意欲を更にかき立てる刺激剤となった。

1972年9月、後沢博士がコチア組合井上会長と懇談、サンタ・カタリーナ州におけるリンゴ栽培の将来性について説明したことから、コチア組合理事会の関心は高まり、リンゴ団地構想は急速に進展した。

74年4月、博士から「良さそうな土地が見つかった」という連絡が入り、技術者と生産者はサン・ジョアキンに向った。博士の調査によると、ブラジルの中では、このサン・ジョアキンがもっとも好適な気候条件をもっている、しかし、この地方の欠点は石が多すぎて、土地の利用率が低いということであった。

だが、リンゴ栽培に命をかける生産者にとっては、問題ではなかった。「石は大部分がバラバラに散っている置石なので、手間はかかっても除去はできるし、土壌の改良も可能だが、もっとも大事な気候条件は人力で変えることはできない——」生産者の力強い宣言で、この土地を購入することになった。

サンタ・カタリーナ州政府は、農務省の指導のもとに、2年前から「サンタ・カタリーナ州における温帯果樹振興計画」というプロジェクトをもっていた。コンデル・レイス州知事は早速奔走し、ブラジルの農業融資の中でも初めてといわれる「農地融資」4億2千万クルゼイロを、州銀を通じて中銀から貸し出されるよう計らってくれた。

これは、土地の選定を終えた一行が、その足で州知事に会い、協力を要請して、わずか10数日後の5月6日のことであった。このほかの融資措置や、道路、電化工事など営農団地造成に必要なすべての計画は、73年にスタートしたPADAP（アルトパラナイーバ計画）をモデルにして作成された。

74年8月5日、土地割の抽選がおこなわれ「コロニア・コチア」と呼ばれる第1営農団地づくりが始まった。

75年1月にはサン・ジョアキンから17km離れたボアーバ区に第2営農団地をつくり、8月にはその隣に第3営農団地、76年9月に第1営農団地の隣に第4営農団地を造成した。

4つの団地を合わせて54区画、440haに植えられたリンゴ樹は352,000本であった。

これが、78年から結実し始め、80年には26,113箱を収穫、81年には180,000箱に増え、全営農団地が一斉に経済生産に入った82年には、440,000箱もの収穫となった。

コチア組合は76年1月にサン・ジョアキンに事務所を開設、79年3月にパッキングハウスを建設、続いて選別機などの工事をおこない、83年2月には生産者待望の冷蔵設備の第1期工事が完了、収容能力2000トンの冷蔵庫が稼働に入った。85年には第2期工事（2000トン）、87年には第3期工事も終って、リンゴ生産団地の冷蔵能力は計8000トンとなった。

これは、販売のコントロールに欠かせない武器で、フジ、ムツといったリンゴの高級種を、半年以上も貯蔵して、8月以降の高値の時期に市場に出荷することができるからである。

この能力が大きいほど生産者の利益も高まるわけで、リンゴ団地と冷蔵施設は切っても切り離せない関係にある。

サン・ジョアキン地方の産業はこれまでパラナ松を主とした林業と、生産性の低い牧畜のみであったが、このリンゴ生産団地ができ、めざましい成績を上げるようになってからは周囲にリンゴ栽培が一斉に始まり、サン・ジョアキン郡は州有数のリンゴ栽培地として蘇えった。サン・ジョアキン郡の調べによれば、1974年のリンゴ栽培面積は440haであったが1988年には2330haとなり、生産量は2.120.000箱となっており、税収も倍増の1.240.000ドルとなっている。

また、このコチア組合のサン・ジョアキン進出の前後から、サンタ・カタリーナ州のリンゴ生産は急増した。1975年度に3150haであったサンタ・カタリーナ州のリンゴ栽培面積は、1988年には12.700haとなり、生産量も203.100トンに昇りなお増植中である。

コチア組合でまとめた、1986年から1990年までのブラジルのリンゴの生産量、消費量、輸入量は次のようになっている。（1989年以降は推定、単位はトン）

	1 9 8 6 年	1 9 8 7 年	1 9 8 8 年	1 9 8 9 年	1 9 9 0 年
消 費 量	3 0 万	3 2 万	3 4 万	3 6 万	3 8 万
国 内 生 産	2 2 万	2 5 万	2 8 万	3 0 , 6 万	3 6 万
輸 入 量	8 万	7 万	6 万	5 , 4 万	2 万

生産団地開発事業として、サン・フランシスコ河流域開発計画とサン・ジョアキンのリンゴ生産団地をとりあげた。これらはいずれも、ごく短い期間で相当な成績をあげ、将来の新農業開発に大きな期待をもたせている。ただ現実には、1980年代後半からブラジル経済政策の大混乱、ハイパーインフレなどのため、短期的には困難に直面しているところもでている。

I V . 農 業 協 同 組 合 の 創 設 と 発 展

外国移民がブラジルの農業面で発展させたものに「農業協同組合」がある。日本移民

も早くから特色のある農業協同組合をつくりあげた。この組織が単に生産面だけでなく、生産物の流通面まで含めて、ブラジル社会に及ぼした影響は大きい。

ブラジル政府が、近代的な独立した「協同組合法」を施行したのは1932年のことであるが（これ以前は、1907年発布の会社法の中で、協同組合の設立、運営などを規定していた）日本移民はこれに先だつ1918年、すでにミナス州コンキスタで「日伯農業組合」（S i n d i c a t o A g r i c o l a N i p p o - B r a s i l e i r o）を創設した。この組合は米価不況と借地だった米作者の離散のため、数年にして崩壊しているが、ブラジル初期の協同組合法に先だつ10数年に、日本人は協同組合と呼ばれるものをつくっていたことになる。

（ブラジル初期の協同組合法、日系以外の協同組合運動については、第1部第3章・日本移民と産業組合の項を、また当時の移住地事情については、第1部第2章・初期移民・農業組合への胎動の項を参照のこと）日本における協同組合運動は大正後半において盛んとなり、これらの気運を日本で身近かに経験して来た日本移民たちが、移住先の環境の中で、自衛手段として協同組合の設立を熱望したのは当然であるが、異国の社

会において生きのびるために、こうした組織はより切実な希望であった。

1920年代後半より、日系集団地にこうした農協は次々と誕生を見、移民たちの生活安定に役立ったばかりでなく、ブラジルの農業経営形態の面においても、従来のファゼンダ（大農場）規模の農場とは異なり、小農形態においても経営のなりたつことを可能とした。

また、更には、不備であった生産物流通機構を改革し、主要都市への食料供給を円滑にし、食品革命ともいえる変化を与えた。今日では生鮮食品供給の組織として、欠くことのできない地位を占めるに至った。

現在、ブラジル政府は日系移民のつくりあげた農協組織を模範として、協同組合組織の普及を図っているばかりでなく、組合を通じてブラジルの地域開発に寄せる期待も大きく、とくに広大な面積をもつセラード地域の開発利用には、日系組合との合弁的開発計画を樹て、先駆的な開発実施もおこなっている。

1. 協同組合の誕生と発展

a 小農の自衛組織として

日系組合の設立は、日本の協同組合運動に負うところがあるにしても、そういった組織への欲求は外国で移民たちが農業で安定した生活を得るために、手段としてより切実なものであった。農業を営むために集団地をつくる必要があった移民たちは、その生産する物を販売する段階で言葉が解らず、市場取引も満足にできないため、商人に買ったたかれ、常に苦渋をなめなければならなかった。こうした移民たちが生きてゆくためには、共同の組織によるほかなかったのである。そして、その自衛組織として農業組合が導入された。

コンキスタの米作組合は別として、組合設立の胎動はその後も度々あったが、部落の経済的事情などがあり、なかなか実現を見ず、1927年の暮れに至り、サンパウロ近郊コチアに、コチア産業組合が始めて誕生をみた。ブラジル初期の協同組合法による設

立であったため、名称は有限責任株式会社コチアじゃがいも生産者農業組合（S o c i e d a d e C o o p e r a t i v a d e R e s p o n s a b i l i d a d e L i m i t a d a d o s P r o d u t o r e s d e B a t a t a e m C o t i a）として会社法に基づいて設立された。

ここでコチア組合設立までの経緯を簡単にたどってみると次の通りである。

サンパウロ近郊 2 0 k m 余に隣接するコチア村に日本人が入って来たのは 1 9 1 4 年のことである。サンパウロ市で大工職をしていた者、あるいは配耕された奥地コーヒー耕地から移って来た者たちであった。彼らはここでジャガイモの生産に携わった。地力が衰えると肥料の施用を行うようにし、屠殺残物を肥料として購入使用した。日本移民がブラジルでも肥料を用いた始りである。

雑多な在来種の中からバタタ・オウロという優良種を選抜し、ボルドー液に始まる消毒剤の使用に踏みきり、多収穫を得るとともに、近代的な集約農を確立していった。

部落に日本人会はごく初期から設立され、親睦団体としての役割、あるいは子弟教育の役割を果していたが、生産活動が盛んとなり、やがて 1 9 1 9 年、会の音頭で肥料の

共同購入に踏みきる。ここで日本人会は初めて組合的な役割を果たすことになり、部落の日本人たちは、農業組合事業に対する意識を深めるようになった。

施肥の効用により、生産規模が広げられるにつれ、家族労働では間に合わず労働者として近隣のカポクロ（土着農民）が使用されたが、労働力不足のため労賃がせり上るようになった。これに対し、日本人会は協定をつくり、せり上げ防止に努めた。更にジャガイモの生産過剰による値下りに対処し、植付け制限を実施して実をあげ、販売に際してそれまで市場の習慣であった計量に当ってリットル制をキロ制に変えることを商人に認めさせるなど、種々の体験を通して組合結成への気運は徐々に盛り上ってきた。

1921年、日本人会全員を組合員として農業組合を組織し、市場における生産物収容倉庫の建設、生産物搬出道路の舗装をおこなうこととなったが、倉庫敷地購入の日、予期せぬ大霜にあい、組合設立計画は一朝にして消え去った。以後1926年まで、入植家族は増えながらも、組合結成への動きは見られなかった。

しかし、この年に至り、おびただしいジャガイモ生産の増加を見、連日市場に搬入さ

れるイモは場外に山積みされるまでになった。その結果、商人たちにつけ込まれ、値段をたたかれ、更に盗難にあい、雨にあい品傷みがでるなど、販売上不利な面が続出した。

折から日本総領事館は補助金を供与し、組合創立の必要性を日本移民集団地に呼びかけていた。また、訪日していた下元健吉は、当時日本で盛んとなっていた産業組合運動の息吹きにふれて帰って来た。この下元の音頭取りによって組合設立運動は本格的に動き出し、コチア周辺の日本人83名が集まり、1927年12月、遂にコチアじゃがいも生産者組合が結成されている。

b. サンパウロ市の膨張と共に発展

このあと、サンパウロ州一円に広がる各日本人集団地では、コチア同様の経過をたどった後、農業組合が続々と生れた。近郊では、サンパウロ市の北方ジュケリー（マイリポラン）にジュケリー農業組合（現在のスール・ブラジル農協組合）が1929年に設立された。

しかし、サンパウロ奥地に生れた組合は、コンキスタの日伯農業組合同様、日ならずして消滅するものが多かった。その原因の主なものは、構成員である組合員の移動にあった。

当時の奥地農業は、新地を開いての無肥料、掠奪農業であり、したがって地力の衰退とともに新たに新地を求めて移動してゆくことになる。そのため開拓入植地の日本人集団地もその離合集散は常ならなかった。組合存続も当然不可能となることをまぬがれなかった。

また当時の移民に組合運営の知識が少なくこのため経営難となったものは少なくない。

ブラジルのように国土が広大な割に消費地が少ないというところは、消費地に遠い小組合の存立は難しかった。

コチア組合も創立直後、1929年の世界恐慌のあおりをくい、倒産の危機に見舞われたが、この難局を切り抜けた後は、なお紆余曲折はありながらも、確実な成長を続けていった。



コチア産業組合中央会の本部事務所

こうして創立後崩壊することなく順調に伸びてこられた組合は、単にコチア組合ばかりでなく、サンパウロ市郊外に誕生したいくつかの組合がある。

1932年に初めて協同組合法が施行され、連邦政府、州政府内に協同組合奨励局も設

置され、コチア組合も有限責任会社からコチア産業組合（C o o p e r a t i v a A g r i c o l a d e C o t i a）と名称を変更し、名実ともに協同組合として活動することとなった。

サンパウロ近郊に生れた組合が崩壊することなく順調に進展できたことは、それなりの理由があった。 29年の恐慌でコーヒーや棉花栽培をおこなっていた日本人の中には、小資本で再起できる道を求めてサンパウロ近郊に移り、小面積経営で野菜作りをするものも多くなり、これらのものたちが近郊の組合に参加し、組合は従来のジャガイモに加えて野菜も取扱うようになり、組合員が増加するとともに、取扱い生産物もトマト、野菜、果実というように増加していった。

これらの生産物の販売が年々増加していったことの裏には、サンパウロ市が工業都市として、この時期に急激に膨張していったことがある。当時のサンパウロ市の人口をみると、日本移民が近郊に入りはじめた1920年当時は57万9千人であったものが、20年後の1940年には132万6千人となっている。20年間で129%増加した。

サンパウロ市人口の増加

年度	人口数	年度	人口数
1 8 9 0	6 4 . 9 3 4	1 9 6 0	3 . 8 2 5 . 3 5 1
1 9 0 0	2 3 9 . 8 2 0	1 9 7 0	5 . 9 7 8 . 9 7 7
1 9 2 0	5 7 9 . 0 3 3	1 9 8 0	8 . 4 9 3 . 5 9 8
1 9 4 0	1 . 3 2 6 . 2 6 1	1 9 8 5	1 0 . 0 6 3 . 1 1 0
1 9 5 0	2 . 1 9 8 . 0 9 6		

出所 I B G E 「ブラジル年鑑」 1 9 8 7 年

こうした膨張する消費市場を背景とし得たことが、近郊に生れたジャガイモを始めとして生鮮野菜の生産を中心とする組合にとっては幸いであった。「サンパウロ市及びその周辺地区の都市化は食糧消費の絶対量を増大させたのみでなく、同時に食生活の変動をともなったために、野菜、果実、とくにトマトの消費が激増した。まさに、このような状況に応じて日本人の組織運営になる農業協同組合が登場し、これに対する食料供給

の面で、決定的役割を果たすことになった」（ジョゼ・アルツール・リーオス 「ブラジルの農業構造と日本人」 「ブラジル移住60年シンポジウム」所収）と評価されている如く、近郊日系組合は、サンパウロ市に食料供給をおこなうとともに、都市の人口増加によって更に成長をとげることができたのである。

後に第2次世界大戦の勃発により、多くの日本人企業の資産は凍結の憂き目にあったが「都市への食料供給の面で、決定的役割を果たす」日系組合はついに凍結の対象とはなり得なかった。逆にこれらの日系組合が、その順調な発展を期し得たのもまた、サンパウロ市の飛躍的な人口増加によるものであった点からみれば、日系組合とサンパウロ市の発展はいわば相互補完的な関係において可能であったといえるであろう。

C. 国際市場にも進出

近郊の組合は、この急激に増加する都市の食品需要に応ずるため、その生産活動地域を拡大していく必要があり、近郊地域から次第にサンパウロ奥地、あるいは隣接諸州

へと伸びていき、かつて経営不振におちいった奥地組合などもその傘下に収めて飛躍的な発展をとげた。参考までにこの発展の度合いを、コチア組合の組合員数をもって見ると下記の如くである。

1927年	83名	1937年	1.303名
1947年	3.930名	1957年	5.846名
1967年	13.306名	1987年	14.470名

1966年に組合法の改正があり、以後は中央会組織となり、10地方単協を傘下に収めているが、1988年現在10単協に属する組合員は16.309名である。

ここに特記せねばならないのは、組合員はそのまま生産者数を意味しないことである。

1人の組合員の名義は一世帯を代表するばかりでなく、その世帯が保有する雇用労働力が含まれている。

近郊に誕生し、成長し現在残っている日系組合は、コチア及びスール・ブラジルの二大組合であるが、このいずれもがジャガイモ生産を主とした組合であり、やがてサンパウロ市場において野菜類が商品として売れるようになると、これを取扱うようになり、更に鶏卵、果実というように取扱う生産物を増してゆき、活動地域が奥地にまで進展するようになると、棉花、コーヒー、その他雑穀類をも取扱うようになり、今日に至っている。取扱い生産物の種類はそれぞれ250種類ほどに上っている。また、これらの生産物を速かに販売市場に直結させるために、国としてのインフラストラクチャーの完備していなかったブラジルにあって、組合は独自の流通網を築き上げていった。すなわち集荷、及び生産資材配給のためのトラック輸送網を活動地域内に張るとともに、主要消費都市には生産物販売所を設け集荷から販売までの一環した流通機構を確立した。これらは単に奥地生産者組合員に大きな経済的利益をもたらしたのみでなく、各消費都市への生鮮食品供給の面でも大きな役割を果たした。

更に、今日これらの組合は国内市場のみならず、国際市場にも進出し、コーヒー、バナナ、大豆、果実、野菜、鶏肉、鶏卵に至るまで、独自に輸出までおこなっている。ま

た、生産資材の輸入も自らおこない、参加組合員の利益を計っている。更にまた、生産物をより有利に販売するため、二次製品としての加工をも独自におこなっており、屠殺場、搾油工場、製茶工場などが併設経営され、コチア組合などは近く紡績工場を創業させるべく建築中である。

d. 大戦の抑圧で・質的転換

同胞移民の利益擁護として生れたのが農業組合としての組織であった。そして、その役割を遂行しながら成長してゆく段階の中で、組合は質的に変換していった。それほともなおきず、日系以外を含めた小規模経営農家の利益擁護団体としての組合であり、より幅の広い本来の組合主義へと進展していったのである。その質的転換はむしろ第2次世界大戦の戦時の抑圧を通しておこなわれていったとみられる。

戦前における日系組合は、日本を通して組合主義がもたらされたせいもあるだろうが、それは完全な日本の産業組合運動の延長であり、単に日本人小農擁護組織であるば

かりでなく、日本の産組運動がたどったのと同様の日本国家主義的イデオロギーにも影響を受けた。しかし、大戦の勃発により、敵性資産として、ブラジル政府の監督下におかれた。

抑圧の期間を通して、日系組合は逆に日系という狭い枠から脱皮していった。それは敵性資産でありながら、他の日系資産と同様にはブラジル政府が凍結し得ないまでに必要欠くべからざる、生鮮食品供給組織として重要な存在となっていたからである。

単なる日本移民農業者擁護組織にとどまらず、ブラジル一般の小農経営者の利益擁護組織として、質的な変貌をとげる契機を、この戦争を通して得た日系組合は、戦後日系以外の中小農業者の参加も急激に増加し、更に組織としての進展をみた。

e. 中小農家安定に大きな役割

かくして、移民80年の歴史の中において、コチア産業組合の如きは、ブラジルのみならず、南アメリカ諸国においても最大の規模を誇るまでに成長しており、ブラジルの

他の企業の中においても、その販売額においては上位にランクされている。

ブラジルでは1932年の協同組合法施行以来、政府は組合奨励局を設け、その普及に努めているが、一般に個人主義的傾向が強く、協同組合主義の普及はむずかしいものがあり、組合が創立されても、その存続はなかなか困難である。

今日、協同組合が普及しているのは外国移民の導入が多かったミナス州、サンパウロ州、リオ・グランデ・ド・スール州、パラナ州、サンタ・カタリーナ州というように南部諸州に伝統的に組合活動が多い。これらの組合活動のうちで主なものは、ミナス州を中心とする農畜産組合、リオ・グランデ・ド・スール州を中心とする小麦生産者組合、米生産者組合、ブドウ酒生産者組合、サンパウロ州を中心とするコーヒー生産者組合、砂糖・アルコール生産者組合、牛乳生産者組合といったところである。

これらの協同組合がほとんど、単一生産物の生産組合であるのに対し、日系の組合はいずれも創立当初から販売・購買・信用・利用などの各部門を兼備した総合組合であった。

これは日本の産業組合に範をとった、ためのものであったが、こうした総合組織のも

のであった組合は、未開発なブラジルの農村にあっては農家のために最も有効な機能を果すものであった。農家は組合に参加し、生産活動に従事していれば、生産物の販売はもちろん、必要生産資材の配給、生産資金の融資、生産の指導など、全般にわたって組合が代行してくれたからである。こうした点において日系組合が開発の充分でない農村地域において、中小農家安定に果した功績は大きなものがある。

ブラジル政府当局は、こうした日系のあり方に範をとって、後進地域の農村に、コベラチーバ・ミスタ（C o o p e r a t i v a M i x t a－総合組合）を奨励し、指導に当たっているが、先にものべたラテン的個人主義傾向の強い国民性と、さらに農民層の教育レベルの低さもあってか、これらの組合の運営はいずれも思わしくなく、協同組合普及は常に伸びなやんでいる。以上のようなわけで、協同組合に関する限り、今日もなお外国移民系組合がもっとも充実した組織と活動を維持している。

この様に日系組合がブラジル社会の中で飛躍的に発展しえた理由は、先にものべたように、時期的にサンパウロ市の工業都市としての発展期と期を一にしたことがあるが、さらにその背景として、これらの組合を創立運営した構成員たちが日本人であり、しか

も彼らが日本の農民層の出身であったことが大いにあずかっているであろう。日本人移民たちはコーヒー労働者としてコーヒー耕地へ配耕されたが、労働契約を終って、独立農として出発するに際し、ほとんど例外なく日本人集団地を形成して入植した。日本人にとって集団化することは、営農上、また生活の上でも必要欠くべからざることであったが、この集団志向は時としてブラジル社会への不同化という非難をこうむった。しかし、個人として無力を移民でも、この集団によってはじめて持てる力を発揮し得たのである。協同組合主義が集団の個々に簡単に理解され、難なく受け入れられて創立発展の基盤となりえたのも、この日本人の集団志向、日本農民の伝統的な部落共同体意識があったからであろう。

2. 日系組合の現状と将来

a. 現存する日系協同組合

ブラジルに、最初の協同組合法が 1907 年に出されてから 1915 年までに 14 組合、1916 年から 1926 年までに 43 組合、1927 年から 1932 年の現協同組合法が発布されるまでに、日系・非日系合わせて、145 の組合が登録された。その中につきの日系の 8 組合が含まれていた。

コチア組合（27 年）、レジストロ組合（28 年）、桂組合（同）、セッテ・バーラス組合（同）、ジュケリー組合（スール・ブラジル組合、29 年）、平野組合（カフェランジャ組合 30 年）、イガラバーバ組合（31 年）、プロミッソン組合（31 年）。

当時、サンパウロ総領事館に農事部があったが、1929 年に日本に拓務省が設置され、海外の拓殖事業の指導・奨励もおこなうことになり、総領事館の農事部は勸業部と改称し、拓務省の管轄となった。勸業部は農業技術の指導にとどまらず、営農指導までおこなったが、とくに日本移民の生活の安定と経済基礎の確立を計るため、日本で実績をあげていた「産業組合」をモデルとした、農業組合の設立を奨励・助成した。

その助成の一つとして、農業組合が正常な活動をした場合、設備投資に要した資金の一部を日本政府の補助として斡旋したが、上記の 8 組合は施設建築に当って、それぞれ

その補助金を受けた。この日本政府の補助は8組合が受けたあと間もなく中止となったが、組合設立の気運は各地方に高まった。1932年に、協同組合を特殊法人として認め、免税措置などを定めた現協同組合法が発令され、翌33年に協同組合奨励局が設置されてからは、組合設立は一層促進され、34年には日系組合は倍増の16組合となった。

サンパウロ総領事館は、この農業者による協同組合結成に深い関心を寄せ、その組織網を強化することを考え、1934年2月に第1回在伯邦人産業組合常務者懇談会を開いたが、早くも4月には、地方に散在する日系組合の連絡・統一を図り、全体的な組合活動を促進することを目的とした、サンパウロ産業組合中央会を誕生させることになった。この中央会の創立総会は1934年4月23日におこなわれたが、当日、つぎの日系16組合が参加を表明した。

コチア、ジュケリー、プロミッソン、イガラパーバ、桂、平野、バストス、レジストロ、モジ・ダス・クルーゼス、グワランタン、イタケーラ、セードロ、ウニオン、セッ

テ・バーラス、カンポ・グランデ、ビラ・ノーバ。

これには内陸部で棉を扱う組合が増えているが、これは1930年のコーヒー暴落、霜害、植付制限令などで、多数のコーヒー農業者が棉作に転向したからである。1938年から40年にかけて、折からの棉景気でさらに棉作者は増え、パラグワスー、マリリア、アラサツーバ、ポンペイア、プレジデンテ・プルデンテ、タクアリチンガ、モンテ・アルト、ツパン、ビリグイ、ロンドリーナ、トレス・バラスなどにも棉作者の組合が設立された。そのあと、大戦中には生糸の輸入禁止で、俄かに盛んになった養蚕の組合もこれに加わって、ブラジルが独伊に宣戦を布告した1942年には、28の登録組合と35の任意組合があった。

戦時中の日系の産業組合は、ブラジルの組合法によって設立された内国団体であったから、そのまま経営を続けることができたが、組合の経営者は強制的に内国人におきかえられ、組合によっては商社なみに英・米のブラック・リストに加えられた組合もあったため経済活動に支障をきたし、経営困如こ陥って破綻する地方組合もあった。

1945年の敗戦のあとに続いた日系社会の「勝ち負け」問題は、組合事業をも混乱に

追い込み、地域住民としての連帯意識を失なわせることになった。

加えて戦時中の移動禁止で、各地に足留めされた形で営農していた農家は、地力の低下を主な理由として、戦後は他の新しい地域に向って移動することになった。そのため組合の精綿工場や精米所はたちまち入荷減を招き、組合の経営は一層困難になって閉鎖する組合が続出した。また戦中の生糸輸入禁止で増えた養蚕組合も、戦後の不況で棉作組合同様の苦境に陥ちいった。各組合はこの戦中戦後の悪条件を切り抜けるため懸命な努力を払ったが、大半は脱落することになった。

そのあと、道路網が完備し、農業の近代化が始まると、地方の小組合の組織ではこれに対応できず、コチアやスール・ブラジルなど大手組合に吸収合併されるものが多くなり、サンパウロ州奥地に残存する日系組合は10指で数えられるように減少した。

現在、活動中の日系組合はつぎの通りである。（名称や建物は残っていても活動停止のものは除く）〈南伯地方〉 コチア、スール・ブラジル、カフェランジャ、アリアンサ、チェテ、バストス、マリリア、ミランド・ポリス、オウリンニョス、カンポ・グランデ、イポチー。

〈北伯地方〉 ここではパラ州、アマゾナス州、マラニオン州、ロライマ州、ロンドニア州、アクレ州を北伯地方としたが、この地方には、ほとんど活動していないものも入れて20近くの移住地がある。創立当初はそれぞれ農業組合に近い働きをする組織をもっていたが、不況による入植者の離散その他で解散したものが多く、現在は下記の5日系組合が活動中である。

トメアスー総合農業協同組合（パラ州、1931年野菜組合で発足、1935年トメアスー農協、1949年トメアスー総合農協、1967年第2トメアスー農協を合併） モンテ・アレグレ農業開発総合組合（パラ州、1958年モンテ・アレグレ農協設立、INCRAの斡旋でモンテ・アレグレ農業開発総合組合、組合員230名、うち日系20名） アマゾニカ農業組合（パラ州、1972年創立、1977年スール・ブラジル組合と提携） パラエンセ産業組合（パラ州、1939年ベレン地区で結成、1972年サンタ・イザベル地区に移転、コチア組合と提携） エフィゼニオサーレス農業協同組合（アマゾナス州、1959年マナオス地区に設立） 〈東北伯地方〉 バイア州、セアラ州、ベルナンプッコ州、リオ・グランデ・ド・ノルテ州など東北伯一帯

をこの地区に入れた。この地方には1950年代の終りから60年代、70年代の初めにかけて10指に余る日本人植民地ができたが、北伯同様、適作物が無く輸送が困難などで、組合らしきものはできて、ほとんどが機能しなかった。70年代以降はコチア、スール・ブラジルなど大手組合の現地事業所に属し、生産団地などで営農しているものが多くなった。

〈その他〉 ミナス州、ゴヤス州、マット・グロッソ州など、1970年代以降に開発された地方では、倉庫、精選工場、輸送、販売などの関係で、ほとんどがコチア、スール・ブラジル、または非日系の大手組合の傘下に入って営農をおこなっている。

以上の日系農協のうち、コチア産業組合中央会とスール・ブラジル農業協同組合中央会の事業規模のあらましを次に示す。

b. コチア産業組合中央会

ブラジル名をC o o p e r a t i v a A g r i c o l a d e C o t i a - C o

o p e r a t i v a C e n t r a l という。

創立は1927年で、今日までに60年の歴史を有している。ブラジルにおいては最も古い歴史をもつ農協の一つであるとともに、その規模においても南アメリカ最大といわれる。サンパウロ近郊に83名のジャガイモ生産者をもって発足した組合は、現在、サンパウロ、パラナ、マット・グロッソ、リオ、ミナス、サンタ・カタリーナ、バイア州にまたがっている10単協をその傘下に収めており、それに属する組合員は16,309名（1988年）に上る。

1988年度のコチア組合の事業規模を数字で示すと次の通りである。（単位は1000クルザード、1988年12月の1USドルは661クルザード）

資本金	3.070.817	事業分量	227.338.793
諸積立金	14.707.137	販 売	129.477.134
固定資産	39.375.439	購 買	97.861.659

1988年度の取扱い生産物は250種にものぼるが、主要生産物は下記の通りである。

品 名	取扱量	金 額
ジャガイモ	3. 3 2 1. 4 6 0 俵	1 1. 2 1 6. 9 0 0
大豆	7. 5 3 8. 6 4 9 俵	2 0. 8 3 0. 8 0 0
棉	1. 1 7 0. 2 4 6 俵	7. 0 8 2. 8 0 0
鶏卵	1. 9 0 7. 3 3 8 箱	7. 7 3 1. 8 0 0
食鶏	1 6. 3 9 4. 6 5 4 k g	4. 5 0 8. 5 0 0
小麦	5. 4 6 4. 1 0 9 俵	2 2. 2 6 7. 9 0 0
コーヒー	6 5 6. 9 8 4 俵	2. 5 4 6. 0 0 0
トマト	2. 6 0 8. 8 0 0 箱	3. 4 8 5. 5 0 0
玉ネギ	1. 4 5 1. 0 3 0 俵	3. 0 1 7. 3 0 0
トウモロコシ	2. 3 2 3. 1 9 1 俵	3. 3 9 2. 5 0 0
ニンニク	2 8 4. 5 8 9 箱	1. 1 5 0. 0 0 0
果実類		1 6. 5 2 9. 9 0 0
蔬菜類		6. 1 5 9. 9 0 0

併設施設としては、農事試験場、種鶏場、屠殺工場、コーヒー精選工場、搾油工場、製茶工場、パッキング工場、ラミー工場などがあるが、現在、紡績工場を建築中である。

コーヒー、大豆、綿花、紅茶、果実、野菜、鶏肉などを直接輸出し、1987年には

3. 537万ドルの外貨を獲得した。近年は政府の要請にこたえ、ミナス州、バイア州、マツト・グロッソ州などのセラード開発にも進出して、着々実績を上げている。

C. 南伯農業協同組合中央会

ブラジル名をC o o p e r a t i v a C e n t r a l A g r i c o l a S u l - B r a s i l という。

コチア組合より2年遅れた1929年、同じくサンパウロ近郊のジュケリー（現マイリ・ボラン）に創立された。コチア組合と同様にジャガイモ生産者49名によって出発したもので、その発展経路も似ている。現在の組合月数は40単協で10.074名である。

1988年度の事業規模は下記のとおりである。

（単位は1000クルザード、1988年12月の1USドルは661クルザード）

事業分量	24.649.360
------	------------

販 売	16.932.372
-----	------------

購 買 7 . 7 1 6 . 9 8 8

1 9 8 8 年度の取扱い生産物は 2 0 0 種以上にのぼるが、主要販売品目は次のとおりである。

品 名	取扱量	金 額
ジャガイモ	3 7 3 . 4 5 5 俵	1 . 6 1 3 . 3 7 9
大 豆	4 0 5 . 3 6 2 俵	1 . 4 0 3 . 7 5 1
鶏 卵	4 3 9 . 5 8 5 箱	1 . 7 1 3 . 1 1 1
小 麦	5 3 6 . 8 4 6 俵	2 . 0 3 8 . 4 6 5
コ ー ヒ ー	8 3 . 5 2 9 俵	1 . 4 0 5 . 8 2 6
ト マ ト	5 9 2 . 4 7 7 箱	8 3 7 . 2 5 7
玉 ネ ギ	4 7 7 . 9 2 7 俵	1 . 0 0 3 . 4 0 4
トウモロコシ	3 4 . 2 5 7 俵	6 6 . 1 6 1
ニ ン ニ ク	1 4 6 . 3 4 2 箱	3 1 5 . 4 9 5
果 実 類		4 . 8 3 5 . 4 2 6
野 菜 類		1 . 6 5 2 . 6 4 5

併設施設としては、農事試験場、種鶏場、屠殺場、コーヒー精選工場、植林場などが

ある。コチア組合と同様、政府の要請にこたえミナス州のセラード開発計画に進出している。

d . 競合する商業資本

日系組合はたびたび繰り返すように、日本移民たちの利益擁護から始まった。その当初 においては、市場の悪徳商人に対抗するのが目的であったが、今日、逆にその主要生産物 であるジャガイモ、野菜類、トマトあるいは果物といったものにおいては、市場値を操作

し得るほどの占有率を占めるまでになっている。つまり、生鮮農産食品の世界においては、今日もはやおそろべき敵対者をもたない段階にあり、その限りにおいて、日系農協は農協としての所期の目的を達成したのである。しかしながら、中小農業者の利益擁護団体として組合は、従来と違った新たな難関に直面していることもまた事実である。

各組合とも現在単なる農産物生産組合としての段階を脱し、それらの生産物の加工、



コチア産業組合中央会がパラナ州アサイに建築中の紡績工場

あるいは輸出の面まで進出している。膨大な施設をもち、輸出入まで自らの手でおこなっているこれらの農協は、すでに60年前の農協の姿はどこにもなく、一大企業の様相を呈している。今日の農協に競合するものは商業資本であり、国際資本である。これらに対して、いかに成長していくかは、今後の問題である。



後継者の育成に真剣だ。

日系組合は、この60年の歴史の中で、単に日系農業者の擁護の役割を果たしただけでなく、ブラジルの農業の発展の面で大きな役割を果たしてきた。中小農の安定、農産物の流通、供給、生産体制の改革の面で、貢献した点はとくに大きいといえよう。

参 考 文 献

- ・「ブラジルの日本移民」ブラジル日系人実態調査委員会。東京大学出版社、1964年
- ・「ブラジルの農業」1973年2月～78年1月号。コペラソン出版社
- ・「農業宝典一養鶏・家畜編」1963年。コベルコテア出版社
- ・「農業宝典一野菜・雑作編」1967年。コベルコテア出版社
- ・「農業宝典一果樹・果菜編」1969年。コベルコテア出版社
- ・「ブラジル移民史年表」半田知雄編。サンパウロ人文科学研究所、1976年
- ・「コテア組合三十年の歩み」アンドウ・ゼンパチ。コテア産業組合、1959年
- ・「40年の歩みと現状」コテア産業組合、1963年
- ・「コテア産業組合60年の歩み」コチア産業組合中央会、1987年
- ・「アグロナツセンテ、34～38号」アグロナツセンテ出版社
- ・「移民の生活の歴史」半田知雄、サンパウロ人文科学研究所、1970年
- ・「パラ州事情」在ベレーン日本国総領事館、1977年
- ・「農学大辞典」野口弥吉編、養賢堂、1961年

- ・「ブラジル史」 アンドウ・ゼンパテ、岩波書店、１９８３年
- ・「われら新世界に参加す」 移住７０周年シンポジウム、毎日新聞社、１９７８年
- ・「日本農業に於ける資本主義の発達」 森喜一、白揚社、１９４７年
- ・「ブラジル農業ハンドブッカー野菜・雑作編」 国際協力事業団、１９８４年
- ・「ブラジル農業ハンドブッカー果樹編」 国際協力事業団、１９８７年
- ・「ブラジル農業ハンドブッカー畜産・養蚕編」 国際協力事業団、１９８７年
- ・「ブラジル移住６０年ーシンポジウム」 ラテンアメリカ協会、１９６９年
- ・「アマゾン地域の農産業と日本人」 国際協力事業団、１９８８年
- ・「日本移民がブラジル南部の農業開発に及ぼした影響」 外務省領事移住部、１９７２年
- ・「ブラジル社会に対する日系人の役割と貢献」 外務省領事移住部、１９７８年
- ・「１９８８年度事業報告」 スール・ブラジル農協中央会、１９８９年
- ・「１９８８年度事業報告」 コテア産業組合中央会、１９８９年
- ・「中央会３５年の歩み」 サンパウロ産業組合中央会、１９６９年

第2章 日本移民の商業・工業と進出企業

I. 日本移民の商業進出

日本移民は戦前はもちろん、戦後移住も原則として農業移住が中心だったから、当然ながら日本人の商業進出は遅かった。ブラジルにおける日本人の商業進出にはいくつかのタイプがある。以下戦前と戦後に分けて商業を概観してみる。

1、戦前の日系商業

a. 最初から商業進出を目指したもの

いわば草創期における進出企業で、これには笠戸丸移民以前にサンパウロに進出した藤崎商会と1910年リオに開店した蜂谷商会があげられる。

1906年、サンパウロ市の中心サン・ベント街に、仙台の藤崎商会が、オ・ジャポン・エン・サンパウロの名の下に支店を開設し、日本製の雑貨を主体に商業活動を行った。まだ、日本商品はおろか、日本人そのものが珍しかった時代であるから、開店2日目からは警官が出動して警備と整理に当るほどの盛況であったという。藤崎商会はその後順調に活動を続けたが、本店の店主、藤崎三郎助が1926年に死亡したことで、第1次世界大戦後の不況によって、本店が苦境に陥ったことを理由に、1932年に閉鎖されている。

また、名古屋に本拠を持つ蜂谷商会は1910年、リオで同名の会社を設立、陶磁器、雑貨の輸出入、卸売業を開始した。同社はその後順調に発展、第2次世界大戦直前には、ブラジルに輸入する日本製陶磁器の80%のシェアを有していたといわれる。

b. 農業移民を便法として商業進出を目指したもの

これは元来、日本で商人であった者が、資本やその他の事情で、いきなり商業進出ができないため、まず農業移民の形でブラジルに渡り、短期間で商業に転じた組である。

したがって、ある程度の資本をもって来ているのが特徴で、1920年代から30年代初期にかけ、サンパウロ市で店を開いたものが多かった。

羽瀬商会、遠藤商会、カーザ中矢、国井商店、伊藤商会などである。これらの商店は、自らも雑貨の輸入小売り販売を行なうとともに、出張販売員（ビアジャンテ）を地方の日本人商店へ送り、卸売りを行なった。ビアジャンテは、コミュニケーションの手段の発達していない当時の移民社会における情報の担い手であったと同時に、商業の实际的訓練を施す学校の役割をも果たしたことは、ビアジャンテ出身で、のちに商人として名を成したものが多いことをみてもわかる。

C. 移民共同体の中から自然発生した商業

同じ頃、サンパウロの入り口の一つに位置するピニエイロス地区に居住する約200家族の日系人と近郊のブタンタン、カシンギ、タボン、カンポ・リンポ、コチアなどの地方の日系人農家を顧客として商業中心地が形成されており、地方の小都市でも、規模は小さいながら、同様の傾向が見られた。

聖州新報の移民25周年記念鑑（1933年）には、日本人移民入植地方の主要都市における日本商店の数を次のように記録している。

サンパウロ	1 5 9 店	バストス	2 6 店
サントス	9 9 店	カンポ・グランデ	3 5 店
バウルー	3 0 店	レジストロ	1 6 店
リンス	3 9 店	プロミッソン	3 7 店
アラサツーバ	3 9 店	リベロン・ブレット	7 店
プレジデンテ・プルデンテ	2 4 店		

これらは、多く日本人を顧客とする農産物仲買商、雑貨商、菓子商、飲食店、旅館、理髪店、自動事業（運送店）、青物商、薬局、家具商であって、その他には玩具店、豆腐屋、書籍店、馬車屋、果物店などが散見するにとどまっている。

d. 野菜市場への進出

日本人の商業進出で比較的多かったものに野菜市場への参入がある。

移住者が次第にサンパウロ市に集中するようになってくると、サンパウロ市の近郊で、これらの日本人向けの小規模の野菜栽培が始まる。1911年にサンパウロ市の近郊、サンタナ、タイパスに日系人の野菜栽培者が入植したのを初めとして、モルンビー、マイリポラン、モイーニョ・ヴェーリョなどで日系人が野菜栽培を開始した。しかし、これら栽培者の主要作物はジャガイモであり、その他の野菜栽培は副次的で、少数の日本人向けのものであったようである。

野菜栽培は、初め現地のブラジル人（ほとんどがポルトガル系であった）と、同種のものを同規模で栽培していたが、都市の拡大と需要の急増に伴い、益々遠隔地に拡散し、規模も大きくなった。それとともに、ようやく飽和状態、過当競争の害も出始め、卸売市場の仲買人の買い叩きに合うようになった。これに対抗して、農業者が団結して日系最初の協同組合であるコチア産業組合を結成したのが1927年であるが、その経緯は第2部第1章に譲り、純粋な商人としては、1928年、今井宇八が日系人の仲買

商として、サンパウロの青物卸売市場に始めて進出し、翌1929年、田場ウシが青物小売市場に日系人として始めて進出した。その後、これらの市場に入り込んだ日系人は引きも切らず、1941年、第2次世界大戦の始まる頃には、実数は定かでないが、市場の商人の全体のほぼ3分の2に達したといわれる。CEAGESP（サンパウロ青果物配給センター）における日系農業者のシェアを下表に示す。

CEAGESPにおける日系人のシェア (1978年)

	CEAGESP認可業者			ボックス比		
	計	日系人	日系人比	計	日系人	日系人比
生産者倉庫 A	195	147	75,4%	228	207	90,9%
生産者倉庫 B	158	79	52,5	306	146	47,7
生産者自由市場	125	77	61,6	272	199	73,2
野菜市場 (計)	478	303	63,4	—	—	—
果実市場	215	23	10,7	188	28	14,9
生産者自由市場 (花)	443	320	72,2	443	320	72,2
生産者ボックス	103	46	44,7	120	51	42,5
計	1239	696	55,	—	—	—

註：生産者倉庫ではトマトなど箱物野菜が販売される。生産者自由市場では葉野菜が販売される。生産者ボックスではジャガイモ、玉ネギ、鶏卵などが販売される。

一方、フェーラ・リーブレ（露店市場）で野菜を商う兼業農家も次第に増え、彼らは、やがて卸売市場で野菜を仕入れて売る純然たる商人に変わっていったのである。このような経過はサンパウロ州、パラナ州、リオ・デ・ジャネイロ州の日系人口の多い都市

でもほぼ同様である。

e. 農産物仲買商と精選業者

1920年代になると、商才があり、多少の資金力も有する農業移民の中から農産物仲買いを始めるものが出てくる。扱う商品は、米、コーヒー、少し下っては棉が主なところで、最初は日本人移民の生産物を集めて精選工場に運ぶ、小規模な仲介業として出発している。

「日本移民25周年記念鑑」には穀物仲買商として、サンパウロに2店、サントスに6店、バウルに2店、アラサツーバに4店、プレジテンテ・プルデンテに1店、バストスに5店、プロミッソンに10店という数が記載されている。

しかし、やがてこの中から、米、コーヒー、棉の精選工場を自分で持ち、会社組織にするものがあらわれてくる。いわゆるマキニスタ（精選業者）といわれる人達で、代表的なところでは藤原久人商会、上野商会、和田商会などがある。

マキナと呼ばれる精選工場は、工場という名前はつくものの、粳や殻付コーヒーを脱

穀したり、柿の場合は実棉から種子を分離することなのである。機械も簡単なものだった。精選業者は自分達のことを *I n d u s t r i a e C o m e r c i o*（商工業）と称したが、実際には工業よりも商業の方に比重がかかるのが実態だった。ただし、コーヒー精選工場や繰り綿工場は、原料倉庫や製品倉庫の大きなものが必要だから、外見は大きな工場に見えるのがふつうだった。

f. 洗 染 業

日系人の商業進出の中の一つとして、洗染業を逸することはできない。香山六郎が「移民40年史」に記している所によると、1940年代の終りに、サンパウロ市1500店の洗染業者のうち、約3分の2は、日系人の経営する所であったという。さらに1958年に調査された「ブラジル日本移民」によると、全ブラジルにおいて、4356人が洗染業に従事している。

種々の事情で、農業を放棄して都会に出た日系人にとって、一番手っ取り早い職業は洗染業であった。これならば家族労働と小額の資本があれば開業でき、さしたる商才も必

要としなかったからである。この業種の人々は、営業区域の地理に明るく、日系政治家の選挙地盤ともなり、また、公益事業の無償奉仕員ともなったことは特筆する必要がある。例えば日本移民50周年記念事業である「コロニア実態調査」において、掴みにくい都市在住の日系人の調査を引受けたのは洗染業の人々であった。このほか日系人に多いサービス業種として理髪理容業、写真業があり、1958年の実態調査では、それぞれ2013人、1122人という就業人口が記録されている。

g. 金融業、サービス業

戦前、金融業は、植民会社などの日本からの直接投資による企業によって行なわれた。

まず、1932年、カーザ東山が資本金200コントスの金融店（カーザ・バンカリア・東山）を開設した。カーザ東山は1927年、東山農事株式会社が3500コントスを投資して設立したブラジルの現地会社である。日本の本社は三菱財閥の総帥であった岩崎文弥が、1919年、同家の個人出資をもって設立した海外投資会社で、農牧業

の開発を目的としていた。

始め、サンパウロ州にカンピーナス農場を開設し、1928年にはサントス市に水上商会合名会社を設立してコーヒーの委託販売を開始し、1937年にはパウリセイア絹織会社を買収するなど、積極的な活動を行なった。これらの活動中、カーザ・バンカリヤ・東山、のちの東山銀行は営農資金貸出（当時、端的に青田貸しと呼ばれていた）と、小口預金の取扱い機関として、日系金融機関の先駆をなしたのである。

一方、ブラジル拓殖組合（ブラ拓）も、1937年、日南産業株式会社が資本金1000万円で日本において設立されるとともに、この会社のブラジルにおける代行機関として営利事業を行なうようになり、カーザ・バンカリヤ・ブラ拓、ブラ拓商事、ブラジル鉱業株式会社、ブラ拓綿花会社、ブラ拓絹糸などがその主要なもので、この他、組合の管理下に、精米工場8、コーヒー精選工場4、線綿工場4、製糖工場1、蚕種製造所2、乾まゆ工場2、製油工場2、抽加工場3、タバコ乾燥場3、製糸工場4、製衣工場4、瓦工場4、煉瓦工場4、農機修理工場9、製材工場4を有していた。このうちカーザ・バンカリヤ・ブラ拓は1937年に設立されて、金融事業を営むようになったので

ある。



カーザ・バンカリア・ブラ拓本店内部

さらに同年、カーザ・バンカリア・海興が設立されて、日系金融店の業績は急激に伸長したのである。

カーザ・バンカリア・ブラ拓の後身である南米銀行が1960年に発行した「南米銀行20年史」によると、これら3つの金融店の業績は下記の通りである。

東山、ブラ拓、海興 3 社の計

年 次	営業所数	資本金と 積立金	預 金	貸付金
1 9 3 0 年	1 5	6 2 0	1 6 . 9 3 2	1 3 . 6 7 2
1 9 3 9 年	1 8	9 6 9	3 0 . 5 8 1	2 5 . 5 2 6
1 9 4 0 年	2 9	1 . 9 5 2	4 4 . 0 9 1	3 5 . 3 8 4
1 9 4 1 年	3 5	3 . 3 0 0	5 8 . 0 0 4	5 0 . 7 5 4

(註：単位 1 0 0 0 クルゼイロ)

このほかに、日系の金融機関としては、ブラスコット金融店があり、その営業権は第 2 次大戦後、住友銀行がブラジルに進出する際に買取っている。海興金融店の営業権はポプラール銀行が継承した。

さらに特筆しなくてはならないのは、東京銀行の前身横浜正金銀行の役割である。同行は為替銀行として、既に 1 9 1 9 年にリオ・デ・ジャネイロに支店を設けて活動していたが、別掲の平生ミッションの訪伯以後、上記の日系金融店の親銀行の役割を果たした。当時の日系金融店の主要な業務はコーヒー、綿花を中心とする営農資金の貸付で

あったが、その資金の供与は、最終的には、横浜正金銀行によって行なわれたのである。

2. 戦後の日系商業

1958年の「コロニア実態調査」は、戦争中の日本移民の地位の向上を、統計的に裏づけている。

この表を見ると、1937年から1947年の10年間に、コーヒー栽培者の全農業者に対する比率は、32, 1%から23, 6%に減り、これとともにコロノとして就労する比率もコーヒー栽培者の46, 2%から16, 4%に減っている。これに対して、自作農の比率は逆に38, 8%から69, 7%に激増しているのである。最も目覚ましい変化は、コロノの労働に頼るコーヒー栽培から自作農、借地農を原則的な営農形態とする棉作農業者と近郊型作物農業者への転出である。

棉作農業者の全農業者に対する比率は1932年の14, 0%から、1937年の39, 0%に達し、戦時中は殆ど移動がなかった。また、近郊型農業者の全農業者に対す

る比率は、1937年の14,5%から1942年の19,9%、1947年は27,5%と激増している。

年代	コーヒー作農業			棉作農家			近郊型作物農家			農業者地位別構成		
	全農家の比率	自作農の比率	借地農の比率	全農家の比率	自作農の比率	借地農の比率	全農家の比率	自作農の比率	借地農の比率	自作農の比率	借地農の比率	コロノの比率
1912	92,6	2,6	91,9	1,2			0,6			5,1	1,9	87,9
1917	76,8	10,1	81,2	4,5	42,0	40,0	4,2	22,2	62,2	16,1	8,7	66,0
1922	52,0	28,3	53,2	12,1	24,4	63,6	10,2	27,7	60,9	28,7	25,2	32,3
1927	62,2	26,9	56,3	11,1	20,6	62,0	11,1	27,4	55,5	26,7	19,7	41,0
1932	59,0	23,8	54,5	14,0	32,4	55,4	13,0	30,9	51,8	27,7	19,9	37,1
1937	32,1	38,8	46,2	39,0	29,1	52,0	14,5	36,0	49,9	35,5	33,1	19,5
1942	24,3	59,7	26,5	39,3	35,8	51,0	19,9	42,0	47,6	44,9	35,8	9,7
1947	23,6	69,7	16,4	31,2	40,4	49,4	27,5	46,4	44,8	51,2	33,9	6,6
1952	27,5	77,2	8,0	20,5	43,8	48,0	34,1	50,7	41,3	58,0	29,6	4,1
1958	28,3	83,1	3,5	8,5	53,6	40,3	42,3	52,7	38,2	64,0	28,4	2,9

年 代 別 農 業 生 産 の 特 色 (%)

これを全農業者の地位別構成で見ると、1937年に35, 5%であった自作農は、42年に44, 9%、1947年には51, 2%と激増し、コロノの比率は1937年の19, 5%から1947年には6, 6%と激減している。また、当時の土地利用の形態は無肥料栽培が多く（とくに奥地）農業者は借地農形態を好んだという事情を、1937年の借地農33, 1%が、1947年になっても33, 9%と殆ど変らない数字が、よく現わしている。

戦時を含んだこの10年間に、現実にあるいは潜在的に、全農業者の90%以上が自作農になったということができるであろう。

戦後の日本移民の商工業進出は、農村経済を基盤とし、そこから余剰資金を汲みあげて作られ、発展したものが多く、一見、農業とは無縁と思われる分野でも、企業の資本構成を仔細に見ると、地方の富農が出資者として名を連ねていることが多いのである。

戦前から継承している日系金融機関で、南米銀行とよい対照をなすものは、東山銀行の場合である。有限会社カーザ・バンカリア・東山は、1943年に早くも精算体制に入ったが、ようやく1951年に精算が解除され、1952年、資本金500万クルゼ

イロで再出発した同社は、1954年に1000万クルゼイロに増資し、名称も株式会社東山銀行とあらためた。1973年、日本の三菱銀行の株式を78,6%に増やし、社名もブラジル三菱銀行と改めて、外資銀行となったのである。

Ⅱ. 日本移民の工業進出

1. 1 手工業からの出発

日本移民の工業進出の場合も、だいたい商業進出同様の経過を辿る。最初から高度の技術と資本を持ち込んだ。ジアスターゼ製造の大河内薬化学研究所のような例外もなかったが、ほとんどが日本人移民を対象とした小規模な家内工業、手工業から出発している。

すなわち、大工、鍛冶屋、家具製造、機械機具修理小工場、ブリキ屋、精米、製油、コーヒー精選、醤油味噌製造、ピンガ製造、日本酒醸造、製菓などがこれである。

斎藤広志著「ブラジルの日系人」の統計によると、1940年においても、工業に従

事する日系人の割合は、3, 0%を示しているに過ぎない、しかし、農業から小規模の工業への移行は、農業から商業への移行より、むしろ容易であったことが認められている。

2. 最初から工業進出を目指したもの

個人の移住者として、最初から、高度の技術と資本を持込んだほとんど唯一の例ともいべきものは、大河内辰夫であろう。北海道大学の農学部農芸化学科を卒業後、1916年にアメリカに渡り、高峰譲吉のもとで研究に従事した大河内は、1923年にブラジルに渡り、1925年にブラジル人と共同で製薬会社を設立した。1927年、独立して大河内薬化学研究所を創立し、当初、家庭常備薬、のち高品位のジアスターゼの製造販売に移った。製品は現在でも、製薬、食品の原料として広い範囲に利用されている。

3. 農業移民から工業進出を目指したもの

日系移民が農業移民に限られたことは、すでに述べた通りであるが、その中には、日

本あるいはブラジルでかなりの技術を身につけた者が混じっていて、技術と資本を蓄積して工業に進出するものが次第に現われてきた。

現在、噴霧機、散粉機の一流メーカーとなっている西村俊治のジャクト農機株式会社の歴史は、日系人の工業進出の一つの典型として興味深い。

京都府立第一工業学校を卒業し、1932年にブラジルに渡った西村は、コロノ、家事使用人と、移民が都会に出るための型通りの経歴を踏んだのち、セブンスディ・アドベンチストの経営になる学校で1年間学び、サンパウロのある工場で職工となる。ついで、友人と共同で機械の修理工場を営み、1939年に、当時の開拓前線であったポンペイアで、修理工場を開いた。その時の看板は「よろず修理引受けます」というものであった。西村は、農具、馬具の修理製作はもとより、バケツ、ピストルの修理、空き缶利用の水呑みなどの製作など、文字通り、よろず製造修理引受け所として営業し、蓄積した資金で溶接機を購入した。戦争中、工業製品の輸入が停止したこと、サンパウロから遠隔の地であったことから、製材所、精綿所の機械、自動車部品の修理、製造などが西村の修理所に舞込み、彼はその好況を利用して、工作機械を買込み、事業を拡大して

いったのである。

このタイプに属するものとしては、鋳物、ボール盤製造の宿屋商工、自動車部品製造の加藤精機、洗濯機メーカーの一色機械製作所及び児玉洗濯機械、製紙機械メーカーの池森機械製作所などがある。

4. 農業部門、商業部門からの工業進出

a. 戦前の工業進出

その一つは蚕種業である。代表としてブラ拓製糸の場合を見よう。

ブラ拓は1930年代の始めから、バストス、チェテ、アリアンサの3移住地の入植者に対して養蚕を奨励した。戦前、生糸は、茶と並んで日本の主要輸出品の一つであり、日本からの移住者の中にも、養蚕の経験者が多かったこと、営農の多様化をブラ拓が奨励したことによる。1932年、ブラ拓は日本から上田平吉技師を呼び、蚕種製造所を設置した。1940年、バストス、チェテの両工場はブラ拓製糸有限公司として独立した。

しかし、第2次大戦時には敵性資産として工場がブラジル側に管理されたり、戦後は生糸の相場が暴落するなど多難な時期を迎えたこともあったが、1960年代から本格的な軌道にのった。その後、ブラ拓は日本から優良品種を導入し、新式機械、技術も導入し、生糸の改良とコストの削減を図って、国内市場はもとより、日本、台湾、ヨーロッパまで製品を輸出するに至っている。

農業からの工業進出で、もう一つ特筆すべきものは製茶業である。

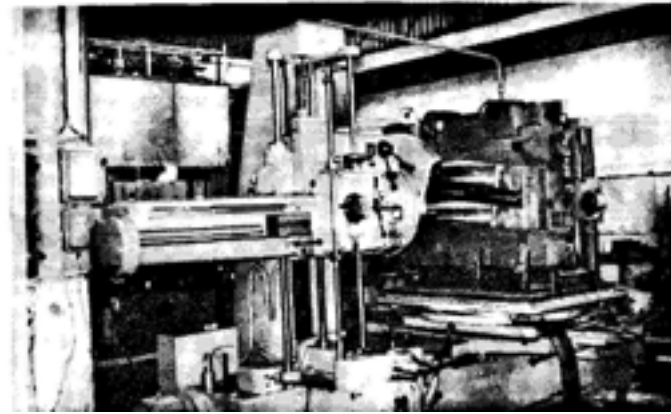
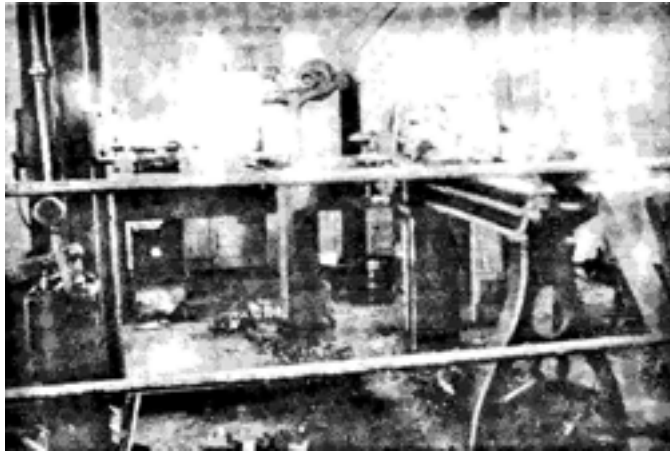
レジストロの岡本寅蔵が、サンパウロ近郊の中国種の種を入手したのが1922年、これから2000本ほどの苗を得て、1934年頃までには80アルケール（約195ha）の茶園を造成した。

これを基盤に製茶が開始されたのは1929年頃で、始めは緑茶、後に紅茶の製造に進んだ。1934年にはレジストロ周辺で約17の工場が操業していたといわれる。技術的にも足もみから、半鉄半木製の揉捻機、鋳物製の揉捻機へ、その他の機械も、ドラム缶利用が自動乾燥機へ、さらには大型萎凋機の導入へと進み、燃料も薪から重油、さらには電力へと発展した。この間、次第に資本の集中がおこなわれ、現在ではシャ・

リベイラの岡本寅蔵、コチア産業組合のシャ・ツピー、山本スタンダード商会のテnder・リーフが日系の大手製茶業者で、リブトンがジェシー・レーヴェル社から発売されている他は、ほとんど日系業者の独占となっている。

中尾熊喜によると、ブラジル農業で施肥が始まったのは、1917年にサンパウロ市近郊コチア方面の日本人ジャガイモ栽培者が、オザスコ市のコンチネンタル・プロダクト社から屠殺の残りを買入れて使用したものが始まりで、そののち15年間は、日本人の需要が、国産、輸入の肥料の需要の全てであったという。1930年、カナカオ肥料会社が骨粉、ニカワ製造を始めたのが日系人の肥料生産の始めで、当時、年産ニカワ200トン、骨粉3000トンは1工場としてはブラジル最大の規模であった。同社は1940年にジャグアレー肥料株式会社に改組された。

これに続いては、1940年に池田骨粉工場が年産1000トンの骨粉の製造を開始している。



加藤精密工業の工場内設備、左は1932年時、右は1968年時

1945年、海興の支配人であった竹中儀助が開店したアルマゼン・パウリセイアは、海興の業務を継承し、1954年には株式会社竹中商店と改組し、肥料の配給と販売を行なうようになっている。

商業からの工業部門への投資も、戦争中から開始されている。羽瀬作良はサントス付近にある低品質のテングサを原料として寒天の製造を行ない、またハッカの精製に乗出

し、1944年には栗津幾太郎とともに、インプレラ時計会社を設立した。寒天は戦後優良品の輸入開始とともに中止され、ハッカ精製工場も戦後のハッカの価格暴落とともに閉鎖されたが、インプレラ時計会社は、後に日本のセイコー社と合併で、ブラスセイコーを設立してブラジルでは先駆的な時計製造会社となった。会社は、戦中、もっぱら鳩時計を製作したが、その理由は、ゼンマイの原料である鋼の輸入が途絶したため、ゼンマイを必要としない鳩時計を選んだというのは、ブラジルの当時の工業水準を物語っている。

また、日系人を顧客としていた日本酒の醸造所を始めた東山農牧工業（1934年設立）、味噌・醤油の中矢父子商会（1930年設立）中矢合資会社（1949年設立）などは、戦後、日本食ブームに乗ってブラジル人にも販路を広げるに至る。

この他、平生使節団の影響によって行なわれた、主として綿の買付けに関連の繰綿工場、綿実製油工場などがある。

b. 戦後の工業進出

日系人の凍結資産が解除された時、旧持主に戻ってきた資産は驚くほど少なくなっていた。商品は売食いし、預金はインフレで目減りしていたからである。しかし、反面、凍結中の不動産の値上りで思わぬ利益を得た場合もあった。例えば、東山銀行の資産が凍結解除された時、不動産の一部を処分して資本を充実したという事実がある。

総じて工業関係者は、日本からの直接投資によるものを除く他、凍結の影響はあまり大きくなかったようであるが、それでも資産の一部あるいは全部の没収におびえなくてはならない戦後の5年間の足かせが無くなったことは、日系人の工業部門の発達に、大きく寄与したといえることができるであろう。あたかも1956年、ジュッセルノー・クビチェック大統領が「50年間で5年で」というスローガンで、急速な工業化政策をとったため、日系人の工業進出も、これにつれて盛んになったといえることができる。

例えば、農産物仲買商、貿易商の山本勝造は、1958年、日本からの佐渡島金属と合併で特殊電球の製造会社サドキン電球株式会社を設立し、1967年からは東北ブラジルのレシーフェに電球を製造するサドキン・ノルデステを設立している。

これも、農産物仲買商の田中義数は、日本から機械、技術を導入して、1964年、段ボールの製造会社パペロツキ商工株式会社を設立した。

両者とも、自己資本だけでなく、現地の日系の資金を資本に導入していることが特徴である。

また、趣味のラジオ製作から出発、1960年代からのモータリゼーション普及で成功を収めたカー・ラジオのモトラジオ商工、自動車部品の中田商工、建設業の山懸建設なども、異色の戦後工業進出組である。

農業資本から工業へのもっとも顕著な例はサンスイ・プラスチック工業株式会社であろう。1966年、主としてジャガイモの大手栽培者の出資によって、プラスチックの農業用製品の製造から始めた同社は、現在ではプラスチック・サイロ、倉庫、テントなどの大手メーカーとして、業界の首位を占める会社となっている。

食品業界では、1961年にパウリスタ延長線を中心に農産物の仲買を行っていた3人の商人によって始められたパカエンブ製油株式会社、及びこれも農産物仲買商がグアララペスに設立し、その後、トーメンが継承したメヌー印の食用油メーカーのトーメ

ン製油などが業界屈指の企業に育っている。

しかし、ここに挙げた各社は、いずれも、やや著しい特色を有する企業として列举したに過ぎず、商業部門と同じく、日系人の工業進出は、地場産業に関する限り、枚挙にいとまがない状況となっている。さらに、農業人口の工業進出は、戦後一貫した傾向となっている。1958年の「コロニア実態調査」では、工業の就業人口は全体の7, 2%に過ぎないが、1988年の「日系人口調査」統計では15, 8%に達している。これは日系人の農業離れとしてとらえることも、もちろん可能であるが、ブラジル人全体の農業人口の減少と、第2次、第3次産業の増加と同一の傾向を辿っていると見るべきものであろう。

戦後、ブラジルが工業化政策をとるに至り、それにつれて、工業技術移民の途が開けることとなった。これに対応して、日本側も移住行政の一環として、この問題を取り上げるに至ったのである。

5. 戦後の技術移民が果たした役割

1953年、リオ・デ・ジャネイロ州のガスパリアン紡績工場へ、16名の技術者が移住就職したのが技術移住の始めである。

ついで、1957年、名古屋の豊和工業株式会社が、サンパウロ州モジ・ダス・クルーゼス市に紡績機械工場を設立し、同工場への技術移住者の募集を日本海外協会連合会（海協連）に依頼してきた。相次いで的大量の求人を受理した海協連では、技術移住の推進をはかる目的で、「工業移住課」を新設し、本格的な斡旋業務に乗出したのである。

1956年、サンパウロ市に設置されたJAMICを通じて、海協連はサンパウロ市及びその周辺の企業200社を対象として、求人開拓を開始した。その結果、13社219人の求人を受け、第1回生として、5社向け32人を募集した。

この趨勢をいちはやくとらえたのは、元外交官でサンパウロ総領事を勤めたことのある内山岩太郎である。内山はブラジル在任当時、日本からの移住者が、ブラジルの国内

において、生活習慣、言語の相違から辛酸をなめていたことを見て、移住者の教育訓練の必要性を痛感したといわれる。1962年当時、県知事の職にあったが、神奈川県県立秦野高等職業訓練学校に工業技術移住課を設け、全国から訓練生を募集して、工業技術者の移住を促進することとした。

一般に「秦野生」と呼ばれているこの訓練学校卒業生の移住者は、その後18年間に310人に達し、全工業移住者の約4分の1を占めることになった。1978年、この施設は県立横浜高等職業訓練学校に移されたが、1980年、新外国人法の施行の年、ブラジル側の移住政策の転換により、工業移住者の受入れが停止されたのを機会に、同年9月末に閉鎖されている。

この訓練生は、機械工、仕上工を主体とする技能者で、地場資本、進出企業、純ブラジル企業、外資企業など各方面に就職し、のち企業の幹部、中堅の職員、あるいは独立の経営者となっている者が多い。

戦後の農業移住が急速に衰える1960年代の後半から、逆に工業技術移住者は増えてくる。

日本からの進出企業が増加したことも主な原因だが、既に海外移住が単なる労働力の移動ではなくなった時代に入ったからである。この情勢に対応するため、1966年、海外移住事業団（JAPAN EMIGRATION SERVICE）運営によるサンパウロ技術センター（後の工業移住センター）が設立され、工業移住あっせん態勢が拡充される。

1974年8月、海外移住事業団の業務は新たに設立された国際協力事業団（JICA／JAPAN INTERNATIONAL COOPERATION AGENCY）に引継がれる。工業技術移住はJICAの現地法人であるJAMIC移植民会社、JEMIS金融会社により従前通り続けられた。

ところがブラジル政府の要求で、1981年9月、JAMIC、JEMISは解散を余儀なくされ、工業技術移住も受け皿がないまま、一旦中絶してしまう。これに関しては1985年、ブラジル在住日本人工業技術移住者によって結成されている工業移住者協会が、ブラジル政府により技術移住者導入業務の代行機関として認められ、細々ながらも工業移住のルートはつながって、今日に至っている。

現在、新規の工業技術者の移住はごく少ないが、戦後2000名近くの技術移住者が日系工業界及びブラジル工業界の発展に果たした役割は決して小さくはない。技術移住でもうひとつ見逃せないのは産業開発青年隊である。が、これについては戦後移住史に述べられているので、ここでは省略する。

Ⅲ．進 出 企 業

1．戦前の進出企業

戦前の進出企業としては、まず初期の藤崎商会、蜂谷商会のような雑貨を取扱った商店があげられるが、これについては商業の項で述べているので本章では省略する。

この2つの商店の例を除くと、戦前のブラジル進出企業は①日本政府の国策に基いた移植民事業会社と②純粋な企業進出を試みた民間会社、及び③第2次世界大戦前にブラジルに進出、大量の綿花を買付けて日本に送った日本の商社に分けられる。どの系統の

企業も日本移民や日本移民の集団である日系社会と深いかかわり合いを持ったことは同じであるが、性格はかなり異なっている。以下、3つの系統の企業を概観してみる。

a. 国策に基づいた移植民事業会社

この系統に属するものとしては、移民会社が合併してできた海外興業株式会社（海興1917年設立）、各県単位の海外移住組合が連合してつくった海外移住組合連合会とそのブラジル法人、有限会社ブラジル拓殖組合（ブラ拓－1929年設立）があげられる。

また北伯アマゾンのアマゾンニア産業会社アマゾン興業会社などもこの仲間に入る。これらの会社はいずれも日本政府の援助や協力指導の下に発足した移植民事業会社で、民間企業が参入したケースもあったが、全体としては官民による国策会社である。

更に、直接の移植民業務ではないが、間接的に移植民事業と密接な関係にあった、横浜正金銀行や移民を運んだ大阪商船もこのカテゴリーに属している。

横浜正金銀行（現在の東京銀行）は1919年リオ・デ・ジャネイロに支店を開設、

日本移民の郷里送金や日本からのブラジル送金、貿易決済に大きな役割を果たしたし、大阪商船は1920年、日本政府よりの受託命令で、移民を運ぶための南米定期航路を開設、1941年まで移民船を運航している。

以上の移植民事業会社のうち、代表的な例としてブラ拓をとり上げ、かんたんに紹介する。

ブラ拓はバストス、チエテ、トレス・バラス（現アサイ）、アリアンサ（最初は信濃、鳥取、富山の各県海外移住協会の直営であったが、後にブラ拓が肩代りした）に直営移住地を経営し、日本からの入植者に分譲した。ブラ拓の母体である海外移住組合連合会は海外発展を目指した日本の国策会社であり、移住地買付けの土地代は政府の貸付金でまかなった。移住地はブラジルとは限らなかったが、ブラジルが主だった。

ブラ拓の移住地には産業施設として、精米所、精綿工場、コーヒー精選工場、製材所、煉瓦製造所、発電所、農事試験所、日用品販売所などを設置した。また公共施設として診療所、薬局、学校などもつくっている。

ブラ拓の移住地経営は試行錯誤をくり返しながらも順調に進むが、海外移住地での各

種事業を行うため、1937年、日本政府は今までの移住組合連合会を改組し、新たな国策会社として日南産業株式会社を発足させる。

これは従来のように移住地経営一本槍ではなく、他の産業分野にも積極的に進出しようというもの。その第1号が後の南米銀行となる、カーザ・バンカリア・ブラタクであり、続いてブラ拓商事、ブラ拓鉱業、ブラ拓綿花、ブラ拓建築、ブラ拓製糸などができる。

b. 純粋な民間企業の進出

このタイプは①のような、日本政府の移住振興政策にのっとった会社の進出ではなく、純民間の営利事業として植民地建設を目指した企業である。

これには東山農事会社のブラジル事業体であるカーザ東山（1927年）、野村合名会社海外事業部の野村南米農場（1926年）、関西川西財閥投資の日伯拓殖バーラマンサ農場などがある。この系列の進出企業は、殖産を目的とした純粋な利潤追求の企業体として進出したところに特徴があり、移植民事業には関係せず、自己の農場の労働者

には主として現地からブラジル人を雇用した。

カーザ東山に例をとって説明すると、カーザ東山の母体である東山農事株式会社は1919年設立された、農業、牧畜を目的とした日本最初の海外投資会社である。ブラジル以外でも台湾、朝鮮、南洋地域でも開発事業を行っている。三菱財閥の当主、岩崎文弥個人の出資経営である。

ブラジルではカンピーナスに東山農場を開設した（1927年）のを手はじめに、サントスの水上商会合名会社（1928）、カーザ・バンカリア東山（1933）、東山農産加工会社（1934）、東山絹織有限会社（1937）、東山鉄工所（1937）などを開設した。

C. 綿花買付商社の進出

1936年以降、日本商社によるブラジル綿花買付ブームがはじまり、日米開戦の1941年まで続く。この時の綿ブームは、原料確保を目指した日本政府と綿業界、余

剩綿花の輸出先 を求めたブラジル政府、棉作者である日本移民の経済的利害関係が一致してブームを現出 している。これは珍しい現象で、こういう例は後にも先にもない。少し詳しく見てみよう

〈経済使節団の来伯〉

戦前の日伯経済交流の中で、日本にとっても、ブラジルにとっても、またブラジルの日本移民にとっても大きな影響を与えたのは、1935年日本より来伯した経済使節団（平生釰三郎団長）だった。この使節団は表面的には日本商工会議所派遣の民間使節団になっていたが、実際は日本政府派遣の綿花買付使節団だったのである。

サンパウロ州内の棉作は、1917年ごろから奥ソロカバナを中心に栽培されていたが、数量的には微々たるものだった。しかし、1930年、ブラジル政府が実施したコーヒー樹新植禁止令で、代替作物としての棉作が急速に拡大、コーヒーを植えられない日本移民の棉作者も急増する。

サンパウロ州における生産高は1931年の1万7千トから1934年には9万トに増える。州内紡績業の需要量は約4万5千トであるから残り半分は輸出に振り向けねば

ならず、ブラジル政府としても輸出先の開拓に迫られていた。

一方、日本側ではそれまで主としてアメリカ綿、インド綿を大量に輸入して紡績用に使っていたが、米、英との仲が次第に陰悪になるにつれ、アメリカ、インド以外からの原綿買付が重大問題になってくる。サンパウロ州産の精綿60梱がはじめて日本にサンプル輸出されたのは1934年である。

こうした情勢の中で、ブラジル綿花買付を主目的とする経済使節団が来伯、大きな成果をあげる。使節団の来伯した1935年の綿花対日輸出量2487トンは、翌1936年には40.686トンと飛躍的な伸長率を示す。(表1及2)

1930年代になって、サンパウロ州の棉作がふえ出すと、アンダーソン・クレイトン、サンブラ、マックファーデンなど、世界的な綿業商社がサンパウロ奥地へ進出、繰綿工場をつくって綿花の買付にのり出す。イタリア系ブラジル財閥マタラーゾも負けじとのり出すようになる。

日本の商社で一番早かったのは日伯綿花社で1936年の進出、ついで経済使節団の報告に刺激された商社がどっと進出する。1937年には東洋綿花、日本綿花、三井物

産が、1938年には兼松、伊藤忠も参加して、サンパウロ州奥地で華々しい綿の買付合戦が展開される。

ブラジル綿花の飛躍的な対日輸出増大は、綿花の主要生産者である日本移民にも歓迎された。日本移民のつくる綿はほとんど日本の商社に持込まれた。

1939年における、サンパウロ州各地方別日系棉作農家の実績は（表2）の通りで、サンパウロ州の実棉生産総量の50％に達している。綿花の生産と対日輸出は、1941年末の日米開戦まで好調を続ける。

1942年以降は日米の開戦で、ブラジルからの対日輸出はまったく途絶えるが、棉景気そのものは相変らず続き、日本移民棉作農家は当初、日本政府関係者が予想したような、経済的困難には陥らなかった。

表 1 の 1 . ブラジル綿花日本輸入数量と価格調 (単位 1 . 0 0 0 円)

年別	数 量 (k g)	価 格 (円)
1 9 3 3	7 9 . 5 5 2	6 1 . 8 7 3
1 9 3 4	1 . 6 5 3 . 6 5 4	1 . 2 6 9 . 7 7 3
1 9 3 5	2 . 4 8 7 . 2 7 4	3 . 0 0 5 . 4 3 1
1 9 3 6	4 0 . 6 8 6 . 0 7 7	4 2 . 7 2 4 . 0 7 0
1 9 3 7	5 1 . 4 5 5 . 3 3 0	4 7 . 8 9 0 . 1 2 2

資料 . 「中南米地方に対する移住奨励方針に関する件」別表 7

表 1 の 2 . 対日貿易額（単位 1 . 0 0 0 円） 1 9 3 1 ～ 4 1 年

年別	日本へ	日本から
1 9 3 1	4 5 3	6 4 2
1 9 3 2	7 5 4	1 . 3 3 0
1 9 3 3	1 . 0 0 8	2 . 7 6 6
1 9 3 4	3 . 2 9 2	3 . 0 6 5
1 9 3 5	4 . 0 0 6	5 . 9 2 6
1 9 3 6	4 7 . 3 5 2	8 . 8 4 0
1 9 3 7	6 2 . 8 1 0	1 7 . 3 0 5
1 9 3 8	4 6 . 1 7 4 ‘	1 0 . 3 8 8
1 9 3 9	7 4 . 6 6 2	1 5 . 6 0 9
1 9 4 0	6 8 . 0 9 5	2 2 . 9 4 5
1 9 4 1	9 5 . 8 0 5	1 4 . 4 3 3

資料． 1 9 3 1 ～ 3 9 年 帝国統計年鑑（第 5 1 . 5 4 . 5 9 回）。 1 9 4 0 ～ 4 1 年 外務省
記録より作成

表 2. 日系棉作者の栽培面積と生産量

地 帯 面 積 (アルケール) (実棉生産量 (1 0 0 0 アローバ))

モジアナ沿線	1 3 . 1 1 0	1 . 9 6 6
パウリスタ沿線	5 9 . 3 3 0	8 . 8 9 9
ソロカバナ沿線	4 8 . 5 8 9	7 . 2 8 8
ドーラデンセ線	1 2 . 5 7 8	1 . 8 8 6
アララクワラ線	1 9 . 3 4 0	2 . 9 0 1
ゴヤース線	5 1 8	7 7
ノロエステ沿線	2 0 . 8 3 2	3 . 1 2 4
その他	8 4 4	1 2 6
計	1 7 5 . 1 3 9	2 6 . 2 7 0

耕作世帯数 3 2 . 0 0 0 世帯

サンパウロ州耕作世帯の	4 0 %
サンパウロ州棉作地の	3 8 %
サンパウロ州実綿生産総量の	5 0 %
ブラジル全生産量の	2 8 %

以上、戦前の日本よりの進出企業を概観した。ブラ拓のような移植民事業と企業体、カーザ東山のような民間企業、綿花買付商社と形態の違いはあるが、共通しているのは、日本の進出企業は日本移民と深いかかわりを持っていたということである。したがって戦前の進出企業は、移民を運んだ大阪商船、郷里送金、貿易決済などの窓口となった横浜正金銀行を含め、すべての企業が「移民関連企業」だったのである。

2. 戦後の進出企業

a. 初期の進出企業と日系コロニア

戦後、日伯の貿易のはじまったのは以外に早く、既に1948年には3国間貿易を通じ、僅かではあるが綿花、ひまし油、雲母などが日本に輸出されている。1949年には在日本GHQ（連合軍総司令部）経済局とブラジル政府間に貿易支払い暫定協定が結ばれ、1950年以降、ようやく日伯の直接貿易が再開される。

1951年のサンフランシスコ講和条約調印後は日本商社の海外支店も認められるよう

になり、商社の海外進出が本格化する。ブラジルとは1952年9月に日伯通商協定が結ばれ、日伯貿易の軌道が敷かれる。1948年から60年まで日伯貿易実績は（表3）の通り。

表 3. ブラジルの対日本貿易表 (単位 1 0 0 0)

年別	輸出 F O B	輸入 C I F	合 計
1 9 1 8	8 7 5	2 8	9 0 3
1 9	1 . 9 2 5	1 3 7	2 . 0 6 2
5 0	1 0 . 8 4 7	1 . 2 8 7	1 2 . 1 3 4
5 1	1 6 . 4 5 0	2 1 . 0 5 2	3 7 . 5 0 2
5 2	1 8 . 9 7 8	1 5 . 8 2 3	3 4 . 8 0 1
5 3	4 0 . 8 1 2	1 1 . 4 3 4	5 1 . 9 1 6
5 4	6 8 . 3 1 5	7 9 . 1 5 6	1 4 7 . 4 7 1
5 5	5 6 . 2 1 4	4 5 . 0 8 0	1 0 1 . 2 9 4
5 6	3 1 . 1 7 2	4 9 . 9 6 7	8 7 . 1 3 9
5 7	3 7 . 4 7 0	2 3 . 2 4 5	6 0 . 7 1 5
5 8	2 2 . 6 9 0	4 1 . 8 7 4	6 4 . 5 6 4
5 9	3 6 . 3 5 6	3 7 . 3 5 3	7 3 . 7 0 9
6 0 年 6 月 未	7 . 5 5 2	2 6 . 2 2 4	3 3 . 7 7 6
計	3 6 5 . 6 5 6	3 5 2 . 3 6 0	

資料. 各年伯国政府統計による

ブラジルへ進出した日本企業も当初はほとんどが商社ばかりで、主な会社を年代別に挙げると以下のようなになる。

1951年兼松江商、52年野村貿易、54年第一物産（三井物産）、55年目綿実業、丸紅、三菱商事、56年日商岩井、57年伊藤忠、東洋綿花。

一方、ブラジルの日系コロニア企業も、戦時下の資産凍結令の解除もあって、徐々に活動を開始、1951年5月にはブラジル日本商工会議所を再開、会頭に宮坂国人が就任する。

この商業会議所は、1962年、現在のブラジル日本商工会議所に改称する。

日本から商社が進出した当時、日本の商社やコロニアの貿易商社が輸入した商品は日本製食料飲料、織物、布地製品、紙製品、用紙、医薬品、化学薬品、化学合成品、金属製品、陶器などで（表4）、ほとんどが日系社会で要求され、消費されるものばかりであった。

表 4 . 伯国の対日輸入内訳 (単位 1 0 0 0 ドル)

商 品 類 別	1 9 5 7 年	1 9 5 8 年
食 料、飲 料	6 7	4 5 9
原 材 料	7 3 1	1 . 0 2 4
ミネラル・ワックス	6 1 9	9 1 6
パラフィン	0	9 1 6
薬 材 化 学 品	3 . 2 1 2	2 . 6 3 4
参加 チ タ ン	4 2 2	
炭 酸 ソ ー ダ	4 4	2 9 8
尿 素 肥 料	1 . 0 9 3	5
繊 維 品	9 0 0	6 7 9
非 金 属 陶 器	7 8 6	1 . 2 1 7
金 属 製 品	6 . 8 0 5	1 4 . 1 7 6
機 械	0 . 6 1 9	1 9 . 2 6 4
内 燃 機 関	3 6 6	3 2 7
繊 維 機 械	3 9 7	1 . 5 7 9
シ ン 機	6 6 0	8 3 0
ボールベアリング	8 8 8	3 0 3
電 機 々 械	1 . 8 2 8	1 . 9 0 4
発 電 機	1 5	6 2
無 電 機	8 2 8	8 0 3

真	空				管	4 2 2					4 9 6				
鉄	道		車		輛	1 . 3 5 1					6 . 4 2 1				
自	動	車	及	部	品	2 4 9									
軍					艦	2 . 8 1 5					2 . 9 5 8				
光	学		機		械	3 5 6					9 8 8				
カ	メ	ラ、	医	療	機	1 0 1					2 4 4				
玩	具				類	6 4					1 2 8				
鉄					鋼	5 . 0 1 2					1 0 . 6 5 2				
銅					板	7 6 0					2 . 2 1 7				
ブ	リ		キ			2 . 8 9 2					2 . 3 4 0				
鉄	板		線		材	1 . 2 2 1					4 7 7				
鉄					鋼	6 3 7					4 0 3				
ア	ル	ミ	地	金		1 0 1					1 . 9 8 6				
工	具				類	3 8 2					4 0 8				
合	計					2 4 . 9 8 9					4 1 . 8 7 4				

表 5 . 伯国の対日輸出内訳（単位 1 0 0 0 ドル）

商品別	1 9 5 7 年	1 9 5 8 年
砂 糖		6 . 7 6 4
コーヒー豆	1 . 7 6 2	1 . 5 7 9
ココア豆	1 . 5 4 9	4 3 5
ココバター	7 6 8	5 6 3
大豆		3 . 4 7 1
羊毛	9 . 7 8 4	
綿 花	2 3 . 2 1 0	1 2 . 5 2 4
鉄 鉱 石	4 . 4 8 5	1 . 2 2 9
銑 鉄	2 . 5 6 3	
合 計	4 4 . 9 9 0	2 7 . 1 0 1

資料．ブラジル貿易統計内訳表及び日本通産省貿易統計年表による。

参考：サンパウロ新聞年鑑 1 9 5 8 年度、ブラジル経済情報特別号。

また、ブラジルからの対日輸出も依然として綿花をはじめとし、砂糖、羊毛などの買付が主力をなしていた。これらの輸出商品買付にはコロニアの日系商社が全面的に協力

したから、戦後においても、初期の日伯貿易は日系コロニアを基盤にしていたということができる。

しかし、日伯の貿易はブラジル側の度重なる経済政策の改変により、1954年をピークに縮小をはじめめる。日本側商社はこの打開策として、1955年1月、ブラジル政府が発令したSUMOC（通貨管理局）指令第113号の無為替輸入制度を積極的に利用する。これはブラジル政府が外貨導入を認めたもの。

積極的な外貨導入政策はクビチェック大統領の就任で一層拍車がかかった。1956年1月、大統領に就任したジュセリーノ・クビチェックは“50年を5年で”のスローガンを掲げ、壮大な開発計画と工業化政策を推進した。外資を導入して、自動車工業をはじめ製鉄、化学工業、電源開発、幹線道路の建設など、大きなプロジェクトが次々に打出され、外資との提携によって実行に移された。

クビチェックの外資導入政策には各国と共に、日本も参加する。当時日本では第3次鳩山内閣が成立、日ソ国交回復、国連加盟決定など、国際信用の回復期にあり、海外投資を行う下地ができていたのである。

外資導入に伴う無為替輸入許可のおかげで1960年までに多くの工業が日本から進出、資本を投下した。1960年の日本進出企業（工業）の会社名と資本金は（表6）の通りである。

表6．日本進出企業資本表（単位1千クルゼイロ）

石川島造船	650.000
長岡商工	10.000
新潟鉄工	10.000
味の素	7.000
豊和工業	198.000
ヤンマーダイゼル	20.000
倉敷紡績	200.000
佐渡島金属	4.000
日商農工	30.000
丸栄陶器	22.000
西沢ミシン	21.000
麻生産業	54.000
海外機械興発	13.200
日本冷凍	35.000
日本特殊陶業	12.000

大 洋 漁 業	7 0 . 0 0 0
久 保 田 鉄 工	1 5 0 . 0 0 0
三 洋 毛 織	1 0 . 0 0 0
ト ヨ タ 自 動 車	1 7 1 . 0 0 0
都 築 紡 績	3 0 . 0 0 0
ウジミナス製鉄	3 . 2 0 0 . 0 0 0
大 日 本 紡	3 0 0 . 0 0 0
鐘 紡	1 5 0 . 0 0 0
計	5 . 5 0 9 . 4 0 0
東 洋 紡	1 7 3 . 0 0 0
パイロット万年筆	1 4 . 5 0 0

(2 . 7 5 0 万ドル)

資料．邦字新聞及び日本商工会議所資料。

日本企業のブラジル投資は、沈滞気味だった商社の貿易活動を活性化する。外資導入に伴う、プラント、機械、資材、部品が商社を通じ、大量に輸入されたからである。この無為替輸入は無制限に認められていたわけではない。ブラジル政府はブラジルに進出した工業が使用するプラント、機械、資材、部品などの国産化を義務づけていた。しかし、国産化体制が完了するまではやむを得ず輸入を認めるとの方針をとったのであ

る。

このように戦後の日本からの企業進出はまず総合商社が進出、その後無為替輸入の恩典を利用したメーカーの進出が行われるが、メーカーの進出は商社の仲介によるところが大きい。その商社の大半と一部メーカーには進出当初、日系コロニアの企業が代理店として全面協力したし、更に原料、資材、労務の提供源として日系コロニアの果たした役割は大きかった。戦後初期における日本企業の進出は商社であれメーカーであれ、日系コロニアを足がかりにしていたのである。

日本の進出企業は概して規模も小さく、また他国企業との合併を好まなかった。このため、ブラジル法人として独立してはいても、日本の本社の1支店、1工場の立場にあり、日本よりの直接指示で運営されることが特徴である。

この中での例外は日伯合併のウジミナス製鉄所で、資本金40億クルゼイロ（日本側16億、ブラジル側24億）年産銑鉄50万ト、当時としては巨大プロジェクトだった。1957年日伯両国の調印式が行われ、58年会社発足、第1号高炉の火入れは1962年10月である。

1961年、ジャニオ・クアドロスは史上最高の得票数で大統領に就任したが、7ヵ月後に突如辞任、ジョン・ゴラルが代った。ゴラルの大統領就任以降、政治的、経済的混乱が続き、インフレは悪化、社会不安は高まる。

1964年3月31日、軍部がゴラル政権追放を叫んでクーデターを起し、軍事政権を樹立する。政府は軍政令を発令して多数の政治家、議員の追放及び参政権の剥奪をする。

1964年4月15日、国会はウンベルト・カステーロ・ブランコ将軍を新大統領に選出、ここに軍事政権がはじまる。新政権はインフレ抑制の措置として、国民総生産を減ずることなく、財政緊縮政策を採用した。これは次のコスタ・エ・シルバ政権にも踏襲され、経済成長に著しい成果を挙げ、ブラジルの奇跡”につながる。

カステーロ・ブランコ大統領はロベルト・カンボス企画相とオタビオ・ブリヨンエス蔵相を起用して財政の建直しをはじめる。カンボスの計画は1965～67年の3ヵ年以内にインフレを抑制、国際収支を改善、雇用政策を再建して地域格差の是正をはかるというもの。

そのために対米関係を修復し、外資導入をはかり、金融を引締め、賃金を抑え、漸進的なインフレの抑制と経済成長を両立させようとした。この政策は奏効し、インフレ率は66年に38, 5%に落ち、経済成長も回復する。カンボスはこの時に外資優遇策を打出し、外国資本を国家資本、国内民間資本と共にブラジル経済を支える3本の柱のひとつとする基本政策を確立した。

つづくコスタ・エ・シルバ及びエミリオ・メジシ両大統領の時代、デルフィン・ネット蔵相、レイス・ペローゾ企画相の下で“ブラジルの奇跡”と呼ばれた経済の高度成長が実現する。また“世界で一番長い橋”と呼ばれた、日伯経済関係の緊密化が行われたのもこの時代である。

b. 起るブラジル進出ブーム

1970年代に入ると、脳出血で倒れたコスタ・エ・シルバ大統領に代って、エミリオ・ガラスタス・メジン将軍が就任、第3次軍事政権を担当することになった。その頃には中・長期開発計画も完成されており、第1次国家開発計画が実施に移され、電力を

はじめ基幹産業の開発が積極的に進められていた。とくに E M B R A T E L（ブラジル通信公社）による大陸横断マイクロ・ウェーブ幹線架設工事と人工衛星地上局が日本始め世界の有力メーカーによる国際入札で順調に進み、国内通信の総合開発が進められた。

1974年3月、メジシ大統領に代りエルネスト・ガイゼル将軍が選ばれる。ガイゼルは蔵相にヴァルガス経営大学のエンリッケ・シモンセン教授を迎え、オイル・ショックの難問題を担当させる。

1970年代（1970～1979年）の日伯経済交流の主なものは次のとおりである。

1970年＝愛知外相一行来伯。第2回目伯政府間定期協議会東京で開催。日本側団長：愛知外相、伯国側団長：バルポーザ外相。

1971年＝日伯技術協力基本協定発行。土光ミッション（土光敏夫東芝社長）外21名来伯。

1972年＝ブラジル経済使節団（団長：レイス・ペローゾ企画相）一行訪日。ブラジ

ル経済使節団（団長：デルフィン・ネット蔵相）一行80名訪日。経団連ブラジル使節団（団長：植村会長）外31名来伯。大蔵省主任企画調査団（団長：中山日本興業銀行頭取）来伯。

1973年＝中小企業海外投資調査団（団長：高橋尚ジェトロ理事外15名）来伯。サンパウロ州官民合同経済使節団（団長：ミゲール・コラスオノ州企画長官一行30名）訪日。中南米投資調査団（団長：伊部住友銀行副頭取一行）来伯。大阪商工会議所使節団（団長：市川忍丸紅会長）一行来伯。日本生産性本部使節団（団長：砂野川崎重工社長）一行来伯。

ジェトロ主催「日本産業見本市」サンパウロ・アニエンピーで開催、藤山元外相が見本市特使として来伯。澄田日本輸出入銀行総裁一行来伯。海外鉱業使節団一行来伯。大来経済協力基金総裁来伯。自民党海外経済協力委員会（団長：田中委員長）一行来伯。デルフィン・ネット蔵相訪日。パッサリンニョ教育文化相訪日。日本自動車部品ミッション来伯。プラチーニ・モラエス商工相訪日。

、1974年＝土光経団連副会長来伯。通産省「企画実態調査団」一行来伯。中部生産

性本部南米経済使節団（団長：岩田日本陶器社長）一行来伯。

第1回「日伯民間経済合同委員会」リオ・デ・ジャネイロにて開催、日本側：平井富三郎経団連日伯経済委員長ほか52名、伯国側：トーマス・ポンペウ・デ・ソウザ・ブラジル工業連盟会長ほか38名。

田中角栄総理一行来伯。ディアス・レイテ鉱山動力相訪日。マルシオ連邦下院議長訪日。

第11回日本産業見本市船「さくら丸」リオ・デ・ジャネイロ港にて展示。

1975年＝名古屋商工会議所経済使節団（団長：三宅会頭）一行来伯。対ブラジル貿易促進使節団（団長：山下英明前通産次官）一行来伯。ラプラタ経済使節団（団長：永野日本商工会議所会頭）一行来伯。倉石元農相一行来伯。福田副総理一行来伯。日伯国会議員連盟結成。

1976年＝河本通産相一行来伯。ウエキ鉱山動力相訪日。

第2回「日伯民間経済合同委員会」東京にて開催、日本側：平井富三郎経団連日伯経

済委員会委員長ほか54名、伯国側：クラウジオ・バルデイレ・ABDIS（ブラジル基幹産業振興会）会長、ほか17名。

ガイゼル大統領訪日（随行：シルベイラ外相、セベロ・ゴメス商工相、ウエキ鉱山動力相、ベローゾ企画庁長官ほか）併せて第1回日伯閣僚協議会を開催。

1970年代は、いわゆるブラジル・ブームを迎え、進出件数はめざましいものがあった。

とくに前半のオイル・ショックまでは雪崩現象の感すらあった。しかし、進出の形態は従前のものとはかなり異なり、既存企業の買収、ジョイント・ベンチャー、共同出資、技術提携を主体とするマイノリティ参加が目立って多くなる。業種も本社のイメージとほど遠い投資が多かった。

C. 大型プロジェクトの参入

ガイゼル大統領の訪日は、1976年9月15日より5日間、現職大統領として初めての公式訪問だった。両国が発表した共同コミュニケの内容は、日伯経済関係のハイラ

イトとして記憶に新しい。

特に今日の日伯経済交流のシンボルとされる両国合弁の巨大プロジェクトは、この時点で始まっている。その主なものは次の通りである。

1) アマゾン地方（パラー州）におけるアルミ精錬工場設立に関する合意。

年産64万トンのアルミ精錬工場を日本側49%、ブラジル側51%の出資により、1977年に着工する計画。

2) CENIBRA（CELULOSE NIPÓ-BRASILEIRO／日伯合弁による紙パルプ製造会社）の設立とFLONIBRA（FLORESTAMENTO NIPÓ-BRASILEIRO）プロジェクトに対する協力。

森林、パルプ資源開発プロジェクトの一つである合弁事業CENIBRAが近く操業開始。バイア、エスピリット・サント及びミナス州にまたがった同種プロジェクトFLONIBRAにも同様に最善の努力を払う。

3) ツバロン製鉄所の第2期工事の建設並びにウジミナス製鉄所の第2期拡張工事と第3期拡張計画に対する双方の協力。

4) N I B R A S C O (C O M P A N H I A N I P O - B R A S I L E I R O D E P E L O T I Z A C A O / ペレット製造) 合弁事業 (1 9 7 7 年末に操業開始予定) が、両国の当事者間の協力で順調に進展していることを認めた。

5) 双方は、日本鉄鋼業に対するブラジル鉄鉱石の安定供給の拡大を図ることが両国の利益となるという認識で一致した。カパネマなどのブラジル鉄鉱山開発計画に関し、両国の当事者間で協力が進展していることを認めた。

これら日伯合弁事業ならびに協力事業はいずれも長期安定的に製品の一部を対日輸出されることを確認した。

6) セラード地帯における農業開発推進計画と合弁による農業開発会社の設立に合意。

両国政府は、パイロット・プロジェクトが満足すべき成果を挙げたことに留意、農業生産活動の支援と推進を図るため、農業開発会社が近く設立されることを確認。

このほか両国政府間の協力に関しては、

7) 両国閣僚会議の設立決定。

8) 科学技術分野での協力決定。

など、計 17 項目のプロジェクトが発表された。

ガイゼル大統領訪日後の 1977 年からの日伯経済交流の主なものは次の通りである。

1977 年＝パウリネリ農相訪日。岸元首相一行来伯。京都商工会議所南米経済使節団（団長：森下会頭）一行来伯。国際資金循環調査団一行来伯。日伯租税条約修正補足書発効。

大阪商工会議所中南米経済使節団（団長：浅井会頭）一行来伯。ブラジル通商使節団（団長：ペローゾ企画庁長官）一行訪日。

桜内建設相来伯。ノゲイラ運輸相訪日。カルモン・デ・サー商工相訪日。経済 4 団体（経団連、日経連、日商、同友会）一行来伯。

1979 年＝コスタ・カバルカンチ・イタイプー水力公団総裁訪日。日本商工会議所経済使節団来伯。第 2 回日伯閣僚協議会ブラジルで開催、日本側：園田外相、渡辺農水

相、江崎通産相、森山運輸相参加。

このような激しい日伯交流の背景には、まずブラジル側では、大規模な基幹産業とインフラの設備投資に必要な融資の導入、高騰するインフレ対策、成長を続ける産業に不可欠の石油の輸入とオイル高の問題、及び米国のドル防衛策による国際金利の高騰などがある。

一方日本側では貿易黒字減らし、円高対策としての輸入促進、海外生産拠点を求める海外投資志向、、第2次オイル・ショックによる省エネ、省力対策に真剣に取り組んでいたことがあげられる。

d. 撤退・休眠企業もでる

1970年代の前半に起きたブラジル・ブームで、進出した日本企業も、70年代の後半から80年代の前半にかけてのブラジルの外債、貿易収支悪化、赤字財政などの影響をうけて、多事多難の時代を迎える。

進出企業にとって最も辛い点は極度の輸入規制であった。進出初期のメーカーは原材

料の相当部分、部品は輸入を見込んでの操業開始であったものが多かっただけに、輸入規制は打撃だった。

この時期に休眠（これがほとんど）あるいは撤退する企業が続出した。

はっきりした資料は得られないが、休眠、撤退を合わせて約 100 社にのぼるものと推定される。ブラジルの経済環境悪化のため、最近の日本の技術から大幅に遅れたといわれているが、困難を克服して残った企業は、いずれも製品の自製率が 100% 近くになり、図らずして技術移転もできて、人・物両面の国産化が同時にできたといわれる。

なお、進出企業の社員の子弟が在学するサンパウロ日本人学校（小、中学校のみ）の生徒数は、1976 年当時約 1000 人であったものが、この時期に半減している。

e. セラード・プロジェクト始まる

フィゲレード政権の終りに近い 1984 年 5 月、大統領が訪日、その具体的成果の主なものは下記の通りである。

①…総額 13 億ドルを超える対伯経済協力。②…短期輸出保険の再開。③…科学技

術協定 の調印。④・・・ブラジルに対する日本の信頼性の回復。上記の①の経済援助の内容を見ると （単位 1 0 0 万ドル）

1) セラード・プロジェクト	1 5 2
2) 灌漑計画	5 2
3) 輸出入銀行信用供与	3 5 2
4) 通産省輸出保険、民間銀行融資	2 0 0
5) 銀行融資計画	5 6 5
計	1 . 3 2 1

1 9 8 0 年代の日伯経済交流の主なものは次のとおりである。

1 9 8 0 年＝土光経団連会長来伯。日伯貿易交流促進ミッション（戸崎伊藤忠社長団長）一行 1 4 0 名来伯。レゼンデ運輸相訪日。ソアレス社会保障相訪日。デルフィン・ネット企画相訪日。

1 9 8 1 年＝田中六助通産相来伯。園田外相来伯。秋山参議院副議長来伯。デルフィン・ネット企画相訪日。サンパウロ州経済ミッション（団長：マルフ州知事）一行訪日。

1982年＝鈴木総理一行来伯。グレイロ外相訪日。日本機械輸出ミッション来伯。大来佐武郎外務省顧問（元外相）来伯。

1983年＝中部生産性経済ミッション来伯。経団連経済使節団（団長：平井富三郎日伯経済委員会委員長）一行来伯。デルフィン・ネット企画相訪日。渡辺美智雄前大蔵大臣来伯。

マセード労相訪日。

1984年ガルヴェアス蔵相訪日。第3回「日伯民間経済合同委員会」日本で開催。フィゲレード大統領訪日。経団連ミッション（団長：武田日伯経済委員会委員長）一行来伯。小此木通産相一行9名来伯。デルフィン・ネット企画相訪日。

1985年＝福田元首相一行来伯。アルシエル科学技術相訪日。パジアノット労相訪日。安部外相来伯。

1986年＝第4回「日伯民間経済合同委員会」リオ・デ・ジャネイロで開催。日本側：武田豊経団連日伯経済委員会委員長、伯団側：アルバーノ・フランコCNI会長（ブラジル工業連盟）。タヴァーレス運輸相訪日。アルシエル科学技術相訪日。サヤジ企

画相訪日。

1987年＝沖縄商工会議所ミッション（団長：末吉会頭）外8名来伯。渡辺美智雄自民党政調会長来伯。フナロ蔵相訪日。

f．軍政の終了と経済危機

1964年に始まった21年間の軍政は、第1次、第2次国家開発計画を協力に推進し、隆盛なる経済基盤を築いたが、オイル・ショックと国際経済変動に揺さぶられ、また長年の軍政に飽きた国民は政治の改革を求めるようになる。

その結果、遂に1985年民政移管が行なわれることとなり、新共和国元年として民主政治がはじまった。しかし国民の期待を担って誕生した新民主政権はハイパーインフレーションと内外債、不況、失業による社会不安の中での出発となった。不幸にして就任直前に病死したタンクレード・ネーベス大統領を引継いで就任したサルネイ大統領はまずインフレ撲滅が救国策であると強く国民に訴え協力を求めた。特に経済担当閣僚（大蔵省、企画省）に人材を起用してショック療法といわれる経済政策を打ち出した。

次にその主なものを挙げると◎ 1 9 8 6 年 2 月 クルザード計画（フナーロ・ブラン）

フナーロ大蔵大臣とサヤジ企画庁長官コンビによる

- ・ 無期限物価凍結・為替レート固定
- ・ 1 0 0 0 分の 1 のデノミネーション
- ・ 通貨価値修正廃止
- ・ 通貨をクルゼイロからクルザードに変更

当初昂進するインフレ（月率 1 6 , 4 % 年率 4 2 0 %）に不安を抱いていた国民に熱狂的な支持を受け、約半年間は 1 % で推移、画期的なインフレ抑制策として十分な効力を発揮した。

しかし物価凍結の一方、実質給与の上昇による購買力の増加と需要の過熱から一般消費物資が不足し始め、ヤミ値が横行するなど問題が深刻化する。

◎ 1 9 8 6 年 1 1 月 第 2 次クルザード計画

- ・ I P I（工業製品税）の引上げによる 5 品目の値上げ（自動車 8 0 %、煙草 4 5 ~ 1 2 5 % 飲料 1 0 0 %、燃料 6 0 %）

- ・ 公共料金の値上げ（電話料 3 5 %、家庭電気料 3 5 %、郵便 8 0 %
- ・ B N H（国立住宅貯蓄銀行）の廃止、国営企業 8 社の統廃合など行政整理
- ・ 為替のミニ切下げ再開

これら一連の政策は過熱需要の抑制策として打出されたのだが、1 1 月総選挙対策のため調整が遅滞し、物価凍結の段階的解除の方策を失したことなどが致命的要因となって 1 年で崩壊する。

インフレは毎月加速し月率 2 5 % 年率 1 0 0 0 % の破局的段階に進展、一方内需過熱に伴う輸入急増と輸出減退を促すこととなった。さらに 2 月のモラトリウム宣告は対外信用を著しく失墜せしめ、最後にサヤジ企画庁長官、フナロ大蔵大臣が失脚することとなった。

◎ 1 9 8 7 年 6 月 新クルザード計画（ブレッセル・プラン）ブレッセル大蔵大臣とティシェイラ企画庁長官コンビによる。

- ・ 1 0 0 0 分の 1 のデノミをし、通貨クルザードを新クルザードに改めた。
- ・ 9 0 日間の物価凍結・公共料金の値上げ（燃料、電気、電話など）

- ・新指数 U R P（参考価格指数）の設定
- ・物価凍結期間中の給料凍結
- ・為替は 9 5 % 上乗せ切下げ実施

フナロ大蔵大臣に代って登場したプレッセル新大蔵大臣は、クルザード計画を修正して中期インフレ抑制策を実施した。内需一時抑制と輸出奨励という現状に則したもので、熱狂的な支持はないが、ショックの度合も少ないという政策といえる。ショック政策に引きずり回され、先行き不安が増大した結果、不況を招き半年を経ずして失敗に終わった。

3. 進出企業の果たした役割

戦後ブラジルに進出した日本企業も早いものは 4 0 年になる。これは戦後の初期に日系コロニアを足がかりにして進出したという、特殊な事情があったからであるが、その後の進出企業の歴史も決して平坦なものではなかった。

まず進出企業のあまりにも日本的な性格が異文化のブラジル社会から反発されると同時に、本来同根の日系コロニアからも批判を受けることになる。ブラジル側、あるいは日系コロニア側から見た進出企業批判はかなりパターン化されており、それだけに根強いものがあるが、要約すると以下のようになる。

- 1) 駐在員は常に日本の本社の意向を伺い、現地の事情を無視して本社の方針を押しつける
- 2) ブラジル語を覚えたいし、覚えようとも努力しない。
- 3) ブラジル文化への理解がまったくなく、日本方式のみ押しつけようとする。
- 4) 日系企業は常に駐在員が上にいるため、日系人を含めたブラジル人の昇進の途が閉ざされてい、る。
- 5) 駐在員と現地社員との身分、給与格差がひどすぎる。
- 6) 駐在員は駐在員同士で行動し、現地の人間とはうちとけない。

こうした現地側の不満は戦後日本企業が進出した当初から存在し、現在にいたるまで残っている問題である。日本企業のブラジル現地法人は100%親会社の出資か、90

%以上親会社がマジョリティをもった会社であるため、親会社からの上意下達による日本的経営が強くおし出され、その結果、さまざまなトラブルが発生したことも事実である。

1970年代までは日本の会社にも社員にも国際感覚が乏しく、異文化を理解、受容する能力に欠けていたのである。

こうした事態を是正するために、サンパウロのブラジル日本商工会議所の企業行動基準委員会は「ブラジル国における経済行動の具体的指針」を作成して、企業の現地との融合化にのり出す。

この行動基準は、各企業が長期的観点に立ち、労使関係に配慮を行い、現地資本参加の途を開き、合弁、株式の公開に努め、現地の習慣を尊重すること。派遣者の選定についてその適性に配慮し、長期派遣を心がけ、また現地で教育と訓練につとめるものといひ、また産業を育成し、再投資を促進し、現地企業や社会と協調すべきことがうたわれている。

進出企業のカルチャーショックの問題も永い歴史の中でとらえれば、やはり過渡的、

一時的な現象にすぎないといえる。何故なら、進出企業も時間が経てば、現地文化に対応する知識と経験を積み、現地社会に適応できるからである。

日本からの進出企業も時代によって変化し、戦後の日系コロニアに全面的に依存した時代は、地域もサンパウロが中心だったが S U D A M（アマゾン開発庁） S U F R A M A（マナウス自由貿易地域）計画による進出企業の地方拡散、官民レベルの経済協力的大型プロジェクトへの参加、利益再投資分野として農牧業や不動産事業への進出、ブラジルや他国企業とのジョイント・ベンチャーにおけるマイノリティ参加など、業種も対象地域も会社の形態も多種、多様になっている。

まだ問題はあるにしても、日系進出企業の現地化は着実に進んでいる。

さらに進出企業の果たした役割りとして見逃せないのは、ブラジル産業の興隆、貿易の拡大、地域開発への寄与、雇用の増大といった直接的な経済効果のほかに、日本的経営の効率のよさがブラジルの産業部門に理解され、浸透していったことである。T Q C（全社的管理システム）はすでにかかなりの程度ブラジル企業に受入れられている。

別表に示すごとく、1987年12月における日系企業の投資残高は29億6100万ドルに達している。アメリカ、西ドイツについて第3位の投資国である。また、日本の大蔵省国際金融局の統計による1951～88年の直接投資累計は約55億ドルである。

日本の進出企業は、政府間ベースによる国際協力事業としての大型プロジェクトを除けば概して企業規模は小さい。しかし、日本の企業進出は比較的規模の小さい民間企業が数多く進出するところにむしろ特徴があるといえるのである。

< 参考資料 >

ブラジルの対外債務と日本民間銀行の貸出額

1985年から1989年までのブラジルの対外債務は、ブラジル中央銀行の調べによれば、下表の通りで、1989年度には1147億4千100万ドルにのぼっている。

	1985年	1986年	1987年	1988年	1989年
外国商業銀行	68.554	69.952	76.536	69.781	72.137
短期	8.639	8.735	13.385	10.242	15.326
長期	59.915	51.217	63.005	59.538	56.811
国内銀行	8.270	8.255	7.900	7.586	6.510
短期	530	551	370	672	130
長期	7.640	7.704	7.450	6.914	6.380
公的機関、他	28.302	32.838	36.738	36.102	35.094
短期	0	0	0	0	0
長期	28.302	32.838	36.738	36.102	35.094
合計	105.126	111.045	121.174	113.469	114.741
短期	9.269	9.236	13.755	10.914	15.456
長期	55.857	101.759	107.509	102.555	99.285

ブラジルの対外債務残高 単位：100万ドル

そのうち日本からは121億9千620万ドルで銀行別では次のようになっている
(フォーリャ・デ・サンパウロ紙：1987年9月2日) 単位は100万ドル。

東京銀行－ 1 . 1 2 1、三菱銀行－ 8 6 2、住友銀行－ 8 5 7、長期信用銀行－ 6 1
3、富士銀行 － 5 7 8、三和銀行－ 5 6 9、興業銀行－ 5 6 3、第一勧銀－ 5
4 6、東海銀行－ 4 4 4、三井銀行－ 3 8 1、日本クレジット－ 3 2 3、太陽神戸－
2 8 6、大和銀行－ 2 6 9、三菱トラスト－ 2 1 8、安田トラスト－ 2 0 8、住
友トラスト－ 1 9 6、横浜銀行－ 1 9 0、三井銀行－ 1 7 1、 埼玉銀行－ 1 4 1、協
和銀行－ 1 3 7、北海道拓銀－ 1 3 4、東洋銀行－ 1 4 4、その他の企業 を含め総額
は 1 2 1 億 9 千 6 2 0 万ドル。 なお、他の国では、米国が 1 7 7 億 6 千 3 0 万ドルで
全体の 1 7 , 4 4 %、西独 3 8 億 9 千 1 9 0 万ドル、仏国 5 億 9 千 9 8 5 万ドル、英国
8 5 億 1 千 7 1 0 万ドル、イタリア 7 億ドル、スイス 9 億 2 千 2 7 5 万ドルとなってい
る。

日本企業の年次別ブラジル進出状況

	～69年	70～74年	75～79年	80～81年	85年～	計
全 産 業	56	150	93	25	15	339
・農 林・水産業	4	4	4	—	1	13
・鉱 業	—	2	1	1	1	5
・建 設 業	—	12	5	—	—	17
・製 造 業	26	75	52	16	8	177
食 料 品	2	6	4	—	1	13
繊 維 品	6	10	3	—	—	19
木 材・家具	—	4	1	—	—	5
パルプ・紙	—	2	2	—	—	4
出版・印刷	—	—	1	—	—	1
化 学	2	4	10	3	—	19
ゴム・皮革	—	2	—	—	—	2
窯業・土石	—	—	2	—	—	2
鉄 鋼 業	2	6	1	1	2	12
非鉄金属	—	3	1	—	2	6
金 属 製 品	—	2	4	1	1	8
一般機械	5	14	9	1	—	29
電気機器	4	15	5	6	—	30
輸 送 機 器	3	1	4	3	—	11
自 動 車	1	—	1	—	1	3
精 密 機 器	—	1	2	—	1	4
その他製造業	1	5	2	1	—	9
商	17	24	13	3	2	59
金 融・保険業	6	12	4	2	—	24
不 動 産 業	1	8	5	—	—	14
運 輸 倉 庫 業	—	1	3	—	—	4
サ ー ビ ス 業	—	11	2	2	—	15
株 式 保 有 他 明	—	—	—	1	—	1
不 明	2	9	4	—	1	16
					2	2

<出所：東洋経済データバンク 1988年度版>

戦後日伯貿易額の推移（1948～1988年）
（輸入C I F、輸出F O B、単位1000ドル）

年	対伯輸入	対伯輸出	年	対伯輸入	対伯輸出
1948	875	28	1969	148.283	120.541
49	1.925	137	70	217.853	166.731
50	10.847	1.287	71	223.063	235.211
51	16.450	21.052	72	249.403	395.337
52	18.978	15.823	73	452.909	611.534
53	40.812	11.134	74	657.185	1.389.057
54	68.315	79.156	75	883.178	927.128
55	56.214	45.080	76	818.557	881.630
56	50.209	45.156	77	946.796	839.749
57	44.990	24.982	78	788.178	1.252.538
58	27.101	41.874	79	1.240.431	1.124.998
59	36.356	37.352	1980	1.560.864	1.114.799
60	32.795	45.763	81	1.578.453	1.367.487
61	64.269	86.029	82	1.602.744	1.042.761
62	40.076	43.558	83	1.669.005	738.267
63	38.387	56.275	84	1.990.820	639.528
64	37.190	26.019	85	1.840.218	614.882
65	49.573	26.556	86	1.874.629	973.114
66	60.602	40.017	87	2.032.405	878.843
67	85.633	54.556	88	2.950.356	998.091
68	87.118	102.069			

	日本からのブラジル向け投資		ブラジルから見た日本の投資		
主 要 業 種	累計 89.3 (百万ドル)	シェア (%)	ストック 87.12 (百万ドル)	シェア (%)	ブラジル全体に(主要投資国) 占めるシェア(%)
製 造 業	3.196	64,7	2.195	74,1	9(米 27 西独 20 スイス 11)
鉄・非鉄	1.674	29,9	(鉄) 293	9,9	33(伊 26 ルクセンブルグ 10 西独 4)
電 気 機 械	387	6,9	(金属) 318	10,7	17(西独 29 米 23 加 9)
			321	10,9	14(米 34 西独 15 蘭 12)
織 維	363	6,5	203	6,9	34(パナマ 17 英 11 スイス 9)
一 般 機 械	321	5,7	225	7,6	8(米 33 西独 28 加 6)
輸 送 機 械	275	4,9	(自転車) 195	6,6	5(西独 36 スイス 15 伊 13)
化 学	157	2,8	(石油化学) 80	2,7	20(米 36 英 16 加 13)
鉱 業	214	3,8	83	2,8	10(米 35 英 14 西独 13)
金融・商業 サー ビ ス	1.962	35,1	525	17,1	9(米 25 英 13 佛 8)
合 計	5.596	100,0	2.961	100,0	9(米 27 西独 17 スイス 9)

ブラジルの投資受入先（単位：億ドル）

	～1960	1961～	1971～80	1981～87	(85 86 87)	累 計	シェア%
合 計	15 (9)	26 (14)	167 (118)	107 (69)	(9 3 5) (4 2 3)	315 (210)	100,0
米 国	5 (3)	7 (3)	43 (29)	28 (21)	(1 -1 2) (2 -0 1)	83 (56)	26,5
西 独	2 (2)	5 (3)	27 (20)	19 (11)	(2 0 0) (-0 0 0)	54 (35)	17,0
日 本	0 (0)	1 (1)	18 (15)	10 (7)	(1 1 1) (1 1 1)	30 (24)	9,4
スイス	2 (2)	3 (2)	21 (13)	0 (-2)	(0 -0 -0) (-0 -0 -0)	28 (14)	8,9

註. 1. 投資額は再投資額を含む。下段は新規投資額、2. 中銀登録額ベース。

出所、ブラジル中銀統計 月報1988年6月号

第3章 教育・文化・宗教

I. 戦後のコロニアの子弟教育

戦後のコロニアの子弟教育は、日本語教育と上級学校進学の動向の二面に分けて考える必要があると思われる。

1. 日本語教育

1930年代後半から厳しさが度を加えた外国語による児童教育への制限と監視、それから遂に日語学校閉鎖の後、子弟に対する日本語教育はどうなっていたのであろうか。1937年、38年頃からの10年間くらいは日系社会の“暗黒時代” といつてよい時期であつて、恐らく日本語による児童教育など到底考えられない状況であつた。しかし、祖国日本の戦勝は殆どの者が信じて疑わないところであつたから、間もなく天下晴

れて教えられる時が来ると誰もが信じて耐えていたのである。それは子弟教育のことばかりではなかった。

日本が“盟主”となるであろう東アジアへの再移住も、実現の確かなものと考えられていたから、危険をおかしてまで日本語教育をする必要もない、というのが一般的な父兄の心情であった。

1949年は、まだ日系社会の「戦後混乱期」にあったが、戦前から日語教育界にあった人達によって全伯教育協議会が生れた。しかしこれは長続きしなかった。（移民70年史312）。

1954年7月、学校経営者、教師ら約100名が参加して、サンパウロ市のドン・ペドロ2世日語学校において第1回サンパウロ州公認日語学校連絡協議会が開かれた。これが戦後における日本語学校の大きな統一行動の初めである。こうして1955年1月16日に創立されたのが、伯国公認日語学校連合会（日学連、註＝日学連が伯国の名を冠したのは1956年1月14日の総会から）であり、この組織は、1988年2月20日に創立総会を開いて独立法人となった日本語普及センターに、同年9月24日

“発展的”に合体吸収されるまで続くのである。

この初めての会議への参加者が約100名もあったということは、既にこの頃は日語学校を経営する団体や個人がかなりあったことを示しているが、これらの日語学校の教育方針あるいは考え方は、如何なるものであったろうか。

第2次世界戦争における祖国日本の“勝敗”をめぐる混乱の後遺症は、少なくとも表面から消え、るだけでも10年近くを要するのであるが、この点から考察しても、日本語による子弟教育の方針の主流は、はっきりと戦前のその延長線上にあったと見て間違いない。

戦後のある時期までは、日本の勝利を信じるものがほぼ90%を占めるといった状態であった。父兄の子弟教育方針への希望・期待も「祖国は勝っている」という見方を根底としたものであったし、教師の多くにもこの傾向はあり、または父兄への迎合・妥協からも、戦前の考え方の延長線上のものを匂わせなければ、受け容れられなかったという事情も指摘できる。もちろん、終戦後の日本の大きな変動と改革をはっきり認める教師達もあって、この事実を基にしての子弟教育を考えた訳であるから、二つの流れの上

での教師間の意見、感情の相剋もあったとみなければならない。日学連内部における一応の一本化までには幾つかの曲折があったのである。

日語新聞が刊行されるのは、終戦翌年1946年からであるが、それにもかかわらず日語学校が1950年代に入るまで再開されなかった理由について、日学連編纂の「幾山河」（1966年8月刊行）は、①母国の地位転換（註・敗戦による日本の国際的地位の変化のことであろう）によるコロニアとしての自重、②時局をめぐるコロニア内部の対立、③日語教育反対論の台頭、④非合法的再開に対する自粛などを挙げ、特に④を最大の理由としている。

戦後、日本人の新しい移住が始まるのは1953年からである。

新しい移民の中には、戦後の教育を受けた者、教職経験者なども含まれていたから、この頃から徐々に日系社会における日語教育に対する“意識転換”が起り始めた。

また1949年6月からは移民の日本訪問も始まっていて、公私共に日伯間の人的交流は次第に多くなったため、いやおうなく敗戦後の祖国の実情は、終戦後から続いた“希望観測的・夢想的”日本の姿に代わって、伝えられて来るようになったのであ

る。

このような状況の中でアンドウ・ゼンパチ（安藤潔、戦前から言論活動、文化活動を行なった。主著「ブラジルの歴史」）を中心とするグループによって月刊「エスペランサ」誌が1956年1月に創刊され、誌上で日本語教育の在り方を論じ、また広く呼びかけて問題討議の会議を開いたりして啓蒙運動を展開した。（「エスペランサ」は2年で廃刊）。

そうしたこともあって、ブラジルの日系社会における児童への日本語教授は、ブラジルの国情・生活環境を踏まえて、ブラジル人である日系子弟の生活の実際に即した内容の教科書の編纂・刊行を行なって、それに拠るべきである、との主張が世論の趨勢となってきた。終戦後、日語教育が始められた頃は、まだ日本からの新しい教科書の導入は少なく、多くは戦前のものが使用されていた。もっとも戦前の教科書に依らなければ、納得できないという空気が父兄側教師側双方にあったことは既に触れたところである。

1959年、日伯文化普及会（前出）は「日本語教科書刊行委員会（委員長：山本喜

誉司)」を設け、編集専任委員を置いて編纂に着手した。これが第一期日本語教科書全 8 巻で、1961 年 4 月に完成した。次いで第二期高学年用 4 巻は 1964 年 6 月に編集を終り、第一期 8 巻は 1963 年 11 月、公認教科書としてサンパウロ州学務局の認可を得て頒布されたのである。因みに第一期分 8 巻の刊行は日本の帝国書院が刊行費を援助している。

1960 年代初め頃の日語学校数について前出「幾山河」は「現況を詳細に調査することは誠に困難……」としながら、北パラナ、南パラナ、ソロカバナ、ノロエステ、南パウリスタ、奥パウリスタ、中央線、アララクァラ、サンパウロ市、サンパウロ市近郊の 10 区域に大別して調査、推定 600 校はあるだろうと記している。

一方、ブラジル日本語普及会の 1977 年の調査では、学校名、教師名、生徒数の判明している日本語学校の数は、サンパウロ市内 44 校、近郊 60 校、パウリスタ線 9 校、ノロエステ線 22 校、ソロカバナ線 17 校、パラナ州 53 校、リオ・デ・ジャネイロ州 13 校、アマゾン地方 20 校、計 244 校となっている。なお、この調査では、日

系の日語学習者 8 2 4 2 人を世代別にみると、1 世 1 %、2 世 2 9 %、3 世 6 7 %、4 世 3 % となっている。

両調査の時期には 1 4 ~ 1 5 年の間があるが、学校数の大きな差が目につく。

2. 日本語普及活動一本化の動き

日本語の教授あるいはその普及という、根底においては同一の性格、目的をもつ日系社会としての事業を進展させるのに、幾つもの団体が存在する必要はない、一本化すべきであるという意見は早くからあった。

日伯文化普及会日本語普及部から独立した日本語普及会と日学連の一体化は多くの機会に試みられたが、その都度成功しなかった。ようやく 1 9 8 8 年の 9 月になって、前述のように日学連が日本語普及センターに吸収されて一本化が実現するのである。

日本語普及センター（1 9 8 5 年 5 月）、日伯文化連盟（1 9 5 6 年 1 1 月創立の日伯文化普及会の後身、A l i a n c a C u l t u r a l B r a s i l J a p a o）、日学連、ブラジル日本文化協会の 3 着で「日本語普及センター」（文協の専門委員会が

運営）を作り、１９８８年２月から独立の組織となった。

ここで、現在における日本語教育（教授）普及の唯一の中心機関となった日本語普及センターについてその成り立ちをもう少し細かく辿っておきたい。

サンパウロ（現ブラジル）日本文化協会が創立されたのは１９５５年１２月１７日であるが、その１年後の１９５６年１１月１７日に日本文化普及会が創立された。この会の初代会長には、サンパウロ市創設４００年祭の祭典委員長だった詩人のギレルメ・デ・アルメイタが推されてなったが、会の主目的としては、当時はまだ対日本観の厳しかったブラジルに、知日ブラジル人をひとりでも多く増やすための日本文化の普及活動を行なおう、ということがあり、この中に日本語普及部が設けられた。

この日本語普及部は１９６４年８月、「ブラジル日本語普及会」として独立の会となったが１９７８年に至って再び日本文化普及会と合体して、この時から日本文化普及会は現在の日伯文化連盟と名称が変更されたのである。

１９８５年５月１日、ブラジル日本文化協会（文協）、日伯文化連盟（日文連）及び

日学連の3者の間で合意が成立し、一体となって日本語普及事業を行なうという目的のもとに「日本語普及センター」が発足し、文協の中の一専門委員会として事業を進めることになったものであるが、時代の趨勢として普及センターの独立組織化が要望され、前出の如く、1988年2月20日に創立総会の開催となった。

この後、同年6月25日に日文連日本語研究部が、次いで9月24日に日学連が最終的に普及センターに合体し、ここで初めて日本語普及活動の一体化が実現したのである。

文協、日文連、日学連3者間の日本語普及活動の一本化が1985年に合意に達しながら真の一本化までになお3年もの時間を経過しているが、これの理由には、日系子弟（児童）を対象とする日本語教授という問題における関係者間の意見（思想）の違いが挙げられる。

この相違は複雑で微妙かつ根深い要因を多く含み、俄かに断定的に言うことはできないが、一応次のように分けられる。

①現在のブラジルにおける日系社会の現状、環境の中にあっては日本語の教授は「外

国語として行なうのが適切である」とするもので、「ブラジルの学校での情操教育（人間教育）の不足は日本語教師の工夫によって補い得る」。また「日本文化」の理解は日本語の習熟によって自ら道は開けるし、「日本的」ということの押しつけはブラジル人である日系子弟の「素直な育ちを歪めるのではないか」とするものと言ってよい。

②日本語を教えることによって、日本伝統の良風美俗を子弟に伝え、日本の文化を伝承させる。言い換えれば日本語教育を通して（あるいは日本語と共に）「子供達に日本人としての心のしつけ、その精神、文化を教える」（のうそん誌第118号—1989年9月）、また日系社会の人々が日本語学校に期待するものは「日本的なしつけを子供達にしてほしい」（引用同前）等に、代表的なものを要約できるのではないかと思われる。

①の立場は、日本人の後裔に対する人間教育は、日本語教授を通してでなければ不可能というものではない、とし、②の立場は「日本人らしい人間（あるいは特質を備えた）の教育を日本語で」としている訳である。

このような日本語教授（教育）に対する二つの意識（思想）の流れの存在が、日本語普及事業組織の一本化を容易ならしめなかった最大の理由と考えられる。

いま、日本語普及センターによって、組織の一本化はできた形であるが、上述の二つの異なる意識の流れそのものがすべて解消された、とは決して言えないのが現状であろう。

3. 教育熱心 について

「日本移民は子弟教育に熱心」と常に言われてきた。開拓地に、都市部に集団ができると、必ずそこでは「日本語学校」が営まれた。第2次大戦後もこのことには変りはない。

後述する子弟の上級学校進学急増も「教育熱心」の現われと見られるものである。この面では、父兄達は自らの生活を犠牲にするほどの苦勞節約にも耐えて学資を貢ぐことも行なわれたのである。

しかし、こと「日本語の教授」ということになる、果して熱心という評価に耐えるほどのものがあつたのかどうか疑問である。特に家庭内におけるそれへの父兄の対し

方、あるいは努力は甚だ心もとない状況にあったと言える。子弟に日本語を教えるほどの力が、移民である大方の父兄にはなかった、という事情があったとしても、やはり本質的な教育への理解がなかった、あるいは浅かった、という点が指摘できる。

学校に通わせておけば足りる、という程度の認識であったのかも知れないのである。

このことは、戦前戦後を通じて常に問題になった教師の待遇にも現われているのではないか。

前出「幾山河」（92頁）は、このことについて『日語学校で徴収する月謝額については全伯平均は僅か389クルゼイロであり、驚くべき低い月謝により運営されていることが判明した。日本円に換算し2200円程度にしか相当しない。月謝収入に生活を依存している教師として、今日の物価高のブラジルでは、到底最低生活を維持し得るに足るだけの金額ですらない。こうした低月謝によって教師の副業従事、転職、質の低下などの問題が派生し従って日語教育の停滞という結果がもたらされるのである。低月謝の原因としては、何よりも父兄側の認識不足を挙げねばならない。日語教育の必要性を認めながらも、月謝値上げに対しては抗議するという父兄側の矛盾した意識の中に、実

は今日の目語教育不振を解く健の一つが潜んでいるのではなかろうか』と訴えている。

日本語以外の語学教育（例えば英・佛語）には高額授業料を惜しまないのに、日本語の場合は確かに「幾山河」が記すような態度を父兄はとってきている。これが“デモ先生”“シカ先生”を生み、あるいは老齡教師に頼らざるを得ない状況を生んだのであった。

日語教師の日本への“出稼ぎ”は1985年頃から始まっているが、皮肉なことに、そのことによって生じた教師不足のために、待遇の改善が真剣に考えられるようになったのである。

家庭内における日本語の伝授ということではよくドイツ人の場合と比較される。ドイツ人家庭すべてに当てはめて言える事柄であるかどうか、その資料はないが、都市居住のドイツ系家族で、幼児がその父母、きょうだいとドイツ語で語り合っているのは、よく見かける風景である。

4．上級学校への進学

第2次世界戦争の前にも、移民の子弟で大学過程まで収めた者はかなりな数にのぼるであろうが、それらは主として都市部で商工業に携わってある程度“成功”した移民の子弟や、当時としては高給を受け得る職場にある者の子弟に限られていた。農業経営者の子弟と言うのは指で数えられる程度であった。

農村地帯の子弟が高等教育を受けるようになる傾向が次第に強まるのは、戦後でも1950年から1960年代にかけてであるが、これにはブラジルの学校制度が変り、高等教育の夜間制が確立されたことに関係している。

例えば、農業組合などが継続開催した組合員子弟対象の講習会、あるいは海外実習生派遣事情において、1950年代から60年代の前半頃までは、参加青年男女で中学課程を終えた、という者さえも少なかった。それが1970年代になると次第に高校または大学在学中や卒業生も加わって来るように変っていったのである。

祖国の敗戦と敗戦後の悲惨な状況が伝わってくると、移民達は抱き続けていた帰郷の願望をなげうたなければならなくなる。好むと好まざるに拘わらず、定住を覚悟しなけ

ればならなかったのである。

戦後の日系社会の混乱期を経て、生活が次第に平常に復してくると、ブラジルにおいての子弟の将来という問題が親達の最大の関心事となってきたのである。

子弟の未来は、親である移民達がなめて来たような苦しいものであってはならない。ブラジルの社会の中で、少なくとも移民達がおかれてきた低い地位を受けつぐものであってはならない、といった気持ちを親たちの誰もが抱いたのであった。

それには教育以外にはない、ということになる。親達が骨身を削っても、子弟を都市で勉学させるというケースが多くなるのである。これは移民の社会的地位の向上を願う

「上昇志向」の現われといわれるべきものかも知れない。子弟の教育の便を得るために、都市あるいは都市周辺への移動の波が起るのも、終戦後において甚だしい。移動の波が起る理由の一つには1920年代から拓かれた内奥地の地力が著しく減退して、植民地の崩壊も始まり、他のいずれかへの転出を計らねばならなくなっていた事情もあった。

社会的地位の向上には、まず何よりも経済力をつけることである。つまりより早い金儲けの道を手にするための大学進学が親の気持にも子弟の気持にもあったのである。

そのため、大学で選ばれる分野も、経済的な向上と結びつき易いものになる傾向が強かった。医科、歯科、薬学科、法科、商科、工科などが主な対象となったのである（近年はコンピュータ、経営学などが加わる）。大学を出た子供の経済力の向上によって、親の生活と社会的地位の向上安定を得ようという気持であるが、これはあながち移民であった親達の「エゴ（利己心）」と決めつける訳にはいかないであろう。事実、親達の「骨身を削る」努力によって、子弟のブラジル社会への進出が早められ、経済基盤を築くのに役立ったことは疑いないのである。

5. 日系学生の志向

戦前戦後を通じて日語教育に最も関係の深かった者の一人、二木秀人は、日本移民70周年に日伯毎日新聞が刊行した別冊特別記念号に「日系学生の志向と考察」を寄稿して

いるが、それによると1949年に自らが調査したサンパウロ州立総合大学における日系学生数は98名になっていて、全在校生3889名に対して2.5%である。また同年同大学の日系受験者は79名で、うち医科20名、工科28名、歯科10名、建築科7名、農科5名などの数字が見られる。

ところが、1978年5月の同人の調査では、サンパウロ州立総合大学学生総数3万5千人中、日系は各学部の平均で15%を占め、そのうち会計科356人中、日系は107人で30%、経済科860人中192人で20%、経営学科833人中167人で同じく20%となっている。

サンパウロ総合大学以外の主要大学においても日系学生の比率は大きく、同じ調査で、マッケンジー大10%以上、FEI工大16.5%、マウア工大13.1%、ABC医大9.3%、サントアンドレ文理大9.9%等の数字が挙げられている。全大学生数の中の日系学生数の比率が著しく高くなっていることをこれらの数字は示し、また日系学生が志向する分野の傾向をも物語っている。

サンパウロ市及びその周辺諸都市以外の地方に所在する大学における日系学生数を把握する資料はないが、州内のマリリア、プレジデンテ・プルデンテ、アラサツバ、リンス、パラナ州のロジドリーナ、マリンガ、クリチーバ、またリオ州の各大学に在学する日系の比率もかなり高いものであることが推測される。なおサンパウロ人文科学研究所の貴近の資料によると、サンパウロ総合大学における日系学生入学比率は16%に達している。

現在のブラジルの人口1億4千万、うち日系120万人として比率は0.85%（サンパウロ州に限れば日系は2.7%）になるので、人口比率に対して、日系学生数の比率は甚だ高いものであることが知られる。

Ⅱ．文学活動の流れ

移民生活の中で、生業以外の面で最も広く互いにつながりを持ちながら、絶えることなく行われて来たのは文学とスポーツであった。前者は精神活動としての性格が強く、

後者は娯楽に発して青少年の心身鍛練という意味を持たせての活動、といった面が強かったと考えられる。

移民が関わった文芸分野（ジャンル）には短歌、俳句、川柳、詩（民謡、童謡を含む）等の韻文から、小説、随筆、紀行、評論と、いわゆる散文と称せられるものすべてがある。

以上のうち、比較的誰にも作り易く（小詩型であるが故に）親しまれ易い短歌、俳句、川柳等は、移民の始まりと共にブラジルに持ち込まれた。

笠戸丸移民の輸送監督として渡伯した上塚周平（俳号飄骨）が、ブラジル上陸の第一夜を過ぎた1908年6月19日に作ったとされる「ブラジルの初夜なる焚火祭かな」は、記録に残っている移民俳句の“第1号”とされている。また短歌では、笠戸丸移民よりも前に渡航していた鈴木貞次郎（南樹）が、与謝野寛、晶子夫妻が主宰した文学誌「明星」に拠っていたと伝えられているから、当然いくつかのブラジルに生活する者としての作品があったと見なければならない。

鈴木南樹は、1920年代の前半頃までは移民の間での先達の短歌作者とみられ、彼

を中心とした愛好者数人のグループが、サンパウロで歌会を催し、手書き歌集を作って回覧した。

その中に南樹の次の歌がある。

山羊の乳しぼる娘をぬすみ見つイペの花みつ吾ただならず

1910年代前半頃の作とされている。

いずれにしても、この時代に何らかの形の「文芸活動」を行ない得た者は極めて僅かの数に過ぎず、「移民文芸」として真の意味での芽が生まれるのは、1910年代後半に入って発行され始めた邦字新聞によってである。

コロニア文芸にとって幸いであったのは、これら新聞（後に雑誌も加わる）の主宰者、あるいは関係者に、文芸愛好者または関心を持つものが多かったことである。例えば聖州新報社主香山六郎（素骨、毒露、公孫樹）、南米新報主宰坂井田南舟、日本新聞翁長助成（白水郎）、農業のブラジルの揮旗深志らは読者文芸を優遇し、自らも作品活動を行なった。コロニア文芸の育成と興隆の上で、邦字新聞、雑誌が果たした役割は量り知れないものがある。

ただし、創刊初期においては印刷事情ほか経営上の問題などで読者文芸を扱うだけの余裕はなかった。移民の数も増え、新聞各自もそれなりの刊行態勢がようやく調う 1920 年代に入って、ぼつぼつ文芸作品（極めて幼稚なものが主だが）は現われ始める。

このようにして形作られたものの上に立って、コロニア文芸は 1920 年代の後半頃から 30 年代初頭にかけて盛んな活動期に入り、各ジャンルにおいての“組織化”（句会、歌会の誕生と機関紙の刊行など）も行われるようになった。

初期のコロニア文芸が概ね望郷の念に溢れた感傷的なもの、あるいは日本で習い覚えた内容と形式をそのまま引きずったものであったのに対して、この時期からより現実的な素材への目と表現方法を持つようになって来るのであるが、短歌でいえば写實的傾向の芽生えで、「写実主義」を標榜した短歌結社「アララギ」の準同人岩波菊治の渡伯が 1925 年であるのは、象徴的な出来ごとであった。

文芸機関誌として、おそらく一番早く刊行されたのは、サンパウロ州ノロエステ線奥のアリアンサ移住地で 1931 年に出された「おかば」である。俳句と短歌を主とするもので、後年この二つの文芸分野で真の意味の先達となった木村圭石（貫一郎）、佐藤

念腹（謙二郎）、岩波菊治らが相交流したことにより文芸活動が起ったと考えられ、1927年頃に「おかば会」が作られたが、これが文芸誌「おかば」創刊の母体となった。「おかば」は初め謄写版刷りであったが、のちに活字印刷となる。活字で印刷した文芸誌としても、これが日系社会での第1号であった。

これ以後、大きな移民集団地の幾つかでは謄写版の文芸誌が発行されるようになり、また青年会機関誌も作品発表の場となり、青少年の表現欲を促したのである。

1. 短歌

戦前戦後を通じ、日本の短歌結社の流れを汲むものとしての立場をとる作歌者は若干あったが、コロニア短歌界の中での派閥的なものはなかった。作歌者の多くは結社の意味といったものも知らなかったし、また日本の一つのグループに所属する必要も感じなかったのである。戦前から「アララギ」その他の結社雑誌へのブラジルからの投稿はあり、戦後になると「林間」、「槻の木」、「まひる野」、「コスモス」、「歩道」等の会員となり作品を寄せる者の数もある程度は増えたが、一方では日本の結社誌につながること

を潔しとせず、また日本の歌壇における或る種の風潮（その中には素材の“異国調”への無批判的な評価も含まれる）に迎合する作品を忌避する作者も多く存在した。「移民の短歌は、移民みずからのものである」とする立場、とこれを捉えることは可能であろう。

邦字新聞各紙は文芸欄の中に「歌壇」を設け、それぞれの選者を置いた。選者には移民である作者の中の、幾らか“先進的”な力量があると認められたものが選ばれた。

移民社会の最初の歌集は、聖州新報がその歌壇の投稿作品を以って編んだ「移り来て」で、1937年の刊行である。

こうした時代の趨勢の中で、専門短歌誌を持とうという気運が一部の作歌者の間に生じたのは当然の成り行きであった。

時のサンパウロ駐在総領事坂根準三、横浜正金銀行リオ・デ・ジャネイロ支店長椎木文也が、それぞれ日本の有力結社に属する作者であって、この二人が専門歌誌発行の精神的、経済的な一つの支えとなったことに加え、岩波菊治（アララギ系）、阿部太（青

杜、若山牧水の「創作」系）の存在が創刊のエネルギーを結集せしめたとも言えるであろうが、このようにして1938年10月に専門歌誌「椰子樹」が生れたのである。

1930年代には、サンパウロ市以外にもマリリア、パラグワスー、バウルー、クラビニョス等の地方に短歌会があり、謄写版刷りの短歌を主とする文芸誌が発行されていたが、「椰子樹」が創刊されると、それらに拠っていた作者たちのすべてが「椰子樹」の会員となり、「椰子樹」は以後、コロニアの短歌作者の最大の拠りどころ（現在は唯一の短歌誌）として、今日に至るのである。

短歌が、移民の郷愁と感傷め遣り場といった性格からはっきり離れ、文芸、文学としての短歌へ、という志向が強く自覚され始めるのも、この頃からといって誤りではないであろう。

「椰子樹」は1941年10月、11号を出したところで廃刊に追い込まれる。第2次世界戦争下でのブラジル国内事情が、日本語による刊行物を許さなくなったからである。「椰子樹」の場合は、何も政府が目をつけた、という事情によるものではないが、危険なことでもあったし、「椰子樹」に拠っていた者たちには刊行を継続する意欲も方

法も失なわれていた。

そうして6年後、1947年の12号から復刊となるのであるが、この間モジ近郊居住の数人の会員が中心となって“ひそかに”「林泉」と呼ぶ手書き謄写版の歌誌を発行し、これが第4号まで続いたところで「椰子樹」の復刊が実現するのである。この「林泉」の発行は、戦時下の“敵性国人”の立場に置かれた作歌者達にとっては「椰子樹」復刊までの“つなぎ”の役割をはたしたものであり、また復刊への土台となったものである。

「椰子樹」は戦時下6年間の休刊時代を除き、年4～6回の刊行が概ね順調に続き、1988年6月現在まで通巻216号となっている。

1930年代における日系社会の短歌人口は200～250人と推定され、地方短歌会15～20と見られているが（移民70年史254頁）、現在の「椰子樹」会員は200余名、これに新聞歌壇投稿者を加えると、短歌人口は250～300名と推定されるので、“人口”だけでみると50年前と殆ど増減はないことになる。

ただ、日系社会の人口の都市集中化の影響で地方歌会の存続が困難になり、今も続い

ているものは10指にも足りなくなっており、地方で刊行されていた歌誌も全く姿を消している。しかし、コロニア短歌にとっても最も大きい問題は、作歌者たちの高齢化である。これはあらゆる文芸分野にとっての問題であるのだが、短歌は文語体を主として用い而も韻文であるところから、日本語へのかなりの程度の習熟を必要とするという条件のために、現在は「後継者」が生れるのは殆ど絶望と言ってよい状態にある。高齢化によって減少する作歌者の数を補う方法がない訳である。いまのコロニアの作歌者は、成人して移住した僅かな幾人を除いて、殆どが準2世によって占められている。そうして「椰子樹」による平均年齢はおよそ70才と推定されている。

戦後に発刊された諸新聞は各自歌壇を設けてコロニア短歌の興隆に尽した。それは現在も続いていて「椰子樹」と共にコロニア短歌を支える役目を果している。

移民70周年を記念する事業として、椰子樹社が中心となって刊行した「コロニア万葉集」は、「移民の生活と心情を表現している作品」という視点に立って、戦前戦後の作品から収集編纂したものであるが「移民の精神史の一半を描くもの」或いは「時代の証言としての移民の歌」として高い評価を受けた。

「コロニア万葉集」は、戦前作品 9 9 1 首、戦後作品 5 6 4 3 首、計 6 6 3 4 首、作者数戦前 2 6 9 人、戦後 1 1 0 9 人、計 1 3 7 8 人によって成っているが、応募、抽出を合わせての選考対象作者数は 1 5 9 9 人（戦前 3 1 1、戦後 1 2 8 8）同作品数は 1 万 5 0 6 2 首（戦前 1 6 0 0、戦後 1 万 3 4 6 2）である。

2. 俳句

同じく五・七音と文語体を基本とする韻本短詩型ではあっても、短歌に比べてより短かく相寄って楽しむ（娯楽性）という雰囲気を持ち得る俳句は、移民社会に文芸活動の行なわれ始めた当初から、作者は他の分野に比べて数が多かった。前出「おかば」が創刊された 1 9 3 0 年代の初め頃で、全ブラジルの俳句会は既に 4 0 以上あり、俳句人口は 4 0 0 人あったといわれる。（移民 7 0 年史 2 5 3 頁）、またそれぞれの会が謄写版刷りの句誌をもっていた。

初めに掲げた上塚周平の作品をブラジル俳句第 1 号と確認する術はないが、内容は確かにそれにふさわしい。

だが、ブラジルの移民社会に俳句を根強く育て上げたのは、新聞、雑誌の文芸欄と言う発表の舞台が提供されたと言う幸運に恵まれたことは否定できないとしても、1927年5月に移住した佐藤念腹の力量と闘志であった、としなければならない。

そもそも念腹の移住の目的はブラジルに俳句を普及させることにあった、と言われるほどで、師の高浜虚子から念腹は出立に際し、「畑打って俳諧国を拓くべし」の餞けの句を贈られている。「ホトトギス」の客観写生、花鳥諷詠を唯一の俳句道として信奉した念腹は、他の文芸ジャンルとの交流はおろか、俳句の他流との接触をも肯じようとしなかった。弟子にも許さなかった。

また日系社会の他の文芸指導者と言われた人々とは異なり、句誌経営と作句指導をその職業とした、という点でも特異な存在であった。新聞、雑誌文芸欄での指導のほか、第2次大戦終結後3年の1948年に、念腹は俳句誌「木蔭」を創刊して指導を強化した。これによって念腹は“俳諧王国”をブラジルにうち立てたのであった。

「木蔭」の会員はだいたい800人であったと言われている。そして念腹を絶対的に信奉する集団でもあった。

戦前において最も有力な俳句誌として創刊されたものに、1937年の「南十字星」がある。

これはサンパウロ駐在総領事市毛孝三（暁雪）の斡旋・助力があり、木村圭石、佐藤念腹ほか、当時の有力俳句作者が発起人であったが、僅か3号で廃刊になった。短期間で挫折した原因は詳らかでないが、有力者間に俳句の在り方に対する意見の相克があった、という想像は許されるであろう。

戦前から、客観写生を信奉するホトトギス派に対立するものとして、主観を尊重する所謂「現代俳句（新興俳句）」の作者も存在したが、ホトトギスの念腹に比肩し得るほどの吃立した指導者と言ったものは存在しなかった。そのため、まとまった大きな力とはなり得なかったが、しかしこの派の活動は活発となり、戦後になってそれぞれのグループが機関誌をもつようになった。

1972年に幾つかの句会の集合体として「ブラジル俳句作家協会」が作られ（2年後に「ブラジル俳人協会」と改称）機関紙として「季刊ブラジル俳句」を創刊した。この現代俳句を標榜する作句者たちの数はおよそ300名である。

佐藤念腹は1979年12月に逝去したが、その直前の10月「木蔭」は通巻372号で廃刊、11月からはこの後を継ぐ「朝蔭」が発行され始めた。「朝蔭」は体裁、編集方式とも「木蔭」と全く変るところがない。

1986年に到り“伝統俳句”はさらに2つの個人経営月刊俳誌が加わる。いずれも3月創刊の「蜂鳥」と「小雷」であるが、現在は、「朝蔭」「蜂鳥」「小雷」3誌の鼎立時代の様相を呈している。地方俳句誌としては1977年創刊のマリリアのイペー吟社機関誌「イペー」が月刊謄写版刷で発行されている。

新興俳句の方では定期、季刊もしくは不定期刊行の形で「麻」「原点」「同素体」「火焰樹」「ブラジル俳句」などが発行されている。日系社会の諸文芸のうちで、数的に作者が最も多いのは俳句で、およそ800～1000名という推測がある。

短歌の場合とは異なり、殆ど全伯的に各地に俳句会があり、その作品は前出句誌及び新聞の文芸欄に発表されており、全伯的規模の俳句大会が毎年幾つか開催されていて、盛況と称することができる。また3日刊新聞が俳壇を設け、それぞれの選者を置いて指導に当たらせているのは短歌と同じである。

しかし作者の老齡化はここでも不可避の事柄であって、若い世代からの参加が到底期待できないとすれば“コロニア俳句”の衰微は当然の成り行きとしなければならない。

句集、もしくは句・文集の刊行数が多いことも、コロニアの文芸ジャンルの中では目立っている。また日本の有力俳句誌（結社）とのつながりが強く広いこともブラジル俳句界の特徴である。

なお、農業誌「アグロ・ナッセンテ」及び「のうそん」にも俳壇が設けられて、活発な発表がみられる。

俳句がブラジルの文化人、文芸人の間で関心を持たれ始めたのは古いことである。近年はかなり“勢い”をもって普及しつつある。「ハイカイ」研究グループ「グレミオ・イペー」があり、時に応じて研究会を開き、年1回のブラジル語俳句の大会を開催している。日本移民がもたらした文芸形式の中で、ブラジル人の間に普及し始めているのは俳句だけである。

3. 川柳

戦前の`コロニア川柳`の拠点となったのは雑誌「農業のブラジル」で1929年に柳壇が設けられている。新聞が作品発表の場であった短歌、俳句とは、この点で異なっている。

人事、風俗、世事の諸相を鋭く捉えて諷刺するのがこの詩型の特徴であるから、移民の生活には素材は幾らでもあった。ただしブラジルの移民生活での経験、見聞がなければ注釈抜きでは理解の及ばない作品も多かった。例えば「その親父指を三本出して見せー南天坊」は、移民間に適齢期の娘が少なかった時代には`娘三コント`という値段一三コント払えば娘を嫁にくれてやろうーがあったことを知らなければ、この句は何のことか分からないであろう。

作者数は俳句、短歌より少なく「農業のブラジル」での発表者は延べで300人と推定されている。

戦後の川柳界は戦前よりも盛んである。3日刊紙もそれぞれ柳壇を設け、特定の選者

を抱えている。戦後に創刊された雑誌「よみもの」がいち早く川柳欄を設けたのが、隆盛のいとぐちとなった。

1950年、全伯の作者の拠りどころとなる「川柳」（のちブラジル川柳）が創刊された。川柳の傾向にも、伝統的な詠風と前衛的といえるものがあるが、現在ではどうやらその中間的なところで落ちついている、という見方ができるようである。

1950年代の初め頃は各地の吟社数も10指に余るほどであったが、やがてその殆どが消滅する。原因は中心的な存在であった作者の他地方への転住である。グループとして盛んな活動を見せているのは、ロンドリーナ（パラナ州）の「親和」くらいのものである。

専門誌としては、季刊的な「ブラジル川柳」が全伯誌的な性格を持ち、前記「親和」社が不定期ながら「親和」を刊行している。

ブラジル川柳界の一つの特色は、海外作者との連絡をとり、国際的な活躍をしていることで、各国での大会には相互に作品の応募が行なわれている。現在作者数は潜在的なものを含めて100名程度とみられる。

4. 詩、歌謡（民謡、童謡を含む）

戦前の文芸の中で発表活動の淋しかったのは詩である。新聞が発行され始めると、詩の形をしたものが時々現われるが、ひどく稚拙なものであった。新聞自身、これらを発表するのに「歌壇」というタイトルをつけたりしていて、扱う側の認識も漠然としたものであったことが窺われる。

1930年代に入って、発表活動もやや活発化し、作品にも質的向上がみられるようになるが、作者は少なかった。

1937年に創刊をみた「地平線」は、詩だけでなく「文芸作品の質」ということに目を開かせるのに功績があった、といえるようである。

戦後の1950年代に入ると、個人あるいは合同の詩集の刊行が見られるようになる。詩の質ということでは、戦前のそれとは比較にならない向上がみられる。だが、新聞、雑誌への発表は、他の短詩型に比べ、至って少ない。

会員制度の専門詩誌としては1976年創刊の「亜熱帯」がある。また「亜熱帯」に先立ち「コロニア文学」から派生した「コロニア詩歌」が1974年に創刊されたが

(小新聞型月刊)「コロニア文学」廃刊後の総合文学誌「コロニア詩文学」の創刊はこれを母体としたものである。

5. 小 説 (その他)

1910年代の後半からサンパウロ州内奥地に日本移民の集団地、いわゆる植民地が作られ始める。1920年代に入るとこの趨勢は益々活発になっていった。

植民地は、その殆どがコーヒー耕地のコロノ（契約雇用労働者）を経験したものが集まり、原生林を拓いて作ったものであるが、新聞の発行が軌道に乗り、意見発表の場ができると、移民とは何か、移住とは何かというような問題が、新聞自体の主張として、また移民の中の“思想家”によって論じられることが多くなった。

「植民文学」つまり移民生活の実体とその感情生活を主題とする小説を待望する声が現われるのは、1920年後半に入ってからである。“植民文学論”と呼ぶべきものも新聞にしばしば発表された。

移民社会で最初に新聞に発表された小説は1923年にブラジル時報に発表された坂

井田人間の「狂伯爵」とされている。（「移民70年史」252頁）。この作品は社会主義的イデオロギーを含むものと言われているが、以後新聞紙上に現われる数々の作品は、当然のことながら極めて水準の低い、異国情緒（エキゾチック）に溺れた興味本意のものが殆どであった。

1932年にはブラジル時報が「植民文芸懸賞短編小説」の募集を始め、これは1937年の第4回まで続けられた。またこれに続く形で日伯新開、聖州新報、農業のブラジルなどの紙誌に小説の発表が行なわれるようになり、移民の創作欲、発表欲を刺激した。移民が書く小説の水準もこの時代になると高まってきて、現在においてもなお鑑賞に堪える作品も出現する。いわば“コロニア小説”の最初の興隆期をなしたのである。前出「地平線」の創刊も、このような気運の中においてであった。

戦後におけるコロニアの小説は、1948年創刊の娯楽雑誌「よみもの」が1947年に始めた短編小説の募集で幕をあけた。この時の応募作品は172篇にのぼったといわれるが、如何に多くの者が、世界大戦を挟む前後7～8年の間に、言いたいこと、表現したいことを抱え込み鬱積させていたかを物語るものと言える。他の文芸ジャンルで

もこれは同じであった。

太平洋戦の祖国日本の敗北が、移民の精神に与えた衝撃は計り知れないものであった。

“腰掛け出稼ぎ移民”から永住への意識転換は、敗戦の苦渋の中から生じたものであった。

文芸、文学の上にも、それは大きな影響を与えた。このことが直ちに小説作品の上に現われてくる訳ではなかったが、移民とは、移住とはを問い、見詰めることの深度は、戦前のそれとは比ぶべくもないものとなった。

「よみもの」廃刊後、この雑誌の母体であったパウリスタ新開が毎年短編小説を募り作品を発表していたが、1957年の創刊10年の記念事業として「パウリスタ文学賞」を設けた。

これは以後毎年募集と発表を行なっている。

その他の“小説発表の場”の動きを列举すると、▽1949年創刊日伯毎日新聞が小説を掲載するようになり、1951年に懸賞超短編小説と銘打って募集を始めたが、

長くは続かなかった。▽1951年創刊「パラナ文芸」が盛んに小説を発表し、この時代の文芸興隆の一翼をになう形を見せる。▽1960年、コチア産業組合機関誌「農業と協同」が同名文学賞を設定、1971年の第11回まで継続。▽1964年、前出の日伯毎日新聞が再び「日伯毎日文学賞」を設定したが2回だけで終る。▽1971年、サンパウロ新聞が同名文学賞を設けたが1回だけで中止。▽1969年創刊の教養誌「のうそん」が1979年に「のうそん文学賞」を設定、現在まで募集と発表を継続。

戦後のコロニアの小説について語る場合、1966年に創刊された「コロニア文学」誌を除くことはできない。この創刊は、戦後の“文芸のルネッサンス”ともいえるべき興隆の気運を土壌としたものであった。

1953年から始まった戦後の移住者の中から新しいエレメントが小説分野に加わって来たことも、この文学誌を生むもう一つの契機となった。この点では、戦後移住者からの参加が極めて少ない短歌、俳句等の短詩型の場合とは異なっている。「コロニア文学」はコロニア一般からもかってない関心を寄せられて会員は一時期800人を数えた。

現代的背景と経験の異なる、戦前移民と戦後移住の作者たちの、移民の姿と、他国移

住の意味を探ろうとする真剣な姿勢がこの時代の各文学賞作品に見られた、と言える。

「コロニア文学」は1977年の第32号を以て廃刊となったが、10余年にわたり、創作発表の場となり、多くの“才能”を登場させた功績は大きい。この間、戦前戦後を通じての小説のアンソロジーと言ふべき「コロニア小説選集」3巻を刊行している。

このような昂揚した状況の中で、ブラジル日本文化協会はコロニアの文筆活動を励ます目的で1968年に「コロニア文学賞」を設定した。（1981年度から「コロニア文芸賞」と改称）。選考委員会を設けて、その年の最も秀れた作品、或いは文筆活動（個人またはグループ）を選び、表彰している。

「コロニア文学」の後を継ぐ形で「コロニア詩文学」が同名の会を作って創刊された。小説ほか散文を主体としながらも、あらゆる文芸分野を含んでいることは「コロニア文学」の場合と同じである。ただ、これの創刊の経緯としては「コロニア文学」を継承するというよりも「コロニア文学」から派生していた「コロニア詩歌」を母体としたもの

である。

なお「コロニア詩文学」は創刊の中心的存在だった武本由夫の死後、その名を冠した「武本文学賞」を設け、小説、体験記、随筆、紀行、詩、短歌、俳句、川柳を対象として毎年 募集と授賞を行なっている。

(註・本稿は「移民70年史」及び「コロニア詩文学」掲載「コロニア文芸史」を多く参考とした)。

Ⅲ．美 術

日系コロニアの文化活動で、美術部門ほどブラジル社会に浸透しているものはない。それは、もはや日系という狭い社会の枠を越えて、ブラジルの美術界に大きな影響力をもつに至っている。

日系コロニアに美術運動らしいものが現われるのは1930年以降のことである。1931年1月、リベルダーデにあった日本倶楽部で、コロニア初の公募展が開かれた。この催しが、コロニアの美術家たちを結集させる大きなきっかけとなった。

1933年の暮れから翌年1月にかけて、サンパウロ州の官展、サロン・パウリスタ・デ・ベラス・アルテスの第1回展が開かれ、これには佐藤豊松、富岡清治、半田知雄の3人が出品して、以後、常連のサロン出品者となるが、ほか多くの日系画家もこれに出品した。

1935年3月、「サンパウロ美術研究会（聖美会）」が創立された。発起人は富岡、半田、田中垂人、根本市五郎、西田春一、高岡由也、玉木勇治、桧垣肇、高橋吉左工門であった。

翌36年からは展覧会その他を催し、1940年までそれが続いた。1939年リオ在住の高岡由也は、リオ国展に自画像を出品して、日本人としては初の銀賞を受けた。

戦後は敗戦によるショックとそれに続く日系社会の対立という異常な状況の中で、再び画家仲間が相集う機会を得たのは、1947年3月になってからである。リオからサンパウロに転住した高岡の奔走で、サンパウロ美術研究会は「サンパウロ造形美術研究会」略称は従来どおり「聖美会」として再発足した。

しかし、この時には半年あまりや月 1 回の集会も中止する状態におちいった。その原因を半田は「中堅会員が生計のために忙殺されるような苦境だからだ」と指摘している。絵では食えない時代だったのである。



聖美会初期のリーダーたち

当時のコロニアの暗い世相に明るい話題を投げかけたのは、ジョルジ森、フラビオ・シロー・田中の両 2 世であった。15 才の少年ジョルジ森は 1947 年の 2 月と 8 月に個展を開いて好評を得、フラビオ・シロー・田中は、太い線と大胆な色彩による描写力

で将来を嘱望された。後年あいついで2人はフランスに渡り、ヨーロッパ画壇で活躍することになった。

1948年に鈴木威（建築技師）の個展を皮切りに、高岡、半田の個展がおこなわれたが、日系人以外の間にも好評で、売上点数も多かった。この頃、半田、高岡、玉木を中心とする研究グループ「グルッポ・キンゼ」が生れたが、このグループの3分の1は新進のブラジル人画家であった。

1950年代に入ると、ブラジル美術界の動きも括発となり、近代美術の開花期を迎えた。

それを象徴するものが、1951年に設立された「サロン・パウリスタ・デ・アルテ・モデルナ」と、リオ・デ・ジャネイロ市の「サロン・ナショナル・デ・アルテ・モデルナ」であり、この年の10月にサンパウロ近代美術館が主催し、市が後援して開かれた「サンパウロ・ビエンナーレ」の開設であった。とくにサンパウロ・ビエンナーレは絵画、彫刻、デッサン、版画、建築を含む総合的な国際展であった。

第1回ビエンナーレには13人の日系画家が入選したが、フランスからは「サロン・ド・

メ」に属する作家たちが出品しており、それらの作品は戦後の美術家が新しい概念として受入れていた非具象、半抽象に属するものであった。

ブラジル美術界の活気はコロニアの画家にも刺激を与え、聖美会の動きも活発になった。

1952年5月に聖美全主催の第1回コロニア展が開かれ、フラビオ・シロー・田中が第1回のコロニア賞を獲得した。以後コロニア展は毎年開かれるようになるが、第2回のコロニア賞は間部学、第3回は福島近が受賞し、やがて彼らはブラジル画壇に活躍の場を広げていく。コロニア画壇にも新しい時代が到来したのであった。

デビュー以来、精力的な活動が続けていた間部は、1956年にサンパウロ近代美術展で小金賞、翌57年には大金賞を受賞さらに58年には同展で州知事賞を受け、59年にはブラジルにおける美術の年間総合最優秀賞の第1回レイネル賞、さらに第1回バリー青年ビェナールにはブラジル代表として参加、ブラウン賞（最高賞）を獲得した。

戦後日本からの移住が再開された1950年代の後半から60年代の初めにかけて、戦後の日本で美術運動の洗礼を受けた若い画家や彫刻家の移住が目立った。この当時移

住し、現在ブラジル画壇の第1線で活躍している作家をあげると、抽象画には若林和夫、近藤敏、越石幸子、楠野友繁、鈴木幸男、金子謙一、榊原久雄らがおおり、具象画には木暮光孝、白井久雄、三浦義幸、中島岩夫、田中慎二らがいる。彫刻では土本真澄、小原久雄、豊田豊といった人たちが代表的な作家といえよう。

現在、コロニア内で工芸熱は盛んで、日本の伝統工芸の普及と紹介を目的にした工芸作家協会は1968年に発足して以来、毎年工芸展を開いている。会の中心となって活動しているのは、陶芸の鈴木章子、仲谷哲昇、漆工芸の今雪皓三、永田昌三、金属工芸の竹川輝信染色の金子謙一らである。

聖美会が発足に当って、とり決めた目的の一つに「年少者の指導」があるが、それは1958年から「子供のための絵画教室」として始まり、現在も続いている。情操教育面の少ないブラジルでは画期的なことであり、最近は外国との交流もある。

1970年になるとコロニア展の出品者は100名を越える一大勢力となったが、コロニア画壇の内部もまた複雑になってきた。聖美会は画業一筋では生活のできなかつた時

代の 1935 年に研究会として、画家仲間の親睦機関として生れたものであったから、戦後移住の新しい会員と、戦前からの古い会員とでは、考え方に相違が現われるのは当然のことであった。

とくに戦後の具象から抽象、さらには 1960 年頃から抽象美術の変質、具象傾向の再台頭と極端な世界的流行が現われたこの時期には、理論上の対立は避けられないことであった。

「聖美会は目的を失なった、解散すべきだ」という意見が出たのもこの年である。ブラジル作家として世界の舞台で活躍できる作家を数多く輩出したコロニア展は、こうして発展的解消をすることになり、1972 年からは新たに「サロン・文協」として再発足した。

また、1960 年代の後半から後述の現在も活躍中の 2 世の活躍も目立ってくる。1979 年 9 月、パラナ州開発銀行が主催した日系画家招待展がクリチーバ市でおこなわれた。これには日系を代表する 32 人の作家が参加した。この 79 年の最後を飾ったのは大竹とみえで、その年の美術活動に対して与えられる「美術家連盟の最優秀賞」を

受賞した。

1980年代の日系美術界は、先駆者の半田、抽象派の間部、福島、大竹、若林などの活躍とともに、60年代にブラジルにやってきた作家たちも独自の表現手法に一層磨きをかけ、さらに多くの新しい2世作家が出現したことが80年代のきわだった特徴である。

これらの新しい作家群を、美術の習得過程とその活動範囲で大別すると、①美術単科大学の教師と学生、②サンパウロ大学建築学部の教師と学生、③はこれらと別の過程で勉強し、日系コロニアとも離れた独立グループに属するものの3つに分けることができる。

①のグループには中野トシフミ、大類ラエルチ、曾我部ミルトン、ヒロ・カイ、橋本マダレーナ、岡本綾男、奥村リージア、石川マリオらがあり、②の建築学部出身グループには福島隆、金子太郎、若林亮、リカルド・ウーなどがいる。

彼らは桶野友繁など実作者の教師たちから激しく刺激されながら、技法と理論における実験的な試作を数多く繰返している。その作品は、今後の発展に大きく期待されるも

のもっている。

1936年から1970年までの「コロニア展」、それを引継いだ「サロン文協」は1988年で第17回目を迎え、また1968年に始めた「工芸展」は第21回、1958年に始めた「児童絵画展」は第27回、1984年に第1回を催した「陶芸展」は第5回を迎えているが、それぞれ年毎に参加数と出品数が増え、多数の新人作家を生み出している。

とくに1980年以降の「サロン文協」は戦後移民と日系2～3世、また日系以外の一般の出品が多くなっている。この現象は、日系コロニアの芸術活動が、すでに日系という枠を越えて、ブラジル社会に浸透していることを示すものである。

(本稿は「ブラジル日本移民70年史」1980年と「ブラジルにおける日系人・その生き方と芸術」1988年発行を参考とした。)

IV. スポーツ

移民初期、サンパウロ州内各地に植民地が作られ、そこでの生活が幾らか落ちつく頃までは、移民には娯楽（集团的）というものはなかった。

それでも、モジアナ線のグワタパラ耕地のような日本人コロノの多くいたところでは娯楽としてのスポーツが考えられたのだろう。1914年8月31日に天長節を祝って相撲大会を催したという話が伝えられている。これが日系社会における相撲大会と呼ばれるものの初めであろう。出場力士は30名余であった。

相撲は何ひとつ用具を必要としないし、また日本人の老若男女すべてが知っているスポーツであったから、一番手っ取り早く試みられた訳である。

サンパウロ州内奥地に植民地が生れると、娯楽と親睦を兼ねた各種のスポーツが考えられるようになり、以後こんにちに到るまで、移民社会老若男女共通の娯楽としての役割を果たすことになった。

a . 相撲

1920年代の初期、最も早く多くの植民地が作られるのはノロエステ鉄道沿線であるが、スポーツの興隆もこの地方が先駆けとなったのであった。相撲もまずこの地方において盛んになり、以後、南聖、ソロカバナ、パウリスタ各地方でも始められるようになるのであるが、後に触れる陸上競技や野球のように、植民地内の競技から地域の競技、さらに一鉄道沿線単位の競技を経て最終的には全伯的な地域対抗競技（全伯大会）というはっきりした形はとらなかった。

その理由の一つとして考えられるのは、1951年8月ブラジル相撲を指導するために来伯した日本相撲協会の笠置山が指摘して「ブラジルの相撲は日本の宮相撲や職業相撲の最も悪い面の様式を取り入れているが、これは改革を要する。日本の青年相撲か学生相撲のように体育化し、お花の如きはいち早く廃止するよう。青年相撲は素人相撲であることを認識されたい」といっているように、青年の純粋なスポーツとして中々受け容れられない面があったのではないか、という点である。

1962年9月、伯国相撲連盟（ブラジル拳闘連盟所属）が組織されてから、アマチュ

ア・スポーツとしての形を完全に整えて、こんにちに到っている。戦後移住者の中に秀れた相撲人がいたことも刺激になって、ブラジル育ちの青少年の中に豊かな素質のある者が現われるようになっている。

日本の学生相撲との交流、選手団の日本派遣も行われるようになり、職業相撲界入りも後を断たないという状況にもある。日系以外のブラジル人の中からも秀れた選手が現われ始め、現在では相撲は日系コロニアだけのスポーツではなくなっている。

全伯相撲連盟主催の全伯相撲大会は、1962年8月のモジ大会を第1回とし、以後毎年開催され、幼年、少年、準青年、青年（一般）各部が年齢別カテゴリーによる競技（選手権）を挙行している。また色々な祝賀行事の中の一イベントとしての大会も数多く挙行されるようになっているが、どちらかという打野球や陸上競技ほどには一般的には普及しないまま今日に到った。

1988年度の主な行事としては、▽伯国相撲連盟主催第10回聖州幼・少年・準青年相撲選手権大会＝2月21日、サント・アンドレー市営スポーツ・センター。出場10チーム、選手300名（19才まで）、優勝パウリスタ。▽主催同第27回全伯相撲

選手権大会＝5月15日、ボンレチーロ（聖州）出場チーム、サント・アマーロ、ABC、レステ、オエステ、ノルテセントラル、サンパウロの7チーム。選手数250名。団体優勝オエステ、カテゴリーは青年、準青年、少年、幼年、ミリン（ABC）。▽日本移民80周年記念大会＝7月23～24日、モジ市ナウチコ・モジアーノ・クラブ競技場、参加チームはサンパウロ、サント・アマーロ、ABC、セントラル、レステ、オエステ、ノルテ、スドエステ、ノロエステ、パウリスタ、パラナ、南リオ・グランデ、リオ・デ・ジャネイロなど4州13チーム、参加選手400名。この大会には日本相撲連盟派遣の「高校・中学ブラジル遠征団」36人とパラグワイから10名が参加した。

b. 陸上競技

移民社会のスポーツの“花形”は、かつては陸上競技と野球であった。この二つは比較的にな小さな集団地、植民地においても必ずといっていいほど普及していた。

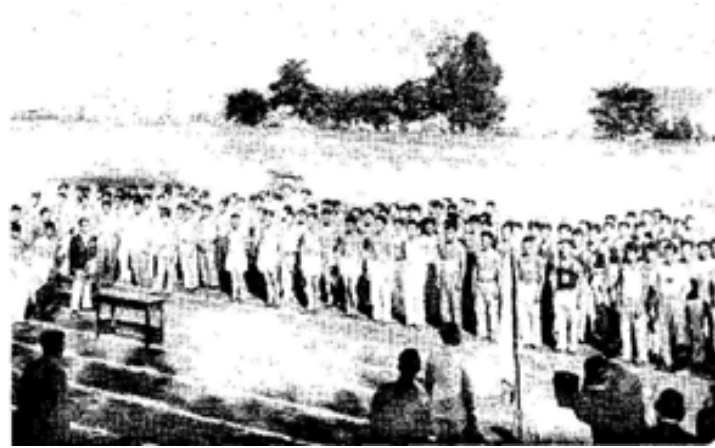
陸上競技は、投擲関係の幾つか以外には用具が不要であることで簡単に単独で練習することができたので、運動会の延長のような気安さで普及は容易であった。当初は競技

用スパイクなど持っているものは稀であった。

陸上競技は植民地内競技から、一駅内植民地対抗、そこで選手を選抜しての一鉄道沿線（あるいは集団の多して一地方）内対抗、またそこで選手を選抜して全伯選手権というパターンが確立されたスポーツであった。（因みに野球の場合は一鉄道沿線対抗大会での優秀チームが全伯大会に出場した）。

1930年、プロミッソンで開催された汎ノロエステ陸上競技大会は、移民社会で初めての大きく組織された競技会であったが、サンパウロ市及びその近郊には青年会の中に陸上競技部が設けられたのが多くなっていたので、呼びかけ会って1931年4月29日、サンパウロ市のクラブ・パウリスターノ競技場を借りて開催したのが第1回全伯邦人陸上競技大会であった。参加チームはサンパウロ、ノロエステ、コチア、レジストロの4チームである。

1930年代後半は戦前における全盛期で、ブラジルの一流選手に比肩するほどの好記録を生む者も現われるようになった。1933年には日本選手団6名のスポーツ使節の来伯があり日伯対抗競技が催され、1939年には日本の陸上競技界の至宝南部忠平



サンパウロでの全伯陸上入場式

が指導に来て、競技の水準を高めるのに貢献した。こうした中で最も華やかな行事となったのは、日本の「皇紀2600年記念全国大会」にコロニアから6名の選手を派遣したことであった。

第2次大戦下で中断されていた全伯邦人大会が復活するのは1947年の第11回からで、翌1948年からは少年少女の全伯大会も開催されることになった。これは後に「全伯陸上」に包括されて今日に到っている。

陸上競技は、勝敗のほかに記録の更新が目標の第1とされるが、1931年の第1回全伯邦人大会の記録と1988年までの各種目最高記録は次の通りである。

全伯邦人陸上競技大会記録の変遷

	1931年第1回	1988年までのコロニア最高記録
100m	12秒2	10秒1
200m	25秒6	20秒9
400m	57秒8	48秒7
800m	2分17秒4	1分55秒7
1.500m	4分52秒2	3分54秒8
5.000m	8分54秒2	14分04秒5
10.000m	0分27秒2	31分56秒4
110m障害	15秒8	15秒4
400mリレー	49秒0	41秒8
1.600mリレー	4分04秒5	3分18秒3
走高跳び	1m60	2m00
走幅跳び	5m90	7m37
棒高跳び	3m00	4m07
三段跳び	11m59	15m15
砲丸投げ	9m14	14m10
円盤投げ	27m74	40m00

槍 投 げ	4 0 m 5 7	6 8 m 7 6
鉄 槌 投 げ	3 7 m 2 0	4 0 m 4 6

年齢層別に少年少女男女の競技が行われるようになったのは戦後のことである。もちろん戦前においても日本人学校では競技は行われ、対抗競技も開催されてはいたが、現在ほど組織化されたものではなかった。

第2次大戦終結後のコロニアの“勝ち負け問題”は陸上競技界にも波及して、二つの“全伯邦人”が存在するという歪んだ状況が1950～1955年の間にあったが、1955年から2世を主体とするビラチニンガ文化・体育協会（サンパウロ市）が主催する一つの大会に統合された。

1950年に南部忠平が5名の選手を引率して再度来伯し、コロニア競技界だけでなく、ブラジルの選手団にも大きな刺激を与えた。

現在3年毎に日本陸上連盟の招待で国民体育大会（国体）に選手団を派遣し、見るべき成績を挙げているし、ブラジルの競技界においても注目される選手が出るまでに、日

系陸上競技は向上している。

1988年度の主な行事。▽ピラチニンガ文化体育協会、アテ・ア・ビスタ会共催第52回全伯日系競技大会＝7月30～31日、イビラプエーラ競技場。選手566名（男子13～30才362名、女子同174名）。参加アナスピ協会青年部、聖市近郊連盟、ストエステ、パウリスタ、ノロエステ、パラナ、アララクアラ、ブラジリアの8チーム。総合優勝聖市近郊連盟（カテゴリー＝少年、準青年、一般。▽ピラチニンガ文化体協主催、アテ・ア・ビスタ会後援第31回少年少女陸上競技大会＝5月8日、イビラプエーラ競技場、12チーム750名、44種目、総合優勝ストエステ。▽第13回ミリン大会＝9月18日イビラプエーラ競技場、18チーム1006名、団体優勝ベラビスタ（オザスコ）

C. 野 球

野球は相撲と共に移民社会の中で始められたスポーツでは最も古い歴史を持つものである。ただ野球は、サンパウロ市居住者の間で先ず始められ、後に植民地の造成期に農業地帯に広がったという点で、発祥と普及の仕方が陸上競技とは異なっている。

初めてブラジルで野球試合が行われたのは1910年代の初め頃、サンパウロ市にあったライト電力配給会社、ブラジル電話公社、米国総領事館、アルモール屠殺会社等の米国人作業員らの間においてで（パウリスタ野球連盟刊「ブラジル野球史上」）日本人の野球はそれに刺激されてのものであったと見られる。1916年、野球同好者が集まってチームを作りこれに当時の初代総領事松村貞雄が用具一式を調達するために500ミルレイスを寄付した、という話が残っている。試合の相手は前記米国人チームであったと推測されるのである。

これらの事情が動機となり1916年9月28日に「伯国日本人青年会」が発足し、野球ほか日本人間の諸行事を中心となって催すことになるが、1920年5月に至って、はっきりした組織の日本移民最初の「ミカド倶楽部」が誕生するのは、このような動きを土台としたものであった。

日本移民の植民地造成期に入るのは1910年代後半からで、1920年代になると急速にサンパウロ州西半分の地域に大小の植民地が増えるのであるが、野球は相撲や陸上競技とは異なり、球、グローブ、ミット、バット等の用具が必要であるため、植民地

創設初期の事情では容易には取りかかれなかったという一面がある。山の丸木を削ってバットを、農作物用麻袋を裁って熊手のような守備用具を、糸をぐるぐる巻きにし、町の靴屋で購めて来たナメシ皮で覆ったボールを、といったぐあいに愛好者自ら知恵をしぼって作る、ということも行われた。



アラツバ球場での全伯野球大会入場式

曲りなりにも皮製の守備用具、ボールや町の木工所製のバットが地方のチームに行き渡るようになったのは1920年代も終りから1930年代にかけての頃である（用具

入手が比較的に容易だったブラ拓、海興その他の農場、移住地の場合は別)。1930年代になると少年野球も次第に勃興し、次の野球全盛時代の土台となるのである。

1920年代に盛んであった地方としては、サンパウロ市、レジストロ、アニューマス海外興業農場、それにノロエステ線のアリアンサといったところである。珍しいのは1925年にモジアナ線セラーナ駅トランスバール耕地の日本人コロノが二つのチームを作って試合をしていることである。〔「ブラジル野球史53頁」〕。

各地で試合が盛んになるにつれて、全伯的な大会開催の声があがるようになり、1936年9月3～7日、サンパウロ市クルーベ・アンタルチカ蹴球場で第1回全伯青年野球大会が開催された。この時の参加はバストス、チエテ、パラグワス、地元サンパウロの4チームで、リーグ戦式による優勝はチエテであった。ただし、それ以前にも「伯国日本人野球リーグ戦」と名づけた大会が1924年から1929年まで毎年1回開催されていたが、アリアンサ・チームの3連覇の後、立ち消えとなっていたので、この全伯野球はその復興という意味を持つものであった。そうして1941年の第6回まで継続開催されている。なお、日本人の商社、企業の多いサンパウロ市では各目の野球部を

持つものがかなりあり、年中対抗試合や実業リーグ選手権が行われ、野球のメッカの観を呈していた。

陸上競技の場合に似て、一植民地内で始まった野球は一駅管内植民地チームの対抗試合、そこから選手を選抜しての一鉄道沿線各駅チームの選手権大会、その優勝チームが全伯大会に出場するというパターンができ上った。サンパウロ市の場合は実業リーグで選手を選び代表チームを結成して出場した。

第2次大戦終結後は、ブラジル人理解者にも呼びかけて、1946年9月24日、ブラジルの体育法に則る公式の「パウリスタ野球連盟」が設立された。以後この連盟主催の全伯青年野球選手権大会が1947年から年1回開催されている。パウリスタ球連主催または共催、後援で現在開催されている選手権大会は次の通り。

①ミリン（9～10才）②インファンチール（11～12才）③プレ・インファンチール（13～14才）④ジュニオール（15～16才）⑤ジュペニール（17～18才）⑥アダルト（18才以上～全伯青年）⑦セミ・ベテラーノ（35～40才）⑧ベテラーノ（40～50才）⑨スーベル・ベテラーノ（50才以上）。⑩全伯選抜地域対抗

(幼年、少年、準青年、青年、OB) このように選手権大会が多く存在し、国際大会出場も頻繁に行われて一見盛んとみられる野球であるが、往年の植民地の殆どが消失し、サンパウロ市をはじめとする地方都市部への日系人の著しい集中が行われた結果として、現在では野球振興の底辺をなすものとしての「まとまりのある日系集団」が薄弱化するか或いは片寄った形になったことを認めなければならない。今では各鉄道沿線で、野球チームが存続するところは極めて僅かな数に過ぎない。維持費が他のスポーツに比べて多大であることもチーム存続の大きな障害になる。国際大会出場などの華やかさがある一方で、野球は一定の地域に片寄った形で続けられており、往時のような“全日系コロニア”的状況にはないといえる。日系以外への普及も、関係者の努力にもかかわらず、今に到っても殆ど無いに等しいのである。

1988年の主要行事、▽第16回全伯クラブ対抗少年野球大会＝2月5～7日、ボン・レチーロ野球場、参加16チーム、優勝トヨタ。▽第40回全伯選抜青年野球大会＝4月29～5月1日、ボン・レチーロ球場、優勝ソロカバナ、参加10チーム。▽第

4 1 回全伯少年（ジュニオール）野球選手権＝5 月 8 ～ 1 0 日、ボン・レチーロ球場、参加 1 7 チーム、優勝コベル・コチア。▽第 4 2 回全伯青年野球大会（クラブ対抗）＝9 月 1 6 ～ 1 8 日、コチア、南伯、ボン・レチーロの 3 球場、参加 1 2 チーム、優勝コベル・コチア。▽第 5 回全伯ミリン野球大会（クラブ対抗）＝1 1 月 4 ～ 6 日、ボン・レチーロ球場、参加 1 5 チーム、優勝ロンドリーナ。▽第 1 7 回全伯クラブ対抗少年野球大会＝1 1 月 1 3 日、ボン・レチーロ球場、参加 1 5 チーム、優勝モジ・ダス・クルーゼス。▽第 3 0 回全伯ジュペニール野球大会＝7 月 1 ～ 3 日、ボン・レチーロ球場、参加 1 0 チーム、優勝コベル・コチア。▽第 1 6 回全伯クラブ対抗少年野球大会＝2 月 5 ～ 7 日、ボン・レチーロ球場、参加 1 6 チーム、優勝トヨタ。▽第 1 8 回クラブ対抗女子ソフト・ボール大会＝5 月 1 4 ～ 1 5 日、ボン・レチーロ球場、参加 1 1 チーム、優勝クリチーバ。

なお、甲子園出場チームから選抜された日本選抜高校チームが 9 月 2 日着伯、各地を転戦して 5 勝 2 敗。また慶応大学チームが 7 月 2 8 日着伯、各地で親善試合を行ない、1 0 戦全勝した。これらは移民 8 0 年を記念しての日伯野球の交流であった。

d. 柔 道

柔道は同じく格闘技のスポーツでありながら相撲とは異なり、かなりの知識と技術を有する者の指導を必要としたから、それほど早く移民の間に普及したとはいえなかった。しかし、ブラジルと柔道との関係は以外に早く生じている。

後に日伯新聞の社主になった三浦鑿（さく）は1909年に既にリオ・デ・ジャネイロ市でブラジル海兵団の柔道教師をしていたと伝えられているし、1911年には、日本移民の馬鈴薯栽培の祖といわれる馬見塚竹蔵がサンパウロ州警察で教え、後道場を開いたという記録が残っている。また前田光世六段（コンヂ・コマ）が1916年にアルゼンチンを経てブラジルに入りサンパウロ、ミナス両州の都市で興業試合を行い、いったん帰国後再渡伯して1920年パラ州ベレン市で指導に当たっていたことが知られている。

しかし、本格的に普及が始まったのは講道館三段大河内辰夫が1924年に移住して来てからである。1930年代の初め頃になると、移民の中になかなかな実力者がまじるようになり、それが道場を開いて青少年の指導に当る気運が生れた。1933年、大河

内を中心として柔・剣道家の協力のもとに「伯国柔剣道連盟」を結成することになり、6月18日サンパウロ市のカルモ労働会館において連盟発会式と第1回武道大会を開催した。

この年には続いてモジ・タス・クルーゼスに連盟中央線支部が作られ、以後パウリスタ、ノロエステ、ソロカバナ各鉄道沿線地域に幾つかの支部が結成された。この柔剣道連盟は1941年までに9回の武道大会を開催するが、第2次大戦下の事情のため、1942年に解散する。なお1939年の第7回大会には、日本外務省が講道館有段者2名を派遣した。

1930年代の後半頃には個人経営の道場がかなりあったが、これが戦後の柔道界の復活と共にブラジル人間に柔道を普及するのに大きな役割を果たしたのである。日系子弟の道場通いも急速に増える傾向となる。

1953年、大河内は「講道館柔道」の普及を計る目的のもとに講道館に要請し、日本選手権保持者吉松七段、大沢五段と引率者高垣八段の派遣となり、これを機会にコロンビア柔道界を一丸としての全伯大会が開催された。この時代になると、日系以外のブラ

ジル人の強豪が現われるようになり、アルセニオ・コスタ・マルチンス及びヅルバル・カストロ・エ・シルバーはこの大会の成績により講道館から五段を贈られた。

1957年、大河内の主導で「サンパウロ講道館有段者会」が設立され、これを土台として1958年「サンパウロ州柔道連盟」が結成された。

この頃から国際的な交流も頻繁になり、各種大会へ選手団が派遣される。移民が導入したスポーツとしては、柔道が最も広くブラジル人の間に普及するのであるが、これにはスポーツとしての娯楽性のほかに、護身術として秀れたものであることが認められたのも原因としてよい。

1962年、「柔道連盟」はそれまで所属していた「ブラジル拳闘連盟」から独立して、リオ・デ・ジャネイロ市に本部、各州に支部をもつ「ブラジル柔道連盟」となった。

日本から指導に来た有段者の中には永住する者もあり、とくに石井五段、岡野六段、関根五段らがブラジル柔道界全般の水準を高めた功績は大きい。中でも石井五段は帰化ブラジル人となって1972年のミュンヘン・オリンピックにブラジル代表として出場、銅メダルを獲得した。また1984年のロスアンゼルス・オリンピックでは、71

k g 級恩村ルイス、86 k g 級のカルモナが銅メダル、95 k g 級のビエイラが銀メダルをブラジルにもたらした。

さらに1988年のソウル・オリンピックではアウレリオ・ミゲールが87～95 k g 級で優勝する偉業を成し遂げた。

ブラジルは現在世界屈指の柔道人口を擁する国になっており、国際大会での上位入賞者が増えている。

いずれの大会にも日系選手の参加が多く、上位入賞に名を連ねている。移民がもたらしたスポーツのうちで、現在ブラジルに最も普及しているのが柔道であって ` J U D O C A (柔道家) ”は既にブラジルの言葉と化している。

1988年度の主要行事 ▽パウリスタ柔道連盟主催選手権大会（男女）＝5月14～15日、シリオ・クラブ体育館。▽第31回ブラジル・ジュニオール・セニオール選手権大会＝6月4～5日、サン・ジョゼ・ド・リオ・プレト体育館。

e . 剣 道

ブラジルでは簡単には調達できない用具を必要とするため、中々移民たちには取りかかれないスポーツであった。従ってごく一部ながらまとまった練習ができるようになるのは1920年代の終り頃から30年代初頭にかけてでサンパウロ市の聖州義塾とかエメボーイ農業実習場などの教育機関内に限られていた。

既に柔道の項でみたように、1933年に結成された伯国柔剣道連盟主催の大会に30名の選手が出場したのが剣道大会と呼べるものの最初であった。以来この連盟主催の武道大会に剣道の部が設けられて次第に盛んになる気運を生み、1941年の戦前最後の大会への参加は団体10、選手百数十名であった。

終戦後いち早く活動を始めたのは、スザノ、モジ・ダス・クルーゼスをはじめとするセントラル鉄道沿線地域とサンパウロ市近郊の集団地のそれで、これらが合同して1947年には伯国中央線剣道連盟が生まれた。これは前出の戦前の柔剣道連盟中央線支部が改称、再発足したものである。

しかし、戦後のコロニア挙げての混乱は剣道界にも波及し、幾つかの催された大会は

片寄ったものになることを余儀なくされた。

1959年の初め頃、ようやく全伯剣道連盟の新生となり、この年3月には全日本剣道連盟の海外支部第1号として加盟、11月21～22日サンパウロ市で第1回全伯剣道大全を開催した。

この時点における連盟傘下のクラブ、団体所属会員は全ブラジルで3000人余と称せられた。また1964年からは有段者剣道大会が毎年開催され、こんにちに到っている。

現在、サンパウロ州では中央組織としてパウリスタ剣道連盟があり、各州剣道クラブの中央機関として全伯剣道連盟がある。国際交流も最近ではかなり頻繁になり、3年毎に開かれる世界剣道選手権大会には毎回選手団を送り、優秀な成績を挙げている。柔道ほどの広い普及は現段階では望み難いとしても、今後に期待できるスポーツの一つである。

1988年度主要行事、▽第6回全伯有段者剣道選手権大会＝1月31日、ピラチニンガ文化体育協会体育館、参加チーム5州23クラブ、210人。▽第6回サンパウロ州

剣道選手権大会（個人戦）＝４月１７日、ブラジル日本文化協会体育館、カテゴリー男女別、幼少年、幼年、少年、段外、初段、４段以上。▽第６回全伯幼少年剣道選手権大会＝７月１７日、イビラプエラ総合体育館。

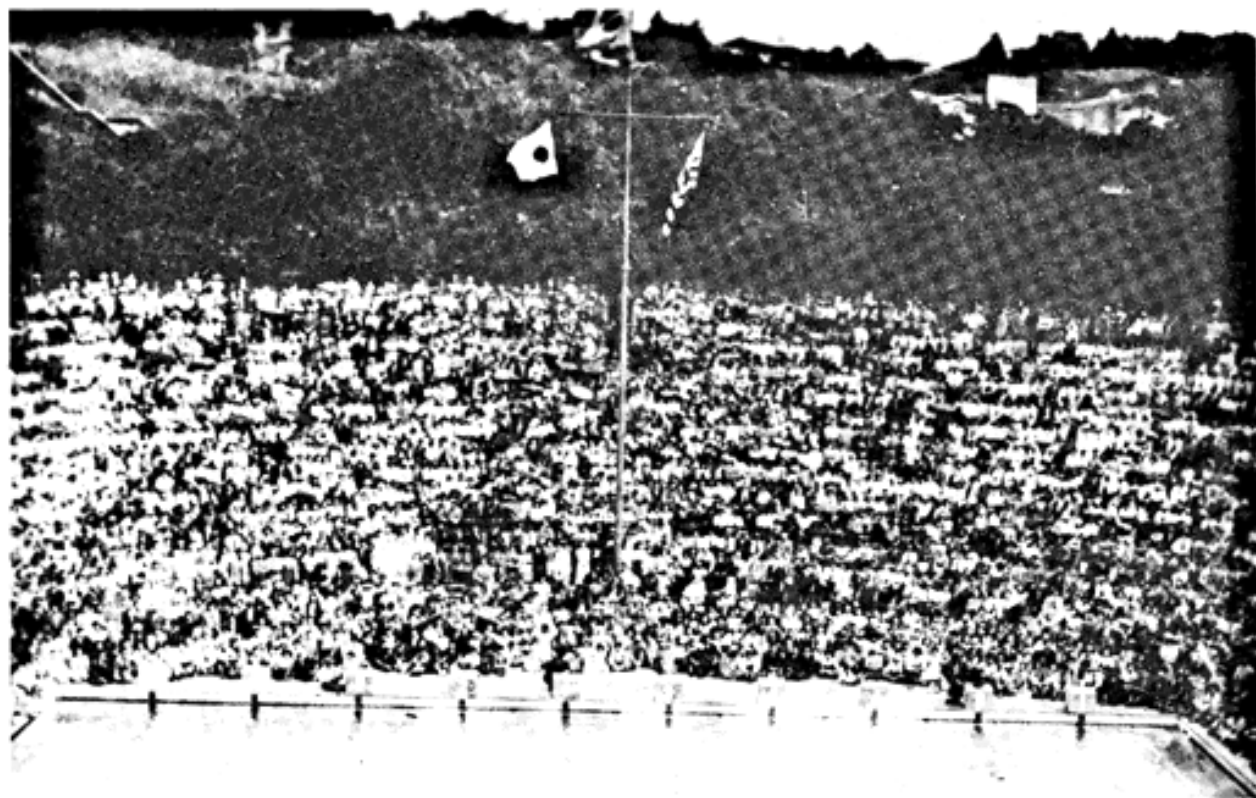
f . 水上競技

日系社会において、組織的な水泳の修練、競技が行われるようになったのは第２次大戦終結後のことである。１９３０年代に斉藤魏洋がブラジル海軍に招かれて水泳の指導をし、また佐藤寛一がＹＭＣＡでコーチをし有力選手を育てたことが知られている。佐藤の指導は戦後にも及んでいる。

ゝフジヤマのトビウオゝ一行がブラジルを訪れ、パカエンブー競技場プールで開かれたブラジル水泳選手権大会に出場したのは１９５０年３月２３～２６日のことで、戦後のコロニア挙げてのゝ大事件ゝかつ“欣快事”であった。開会式にはサンパウロ州政府の好意によって日章旗が翻えり「君が代」が軍楽団によって奏せられ、まだ戦後の暗い時代が後を引いていたコロニアの人心を一挙に明るくしたのであった。

日本水上選手団のブラジル訪問は、1949年に北米に招かれた古橋広之進ら日本選手が幾つかの世界新記録を出し「フジヤマのトビウオ」の名を奉られ、戦後沈滞の極みにあった日本人を驚喜させ、自信を取り戻させるのに一役果したことに刺激され、コロニアでもこれを招いて、勝ち組負け組の混乱が未だに沈静していない日本人間にも明るい空気を呼び込もう、という計画が州政府の賛同を得て実現したのである。

遊佐監督以下村山修一（主将）、古橋広之進、橋爪四郎、浜口喜博らは、パカエンブー競技場、リベロン・プレト、マリリヤ、リンス、アラサツバ、サントス、リオ・デ・ジャネイロ、ニテロイ、プレジデンテ・プルデンテ、ロンドリーナ、リオ・プレトの各市における競技で、世界新記録2、南米新2、日本新1の記録を樹立し、コロニアの“暗雲”を一気に吹き払ったかの観があった。このことがコロニア全般の水泳競技への関心を高めたのは疑う余地がない。



1950年3月23～26” フジヤマのトビウオ” 一行が来伯、ブラジル水泳大会に出場し、数々の新記録を樹立した。敗戦後初めての「日章旗」と「君ヶ代」は、コロニアの人心を一挙に明るくした。

マリリア市のヤーラ・クラブは当時水上競技で好選手を出しつつあったが、中でも岡本哲夫は1952年のヘルシンキ・オリンピックにブラジル代表として出場、1500m競泳で銅メダルを得、ブラジルの水上競技では最初の五輪入賞者となった。この競技での1位は米国の紺野、2位日本橋爪、3位岡本で、奇しくも日系の3人が金、銀、銅メダルに輝いたのである。

この時代から後、日系子弟の水上競技への出場は国内的にも国際的にも多くなり、同時に記録も著しく向上した。

日系によって組織された水上競技大会が初めて実現するのは1967年1月22日、サンパウロ州立体育館で開催された第1回全伯邦人水泳大会においてである。

1988年の行事、▽第22回全伯日系水上競技大会＝11月19～20日、イビラプエーラ体育館、カテゴリー（男女共）はジュベニール、一般、インファンチールA・B、ジュベニールA・B、安養寺盃、古橋広之進盃、吉田光男盃争奪戦（この争奪戦は日系に限らない）。

g . 卓 球

球さえ手に入れば、後の用具全部が手製で間に合わないこともない卓球（ピンポン）は移民の生活の中で早く親しまれたスポーツである。家庭内で、グループの中で簡単に男女共に楽しめるものであった。

戦前にも親睦試合、対抗試合は行われていたが、選手権大会というものがコロニアで始まるのは1950年に目伯毎日新聞が主催したサンパウロ近郊卓球大会が最初で、参加選手80余名であった。1951年からはこれが「全伯邦人卓球大会」と改称されて毎年開催されることになり、規模も大きくなっていった。

1950年代は日本の卓球界が世界的な好選手を輩出するようになったが、これはコロニアの卓球人に刺激を与えた。ブラジルの日系人にとっても、体格、体力などの面からいって男女共により適合性があるため、国内的に高水準の選手がまず生れることになった。

1958年の移民50周年を記念して日本から萩村伊知朗、田中利秋2選手が来伯、日系卓球界を指導した。1959年には、戦後移住の平崎義積がブラジル卓球ランキン

グ 1 位、高橋正剛がサンパウロ州準青年ランキング 1 位、女子では平崎美保子がサンパウロ州ランキング 1 位、高橋笑子が準青年南米及びブラジル 1 位などを筆頭にする活躍が記録されるようになったも この頃から日系選手がブラジル代表団の主力として国際大会に頻繁に出場することになるが、1988 年度の主な行事としては、▽1 月、北アイルランド大会参加、続いて西独、ベルギー、オランダ、フランスで親睦試合、▽汎アメリカ「最優秀 32 人」選手権大会＝4 月 10～17 日、キューバ。▽パウリスタ卓球連盟主催選手権大会＝3 月 13 日、イビラプエラ体育館、州内 35 地区 340 選手参加、総合優勝スザノ、どのチームも日系が主力を構成しているのが目立つ。▽第 38 回全伯日系卓球選手権大会（全伯卓球連盟、日伯毎日新聞共催）＝7 月 29～31 日、イビラプエラ体育館、全伯 12 区 690 選手参加。▽第 7 回矢尾板盃卓球大会＝8 月 6 日、イビラプエラ体育館、29 地区 420 人参加。▽パウリスタ卓球連盟幼少年卓球大会＝9 月 18 日、アグア・ブランカ州立体育館、24 地区 430 人参加。▽パウリスタ卓球連盟主催幼少、青年、婦人大会＝10 月 1～2 日、サント・アンドレ市営体育館、22 地区 470 人参加。

“日系 ” を冠しない諸大会でも、日系選手は各カテゴリー毎に上位の成績を占め、卓球は柔道と共にブラジルの第 1 線級の選手を多く出している点で特色あるスポーツといえる。

h. テニス

相撲、陸上、野球、卓球などは、移民の集団化と共にいつからとなく、どこからとなく自然に始められ広がったスポーツといえるがテニスはその “発祥 ” と広がり方の形がかなり異なっている。いわゆる “奥地 ” では、ボールを始めラケット、ネットなどの用具を手に入れるのが難しかったし、コート作りも他のスポーツに比べて技術を要した。このような理由から、テニスはサンパウロ市ほか幾つかの都市の居住者に限られ、しかも公館や商社筋の関係者が主なプレイヤーであった。

記録によると、サンパウロ市居住日本人のテニスの始まりは 1921 年頃で、1926 年に市内ブルックリン・パウリスタ区に日本人クラブがコート 2 両を作るまでは、エスツダンテス街付近のコート（正式のコートだったか否かは不明）で同好者が楽しむ程

度だったといい、同じ頃リオ・デ・ジャネイロ市でも数人が始めていた。

1927年9月に開催された全サンパウロ選手権大会で、パウリストアーノ・スポーツ・クラブに所属していた水上不二夫が優勝したのは移民社会スポーツにとって大きな出来事であり、同年11月13日には「日本倶楽部庭球選手権大会」、1928年には日伯新聞社主催の大会が開催されるなど、かなり活気づいて来るのである。以後1930年代の初めにかけてノロエステ、ソロカバナ、パウリスタ各地方の一部都市、植民地で盛んになっていった。

1937年12月のサンパウロ州選手権大会において、渡伯後間のない藤倉二郎（日本デ杯選手）が優勝した。庭球は日系社会のスポーツとしては普及の点では他に劣ったが、ブラジルのスポーツ界における成績という点では先駆け的存在だったといえるのである。

サンパウロ市、ノロエステ鉄道地方を主とするテニス興隆の趨勢の中で1941年8月「全伯邦人都市対抗第1回大会」がサンパウロ市サント・アマーロのコートで開催された。この時の優勝はマリリアで、ほか参加チームはプロミッソン、サントス、コチ

ア、サンパウロであった。

戦後になると、1947年にコチア・クラブのコートで第1回邦人全伯大会が举行され、パウリスタ、コチア、サントス、サンパウロ、ノロエステ各チームが出場した。以後毎年この大会は開催されているが、1950年代の後半頃からは2世の優秀選手が出るようになった。

女性の目ざましい進出もこの時代からである。

1988年の行事 ▽第42回全伯日系テニス選手権大会＝7月13～17日、コベル・コチア・コート、カテゴリー、男子単複A・B・C級、(プレ・ベテラーノ)(スーベル・ベテラーノ) エスぺシアル、ジュペニール、インファンチール、プリンシビアンテ、女子同、B級、プレ・ダーマ、ダーマ、ジュペニール、インファンチール、プリンシビアンテ。

i. 空 手

戦後に普及したものに空手がある。戦前においては「空事(唐手)」は沖縄県特有の

武技といった認識の程度であったが、戦後移住者の中になら多く日本の練達者があり、ブラジルの都市部で道場を開き普及に努めた。ブラジル人にも急速に普及し「アカデミア・デ・カラテ」の看板は到るところで見られるようになった。

柔道よりも護身術（一面では攻撃的“型”が強烈でもある）として“直接性”が形の上に表われている点もあって、特に日系以外に関心を持たれ、受け入れられたとみることができる。

ただ柔道の場合は講道館という強い統一組織体が存在するが、空手にはそれはなく、幾つもの流派がある。そのため、一つにまとまって全伯大会（日系であると否かを問わず）或は選手権大会とかはない。流派毎の選手権大会、また国際大会が開催され、交流は活発である。空手人口といったものの把握は現段階では難しい。

j . ゴルフ

戦前にも一部の日系企業、商社、総領事館関係者間で楽しまれてはいたが、一般移民社会にとってはエンもユカリもないものであった。

戦前の動きでは、1936年に蜂谷専一などを中心にタペサリニア・ゴルフ・クラブが作られた事実があるが、愛好者の殆どが既存クラブに入会してプレイをするといった程度であった。

ゴルフが広く日系社会の男女間に普及し始めるのは1950年代の後半から1970年代へかけての時代に、日本からの企業進出が“ブーム”とも呼べる勢いで行われ、それらの関係者にゴルフを楽しむものが多かったのが刺激となったものである。日本における経済発展と国民の生活水準向上に伴うゴルフ愛好者の増大がブラジルの日系社会にまで波及したともいえる。

この勢いに乗って、日系会員を主として創立されたアルジャー、P L、レーク・サイドなどのクラブがあり、それぞれ完備したゴルフ場を所有している。珍しい存在としては日系集団地バストスにクラブと競技場があることである。

全伯的規模の日系人の大会としては、1970年からパウリスタ新開主催の「全伯日系ゴルフ大会」が始まり、1988年10月に第19回大会を主催している。その他にもサンパウロ新聞社、日本航空主催の大会も催されており、「サンパウロ州選手権大会」

で好成績を収めるプレイヤーも生れている。現在日系コロニアのゴルフ人口は2000余と推定されている。

k. サッカー

サッカーの国ブラジルではあるが、日系人の選手権大会といった規模のものは開催されていない。しかし、用具はボール一つで簡単に取っかかり易く、誰でも一応は心得ている競技であるため、室内サッカーと共にいろいろなグループ間の対抗試合は常に行われている。稀にはブラジルのプロの世界に現われる日系選手もあるが、一流まで成長したというのは皆無に等しい。それよりも、日本のサッカー熱の勃興につれて、日本から“武者修行”として来伯、プロ・クラブに所属して技術を磨く青少年が現われ始めている。その中のある者は一流クラブに所属してもてはやされることもあるが、やがては帰国して日本の社会人チームに所属する、ということが生じている。

1. バレー・ボール、バスケット・ボール

サッカーと同様、各グループによる競技はおこなわれているが、全日系選手権大会といったものはおこなわれていない。

m. ゲートボール

近年、これほど急速に広く普及したスポーツはない。ちょっとした日系人の集まるところには、必ずといえるほどにチームがあり、絶えず試合が行われている。

「全伯ゲート・ボール協会」が結成されて全伯選手権大会が開催されている。主として壮年層あたりから老年層に至る男女によってチームが構成され試合ができるというこのゲームの“性格”が、娯楽と健康維持を兼ねたものとして受け入れられ普及した。

コロニアに導入されたのは1977年で、第1回全伯大会は1983年7月17日、5チームの参加でスザノ文化協会運動場で開催された。

1988年の行事、▽第6回全伯ゲート・ボール選手権大会＝全伯ゲート・ボール協会とサンパウロ新聞社との共催、3月5～6日、サンパウロ市サガ・コート、参加252チーム。

▽第4回全伯婦人大会＝全伯ゲート・ボール協会主催、月日不明、参加65チーム。

▽第3回世界選手権大会＝6月20日、パカエンブー競技場、優勝ドラセーナ。

n. ラジオ体操

広い意味ではスポーツの分野に入るが、`競技性`をもっていないので、より健康増進的な性格のものである。ただし戦前からラジオ体操は日本で全国的に普及していたので、移民とは馴染みが深かった。幾つかの団体、あるいは個人的な指導をした記録は残っているが、活発に普及し始めるのは戦後の1960年代に入ってからである。1978年に誕生した「リベルダーデ体操会」（サンパウロ市）が、リベルダーデ商工会の1部門となり、普及と指導の中心となった。

1985年にはブラジル・サンパウロ体操連盟が結成され、現在21団体、会員1千数百名（10％は日系以外）が加盟し、日本及び南米諸国との国際的交流も始められている。

V. 趣味・娯楽

移民の生活の中で趣味・娯楽として出発した多くの行事も、戦後の日系人の都市部集中や経済的な余裕、また新しい移住者のエレメントが加わってそれぞれの分野の活動が広がり層が厚くなってくると、指導的な立場にあった者はやがて“専門家”となり、それを職業とするようになる。

それらの好例としては音楽（声楽を含む）、歌謡（民謡も）、舞踊（日舞が主、洋舞は僅少）、生花、茶道などが挙げられる。これらはグループ、流派毎に「会」を組織し、協会・連盟等の名を冠し、指導者を中心にして発表会を催すなどの活動を行う。中の或る分野は日系以外に広がっているが、まだ範囲は極めて狭い。

洋舞の場合、特殊な例として「弓場バレー団」がある。これはサンパウロ州ノロエステ線ミランドポリス駅`弓場村`在住者、つまり農業に携わる者が作ったもので、日系面も農業者の文化活動としては異色かつ高度のものと言える。

映画や演劇は、移民の多くは自ら参加するという形で起ったものではなく、観る（受け入れる）娯楽としての存在であった。

映画は日本で制作したものが輸入され、戦前は主として幾つかの`映画社`がそれぞれに巡回姓を持って地方の移民集団地を訪れ上映した。戦後はこれが都市の映画館経営者に受け継がれ、“巡回映画”は消滅した。日系人の都市集中や、移民が作った集団地（植民地）の多くが姿を消したのが原因である。都市部（主としてサンパウロ市）の映画館も、近年の著しいビデオの普及、移民の老齢化の影響を受けて観客数が激減したのと、日本映画の輸入の困難がこれに加わって、1980年代後半には日系人経営の映画館はすべて廃業に追い込まれた。しかし、映画は1920年代後半の地方巡回に始まり、長く移民の娯楽面に大きな役割を担ったものである。

演劇（芝居）は幾つかの地方巡回劇団が生まれ、或るものは相当長い年月続いたが、演劇活動そのものが移民の間に広がった訳ではなかった。芝居は記念日、祝祭日などの催しものの一つとして、素人の寄り集まりで行われた。これは現在も続いているが、それも散発的で僅かなものである。

趣味と娯楽は、それに携わる者の気持の上では非常に区別しにくい。趣味はより精神的な楽しみ、娯楽はより表面的な楽しみ、とでも言えるかも知れない。例えば対照的なものとして囲碁、将棋と、いま流行のカラオケを考えてみるのもいいであろう。ただ、単なる趣味娯楽から出発したものであっても、それが「芸」として或る高度に達せば、おのずから芸術と称し得るものとなる。それは前記のあらゆる分野について言えることで、日系社会においても必ずしも多くないが、皆無ではない。

“芸術祭” と呼称されるものが、大きな規模で催されるようになったのも戦後ここ数十年来のことである。「芸術」という言葉がどのくらいの範囲を含むものか確定はできないが芸能祭の“出し物”に含まれるのは、おおよそ次のようなものである。

民謡、演劇、日本舞踊、バレエ、音楽、歌謡曲、浪曲、詩吟、剣舞、奇術など、及び郷土芸能的なもの（伝統的なもの）。
これらのすべて、或いは幾つかが“芸能祭”において一堂に会して上演される訳であるが“芸”としての水準となると千差万別というほかはない。

娯楽・趣味の中で、より“頭脳的”な要素をもつものとして特色があるのは囲碁と

将棋である。この二つは、恐らく笠戸丸の移民と共にもたらされたと言えるものだが、碁における盤、白黒の石、将棋における盤と駒は、紙を用いて作ることが出来るものであり、時間をかければ木材を削ったり、土をこねたりしての用具造りが可能であった。特別な競技場の必要もないから、打ち方、指し方の知識さえあれば誰にでもできる娯楽であった。

a . 囲碁

第2次大戦前の1938年に「サンパウロ市囲碁会館」がコンデ・デ・サルゼータス街に設けられたこともあったが、何々大会、何々選手権といった催しが“全伯”或いは“全州”の名を冠して举行されるようになるのは戦後のことで、1948年に第1回全伯囲碁大会が開催され、これを機として「ブラジル棋院」が創立された。現在は1988年12月に完成した独自の本部建物「日本棋院南米囲碁会館」を所有している。これは日本棋院の海外会館の第1号である。

また1976年10月には「南米囲碁連盟」が結成され、ブラジル、アルゼンチン、

チリー、ボリビア、ペルー、メキシコの6カ国が参加しており、代表決定戦を経て国際大会への選手派遣も行われるようになっている。

1928年にブラジルに来たことのある岩本薫九段（当時六段）は、戦後も何回となく訪れ、ブラジル囲碁界を指導し刺激を与えさらに前記の全館を完成させた功績は大きい。

将棋

囲碁より“庶民的競技”とされる将棋は、植民地や都市の住人間で親しまれて普及度という点では囲碁を凌ぐものがあった。

1930年代から、各地で大会と称するものが開催されていたが、1948年にパウリスタ新聞社の主催で第1回全伯将棋大会が開催され、第2回からは日伯毎日新聞社の主催となった。

1955年「ブラジル将棋連盟」が設立され、ブラジル日本文化協会建物内に会所を持っている。地域毎の選手権大会が開催され、全伯的な行事としては「四大棋戦」と称されている老中棋戦、王将戦、全伯名人戦、最強者戦の四選手権大会があり、他に普及

を計る目的の「チビッ子、女流、学生」大会があり、数少ないながら日系以外からの有段者も生まれている。

ただ、将棋は駒毎に名称と階級があり、名称が漢字で書かれていて親しみにくいのか、日系以外への普及は極めて微々たるものである。

囲碁における岩本薫九段の場合に似て、将棋では永世名人大山康晴がブラジルの将棋界と緊密な関係にあり、既に数回来伯して指導に当たっている。

娯楽・趣味に関する記述の終りに、現今のカラオケ・ブームに触れておく必要がある。

県人会をはじめとして“カラオケ”部のない団体は少ないという状態にあり、もちろんカラオケ設備をもつレストラン、バーは無数に存在する。親睦を目的の集まりでは必ずといっていい程にカラオケで唄われ、人集めの一手段になった観があり、何々大会、県人会対抗と、とどまるところを知らない盛況で、日系以外にも普及して「カラオケ」は今では“ブラジル語”として通用するようになった。

VI ブラジルに於ける日系人の宗教生活と日系宗教

この項では、日系ブラジル人の宗教生活と日系宗教のブラジルでの布教の歴史をみることにしよう。ここでは次のような時代区分を用いて、それぞれの時期の宗教生活や日系宗教教団の布教の様子を概観し、その特徴を眺める。

第1期一 宗教の空白期

この時期は年代的にみると、1908年の移住開始から20年代頃までであり、多くの日本人移民は直接的にはイタリア移民に代わる労働力として、コーヒー農園に『コロノ』として導入された。この時期、ほとんどの日本人移民には、出来るだけ早く金を儲けて日本へ帰国しようという考えがあり、いわば、こうした『短期的な出稼ぎ』目的が日本人の生活と行動を規制していた。尤も、1910年代には、『短期的な出稼ぎ』から『長期的な出稼ぎ』へと目的を変更し、サンパウロ州内陸部には日本人移民の集団居住地が形成され始めてはいる。しかし、ここでは、日本人の生活の典型を『コロノ』と

しての生活に求めることにする。一口に言えば、この『コロノ』時代の日本人移民の宗教生活は活発であったとはいえない。この活発でなかった理由はいかなるものだったのであろうか。この時期に関しては、この不活発性の様々な要因を明らかにしていきたい。

第 2 期一植民地での宗教生活

この時期は年代的にみると、1920年代から30年代の終り頃までの時期に相当する。この時期には長期的な出稼ぎへの変更を背景として、サンパウロ州内陸部を中心に日本人によって植民地・移住地が形成されていった。また、日本人移民の経済的な地位もコロノを脱して、借地農を経て、独立農へと上昇してきた時期であった。30年代後半には、日本人の植民地はその数が6～700を数えている。また1925年からは、日本政府の渡航費援助が開始され、30年代には当初より自営開拓を目的とする移住地の建設も行われ、また数的にも日本移民の全盛期とも言える時期であった。その一方で、早くも10年代から起っていたサンパウロ市への移動に抛って、コンデ街を中心として、日本人街が出現したのもこの時期の初めであった。ここでは日

本人の宗教生活の場としての植民地での宗教生活の一端に触れ、また、都市部でのキリスト教系の布教、或いは天理教や生長の家など日系宗教の初期布教について述べておこう。

第3期一離村向都時代

第2期とも重なる時期もあるが、年代的にはヴァルガスの、一連のナショナリゼーション政策が開始され、それが現実的心理的な制限となっていた30年代の終わりから、第2次世界大戦の勃発と日本の敗戦を経て、日系社会に起こった『勝ち負け』問題等が終息した50年代初頭までの時期である。この時期には初期においては『長期的な出稼ぎ』の、都市的な発現形態であった自営業種への転向や後にはサンパウロ市の産業化を背景とする就業機会の増加あるいは日系人の社会的経済的な上昇の手段として選ばれた高学歴取得などを背景とする日系人の都市移動が活発になった時期であった。そして、この40年代の後半には、『出稼ぎ主義』に代わって、『永住主義』が日本の敗戦や子弟の教育などとの関連から台頭してきた。

50年代にはいつの『日本宗教の復活』は、戦前に日系人が持っていた世界観一天

皇崇拝を中心とする一の崩壊、都市移動とそれに伴う階層移動、都市への適応、『永住主義』の台頭などを要因としておこった。この時期については、戦時中の宗教活動に簡単に触れたのちに、『日本宗教の復活』の諸要因を述べることにしよう。

第4期－都市時代－日系宗教の復活とその後の展開第1期－宗教の空白期

この時期は50年代以降現在までである。当初、日本人移民の90%以上は農村部にはいったが、40年代以降活発になった都市移動及び都市化の結果、現在に於いては約90%が都市住民となっている。しかも日系人は、都市にしろ、農村にしろ、自らの社会経済上昇の戦略の結果として、中産階級を占めるに至っている。

まず、ここでは『日本宗教の復活』の一面を、50年代から布教活動を実施するようになった日系宗教教団の布教の概略から示そう。続いて、60年代後半と現在の、主要な日系宗教教団の教勢とを比較することで（日系宗教の受容主体（信者）の変化に注目しながら）、60年代以降に起こった変化をブラジル社会の変動と日系宗教教団側の布教体制との双方から、概観することにしよう。50年代から開始された日本宗教の復活

は当初は日系人間に起こった現象であったが、70年代以降では日系宗教の信者は、日系人という民族的な枠を越えて、非日系人へと広がっているのである。

それでは、各時期の日系人の宗教生活について、見ていくことにしよう。

1. 第1期－宗教の空白期

『ファゼンダに入った。宗教的行事はほとんどなかった。マラリアのために犠牲者をだしたところもあった。お経もない簡単な葬式がでた。墓には卒塔婆の代わりに白木の十字架をたて、裏側には横に「ほとけ」の生年月日、没年の日付を書き、たてには俗名、行年何才と書いた。そして表には南無阿弥陀仏あるいは南無妙法蓮華経と記した。土まんじゅうの上に、ブリキ製ペンキ塗りの花輪をおく。

これは風雨にさらされてもながもちした。線香をあげ、あるいはろうそくをたてた。会葬者は無言で合掌するか、口の中で念仏か題目をとなえた。

遺族はコロニアの家にもどって、一室に（多くの場合寝室に）小さい棚をつくり、そこに「ほとけ」の生前の写真をかざり、野の花をささげ、線香をあげる。線香のないと

きはろうそくをたてた。しばらくのあいだは、毎日灯明としてカンテラをとぼす。初七日には 近所の人を呼んで法事らしきものをいとなむ。むろん坊さんはいないのであるから、読経はない。にわかづくりの仏壇に合掌したのち みんなで夕食を食べる。いんげん豆のあんこと麦粉でつくっただんご の「おしるこ」や細いマカロンでつくった「うどん」をふるまう』

(半田知雄 1970 : 712)

この時期、さらに言えば、戦前までの日本人移民の宗教生活は活発なものであったとはいえない。何故、この時期に於いて、日本人移民の宗教生活は活発ではなかったのだろうか。日本人の宗教生活は伝統的には『イエ』制度を基盤とした『先祖祭祀』と共同体ムラの氏神祭祀をふたつの軸として展開されてきたといえる。伝統的なイエにあっては、先祖祭祀は家督の相続継承者である者一即ち、多くの場合は長男（長子）が行うべき役割であった。つまり、家督を相続しイエを継承する者が、先祖の供養を行う義務をおわされたのである。ここで日本人移民の主体についてみると、多くの場合はイ

エから分家ないし転出し、新しいイエを興すべき、イエの次・三男という『非相続者』であって、この点を先祖祭祀との関連で言えば、彼等の多くは祀るべき祖先をまだ有していない—自己が祖先となって祀られるべき一者であったし、氏神祭祀の単位である、将来のイエの創始者であった。また、彼等は一時的には日本の共同体やイエを『出稼ぎ』という目的から、離れる一時的な不在者であって、決して正規の成員としての地位を失うものではなかった。それゆえ、『カミサマやホトケサマのことは日本で留守を頼んできた』のであった。しかしながら、ブラジルの慣れない環境下で、『客死』するものもでた。こうした際には、前述のような臨時的な葬送儀礼が行われたが、その一方で、その魂は日本へと『飛んでいく』ものとされた。(W i l l e m s 1 9 4 8 : 9 8)

これは、死者の供養が行われるのは帰るべき日本の共同体のイエでなければならなかったことを、象徴的に表現した言説である。ブラジル日系人の場合、こうした先祖祭祀の問題が頭をもたげてくるのは、土地や財産への執着あるいは2世の成長等がイエ意識の台頭や永住を決意させるようになった戦後になってからのことであった。

このような事情が移民側から、なぜ日本宗教が初期に於いては活発でなかったのかを

日本の社会構造との関連で説明するものであるとすれば、以下は日本政府乃至日本の宗教教団側あるいは初期の移民が持っていた事情であるといえる。

1918年、本派本願寺がブラジルに開教師を派遣しようとした際、外務省は在伯日本公使館に意見を求めた。その折りの回答は次のようなものであった。

『我が帝国は信教自由の国なるが故に、在ブラジル移民中には、或いは神道を奉ずる者あり、或いは仏教に帰依する者あり、また若干のキリスト教徒もあり、なかんづく仏教徒は其の数多きも、その宗派多岐なるを以て、若し布教使を派遣することとせば、真宗本願寺のみでは、到底事足りぬこととなるであらう。殊に我が移民の経済は、宗教よりも更に現実には其の必要を痛感せる医療及び児童の教育の為にさへ、その資力足らざる者多き状態であるから、さまで布教使の派遣を渴望していない。なほ今一つ考慮すべき点は、ブラジルには比較的微弱ながら、一条の排日暗流があつて、その排斥の理由として、人種・言語・風俗等の外に、宗教の異なる点が度々指摘されているから、僧侶（および神官等）の派遣はおこなはれない事こそ望ましい』（『ブラジルに於ける日本人発展史』1953：209）

この回答には、

- (1) 本願寺の布教使のみを派遣すると他の宗教に対して歯止めが利かなくなる。
- (2) 移民の側に、布教使の生活を維持させるだけの経済的条件がない。
- (3) 移民がそれほどには布教使の派遣を望んでいない。
- (4) 排日感情が存在する

という4つの自粛理由が存在していた。(中牧1989:384) こうした回答から、外務省は1918年以降第2次世界大戦後まで、ブラジル向けの、カトリック教以外の布教使の渡航は厳重に制限することになった。ブラジル天理教伝道史によれば、天理教の一布教使は出国に際して、ブラジルでは布教しないという一筆をかかされたという。

(1) と (4) の事由はいわば、日本政府の移民政策上の考慮であったといえるが、それらは日本人が『仮住まい』の地であり『微弱ながら』排日感情のある、ブラジルに於いて、文化的な伝統の相違から生じる様々な問題を回避する上での、ひとつの措置或いは指導であった。即ち、『…ブラジルに移住せる我が同胞は、ブラジル人の多数が加特力教徒たることを深く心に留め、ブラジル人から見て異教たる神道や仏教の礼拝は、出

来るだけ此を内輪にし、神社仏閣の如き人目に立ちやすきものを建立するなどは差し控へた方が、我が民族発展の将来の為に寧ろ賢明なる措置であろうと思ふ』（野田 1926 : 477）

このようなブラジルの日本政府の出先機関からの指示は、当時の日本人移民の心のたずまいとそれに規制された行動とも整合的であった。即ち、当時の日本人移民には『出稼ぎ意識』が強固であり（註1）、それ故に「たといブラジル社会の枠組内で長期にわたって生活が続けていても、本来的には日本社会の正規の成員であるという考えは強固であり、一時的な留守成員であるにすぎず、ブラジルでは『客』であるに留まっていた」（前山 1987 : 9）そしてこの『客』であるということは「現在、座している『イエ』のメンバーではなくそのイエの在り方に責任をもたず、『お世話になっている者』であるから、そのイエの『家風』に対して口出しをしてはならず、おとなしくしていて、やがては礼を言って自分のイエに帰属すべき存在」であり、それ故に「仏教を持込んだり、政治を持込んだりして迷惑をかけてはならない、という風に考えていたのである」（前山 1982 : 194） こうした、日本人移民の考え方に反して、1932年

にはミナス・ジェライス州の、いわゆる三角ミナスに於いて大本教の布教使 4 人がその宗教活動により、ブラジル官憲に拘留されたのである。この当時、サンパウロ市で発行されていた邦字紙はその社説で、次のように、この布教使の行動を非難している。

(註 1)「出稼ぎ意識」に関しては、1938 年当時で日系人の 85% は帰国を望み、10% が永住を望んでいたに過ぎなかった。(輪湖 1939 : 1)

『カトリック教を事実の国教とするブラジルへは他宗の宣伝は差し控えねばならぬ裡にも我々日本人の如く是からいよいよ多数にブラジルへ移住して、日伯親善を図らねばならぬ者にとっては、層一層注意して、他宗の宣伝若しくはそれに類似の行為を断然差し控え、宗教上ブラジル人に危惧と不安を与えざるよう気を付けねばならぬとして、吾人は常に筆と口に警告を繰り返して来たのである』(伯刺西爾時報 1932 : 5. 25)

つまり、これは、邦字紙上に於いて、当時の日本人が持っていた考え方が明確に表現されたものであったといえるのである。

前述の理由（２）に関しては、初期移民の就労状況を視察して在伯日本公使館書記官であった野田良治が次のような報告を残している。

『１ヵ年勤勉就労の結果、男子２名女子１名の家族にて僅々４４０ミリレイス、即ち邦貨に換算して凡そ２７０円に足らず、この金額は家族３名が伯国に渡航するために費やしたる費用金額を支弁するに足らず、いわんや此の２７０円といへる純収は成績最良の移民にして其の最も少なき者に至っては漸く１か年の生計を維持したるに過ぎざるや』。したがって、多くの初期移民にあっては、自己と家族の生活を支え、渡航費用を返済するのに窮する状態であり、宗教活動を行い、布教使の生計を維持する余裕などはないのであった。この移民の経済的な条件に加えて、地理的に広大な地域に散在する移民を対象に布教を行うことは日本の宗教教団にとっても経済的に困難なことであった。

１９２４年にブラジルを視察した本派本願寺の布教使松原致遠は次のように報告している。

『我が移植民が甚だ広大なる地域に点々散在するため、仮に寺院を建立するとしても、また布教使を巡回せしむるとしても、極めて多額の費用を必要とし、在ブラジル信徒側

に於いては勿論、本山側に於いても、到底その負担に耐へずとの特殊事情を看破して、帰朝した』（ブラジルに於ける日本人発展史 1953：209） 以上のように、移民、日本政府及び宗教教団の三者がそれぞれの立場で有する理由のために初期日本移民の宗教生活は低調なものであった。初期移民の生活の中に、僅かに『宗教的なもの』を認め得るのは「葬式の際と『ほとけ』を出した家族に於ける仏壇や神棚の礼拝にすぎなかった」（半田 1970：719）のである。

既に、この期の半ば－1910年代には早くも日本人植民地が各地で形成されはじめ、他方、1914年にはサンパウロ市に日本領事館が設立され、コンデ街を中心にして日本人街が形成され始めていた。日本人植民地やサンパウロ市に於ける宗教事情に関しては次節でみることにしよう。

2. 第2期一植民地での宗教活動

a. 植民地の形成と宗教生活

『入植当時はまだ若くて元気で、行く先も考えず一念金儲けに走ったが、さて其の結果はどうか、金が出来たか、出来ん、地位が出来たか、否残ったものは只此の瘦躯とみにくい根性、これでは錦を着て祖国へ遊ぶことも夢より外に道がない、と考へめぐらす時、行く先此の体はどうなるか、という深い煩悩に沈む。どうも心に物足りなさを感じる。この煩悩の心を鎮め苦悩を忘れるにはどうしても仏の力でなくては浄ふする事が出来ん…』(平野廿五周年史)

『御真影が礼拝の神体であり、教育勅語が経文であり、君が代が聖歌であり、校長が司祭であり、日本学校が氏神様であった』(前山隆 1984・4511)

コーヒー農園での契約賃金労働者(コロノ)としての収入は少なく、金を儲けて「錦衣帰国」することは不可能であった。というのは、日本人移民のほとんどはサンパウロのコーヒー衰退期に渡航しており、コロノとしての農園での労働では経済的な上昇達成が不可能であるという構造的な理由のほかに不作、過剰生産、恐慌などにあって所与

の目的を達成出来なかったのである。

しかしながら、その一方で、コーヒーの衰退期にあたっていたために、将来のコーヒー栽培地として予定されていた開拓前線の土地がこま切れで安く、しかも好条件で売り出されたため、コロノ労働者たちもその土地を分割払いで購入したり、借地することが可能となった。日本人移民は短期的な出稼ぎを長期的な出稼ぎへと切替え、分益農、借地農、自作農として小商品生産者に転換していったのである。この際、日本人は単独ではなく、日本人という繋がりを利用して集団的に借地、或いは土地を購入して、植民地（コロニア）を建設していったのである。植民地のムラ作りには日本の村落共同体に根を持つ文化的な枠組みが援用された。こうした日本人植民地は早くも1910年代に形成され始め、30年代後半には南東部ブラジルで6～700もの植民地が存在していた。

註2) ムラ作りの契機とそのやり方については前山（1968：125）が次のように簡単に述べている。

「ブラジルの移民社会において同族や親類関係による結合形態を喪失した日本移民たちは、

同県人、同船者、同じコーヒー農場で働いた仲間、あるいは単に日本人同士であるというだけの理由で、赤の他人との間に、疑制的な親類関係を結び、またはそのような感情に包まれて、共同して「視察」（土地を見て歩くこと）をし、借地または購入の土地を選定し、集団的に居住し、家屋の建設・森林の伐採・植え付け、収穫その他には相互扶助的な労働関係を形成し…」



正月の日本人会の祝賀式

ムラ作りが行われるにつれて（註２）、様々な行事も徐々に再現されていった。しかしながら、この植民地での宗教的行事の再建はいつまでも後回しにされ、打ち捨てられたままであった（前山１９６８：１２６）。日本人家庭でも「植民地の初期時代は『ほとけ』を出した家以外は仏壇もあまり見あたらなかった…指し物大工の片手間に作った仏壇や神棚があらわれたのも植民地生活にはいって６、７年後、コーヒーがとれだしてからであって、着伯から十数年たってからであった」（半田１９７０：７１４－７１５）。つまり、植民地形成の初期に於いては、死者の埋葬や供養もまだ『臨時の応急処置』の域を出なかったのである。即ち『死者が出ると、うろ覚えのお経を多少唱えることのできる近隣の人が依頼を受けて馳せ参じ、即席の引導を渡し、命日には間に合わせのアマチュアのお経があげられた』（前山１９６７：９３－９６）にすぎなかったのである。

それでも、植民地での生産活動が安定し、組織化も進んでくると、そこでは宗教的な活動がぼつぼつとおこなわれるようになった。１９２０年代後半から３０年代には、日本人の集団地－カフェランジア、レジストロ、マリリア、リンスなど－では在家門徒による仏教活動が見られるようになったし、プロミッソンやアリアンサといった植民地で

は神社建立の動きが見られた。前者の例として、1915年に創設された平野植民地では、初期にはマラリアのために多くの犠牲者を出したが、1930年からは浄土真宗の「法話会」が熱心な信者を中心に組織された。ここでは、平野植民地の在家門徒の当時の活動を簡単に振り返ってみよう。

〈平野植民地の在家門徒の活動〉

平野植民地はサンパウロ州北西部に位置する、独立小農を目指した最初期の日本人植民地の一つである。1915年8月に平野運平をはじめとする先発隊が入って開拓を開始したが、翌16年3月よりマラリアが流行し、この年だけでも80名近い死者を出している。平野植民地では、1930年より浄土真宗の「法話会」が開かれたが、そこによく招かれたのが伊藤助一（空真）であった。伊藤は明治14年（1881）広島県生まれで、移住当初はモジアナ線に入り、後に平野植民地近くに移り住んだ。僧籍はなかったが非常に熱心な門徒であった。

その後、1933年頃に「同心会」が組織され、34年11月27日には5×7メー

トル程の板家の堂が建立された。当初は、広島県出身の福渡英全が初代を務めたが、僧職では生活が安定せず、リベイロン・プレットの日本領事館勤務にかわった。福渡と伊藤は農業の暇をみては布教の目的で日本人植民地などを行脚したという。福渡の後を伊藤が穴埋めしていたが、1940年7月には井上白道が僧職を依頼された。井上はそれ以前にも報恩講の講師を依頼されたことがあった。しかし、翌41年11月には心臓麻痺で急逝してしまった。伊藤は既にパラナ州アサイーに移動していたが、井上の墓参りにきたところ、平野植民地の門徒は彼に泣き付いて帰さなかった。仕方なく、伊藤は僧職として平野植民地に止まったのであった。

こうして伊藤は1954年の門主第1回ブラジル巡教の際、得度し、第2回門主巡教の時に得度した井上未亡人（寿正）とともに、平野植民地を守ったのである（中牧1989：392－393） この事例は初期における在家門徒の活動や植民地での宗教活動の組織化などが示されているが、この節頭に記した引用と合わせてみると、15年間の植民地での生活の中で、死者の埋葬や供養などの儀礼執行者の形式的な必要性から、門徒側の宗教的な渴望へという変化を窺うことができよう。

一方、神社建立の例としては、プロミッソンの上塚植民地ボン・スセッソ区の「ブーグレ神社」やアリアンサ植民地の「諏訪神社」建立の動きなどが挙げられる。上塚植民地のボン・スセッソ区では偶然にインディオの墓が発見されたのを契機に、1920年、その場所に「ブーグレ神社」（ブーグレはインディオの意味である）をインディオが使用した水瓶と土製のラッパを御神体として建立し、以後毎年5月5日に祭を行い、神前相撲を奉納していた（農業のブラジル1928年9月号）。また、1928年にはアリアンサ植民地に諏訪神社建立の動きがあったが、アリアンサ会が同化政策を採るブラジルの意向に反するという理由で反対し、結局建てられるには至らなかった。さらに、1938年にはバストス移住地に蚕の神を祀る蚕祖神社が建立されている。このように様々な植民地で神社建立の動きが見られたがこれは日本のムラに於ける氏神の、ブラジルの再組織化であったといえる。

しかしながら、こうした寺院や神社の建立はすべての植民地に於いて行われていたわけではない。むしろ、ブラジルの日本人植民地で、日本の宗教行事が果たしていた集団統合の役割を果たしたのは、「天皇崇拝」であったといえる。植民地に於ける天皇崇拝

の中心は植民地の形成とともに建設された「日本学校」であった。日本学校は教育の場だけでなく日本人会の会館であり、産業組合の本部であり、結婚式の会場であった。そして、ここを舞台とする行事は植民地を構成する日本人全員が参加することで行われた。そこでの行事の際には、ほとんど常に東方遙拝、御真影への最敬礼、教育勅語の奉読、君が代斉唱などが行われた。つまり、植民地では御真影を神体、教育勅語を経文、君が代が聖歌、校長を司祭、日本学校を氏神とする「宗教構造」が創造されたのであった。（註3）こうした動きは30年代に日本の国粹主義的ナショナリズムの洗礼を受けて渡伯した日本人移民によっても強化されることになった。

いずれにしろ、コロノ時代はほとんどなかった日本人の宗教活動が、日本人によって組織された植民地を舞台として復活し、活発になっていったのである。

b. キリスト教系宗派の伝道活動（註4）

前述のように、第1期から継続して、この時期もブラジルのナショナリズムやカトリック教への「遠慮」などの理由で、日本宗教は活発な布教を行っていないが、それに

反してカトリック教やプロテスタントが積極的に日本人植民地や既に日本人街が形成されていたサンパウロ市に於いて伝道活動を行った。

註 3) 前山 1984 : 451 頁

註 4) ここでの記述は 『ブラジルに於ける日本人発展史』(下巻) 208～209 頁および香山六郎編著『移民40年史』の第6章在伯邦人の宗教史373～384 頁を参照した。

註 5) ギド・デル・トーロ神父はイエズス会士で、日系子弟を多く育てたサン・フランシスコ学園の創始者でもある。また同神父は1933年、邦人渡伯二十五周年祭の折り、日本病院(ヴィラ・マリアーナ)の定礎式をカトリック式で行っている。

前者(カトリック)は主に非日系人神父によって、後者は日本人牧師によって、行われた。

カトリックによる在伯邦人への布教は1919年、ピンダモニャンガーバ駅サプカイア農場で働く日本人に対して、ドイツ人ロレンゾ・ファパウエル神父によって開始された。

1921年には同神父はコルプツーバの小聖堂で日本人の一団に集団洗礼を行っている。

また、同21年、サンパウロ市ペンニャ修道院のドイツ人神父は日本人移住者が増加するのを見て、日本人神父による伝道の必要性を痛感し、時のリオ・デ・ジャネイロ駐在ローマ教皇使節に日本からの神父派遣を要請し、その結果、1923年には奄美大島から中村長八神父が来伯した。1926年にはイエズス会ギド・デル・トーロ神父が日本人関係の宣教師となり、同年11月15日共和制宣言記念日に日系子弟46名に集団洗礼を行っている。（註5） こうしたカトリックの日本人への活発な伝道とその結果としてのカトリックへの帰依をエスタード紙は次のように論評している。

『こうした日本人のカトリック帰依は同化の最も近道となり、日伯人間の融合を妨ぐる唯一の壁を除去し両人種は心情相反するとの妄想で、日本移民を否とする皮相論を消滅せしむるものである』（1927・2・13 宗教欄）

しかしながら、日本移民の場合、カトリックへの帰依は個人的信仰というよりは社会

的関心から行なわれていたと考える方が妥当である。2世に洗礼を受けさせる親が多かったが、これはコンパドラスゴ制（代父母制）という習慣に順応した結果であり、それは地元の有力者や名士に代父母を依頼することで、ブラジル社会への適応と社会的経済的上昇のための一つ的手段としたのである（半田1970、中牧1989など） また1920年代には、レジストロ、プロミッソン、ボッカツー、ビリグィ、アルヴァレス・マッシャード等の日本人植民地では、カトリック教会が建立されている。このカトリック教会の建立もまた、カトリック教への帰依というよりはブラジルの「家風」に順応した結果であり、心情的には「おそらく神社を建立したようなもの」（中牧1988：386）であっただろう。そして、いわば氏子制度の代替としての、カトリックの受容故に日本人は熱心な信者とはならなかったのであろう。また、植民地の構成から言えば、そこには日本人ばかりではなく非日系人労働者がおり、彼等への配慮や『同化』の対外的な表明という現実的な要因もあったのである。

一方、新教諸派の日本人牧師による伝道は1920年代の前半から、サンパウロ市に於いて開始された。

1921年、伝道目的でアメリカから渡伯した、プロテスタントの小林美登里は翌22年5月15日、コンデ街の大正小学校で第1回日曜学校を開催し50名ほどの参集者を得た。同年9月7日の独立百年祭にはキリスト教的教育機関『聖州義塾』の設立宣言を行い、2年後の独立記念日にはサンパウロ教会の設立に至っている。

註6) プロテスタント諸派では、ここに記述した以外に、アライアンス（英国）教会、ルーテル教会、イエス・御霊教会、セブンスデー・アドベンチスト教会などが日系ブラジル人間で伝道を行っている。（中牧1986・398）

聖公会の伝道は1923年3月、伊藤八十二牧師がサンパウロ市ボニータ街（現トマス・デ・リーマ街）11番上地旅館の一室で、力行会員7名と宣教開始の祈祷会を行うことで始められた。伊藤牧師はサンパウロ市ピニエイロス区の聖ヨハネ教会の牧師を務めながら、ノロエステ線ビリグイ、リンス、アリアンサ、チエテ、マリリア、ロンドリーナ、レジストロなどの日本人居住地で伝道活動を行った。

ホーリネス教会の伝道は、日本ホーリネス教会の牧師物部赳夫が1925年7月にサ

ントス港に到着した後、サンパウロ市ボニータ街13番に居を構えながら行われた。この他、1936年に農業移民として渡伯した救世軍の田中三次がリオ・デ・ジャネイロで3ヵ月間、非日系人への伝道を行った後、同年9月、日本人部『開戦』（日系人への伝道を開始すること―筆者注）の任命を受け、サンパウロ市に移り暁星学園講堂にて第1回の集会を開いているまた、自由メソジスト教会も断続的に伝道を行っていた。（註6）

C. 日系宗教の布教一本門仏立宗、大本教、天理教、生長の家

この時期、日系宗教は総じて活発な布教を行ってはいなかった。しかしながら、いくつかの教団・宗派では組織的ではなかったものの「熱心な」信者（或いは信者になったもの）が個人的に、或いは教団（本山）の意を受けるかたちで布教を始めていた。

本門仏立講（現在の仏立宗）のブラジル布教は、1908年の第1回笠戸丸移民の茨木友次郎（日水）によって、すでに移住初期から行われていた。茨木の移住は皇国殖民会社の社長水野龍が本門仏立講の信徒であった関係で、本山の斡旋によって実現された

のである。

一方、茨木とは無関係に、リンスのユニオン植民地では1932年から松原米次が中心となって仏立講の活動を行っていたが、茨木の存在を知って、36年には自分の敷地内に寺（仏立講伯国元寺）を建立し、茨木を迎えた。本門仏立宗は現在、サンパウロ、パラナ、リオ・デ・ジャネイロ州に9カ寺を有している。

本派本願寺では1928年に本山から生駒真澄が来伯し、イグアッペ植民地に「慈光会」を組織して真宗の布教を開始した。1954年サンパウロ市400年祭を機に門主のブラジル巡教が行われ、ブラジルでの開教が宣言された。現在、本派本願寺南米教団はブラジルに32カ寺を擁している。

大本教がミナス・ジェライス州で布教を行い、邦字紙上で「同化を妨げるもの」として批判されたことには触れたが、日系新宗教では大本教の他に、天理教、生長の家、金光教などが、この当時、サンパウロ州内陸部の日本人集団地を中心に布教を始めている。

天理教のブラジルでの布教は、1929年に天理教南海大教会の信者4家族がサンパ

ウロ州内陸部のチエテ移住地に入植し、そこでの布教を始めたときに開始された。その後、拠点をバウルー市に移し、活発な布教を行い、35年にはブラジル初の教会（ノロエステ教会）がボラ植民地に設立された。信者・教会を統合する全国的な組織は41年にその基礎を完成し、55年には天理教ブラジル伝道庁が設置された。1983年時点での教勢は、教会56、布教所243、よふぼく（「天理教の本当の信者である」と考えられている－筆者註）2006名、一般信者1万人程度である。

生長の家に関しては、1930年頃からサンパウロ州内陸部の日本人で、日本から生長の家の出版物を取り寄せて読む者があったが、この時点ではこうした人々が外に向かったの布教は行っていなかった。1934年に、病床にあった松田大二郎は『生命の実相』を一読して回復し、生長の家の熱心な信者となり、弟巳代志とともに個人的な布教活動に携わるようになったのが、ブラジルに於ける生長の家の布教開始の時である。

この松田兄弟の布教努力によって、教勢はノロエステ線やパウリスタ線へと拡大していった。1936年にはグァララーペスで誌友会が結成され、11月には本部よりブラジル支部の認可を受けている。その後、各地に誌友会が結成された。37年12月には

やはりグアララーペスにブラジル初の白鳩会が組織された。50年には各地の誌友会が集まり、聖市近郊誌友会連合会を、翌51年には全伯連合会を結成し、同年5月には本部より「生長の家ブラジル総支部」の認可を受け、全伯規模での組織的布教が開始された。52年には機関誌「円環」が創刊され、同年8月にはブラジル政府より宗教法人の認可がおりている。既に50年代の前半には、教義書「甘露の法雨」、機関紙「生長の家」などのポルトガル語版が発行され、一日系2世や非日系人への布教体制が整えられていった。63年には総裁谷口雅春が来伯し、「ここに大乘キリスト教の成就する地がある」と述べて布教推進を指示するとともに、2世、非日系人への布教に力をいれることを強調した。また、第2回目の来伯時（1973）には、ポルトガル語による文書伝道に力を入れる必要を説き、影響を与えた。ちなみに「アセンデドール」「ポンバ・ブランカ」誌の年次別出版部数は80年39万3千、85年40万3千、88年51万1千である。信者数は約240万人と推定されている。

3. 第3期一離村向都時代

『「御三家」と日本人会、日本新開、日本学校は一夜にして消え去ったが、「日本精神」と天皇を核とした象徴構造は移民ひとりひとりの心の中に生きつづけた』（前山隆 1982b）

a. 1930年代後半から戦時中の宗教活動

植民地での生活が最盛期になっていた1930年代後半に、ヴァルガス政権が誕生し、新国家体制（エスタード・ノーヴォ）（1937－45）の下でナショナリゼーション政策が強く推進されることになった。ここで採られた一連の政策はブラジル精神の高揚と国家主義が目指され、そのための外国人及びその子弟に対する強硬な同化政策であった。サンパウロ内陸部で数多く形成された日本人植民地はブラジル社会の中で「キスト（癌）」と見放され、日本人の非同化性が批判され、さらにナショナリズムの高揚の中で黄禍論や排日論が叫ばれた。

具体的には、1937年、14才未満の者に対する外国語教育が禁止され、翌38年にはブラジルの外国語学校の閉鎖、41年には外国語による新開の発行が禁止された。

そして、1941年12月の太平洋戦争の勃発とそれに続くブラジルの枢軸国との国交断絶（1942年1月）により、日本人は敵性国人として多くの自由を奪われることになった。旅行の自由が制限され、公共の場所での外国語の使用が禁止されたり、集会が禁止されたりした。30年代には植民地の中で漸くうまれた宗教活動（特に在家門徒による仏教及び天皇崇拜を巡る活動）が活発化し、またいくつかの教団の信者たちは日本人集団地を中心に布教を行い、あるいは信者たちは信仰生活を行っていたが、こうした諸活動は大きく制限されたり、禁止されたりという危機に直面することになった。この当時に、日系宗教教団のリーダーたちの何人かはスパイ容疑で拘留されるものもあった。「天理教ブラジル伝道史」には、戦時中の様子が次のように記されている。

『天理教も敵国宗教として当然厳しい取締りの対象となり、教会は閉鎖され集会は禁止された。その年（1942）の3月、バウルー教会長大竹忠治郎は日本人の主な指導者の一人として拘引され、サンパウロの獄舎に1年3カ月拘留された。翌年5月に出獄を許されたが、「サンパウロ市外禁足」の拘束を受けていたのでサンパウロ布教所に身を寄せて、布教所の隣接地を借りて錬成道場の名目で密かに教義講習会を開き、道（天

理教のこと―筆者注）の青年男女を対象としてよふぼく育成に力を尽くした。1945年禁足解除を機会に錬成道場をバウルー市に近いアバイに移し、なおも厳しい取締まりの中を農事実習所の名で1948年まで継続した』（伝道史1984：18－19）生長の家では、戦時中から戦後にかけて、皇運扶翼谷口哲学同志会を各地に発足させ、細々とではあったが、その宗教活動を続けていた。こうした天理教や生長の家の状況は、ほとんどの日系宗教教団が戦時中から戦後にかけて、経験したといえるであろう。

戦時中の宗教活動で重要なものはカトリックを中心に組織された「救済事業」であった。

第2次世界大戦が始まると、サンパウロ市の前移民収容所の建物に日本人がスパイなどの嫌疑をかけられて、未決囚として収容される数が多くなってきた。1942年5月、宮腰千葉大が多くの人々の希望を代表して、こうした日本人の救済を行う会を設立すべく、渡辺マルガリーダと相談し、時のサンパウロ大司教ドン・ジョゼー・ガスパールに申し入れ官憲から許可をもらい、大司教直属の慈善事業として同年6月に発足したのが『聖市カトリック日本人救済会』である。戦後の1953年には救済会と改称し、

福祉団体として登録、現在まで広範囲な福祉活動を行っている。また、福祉事業に関連して言えば、戦時中の1943年、デル・トーロ神父はサンパウロ市タマングレー街に邦人子女のための孤児院を設けている。

b. 日系人の都市移動と日系社会の変容

いわば「宗教の冬眠期」ともいえる30年代後半から50年代にかけて日系社会およびブラジル社会の双方で、主には50年代後半からの『日系宗教復活』をもたらすことになる、いくつかの重要な変化が起こっていた。ここでは、日系社会或いは日系人に起こった主要な変化を振り返っておこう。何故ならこれらの変化は『日系宗教復活』の条件と考えられるからである。

第2次世界大戦の勃発とともに、その戦火の外側にあったブラジルでは、特にコーヒーやほとんど全ての農産物の値段は高騰し、ブラジル経済は大きな好況に恵まれ、それに伴い多くが農業者或いは農業と結びついた職業に就いていた日系人の経済力は飛躍的に上昇した。この時期に貯蓄した資本や獲得した生産手段を利用して、ある者はコロ

ノや借地農から自営業へと地位を上昇させ、またある者は地方都市やサンパウロ市へと移動し、都市での生活を始めるようになった。特に、日系人のサンパウロ市への移動は、日系子弟の教育問題を主要な理由として、既に日本人街の存在や友人・知人・親戚などが居住するという移動のチャンネルを持っていたことなどを促進条件として、50年代に入って顕著となった。サンパウロ市の日系人口の推移を見ると、1939年には僅かに3467人であったのが、約20年後（1958）にはおよそ18倍の6万2千人へと増加し、70年代には日系人口の約3分の1がサンパウロ大都市圏へと集中した。勿論、こうした都市移動は何も日系人だけにおこった現象ではなく、40年代以降のブラジルの産業化に伴う都市化との関連から理解されねばならない。（この点については後述する）ブラジルの都市化は社会の階層構成に大きな変化をもたらした。そのひとつは新たに中産階級を膨張させたことであと上 また、下層階級の急激な増加であった。日系人に関してみると、彼等は増大した中産階級の拙い手であった。この中産階級を生産手段の有無という観点からみると、生産手段を有する旧中産階級とそれを持たない、ホワイトカラーに代表される新中産階級とを区分することが可能であるが、日

系人の場合、都市化の初期には圧倒的に旧中産階級に食い込んでいったのである。図表 1 は 1 9 5 8 年当時の日系人の非農業分野の階層構成を示したものであるが、この当時に於いては、日本生まれ即ち 1 世、ブラジル生まれ（2、3 世）とも圧倒的に旧中産階級が多いことがわかる。このことは初期に於ける、日系人の都市的環境への適応過程で、農村ないしは地方都市で蓄積しえた小資本を利用して、家族労働力を使った独立自営業を営むというやり方が採られたことと関連があろう。しかしながら、この一方で、都市に移動し、賃金労働者となっていた日系人も存在した。既にサンパウロ市では工業化が進行し、工場労働者階層も生じており、そこに吸収されていったのである。但し、日系人が都市移動を開始した時には、既に先行の都市住民としてヨーロッパ系人がおり、彼等がこの工場労働者分野に進出していたことや日系人自身の社会的経済的な上昇の達成方法から、日系人の、この分野への進出はそれほど多くはなかったと想像される。

図表 1 非農業分野日系ブラジル人の階層構成－1958－

階 層	日本生まれ	ブラジル生まれ	合 計
新中産階級	13%	2%	20%
旧中産階級	75%	52%	63%
賃金労働者	12%	23%	17%
合 計	100%	100%	100%

(M A E Y A M A 1963 : 62)

1958年の日本移民実態調査の結果からみると、旧中産階級に属する日系人が選択した職業として、洗濯業、理髪業、農産物の仲買・小売りやフェイランテなどが多かった。

家族員の緊密な協力で農業なり自営業なりで、経済基盤を一応確保すると、育てくる弟や妹たちを肉体労働から開放し大学へと送り込むようになった。それは社会的な威信を得て家族の地位を上昇させる目的からであった。つまり、兄弟姉妹間で家族の経済的上昇と社会的威信の獲得を分割し、彼等の緊密な連帯と協同によって、その2つの目的を達成しようとしたのである（前山1987：18）こうした解釈は少し図式的過ぎ

るくらいはあるが、この兄弟姉妹間の分業体制は結果として、2つのタイプの2世を出現させることになった。

第1のタイプは理念的に言えば「ポルトガル語ばかり話して日本語があまり分からず、ブラジルの価値観と文化を強くもち、宗教心ある場合にはカトリックに近づく」大学出の、ホワイト・カラーや自由業に従事する2世であり、他方は「独立自営ながらかなりの程度肉体労働に関連した職業に従事し…」「日本語がよくでき、日本的価値観に大きな固執を示し、日本宗教の活動に参加する傾向が強い」農業や中小企業、家族的規模での独立自営業を営む2世である。（前山1987：18）つまり、ブラジルの産業化や都市化に関連して起こった、階層変化の中で多くの日系人は中産階級の担い手となったが、他方で、中産階級内部で文化的に異質の2つのタイプの2世層を生み出してきたといった変化を見せたのである。（註7）ところで、都市部であれ農村部であれ、子弟たちがブラジルの環境の中で教育され「ブラジル人」となってしまふことや敗戦による帰るべき祖国の喪失（感）などは、日系人の間に永住主義を芽生えさせる、大きな要因となった。既に30年代には永住を唱える者もあったが、多くの日系人が永住主義

を析出するのは、日本の敗戦以後の40年代後半であった。

これらに加えて、永住主義析出は、ブラジルで獲得した生産手段（土地など）、地位、財産などに執着を持ちはじめ、それに反比例して日本への帰属意識を弱める中で行なわれたといえる。永住の決意とともに重要なことは『イエ』意識が徐々に芽生えてきたことであった。それを端的に示すのは永住を決意した日本人は自らをイエの『先祖』と同一視し始めたということであり、また60年代後半から急速に増加した「訪日」とか「墓参」とかとの目的で祖国日本へ旅立ったことである。後者は経済的上昇を背景とするが、この旅はブラジルへの永住を日本の先祖様や親戚に報告することを目的としたものであった。

また、既に述べたように、戦前に於いてブラジル各地に形成された「植民地」は日本人会を中心とした構造を持っていたが、ブラジル全体でこうした日本人会（或いは植民地）を統合する構造は領事館や海外興業株式会社、あるいは文教普及会などというた日本の出先機関を仲介して、神国日本と日本天皇とに繋がっていた。つまり、「こうして日本移民のひとりひとは、地域共同体の日本人会、サンパウロ市にある御三家を經由

して、シンボリックには日本天皇につながっていた」（前山 1982 : 140－141）のである。ところが、日本の開戦で日本の出先機関の『支配階級』は交換船で総引上げを行い、現実の構造は一夜のうちに崩壊してしまったのである。しかし、頭のなかにある象徴的な世界はそう簡単には改変されるものではない。現実と世界観との間に大きな溝を感じ、一種の意味喪失の状況におかれたというのが、戦後すぐの日系人の状況であったといえる。

これまで簡単に記述してきた40年代以降の、経済的社会的上昇、都市化、中産階級化との内部での分裂、永住の決意、『イエ』意識の芽生え、現実と世界観のギャップなどが50年代後半から始まる『日本宗教の復活』の日系社会＝日系人側の社会的背景であった。（60年代後半からの変化は後述する）

4. 都市時代一 日系宗教の復活とその後の展開

『移民は「日本」を捨てた時に、自分のなかに日本宗教を抱え込んだ』（前山 1987 : 12）

a. 1950年代に於ける日系社会の宗教事情

ここでは1950年代に於ける資料から、当時の日系社会の宗教状況を簡単に振り返ってみよう。

表2 日系ブラジル人の都市・農村別宗教帰属－1958－

	ブラジル全体	農村部	都市部	サンパウロ%
伝統的日系宗教	44, 5	50, 1	37, 9	37, 7
カトリック	42, 8	36, 5	50, 3	48, 7
その他の	12, 7	14, 4	11, 8	13, 4
(C R C J 1964)				

図表2は1958年当時の日系人の宗教について、都市・農村部およびサンパウロ市に区分して示したものである。これによれば、ブラジル全体では伝統的日系宗教とカトリックを信仰するものの割合がやや前者において高いものの、ほぼ同率を示している。このことは、. 当時の世代別人口構成で1世の割合がまだ高率であったことやカトリックの幼児洗礼を社会的な慣行として受容させられた2世層が多かったことなどに関連し

ている。同じ資料によれば、カトリック信者が高い比率を示すのは、年齢的には10～14歳の層で、35，8％に達している。この年齢層でカトリックへの帰依が行われる社会的な理由としては「親は仏教を信じてつも、子供が小学校で不利な立場に立たないように洗礼を受けさせる」というケースやある事業を有利に運ぶために相手のブラジル人に子供の代父母を依頼するといった実利的なケースなどがあった。

註7) この図式から2世層の宗教帰属を類推すると、新中産階級に属する2世ではカトリックを、旧中産階級の2世では日系宗教を信仰することになる。この状況は1950年代の日系宗教復活期においてかなり妥当な解釈であろうが、その後においては、こうした様相はより複雑になる。この点は家庭に於ける問題解決や個人主義の浸透などに関連させて理解される必要がある。

そして何よりも、当時にあってはブラジルへの永住の決意が固まっており、このことがカトリックへの改宗を促した背景として存在していたのである。また、自己の宗教的関心から改宗が起こるのではなく、こうした社会的現実的な利害との関連からカトリック

への帰依が起こることが多かったことは、それ故に日系人信者はそれ程熱心な信者とはならなかったことを示すとともに、本来的なコンパドラスゴ（代父母）制度では、代父母と実父母或いは洗礼親と子供との間に繰り返される緊密な社会的交際が、この時期の日系人の間ではあまり活発ではなかったことなどを示すものである。このことはアマゾン地域で日系人の同化調査から日系人は積極的にブラジル系宗教を受容してはいるが、このことが必ずしもその底に流れる意識の変革へとは繋がっていないという結論と対応するものである（蒲生 1957）。また、カトリシズムの受容と教育程度との相関についてみると、高学歴取得者のほうが、カトリシズムに対する信仰心は深くなり、カトリック的な教養が身についているということが指摘されている（泉 1954：78－79）。

ところで、都市部と農村部での宗教状況を比較してみると、農村部では伝統的日系宗教が50, 1%と高いのに対して、都市部ではカトリック教が50, 3%と高くなっており、ちょうど対照的な状況を示している。このことは都市部住民では勉学・就職のために植民地からでた2世層が多かったという状況や農村部に於いては対内的な宗教的な

渴望から、植民地単位で仏教などの日本宗教の活動や組織化がみられたこと或いは、共同体や家族の規制力が強かったことと関連していよう。

次に、1958年当時に於ける日系人の宗教状況を世代との関連でみることにしよう。

表3 日系ブラジル人の世代別宗教帰属－1958－

	日本生まれ	2世	3世・4世	%
伝統的日系宗教	70, 6	29, 2	19, 0	
カトリック	15, 5	58, 7	70, 0	
その他	13, 9	12, 1	11, 1	

(CRCJ 1964)

この図表から、日本生まれの1世では日本から持ってきた『イエ』の宗教である仏教などの日本宗教に帰属する者の割合が高いが、世代が下がるにつれて、カトリックへの改宗が増加していくという傾向が見られる。このことは前述したような要因によるのであろう。

ところで、『家庭』の内部でどのような信仰生活が行われていたのでしょうか。ここでは神棚と仏壇の有無およびこれらを巡る行事の執行という観点から、南部ブラジルの日系人とアマゾンの日系人とを対比的にみることにしよう。まず、神棚と神棚を場とする行事では、神棚の全然ない家が南部では40, 6%、アマゾンでは78, 3%である。また、神棚はあっても全然まつらないものが南部では17, 7%、アマゾンでは7, 9%である。従って、神道的信仰が全く失われてしまっているとみてよいのは、南部では58, 3%であり、アマゾンでは86, 2%である。一方、仏壇のないものは南部17, 9%、アマゾン47, 1%であり、仏壇はあっても行事を行わないものは南部8, 2%、アマゾン6, 8%であり、仏教に対する形式的な信仰は南部では26, 1%、アマゾンでは53, 9%が消失している（泉1954：108－109）。この結果によれば、この当時では神道よりも仏教に関わる伝統が持続されていることを示しているが、それは神棚にまつる神聖なものが漠然とした対象であるのに対して、仏教のそれは非常に具体的な、しかも切実なものだけに、より根強いものとなっているからであろうと泉教授は指摘している。しかしながら、この数値は第2次世界大戦後に、永住主義の

台頭と共に生じた『イエ』意識とそれに伴う日本的信仰の復活という観点からとらえ直すことも可能であり、こうした観点からみると、祖先祭祀は南部で7割以上、アマゾンでも半数近くが行うようになっているともいえるのである。

b. 1950年代以降の日系宗教布教の概略

ここでは1950年代から開始される、活発な日系宗教の布教の概略を仏教系、神道系、諸教に別けて記述することにしよう（註8）。何故、この時期に日系宗教が活発に布教するようになった幾つかの要因に関しては既に前節で述べた通りである。

< 仏教系 >

ほとんどの仏教系宗派は1950年代から、組織的な布教を開始している。浄土真宗本願寺派（本派本願寺）は既に熱心な信徒によって戦前から布教がおこなわれていたが、正式に開教が宣言されるのは、1954年サンパウロ市400年祭の機に門主の巡教が実現した後のことである。真宗大谷派でも1952年に東本願寺の法主がブラジル巡教を行い、開教を宣言した。現在、本派本願寺南米教団は32ヵ寺を、真宗大谷派南

米教団は15カ寺を擁している。

浄土宗・日蓮宗はいずれも1954年の開教で、曹洞宗は1955年、曹洞宗南米別院を設立し開教、現在、佛心事（サンパウロ）、禅源寺（モジ）佛心寺（ローランジア）、イピラス佛心寺（エスピリット・サント）の4カ寺を擁し、信徒は日系約300世帯である。真言宗では、1939年、高野山大師教会伯国支部が設立されている（香山1949：384）。

詳8）日系宗教教団の活発な布教の直接的な契機のひとつは1954年のサンパウロ400年祭であり、この時には日本から天理教真柱と西本願寺門主がブラジルを訪れている。しかし、同時にカトリック教側からの仏教批判もかなり厳しかった。例えば、ひとりのカトリック信者はつぎのように断じている。「ブラジルは、民主主義の国として信教の自由が法律によって認められてはおりますが…カトリック教国であります…信教の自由という法文はあっても、ブラジル人の国民感情は異教の進出を排斥します。そうした国柄である事を考慮に入れず法文をたてに異教をもち入れ、路上にまで進出して大幅の宣伝を行う事は、ブラジル人の国民感情を無視する事であり、カトリックに受洗した二世まで入門を強いるが如きは、正にカトリック教会への挑戦であります」（青木新二郎1958「コロニア・カトリック界五十年の動き」『暁の星』（日本カトリックセンター）

尚、この6宗派で現在、ブラジル仏教連合会（仏連：1958年結成）が結成されている。仏連では毎年、4月8日釈迦の誕生の日に近い週末に、それを祝う花祭りの行事－お練り行列、慶賛法要および子供会プログラムから構成される－や各種福祉団体への慰問、奥地巡教などの活動をおこなっている。（仏連の結成当初には本門仏立宗も参加したが、早々に脱会した）

ブラジル日蓮正宗（NSB）は、1960年以前は移民信者が各家庭で日本からの教団の新聞等を取り寄せて信仰していた程度であったが、1960年にSGI（創価学会インターナショナル）の組織化を行い、各国への布教を展開する一環として、60年に池田大作会長の第1回ブラジル訪問を行ない以後活発な布教を行うようになった。1964年には、S O C I E D A D E R E L I G I O S A N I T I R E N S H O S H U D O B R A S I Lの名称で宗教法人登録がなされた。信者は約20万人であり、その母体である信者団体は約3万人の信者を抱えている。信者の日系と非日系の比率は4：6で非日系が上回っている。NSBの寺院としてはサンパウロ市に『一乗寺』があり、全国の州都を始め各都市には支部（22カ所）が組織されている。

天台宗は宗派として組織的な布教は行っていないが、天台宗系の寺院はブラジルに2ヵ寺存在し、いずれもサンパウロ郊外のジアデーマにある。その一つは浅草寺に繋がる、1952年に設立された伯国観音寺院で、加持祈祷を専門としている。また火渡り行事のような修験的要素、金比羅信仰さらにはアパレシーダ崇拝なども取り入れ、多くの非日系人を獲得している（MAEYAMA 1983：225－235）。別の天台宗系の寺院は熊本県下益城郡富合町にある『木原不動尊』（天台宗長寿寺）と深い関係にあった女性霊能者によって1961年から開始され、72年にジアデーマに建立された『天台宗成願寺不動所』である。

その他、仏教系宗派としてはジュンジャイの中山身語正宗南無不動心霊会、サンパウロ市の顕本法華宗、浄土真宗親鸞会、神霊教、華嚴宗不動明王平豊寺、醍醐山三宝修験道、照霊会、波切り不動、阿含宗などがブラジルで活動している。

< 神道系 >

神道系の教団・神社としては次の3つのタイプに分類することが可能である。まず第

1 のタイプは日本人移民によって形成された植民地に移民の手で建立された神社で、言わば日本の村落共同体に於ける「氏神」に匹敵するものである。このタイプとしてはバストスやバウルー市近くにある富士植民地（バラコン植民地）に建立された蚕の神をまつる『蚕祖神社』や、1958年にパラ州モンテ・アレグレに建立された『ドイス・ガリョス神社』、1961年にスザノの敷島植民地内に建立された伯国石槌神社等があり、その他にもアマゾーナス州、マット・グロッソ州の日本人植民地にもこうした神社が建立されたという。

(M A E Y A M A 1 9 8 3 : 1 8 5)

第2のタイプは霊能者（多くは女性）によって、日本的信仰の伝統とブラジルの宗教を習会した形で都市部に創設された教団である。このタイプとしては1966年にアルジャーに設立された巖戸神社（それは神乃家八百万教と称し、伯国大神宮を祀る）や同じ頃、組織された稲荷等をまつる稲荷会、1970年に2世女性によって設立された、伊勢神宮系の神道倭教大明神宮、また1980年にサンパウロ市に設立された八光大神宮等がある。これらの教団では様々な問題を抱える依頼者に対し、祈祷、呪い、お

はらい、つきもの落とし等の呪術・宗教的活動による「人助け」をおこなっている。

第3のタイプは日本から直接に進出した神道系教団である。靖国講は1949年以降、サンパウロ市やマリリアを始め10カ所で『神』としてまつられる戦死者の供養と日本の靖国神社のサポートの目的で活動を行なっている。伊勢神宮系の南米大神宮は1978年以降、日系のリベルダーデ商工会の後援を得て、6月30日と12月31日に大祓いの茅の輪神事を行い活発な活動をみせている。また、1979年にはサンパウロ市に香川県人会館の中に金刀比羅神社がまつられ、毎年盛大に祭典が行われている。(中牧1988:395)

< 諸 教 >

諸教に分類される教団のうち、戦前に布教を開始した大本南米主会(1924)、天理教(1930年代初頭)、生長の家(1932)に関しては既に述べた。また、戦後、1957年から活発に布教活動を実施しているPL教団と1971年にブラジルに進出した立正佼成会に関しては後述する予定である。ここでは世界救世教、霊友会、世界真

光文明教団（現 崇光其光）について簡単に触れることにしよう。

世界救世教のブラジル布教の歴史は1965年7月の本部設立以前の「開拓時代」とそれ以降の「組織的布教の時代」に区分される。「開拓時代」では1955年頃から移民として来伯した信者によってベレンやサンパウロ市で主に日系人を対象にした布教が開始され、65年の時点で既に10カ所程度の支部が結成されていた。1965年以降ではポルトガル語での『浄霊』を中心とする布教と文書による教化活動を行っている。月刊誌『JOURNAL MESSIANICO』は約9万部の発刊を誇り、信者も15万人程度である。信者の97%程度が非日系人である。

現在ではブラジル全国で141の支部を有し、その8割の支部長は非日系人であり、布教師257名が布教を進めている。またメシアニカ財団を擁し、その多彩な文化・芸術活動も教団の宣伝と信者の獲得に貢献している。現在、ブラジル聖地としてグアラビランガに「地上天国」の建設を進めている。

霊友会は1969年の鈴木トクの来伯を契機として布教が開始され、1975年にはブラジル霊友会として宗教法人として登録された。霊友会のブラジル布教の特徴は多くの

教団がサンパウロを拠点として布教を開始したのに対し、パラナ州をその主要な布教地としていた点にある。霊友会では在家仏教主義と父方母方双方の先祖祭祀、自己の啓発を重要視する布教をおこなっている。1979年にはサンパウロ市に南米総局が開設された。現在、信者数は約5万人（会員数）程度で日系：非日系の比率は4：6である。1976年からはJORNAL REIYUKAI DO BRASILが日ポ・両語で発刊され、85年からはポルトガル語のみとなっている。

崇光真光は1974年3月に設立され、既に数万人の信者を獲得している。サンパウロ市では日系信者の比率が高いがそれ以外では非日系人が多い。GLA（GOD LIGHT ASSOCIATION）は1977年頃伯国GLAを設立、また晴明教も信者を中心に各地で布教活動を行っている。金光教はサンパウロ州ビリグイを中心に活動を行い、現在ではサンパウロ市やロンドニア州アリケーメスにも拠点を有している。また、黒住教もあったが積極的には布教をおこなっていない。

C. 1960年代以降に於ける日系宗教布教の特徴

多くの日系宗教は1950年代から、組織的な布教を開始した。資料1はブラジルに進出している日系宗教を仏教系・神道系・諸教別の開教年・場所から示したものである。各宗教の歴史や現状に関しては、既に概略を述べたので、ここでは1960年代後半に於ける主要教団の教勢を1988年との対比から、その布教の特徴と当時の状況をみることにしよう。図表4は天理教、生長の家、世界救世教、PL教団、日蓮正宗・創価学会の信者数、信者の日系・非日系の割合を1968／1988年の時点で比較したものである。

60年代後半の日系宗教の特徴をみると、まず世界救世教を除いて、他の主要教団では信者の日系・非日系の割合ほとんどが日系によって占められていた。このことは第一に、教団側の布教体制が非日系人を対象とした布教を目指していなかったこと（唯一の例外は世界救世教である）やその条件が揃っていなかったということと関連する。

例えば、天理教では信者の獲得は身上（病気）・出直し（死亡）等に起因する家族の危機的な状況下に於いて、オタスケをし、教祖の教えを伝えるニオイガケを行うことから開始される。そして、信者になると、今度はその信者の親族的な繋がりを通じて教勢

図表4 主要日系教団の1968／1988の教勢比較

教 団	信者数		日系 (%)		非日系 (%)	
	1968	1988	1968	1988	1968	1988
天理教	4000	10000	100	99	0	1
生長の家	15000	2400000	99～100	15	0～1	85
世界救世教	5-7000	153810	40	3	60	97
P L	8-10000	30000 *	80～90	0～10	10～20	90～100
日蓮正宗創価学会	15-20000	200000	100	40	0	60

註* P Lは活動的な信者数、生長の家は教義書の販売部数から割り出した数字である。

P Lは周辺の信者までふくめると30万人ほどになる。

** 1988年の数値は、森による簡単なサーヴェイの結果から得られたものである。

を伸ばしていくとともに、家庭内での信仰の継承という『タテの布教』に重点を置いたやり方が重視された。つまり、天理教では日本人から日系人へ、親から子へというのが布教の戦略であったのである。また、P L教団も1970年代半ばを境として布教中心の時期から教化に重点を置いた時期へと移行するまでは日系人中心の布教であった。

こうした教団が非日系人への布教を目指していなかったことにも増して、日系人を布教のターゲットにしたのは、既に述べたように日系人あるいは日系社会内部にあった要望に強く結び付いている。例えば、1950年代前半に、生長の家は急速に日系社会の中に浸透していったが、その理由は生長の家が「戦中戦後を通じて、日系コロニアの精神的支柱のひとつであった、『日本精神』に『生長の家』がとって代わりつつあった」ためであった（泉1954：78）。つまり、日系人の多くが経験した、現実と世界観の隙間を埋めるという役割を生長の家が担ったのである。生長の家の教えでは日本的価値が強調され、日本民族と日本文化の優秀性が国粹色豊かに美化されていたのである。これは何も生長の家だけに固有のものではなく、当時では多くの日系宗教に於いて強調されていた点であっただろう。

d. 60年代以降のブラジル社会の変化

60年代以降に関してみると、天理教を除く主要教団では、教勢を著しく伸ばすとともに、多くの非日系信者を数多く獲得している。何故、60年代以降、日系宗教は非日

系信者の獲得に成功したのであろうか。この問題を考察する際には、2つの側面を考慮する必要がある。まず第一は30年代後半から開始され、戦後に加速化されたブラジル社会の社会変動との関連である。第二は、日系宗教教団側の布教体制及びその姿勢との関連である。

モノカルチャー経済から一挙に工業化を達成しようとしたブラジルでは農民層の都市移動による急速な都市化が起こった。特にこの時期に、サンパウロやリオ・デ・ジャネイロ市といった都市が国内移動者によって急速に膨張した。1940／50年の資料から、ブラジルの8大都市のムニシピオ人口を見てみると、この時期の人口増加の、実に84%は国内移動者による増加であった（Durham 1978：28）また、68年の調査結果によれば、この国内移動現象は引き続き継続され、例えば、サンパウロ市の人口の61%はサンパウロ市外部からの移動者で占められていた。こうした都市化に伴う現象として、一般的には家族・近隣集団の喪失ないしは弱体化、世俗化、個人主義や匿名性の台頭などがあげられている（Wirth 1949, Park 1925, Redfield 1949, Durham 1978 etc） こうした産業化や都市化は、

都市部に於いて就業機会の増大と職業の多様化などを引き起こし、19世紀初期から僅かながら存在していた都市中産階級を何倍にも膨張させることになった。この拡大に対応した形で、60年代後半から70年代にかけて、ブラジルでは核家族化が急激にしかも直線的に進行した（V e l h o 1981など）。ブラジルの都市生活者の家族は中産階級では圧倒的に核家族であり、上層や下層の一部を除いては大家族形態は核家族形態にとって代わられることになった。しかし、都市中産階級の出現と膨張やそれに伴う核家族化はあまりにも急速であったために、その中にさまざまなジレンマや問題を抱え込むことになった。中産階級では伝統的上層階級の持っていた価値観や態度を保持しようとするのであるが、その保持にとって必要な経済的基盤を持ち得ないためにそれが困難になっているのであった。例えば、夫はブラジル社会の伝統的価値観のひとつであるマッシュムの感覚を強くもっており、女性の従順や女性は家庭にとどまるべきだといった考えを持っていたが、彼等の脆弱な経済基盤が女性の家庭外での労働を必要としたことから、こうした伝統的な夫婦の関係性とは異なる関係を探さなければならなかったのである（ワーグラー1963：112－113）。

また、都市部では様々な職業や会社が生まれ、都市住民はこうした職場での新たな職業倫理や職場での人間関係への適応という問題も生じたのであった（中牧 1989, Wagley 1968）。さらに、70年代以降のブラジルに於ける家族研究は、都市部の同じ階層内の核家族形態の家庭にもかかわらず、生活スタイルや経済的上昇の戦略などで異質化が起こっているし、同時に個人主義の浸透と関連して、様々な家庭内の人間関係のかたちが模索されてきているという状況を示している（Saleem, Velho, など）。

また、ブラジル社会に於ける一般的な宗教状況を簡単にいえば、1980年に於いても、ブラジルではカトリック教が人口の約9割を占め、依然強力な基盤を維持しているが、その一方でペンテコスタルやアフロ・ブラジリアン宗教が広範を社会階層に受容されている。

プロテスタンティズムは社会的なモビリティの結果として出現した中産階級に受容されているという。それは新教の教えが「仕事に精を出すこと、飲酒と賭博、婚外セックスの禁止、高い水準の道義性、…自分と子の教育を重視」しており、親族紐帯を断ち

切り、都市へ移動し、カトリック教会との関係を放棄してきた彼等に、新しい価値と成功への威信を与えることが可能であったからである（ワーグラー 1971：220）。また、アフロ・ブラジリアン宗教は組織や教義、権力との関係性を変えながら、アフロ系以外の住民に受容されている。つまり、ブラジルは決して同質的な宗教基盤を有しているとはいいがたい状況下に置かれているというのが現状なのである。

以上に見てきたような背景が、日系宗教が広範に受容される、ブラジル側条件となっているのである。

e. 日系宗教教団側の条件

以上のブラジル側の条件は、日系宗教が受容される背景とはなったが、必ずしもすべての日系教団が非日系人の信者を獲得しているのではない。60年代の後半以降、日系宗教を非日系人への浸透という観点から、2つのグループに分けることが可能である。まず第1は日系人という民族的な枠を突き破り、非日系人の信者を獲得するのに成功した教団（宗派）であり、第2は非日系人の信者を獲得している教団或いは非日系人への

布教を目指していない教団である。第一の教団としては生長の家をはじめ、世界救世教、P L教団、日蓮正宗、崇光真光などをあげることができる。また、第二の教団としては天理教、立正佼成会、多くの既成仏教系宗派（但し、仏教のある宗派では禅・瞑想と結び付き、非日系インテリ層に受容されている）をあげることができる。ここでは非日系人の信者獲得に成功している教団の事例として、生長の家とP L教団を取り上げてみよう。

<生長の家>

生長の家のブラジル布教は1930年代にサンパウロ州内陸部から開始され、戦後には『日本精神』にとって代わるかたちで急速に日系人信者を獲得していった。そして1966－1968年には布教方針を一変し、非日系人を布教のターゲットにしたのである。1966年には非日系人を布教の対象にするためポルトガル語伝道局が設置され、翌年にはポ語による教化誌A c e n d e d o rが2世用から一般ブラジル人用に改変された。こうした変革から1967－68年頃にはぼつぼつと非日系人の教化誌の勉強会ももたれるようになり、1988年には信者の85%が非日系人となっている。

生長の家教団では布教戦略として『生長の家は宗教ではない、哲学である』というモットーを採用し、非日系人がカトリック教の信仰を継続したままで生長の家の信仰に入ることを可能とした。そして彼等に対してはキリスト教の新しい解釈を教えることで、彼等には生長の家が『革新運動の意味をもち、キリスト教の広い枠組の内部の一つという在り方』として理解させることに成功したのである。この点に於いて、生長の家の教えは日系人に対するものとは異質であった。日系人に対しては『生長の家に入ることによって、良き日本人または日系人、より良き人間』となることを教え、一方、非日系人に対しては『より良きカトリック教徒たる』ことを説くのである。こうした点からカトリック教義の新しい解釈を求め、その疑義や欠陥を埋め、信者のブラジルのカトリック教会の在り方への不満を解決しているのである。

こうした、二重性は組織面や儀礼、教義面においても存在している。例えば、生長の家の中核的儀礼である神想観の過程で歌われる『招神歌』は、日本人・日系人に対しては世界の中心は日本で、日本の中心は天皇で、日本は神国であることを神を通して超自然的直観によって把握させようとするのに対して、ブラジル人に対しては日本的伝統で

形成された諸概念がキリスト教的伝統から翻訳されて歌われるのである（前山 1987：13－17）。以上のように、生長の家にあっては布教方針の転換に対応した速やかをポルトガル語化、カトリック教との競合回避、柔軟な教義の解釈―日系人と非日系人とで異なる教え―、日系人と非日系人とで異なる組織化といった点に於いて、日系人ばかりではなく、非日系人に浸透する条件を揃えていたといえよう。（註 9）

< P L 教団 >

P L 教団は 1968 年の資料によると、信者の日系・非日系の割合は 80～90% が日系信者であったのが、88 年には 90% 以上が非日系信者となり、20 年間に比率が逆転している。P L 教団の布教はサンパウロ市で開始されたが、その後 P L の布教は大きく二つの時期に区分される。つまり、布教中心の時期（祖遂断布教）と教化に重点を移行した時期（教え中心）である。こうした移行は 1960 年代の後半になされた。この移行を手短に説明すれば、「祖遂断の神事」を通じて苦痛や病気を直すという奇跡信仰から日常生活の苦悩に対する解決法を提示する生活倫理を説くという形への移行で

あった。前者の奇跡信仰は日本の新宗教一例えば、天理教の『オタスケ』や世界救世教の『浄霊』あるいは真光の『手かざしの神事』などーが初期に於いて教勢を拡大する

注9) 中牧は、生長の家がなぜかく もブラジル人の間で成功を収めているのかを文明学的視座から、ブラジル人の嗜好と正統性の欠如という問題に関連させ、＜融合型＞のブラジル文例では＜融合型＞の宗教が適合的ではないかという仮説を提示している。

中牧 1985 「フェイジョアーダ宗教論」『東京大学宗教学年報』Ⅱ

ために使用したものであった。しかしながら、天理教の信者の固定性とは対照的に、P Lの場合、この奇跡信仰だけでは信者を永続的にとどめることができず、信者の流動性は非常に高かった。そこでP Lの場合、この奇跡信仰を生活倫理に結び付ける必要性が出てきたのが、この移行の要因のひとつであった。P Lの場合はブラジルに先行して起こった日本の近代化の過程で、この倫理宗教という側面が大いに鍛えられていたので、強みがあったといえる。P Lは奇跡信仰で日系人のみならず、非日系ブラジル人の関心を引き付け、その後、日本の近代化－社会変動のプロセスで鍛えあげてきた倫理宗教と

してのノウ・ハウを近代化の波に揉まれていたブラジルへと適応したのであった。具体的には核家族の家庭生活倫理や職業・職場倫理、市民倫理といったかたちで、新しい価値観や態度を模索していた都市中産階級の適応過程で説いていったのである。この点は自らを『生活倫理（哲学）』と規定した生長の家と類似している。こうした生活倫理を説くために、教化上で様々な『現地化』が計られていった。この現地化はポルトガル語での教化を目的とした、様々な改変であった。具体的にはポルトガル語に堪能な布教師の養成であり、教義や機関紙のポルトガル語への翻訳であった。特に翻訳は日本語をそのまま訳すというのではなく、ブラジルのコンテキストへの適応が計られ、きめ細かな翻訳がなされている。そして、現地化は儀礼や日常的活動にまで及んでいる。例えばPLリベルダーデ教会が毎月最後の日曜日をフェイジョアーダの日として、資金調達の一助にしたり、フェスタ・ジュニーナというブラジルの行事を積極的に取り入れているのは、こうした『現地化』の一端である（中牧1989：411－452）。

このようにPL教団に於いても生長の家と同じように、布教から教化へという戦略の変更に速やかに対応して、ポルトガル語での教化体制を整え、教義や儀礼の現地への適

応を計り、非日系人へと浸透していったといえよう。

一方、第一の教団とは異なり、非日系人の間にはまだ浸透していない（非日系人を布教の対象にしていない）教団の事例として、天理教と立正佼成会を取り上げてみよう。

<天理教>

天理教のブラジルでの布教は1930年代の初めにサンパウロ州内陸部に於いて始まり、37年にはサンパウロ州内陸部に9つの天理教教会を数えるまでに至っている。そして、ブラジル全国の信者を統合する組織の基礎は1941年の段階までに固められていた。天理教でもPLと同様に「オタスケ」と呼ばれる奇跡信仰を初期の段階での教勢拡大の主要なやり方としていた。ただ、天理教の場合は。PLとは異なり、信者定着率は非常に高かった。天理教では、一旦信者になると「オタスケ」を受けた者と「オタスケ」を授けた者の間には「理の親子」という信仰上のオヤコ関係が結ばれ、この関係を巡ってさまざまな権利・義務が発生した。こうした信仰上のオヤコ関係の存在は信者間相互の関係を緊密にすることになり、それが信者の固定に繋がっていった。

天理教に於いても、当然ながら、教勢の拡大は大きな関心であったが、その方法に於いてPLとは異をっていた。天理教の教勢の拡大は信者の高い固定性とも関連するが、相対的に親から子への信仰の継承という点が強調され、いわゆる「タテの布教」が唱えられた。

またこれと同時に、親族的な繋がりを利用した信者の獲得が目指された。このようなやり方で、天理教では信者を獲得していったが、天理教の教会帰属方式から「理の親子」は同じ教会に属することになり、ひとつの天理教教会は擬制的および現実の親族関係に裏打ちされた、大きな『イエ』的な様相を呈するようになった。

ところで、天理教信者の職業をみると、多くは洗濯業や自営業という職種であった。

彼等は相対的に日本的な価値観を強く持ち、その行動にはこうした価値観が反映し、例えば配偶者の選択などでは日系人との結婚が指向された。一方、子への信仰の継承という点から見ると、親と共同で自営業を行う傾向が強かった、より年長の兄弟では天理教信仰が比較的スムーズに行われたが、高学歴取得の機会を与えられた年少の兄弟ではよ

りブラジルの価値観をもつようになり、天理教信仰から離れていくという傾向がみられた。こうした年少の兄弟のなかには、非日系人との婚姻も見られた。つまり、天理教では、その教勢拡大の方法から、非日系人信者を獲得することが非常に難しく、しかも信者の増加は幾何級数的になされることはなかったのである。天理教にあってもP Lや生長の家と同じように、70年代後半には布教・教化のポルトガル語化が計られたが、その目的はあくまで2、3世への布教の継承という要請から結果したことであり、それ故、P Lや生長の家のように、ブラジルの環境に適応させるかたちでの翻訳や『現地化』が計られたわけではなかった。儀礼にしても日本とほとんど変わらない形式に於いて実施されている。天理教では非日系人への布教を否定しているわけではないが、以上のような要因から、非日系人信者の獲得に成功していないのである。

〈立正佼成会〉

立正佼成会のブラジルでの布教は1971年に、日本から派遣された布教師によってサンパウロ市に於いて開始された。この教団が採る布教戦略は地縁、血縁などの社会関

係を利用した「導き」中心の布教であった。こうした結果、1983年当時では、信者数は1500名程度となったが、その日系・非日系の割合を見ると、99%が日系人であった。この教団では、ポルトガル語による布教は天理教と同様に、日系2・3世を対象にして80年代の後半から始められたばかりであり、それもポルトガル語による布教も月1回程度であって、ほとんどの日常的な活動は日本語で行われているのが現状である。また、現在経典などが翻訳されつつある状況である。つまり、この教団ではブラジル進出の歴史が浅く、現在、今後の布教体制を整備しているところであり、非日系人への布教まではまだ手が回らないのである。それにも増して、教団は「本当に正しい教えであるならば、わざわざこちらからムリな布教を行わなくても、自然に向こうからやってくるもの」（小笠原1983：132）という姿勢を有しており、今後非日系人への布教が積極的に展開されていくのかどうか現在ではあきらかではない。

以上、4つの日系宗教教団の事例を簡単に記述してきたが、ここではさらに一般的な次元から、なぜある教団では非日系人への布教に成功し、ある教団では成功していないのかをみよう。非日系人への布教に成功している教団は、2つのグループに分けもこと

ができる。一つは生長の家、P L 教団、世界救世教、崇光真光などであり、第 2 のグループは神霊教、稲荷会、伯国大神宮などである。まず第一のグループに関してみると、その有利きはこれらの教団が日本の伝統の中でうまれたのにもかかわらず、その教義や儀礼、活動を説明する際には、その日本的伝統の特殊性から比較的自由におこなうことができたという点であり、それらの持つ説明体系は日本の中で鍛えられ、練り上げられてきたものであり、ブラジルの特殊宗教事情の中でも柔軟に対処し得たのであった。一方、これらを仏教や神道系の教団一即ち非日系人の獲得にあまり成功していない教団一に関してみると、自己の教えや活動を説明するのに、極端に言えば、日本文化の特殊性そのもから解き起こさなければならないというハンデ・キャップを持っているのである。（参照井上、1985） さて、第 2 のグループが非日系人信者を獲得している事由のひとつは、それらがいずれもブラジルに於いて日系人によって創設された教団であり、積極的にブラジルの宗教的伝統を自らの中に取り込み（例えば、稲荷会ではアパレシータ信仰やバードレ・シセロという民間信仰でのシンボルを積極的にとりこんでいるし、その主要活動の一つはマタンパに対するお祓いである（註 10)), さらに、病気

直し、憑きもの落としといった、結果（ご利益）が直接にすぐに現れるという『即効性』も信者獲得に大いにプラスしているといえよう。そして、これらの、小規模な日系宗教は、大規模な教団が中産階級に信者を獲得しているのに対し、むしろ、低い階層の中に信者を見出しているのである。

5. コロニアの宗教構造

図表 5 は 1988 年の標本による日系人口調査から得られた結果から、日系人の宗教を男女別、都市農村別に示したものである。

図表 5 日系人の男女別都市農村別宗教帰属－1988－

宗 教	男	女	都市	農村	全体 (%)
カトリック	57, 65	60, 80	60, 79	45, 54	59, 19
プロテスタント	3, 18	3, 04	2, 71	6, 61	3, 12
日系宗教	24, 20	25, 69	23, 36	38, 17	24, 90
なし	12, 84	8, 20	10, 85	8, 77	10, 64
その他	2, 09	2, 25	2, 29	0, 88	2, 14

註 10) 稲荷会に関しては渡辺（1990）が詳細な調査報告を行っている。

11) このサンプルは1987年の標本による日系人口調査の際に、統計学的方法で抽出されたものである。こうしたデータをもとにして森（1991）は「サンパウロ市内在住日系人の婚姻関係の分析」（M I M E O）を行っている。

これによると、全体としては日系人の約6割がカトリック教に帰属し、4分の1程度が日系宗教を信仰していると推定される。男女別の宗教帰属には、目立った差異は存在していないものの、都市農村別にみると、都市部ではカトリックの比率が高く、他方、農村部ではカトリックの割合が高いものの、日系宗教信仰者との数値の差異は非常に小さくなっている。但し、現在に於ける日系人口の都市農村別人口の比率は約9：1で圧倒的に都市部居住者が多く、都市部居住日系人で、日系宗教を信仰している人口数は20万人をはるかに越えていることになる。他方、農村部に於いて日系宗教を信じているものは5万人程度と推定される。これを1958年当時の資料と比較するなら、58年当時では伝統的日系宗教およびカトリックの割合はほぼ均衡していたのが、30年後の88年では日系宗教を信仰する人の比率は下がり、反対にカトリックの割合が上昇してい

る。都市農村別に比較してみると、まず都市部ではこの30年間でカトリックが更に日系人に受容されるようになり、一方、農村部では日系宗教とカトリックの比率が逆転し、農村部に於いてもカトリック教の割合が高くなっている。

さて、次にカトリック及び日系宗教を信仰する日系人の社会的な性格について、サンパウロ市内に居住する日系人夫婦の属性との関連で見ることにしよう。（註11）図表6・7は日系人同士の夫婦と日系人と非日系人の夫婦別に、夫と妻の信仰する宗教の組合わせをみたものである。これによると、いずれの夫婦ともに夫と妻の信仰する宗教が同じであるケースが多く出現している。中でも、夫婦共にカトリックである夫婦の組合わせが半数近くを占め、最も多くなっている。一方、夫婦ともが日系人である場合には夫婦ともに日系宗教を信仰するケースも3割近く占めている（異民族結婚の場合は12%程度である）このことは宗教的帰属を同一にする者同士が結婚することが多いこと、或いは結婚後に夫婦いずれかの宗教へと帰属を変更する場合が見られることを示している。

図表6 サンパウロ市居住日系夫婦の宗教別組合せー日系人同士の場合ー

夫 妻	夫						(%)
	カトリック	日系宗教	プロテスタント	エスピリタ	なし	その他	合計
カトリック	41,4	2,5	—	—	4,3	—	48,2
日系宗教	1,9	29,6	—	0,6	1,2	—	33,3
妻 プロテスタント	0,6	—	4,3	—	0,6	—	5,5
エスピリタ	0,6	—	—	—	—	—	0,6
なし	—	0,6	—	—	11,1	—	11,7
その他	—	—	—	—	0,6	0,6	1,2
合計 (%)	43,8	32,7	4,3	0,6	17,8	0,6	100,5

図表7 サンパウロ市居住日系夫婦の宗教別組合せー異民族婚の場合ー

夫 妻	夫						(%)
	カトリック	日系宗教	プロテスタント	エスピリタ	なし	その他	合計
カトリック	46,6	1,9	1,0	1,9	8,7	—	60,1
日系宗教	1,9	11,7	—	—	1,9	—	15,5
妻 プロテスタント	1,9	—	3,9	—	—	—	5,8
エスピリタ	2,9	1,0	—	1,0	—	—	4,9
なし	—	1,0	—	—	12,6	—	13,6
その他	—	—	—	—	—	1,0	1,0
合計 (%)	53,3	15,6	4,9	2,9	23,2	1,0	100,9

次に夫婦の学歴別にその宗教帰属を示したのが表 8・9 である。表 8 は日系人同士の結合であるが、この表はほとんどが伝統的日系宗教を信仰する 1 世をのぞいた日系 2・3 世の数値である。これによると日系人同士の夫婦の場合、カトリックを信仰する者は学歴に無関係に広がっている一方で、日系宗教を信仰する日系人はより低い学歴層により多く出現するという傾向が認められる。他方、異民族結婚のケースではカトリックにしる、日系宗教にしる、高学歴者に相対的に多く受容されている。ここで図表から示すことはしないが、日系夫婦の場合、学歴と職業には次のような相関が見られる。即ち、高学歴者では専門技術職や管理的職種が多いのに対して、相対的に低い学歴層では販売業やサービス業など自営的職業に携わるものの割合が高いのである。この点を前述の宗教と学歴の相関と関連させると、夫が自営業的職種の場合には、日系宗教へ帰属する場合が多いといえるのである。但し、異民族結婚の場合には、日系宗教を受容するもので高学歴を有する者の割合も高く、この相関は見られない。

図表 8 サンパウロ市居住日系夫婦の宗教帰属と学歴（1世を除外した日系人同士）

	カトリック	日系宗教	プロテスタント	エスピリタ	なし	その他	合計%
初等科中退	14,8	10,5	1,0	—	4,3	—	30,6
初 等 科 卒	15,8	5,3	1,0	—	3,3	—	25,4
中 等 科 卒	11,0	1,4	0,5	—	1,4	—	14,3
大 学 卒	18,7	3,3	1,0	0,5	5,3	—	28,8
不 明	—	0,5	—	—	—	—	0,5
合 計(%)	60,3	21,0	3,5	0,5	14,3	—	99,6

図表 9 サンパウロ市居住日系夫婦の宗教帰属と学歴（異民族婚の場合）

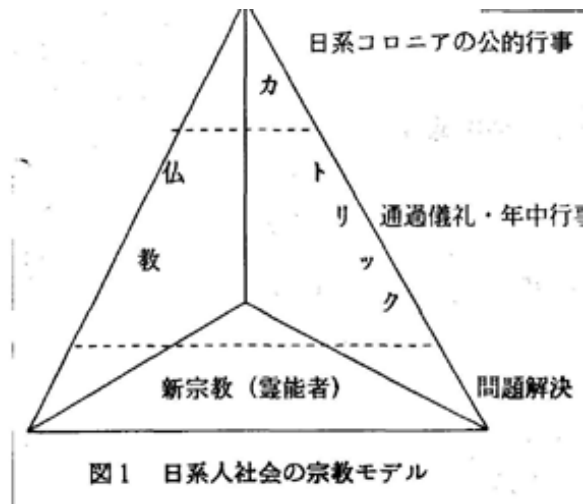
	カトリック	日系宗教	プロテスタント	エスピリタ	なし	その他	合計%
初等科中退	7,8	3,9	1,9	—	9,7	—	23,3
初 等 科 卒	7,8	3,9	1,9	—	2,9	—	16,5
中 等 科 卒	9,7	1,9	—	—	1,9	—	13,5
大 学 卒	28,2	7,8	—	—	1,9	7,8	45,7
不 明	—	—	—	—	—	1,9	1,9

これまで、日系人口の全体的な宗教受容について述べてきたが、ここでは現在の日系社会に於ける宗教構造を、カトリック、仏教および新宗教が日系社会で果たす役割から概観してみよう。まず、コロニアの公的行事に関してみると、ここでは『移民××年祭』というような日本人移住の節目に行われる大きな祭典と毎年6月18日の移民の日にブラジル日本文化協会が主催する行事などを指すのであるが（特にここではサンパウロ市を念頭に置いている）こうした機会には、主催者によって先亡者の追悼法要とカトリックのミサが行われるのが恒例となっている。それは1958年6月の日本移民50年祭から開始された。さらに1975年からは在伯都道府県人会連合会主催による開拓先亡者慰霊塔での仏式法要が加わっている。このように、日系社会（コロニア）の公的行事（移民の日の行事など）は仏教とカトリックが公的な宗教の領域を2分割しているかたちになっており、他の宗派がこうした公的行事に関与することは行われていない。

また、通過儀礼（誕生・結婚・葬送）や年中行事（盆・ナタール・花祭りなど）の側面に於いても、カトリックや仏教が圧倒的に強いが幾つかの行事では、新宗教や神道も

その一角を占める。例えば、通過儀礼では誕生から葬送および死後供養に於いて、カトリックや仏教は大きな役割を果たしている。日系人の6割がカトリック教を信仰している事実はカトリック的伝統が日系人の人生の様々な機会に深く関わっていることを示すものだが、例えば洗礼・結婚時におけるコンパドラスゴ制度などはその一つである。移住当初においても2、3世に対する洗礼は自分たちの社会的上昇や庇護を目的にして地方の有力者（地主など）などに依頼して行われることが多かったが、現在に於いては、兄弟姉妹及びその配偶者やオジ・オバといった親族関係者に依頼し、親族間の連帯を強化する機会になってきている。また、死後供養では仏式にしろ、カトリックにしろ、初七日の法要やミサが行われ、日本のお盆やブラジル盆（11月2日の万霊節）或いは母の日、父の日、命日などには、墓参りが行われている。

一方、年中行事としてはナタール（クリスマス）が『家族のフェスタ』として、正月とともに重要な親戚の参集機会となっているし、釈迦の誕生を祝う花祭りは仏教連合会やリベルダーデ商工会の主催で4月8日に近い週末に、リベルダーデに於いてお練り行列と慶賛法要などが行われている。



ここでは日系人社会の宗教モデルとして中牧（１９８９：３９９）によって提示されたものを図示しておく。

また、伊勢神宮系の南米神宮は１９７８年以降、リベルダーデ商工会の後援を得て、毎年６月３０日と１２月３１日に、リベルダーデ広場で大祓いの茅の輪神事を行なっている。

他方、問題解決の領域では、新宗教や霊能者（沖縄系ではユタなど）が圧倒的に強くなっている（註 1 2）

資料 1 ブラジルに於ける日系宗教教団・宗派

A. 仏教系

教団・宗派	開教年	開教場所
浄土真宗本願寺派	1 9 5 0	サンパウロ
真宗大谷派	1 9 5 2	
曹洞宗	1 9 5 5	
日蓮宗	1 9 5 4	
浄土宗	1 9 5 4	
真言宗	1 9 3 9	
本門仏立宗	移住初期	サンパウロ州内陸部
日蓮正宗（N S B）	1 9 5 2	サンパウロ市
伯国観音寺院	1 9 5 2	ジアデーマ
天台宗成願寺不動尊祈禱所	1 9 6 1	ジアテーマ
神霊教	1 9 5 0 年代	
中山身語正宗南無不動心霊会	1 9 6 3	
顕本法華宗		

浄土真宗親鸞全

華嚴宗不動明王平豊寺

醍醐山三宝院修験道

昭霊会

波切り不動

阿含宗

B. 神道系

蚕祖神社

1 9 3 8

バストス・富士植民地

ドイス・ガリヨス神社

1 9 5 8

パラ州モンテ・アレーグ

レ

伯国石槌神社

1 9 6 1

スザノ・敷島植民地

神乃家八百万教巖戸神社伯国大神宮

1 9 6 6

アルジャ市

稲荷会

1 9 6 0 年代

サンパウロ市

神道倭教大明神宮

1 9 7 0 年代

サンパウロ市

南米大神宮

1 9 7 8

サンパウロ市

靖国講

1 9 4 3

サンパウロ・マリリアなど

八光大神宮

1 9 8 0

サンパウロ市

金刀比羅神社

1 9 7 9

サンパウロ市

C. 諸 教

天理教

大本南米主会

生長の家

世界救世教

P L 教団

立正佼成会

霊友会

伯国 G L A

金光教

晴明教

1 9 3 0 年代初頭

1 9 2 4

1 9 3 2

1 9 5 5

1 9 5 7

1 9 7 1

1 9 7 5

1 9 7 7

チエテ植民地

三角ミナス

サンパウロ州内陸部

サンパウロ市

サンパウロ市

サンパウロ市

パラナ州

ビリグイ

参 考 文 献

輪 湖 俊 午 郎

1 9 3 9 「パウルー管内の邦人」サンパウロ州チエテ移住地

1 9 5 3 「ブラジルに於ける日本人発展史」上・下巻ブラジルに於ける日本人発展史刊行会編

中 牧 弘 允

1 9 8 5 「在家門徒の出家ーブラジルの事例からー」

「海外移住調査研究レポート」（広島市博物館調査報告書Ⅴ）20－22 p

1 9 8 9 「日本宗教と日系宗教の研究 日本・アメリカ・ブラジル」東京刀水書房中牧弘允編

1 9 8 5 「研究レポートⅠXーブラジルの日系新宗教」サンパウロ人文科学研究所

野 田 良 治

1 9 2 6 「実査十八年 ブラジル入国記」博文館

天理教ブラジル伝道庁編

1 9 5 8 「天理教ブラジル伝道史」天理教時報社 1 9 8 5 「天理教ブラジル伝道史」天理教
時報社

半 田 知 雄

1 9 7 0 「移民の生活の歴史 ブラジル日系人の歩んだ道」サンパウロ人文科学研究所編

前山 隆

- 1967a 「ブラジル日系マイノリティー社会における宗教行動の一考察「研究レポート」
サンパウロ人文科学研究所 第3号 pp109－
- 1967b “O Imigrante e a Religiao: Estudo de Uma
Seita Religiosa Japonesa em Sao Paulo” Escola
de sociologia e politica de Sao paulo (MAthesis)
- 1982 「移民の日本回帰運動」東京 日本放送出版協会
- 1983 “Religion, Kinship, and the Middle Classes
of Japanese in Urban Brazil” in LITIN AM
ERICAN STUDIES 1983 pp57－82
- 1984 「ブラジル日系人におけるエスニシティーとアイデンティティー－認識的、政治的現象として－」「民族学研究」48巻4号 pp 444－458
- 1986 「ブラジル日系人における分裂と統合」重松伸司編「現代アジア移民」名古屋大学出版
版 PP1－32
- 1987 「異文化接触と文化変動－ブラジル日系人の事例に照らして－」「文化と哲学」第6
号 静岡大学哲学会 pp1－27
- 1990 「日系人（ブラジル）－中間マイノリティの問題」「文化人類学7 特集＝世界の少数民族民族」アカデミア出版会 PP 208－221

農業のブラジル社

- 1928－9 「農業のブラジル：プロミッソン開拓10周年記念号」

平野植民地日本人会

1941 「平野廿五周年史」

生長の家ブラジル総支部編

1973 「生長の家ブラジル総支部二十年史」 サンパウロ

移民70年史編纂委員会編

1980 「ブラジル日本移民70年史1908－1978」

泉 靖一（編著）

1957 「ブラジルの日系コロニア」

「移民－ブラジル移民の実態調査－」 東京 古今書院 pp 11－127

泉 靖一・斉藤 廣志

1954 「アマゾン－その風土と日本人」 古今書院

蒲生 正男

1957 「アマゾニアに於ける日系コロニアの同化過程－トメ・アスウ植民地」「移民」

泉 靖一（編著） 古今書院

ブラジル日系人実態調査委員会編

1964 「ブラジルの日本移民：記述編」 東京 東大出版会

小笠原 公衛

- 1985 「日本的先祖祭祀のブラジルの展開ー立正佼成会と霊友会の比較を通してー」
中牧編「研究レポート I X ブラジルの日系新宗教」サンパウロ

森 幸一

- 1985 「ブラジルに於ける天理教の展開と組織化の特質」
中牧編「研究レポート I X ブラジルの日系新宗教」サンパウロ
1991 「サンパウロ市内在住日系人の婚姻関係の分析」(M i m e o) サンパウロ

井上 順孝

- 1985 「海を渡った日本宗教ー移民社会の内と外」弘文堂

アリアンサ移住50年史刊行会

- 1936 「創設十年」サンパウロ

暁の星会(日伯カトリック中央会)編

- 1955 「聖市四百年祭「暁の星」特集号 在伯日本人布教沿革誌」サンパウロ

香山 六郎編著

- 1949 「移民四十年史」サンパウロ

藤八十二先生追憶記念実行委員会編

- 不明 「在伯邦人開拓伝導者の生涯ーブラジル聖公会大執事伊藤八十二氏の追憶」サンパウロ

渡辺 雅子

- 1990 「ブラジルに於ける憑霊の文化と日系宗教ーサンパウロ市の稲荷会の事例を通してー」
「明治学院論叢 社会学・社会福祉学研究」83(明治学院大学社会学会) pp1-52

サンパウロ人文科学研究所編

1990 「ブラジルに於ける日系人口調査－1987・1988」サンパウロ
伯刺西爾時報

1932. 2. 25 日版

ワグラー、C

1961`The Brazilian Revolution: Social Change Since 1930`
IN Social Change Since 1930`

1971「ブラジル An Introduction to Brazil」山本書店

VELHO, GILBERTO

1981`Individualismo e cultura: notas Para Uma Antropologia da Sociedade Contemporanea`Zahar Editores BRASIL.

EMILIO WILLEMS

1948`Aspectos da Aculturacao de Japoneses no Estado de sao Paulo`USP

EUNLCE R, DURHAM

1978`A Caminho da Cidade: A Vida Rural e a Mig

r a c a O P a r a S a o P a u l o ”
e c t i v a .

S a o P a u l o E d . P e r s p

P E T E R , F R Y

1 9 8 2 ` P a r a I n g l e s V e r `

S a o P a u l o Z a h a r E d .

J O R N A L D O B R A S I L

1 9 8 5 特集 A N o v a F a m i l i a

O E S T A D O D E S A O P A U L O

1 9 2 7 2 / 1 3 日宗教欄

編 纂 後 記

当ブラジル日本移民80年史編纂委員会が出来たのは、80年祭々典も終了した翌年、1989年の3月のことであった。

委員会は下記のメンバーによって構成された。

委員長 脇 坂 勝 則

委 員

(日本語版)

清谷 益次、内山 勝男

田尻 鉄也、宮尾 進

(ポルトガル語版)

山城 ジョゼー、渡部 和夫

山内 淳

委員会は隔週1回開催することを原則とし、まず、編纂の基本方針を決定したが、その決定された主な事項は次の如くであった。

1、80年の歴史を経過した現在の時点にたって、これまでの日本移民・日系社会を検討し、執筆にあたる。

2、執筆された原稿は委員全員が精読し、検討の上、最終稿を決定する。

3、ポルトガル語版は日本語版の単なる翻訳とせず、日本語版とは視点を変える。

以上の方針のもとに、原稿執筆にあたったが、執筆者は編纂委員直接または外部に依頼した。

出来た原稿は委員によって討議、検討の上、再三にわたって執筆者に手を加えてもらい、最終稿を決定した。

日本語版各章の執筆担当者は下記の如くである。

第1部 日本移民80年のあゆみ

第1章 日本移民の始まるまで 田尻鉄也。

第2章 初期移民から1920年代までの動き 清谷益次。

第3章 国策移民の時代 内山勝男、田尻鉄也。

第4章 移民空自時代と同胞社会の混乱 宮尾 進。

第 5 章 戦後移住者時代 中隅哲朗。

第 6 章 移民時代の終幕と新しい日系社会の幕開け 中隅哲朗。

第 2 部 日本移民のブラジルに及ぼした影響

第 1 章 ブラジル農業に果たした役割 坂田 英晴。

第 2 章 日本移民の商業・工業と進出企業 鈴木信男（商業）西田康二（工業と進出企業）。

第 3 章 教育・文化・宗教 清谷益次、森 幸一（宗教）。

商工業・進出企業に関しては、別に小委員会を山本勝造、鈴木与蔵、鈴木信男、西田康二によって構成し、鈴木（信）、西田の執筆した原稿を検討、出来上った最終稿は、制約された頁数の関係で、本委員会の責任で、削除縮小した。

また、当委員会設立の時点において、80 年史完成までの期限も 2 年間という制約があった。資料を再検討あるいは新たに発掘し、検討した上で執筆するには 2 年という期限は決して十分なものではなく、全体を完全に統一あるものにすることは不可能であっ

た。

以上のような理由により、当委員会として決して満足のできる80年史の完成を見たわけではないが、この2年間に本業のかたわら50数回にわたる検討委員会を重ね、最大の努力をもって編纂にあたったつもりである。

最後に本書の編纂にあたり、商工業・進出企業小委員会の各位、また委員同様に執筆・検討にあたってもらった中隅哲朗、坂田英晴（編集）飯田イオエ（資料収集）田中慎二（表紙デザイン・レイアウト）の各氏及び日本移民史料館（写真及び資料）の協力を得たことを記し、感謝に代える。

なお、ポルトガル語版は、当日本語版と平行して編纂を進めており、数カ月後に刊行の予定である。

1991年6月

日本移民80年史編纂委員会

ブラジル日本移民八十年史

発行 1991年6月

編纂 日本移民80年史編纂委員会

発行者 移民80年祭祭典委員会

ブラジル日本文化協会

印刷・製本 トッパン・プレス印刷出版会社

R u a M u n i z d e S o u z a , 6 5 5 C E P 0 1 5 3 4

C a m b u c i — S a o P a u l o